

---

# 空をなくしたその先に

雨宮れん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空をなくしたその先に

### 【Nコード】

N6014I

### 【作者名】

雨宮れん

### 【あらすじ】

「なんとしても帰らなければいけないんだ……」  
機密書類を隠し持ち、  
偽名で旅をする王子。

「全てをなくしても、あたしはまだ飛びたいと望んでしまう」  
空を離れることのできない  
パイロット。

空の支配権をめぐる争いに

二人は巻き込まれていく。

## 1・襲撃からの脱出(1)

客船メレディアーナは、順調に航路を航行していた。いったいに風をはらんだ帆は真っ白で、船体の優美な姿を強調している。甲板では乗客たちが思い思いに時間を過ごしていた。

地上数千メートルを、ゆっくりと航行する豪華客船。この船に乗ることを許される人間は、それほど多くない。

船での過ごし方は変わらない。それが海路であっても、空路であっても。皆、のんびりと太陽の光を楽しんでいる。最新のファッションに身を包んだ女性たちが、甲板を歩き来している。子どもたちが走り回る。下に落ちると大惨事のため、ボール遊びは厳禁だ。

ディオは、甲板に並んだ長椅子の上で体勢をかえた。椅子はしっかりと甲板に固定されている。万が一にも地上に落ちることがないように。両隣の長椅子も日光浴を楽しむ人でうまっている。

今はあたたかいが、そろそろ季節は秋にうつりかわろうとしている頃だ。あと数時間もすれば肌寒くなってくるはずだ。

長椅子から見上げる空も、甲板の手すりの間から見える空も、どこまでも真っ青だ。まさしく航海にはいい日だ。今航行しているのは海ではなくて空だけだ。

手にした雑誌をめくってはいるのだが、内容は少しも頭に入っていない。女性の最新ファッションになんて、最初から興味はないのだから当然だ。廊下の雑誌立てから一冊適当に抜き出してきたのだが、暇つぶしにもならない。

ディオはそっと胸に手をあてた。上着の内ポケットにしまいこんだ書類を、なくすことになったら大変だ。

一七でセンチアの大学に留学して二年。その間国には一度帰っ

ただけだ。もうじきくる誕生日の日を過ぎれば一九になるが、親からはいまだに子ども扱いされているのを感じずにはいられない。

週に一度、変わらず母から送られてくる手紙の最後には、「風邪をひかないようにしなさい」と書かれているし、二週間に一度父からかかってくる電話はいつも数分で終わる。「勉強頑張れ」の一言とともに。

子ども扱いしている人間に、こんな大事な書類を持たせるというのもどうかと思うが、父が倒れたというのなら緊急事態には間違いない。

風が頬をなでる。

急遽国に戻るようになって、数十分後にはこの船の乗船チケットが届けられた。同時に偽の身分証明書が魔法のように手渡され、道中のスケジュールも決定された。こういう時は、王家の力を実感せずにはいられない。

物を言わせることのできる権力と財力。

ディオを大学に送り出した時には、家の力をあてにするなど言い、実際の大学生と同じ生活を送らされたものだが。狭い寮の寝室、堅いベッド。まずい食事。それも青春の一ページか。

ディオは目を閉じた。日の光が頬を柔らかくなでる。留学してからずっと研究室にこもりきりで、こんな風に過ごすことなんてなかった。日の光にあたるのも久しぶりだ。居眠りをしないようにしなければと思うが、この心地よさは眠気を誘う。

わざわざ偽の旅券を手配してまで守らなければならぬ秘密だ。誰かに盗まれないように気を配らねばならない。名残惜しいが、長椅子から離れることにする。

ディオは、持ってきた雑誌を丸めて立ち上がった。昔から背が低

いのがコンプレックスだ。男にしては華奢な体格、日に焼けた藁の色をした髪と目。童顔で、年相応に見られたことなど一度もない。どちらかと言えば目立たない方だが顔立ちが悪くないのだろう。

研究室にいる女の子たちが、「かわいい」と評しているのを聞いたことがあるから。……嬉しくもなんともなかつたけれど。

くだけた格好の他の旅客たちと違って、きつちりとネクタイを締めた上に上着も着込んでいる。本当はもう少し楽な格好をしたいのだが、上着を脱ぐことさえ不安でしかたない。

託された機密書類を無くしてしまいそうで。部屋に戻っても、寝間着に着替えることすらなく過ごしてしまいそうだ。

手すりにもたれて目を細める。船底につけられたプロペラが風を切る音が響いてくる。

頭の上では、帆を固定したロープの端がぱたぱたとしている。空の航海ははじめてだった。

主に金銭的な事情で。

ディオの生家から、大学のあるセンチアの王都までは海路で一週間程度、列車で十日以上かかる。それでも空を使うよりはるかに安上がりだ。

甘えるなど言った両親は最低限の旅費しか出してくれなかったため、今までの往復にはその時の懐事情に応じて船か列車を使っていた。

甲板を行き来する乗客の衣装一つとっても、ファッションにうといディオの目にさえ高価な品だとわかる。これがこんな事情でなかったら、初めての空の旅をもう少し楽しめただろうに。

胸の機密書類。

父の病状。

気にかかることが多すぎる。

デイオは風に乱された髪をかきあげた。

航海が終わるまで、数日の旅程だ。何事もなく、テイレントに到着することを願うしかない。そんなデイオの願いは、即座に打ち消された。

警報が鳴り響く。

「空賊だ！」

乗客の一人が、空を指さす。点のように見えている黒い影がみるみる大きくなって、メレディアーナ号にせまってきた。

海賊も多数存在するが、空賊も多い。乗客の大半が裕福な人間であることを計算すれば、

海より空の方が効率がいいとも言える。飛行機を用意するだけの事前投資ができれば、の話だが。

悲鳴が甲板中に響きわたった。乗客たちは、我先にと船室へと逃げ込もうとする。狭い通路はたちまち人であふれかえった。デイオはその流れを無視して、船体後方の非常階段にかけよった。

このまま船底まで行けば、脱出用の小型艇があるはずだ。

財布に偽の旅券、機密書類。

大切な物は、すべて身につけているから問題はない。

空賊にもいろいろあるが、乗客を皆殺しにする残虐なやつらも多数存在すると話には聞いている。殺されては元も子もない。生きて国にたどりつかなければ。

二段ずつとばしながら階段を駆け降りる。

船底にたどりついた時、爆発音が響いてきた。

こういう大型船には、古代人の残した遺産であるフォースダイトが使われている。現在の技術力だけでは、これだけの大型の船を空中に浮かべることなど不可能だ。

ディオは、知っている限りのフォースダイトに関する知識をかきあつめた。刺激を与えれば、宙に浮かぶ鉱石。天からの贈り物と人は言う。フォースダイトを搭載している限り、すぐに墜落することはなさそうだが早めに脱出した方が無難だろう。

脱出用小型艇を捜し求める。

船底に格納されているということまでは知っているのだが、具体的な置き場所がわからない。乗船してすぐ在処を確かめておくべきだった。後悔の念が胸をかすめる。

焦る気持ちとはうらはらに、船は見つからない。

「ディオ・ヴィレッタね！ちょうどよかった」

少女特有の高い声に、ディオはふりかえった。飛行服に身を包んだ少女が立っている。茶の飛行服は、彼女の体格には少し大きめだった。年齢はディオと同じくらいだろうか。

頭の大部分は帽子で覆われているが、わずかにのぞく鮮やかな赤い色の髪は、耳より上で短く切りそろえられている。ゴーグルを頭の上に押し上げているため、気の強そうな碧玉色の瞳が輝いているのが見えた。

女性を美人と不美人にわけるとすれば、明らかに美人に分類されるだろう。それも特上の。

「君は？」

「ダナ・トレースよ。すぐ見つかってよかった」

「どういうこと？」

「あなたを連れ出すように言われているの」

ダナと名乗った少女は、ディオの手をつかんだ。

「こつちよ」

手を引かれて、駆け降りてきたばかりの非常階段を逆に駆け上る。先に立つダナは、非常階段の存在を思い出して逃げてきた乗客をか



みつきそうな勢いでとなりつけ、道を開く。

だんだんと上の物音が大きくなってくる。

甲板にたどりついた時には、轟音が響いていた。

見上げれば、襲ってきた空賊とどこかの部隊が空戦に入っている。やってきた援護に胸をなでおろす余裕もなかった。船室へ戻るための階段は狭く、大人数が一度に降りるのは不可能だ。

階段にたどり着いた乗客はよかったが、たどり着けなかった者は、上での戦いに巻き込まれないよう身の隠し場所をもとめて甲板上を右往左往している。

非常階段の存在を思い出した者は、まだ冷静な判断力を失っていないかったということなのだろう。

船員たちが誘導を試みてはいるのだが、その努力もむなし物だった。

響く女性の悲鳴。

泣きわめく子ども。

メレディアーナ号からも、銃声が響く。船員たちが応戦を開始したのだ。

撃墜された飛行機が船の横を落ちていく。脱出装置が故障したのだろうか。必死にボタンを叩いているが、脱出装置が動作する気配はなかった。落ちていくパイロットの絶望した瞳と、ディオの瞳が交錯した。この高さから墜落すれば、生き延びることなどほとんど不可能だ。

たとえ下が海だとしても。

視線が交わったのはほんの一瞬。すぐにパイロットは、煙をあげる飛行機ごと見えなくなつた。

これが空の戦いなんだ。

デイオは書類を入れた内ポケットを上から強く押さえつける。何としても、この研究成果を国に持ち帰る。そうすれば空賊を根絶やしにすることだってできる。こんなところで終わるわけにはいかない。

甲板に一機の戦闘機がとまっている。茶と赤で塗装されたそれは、この状況下で静かに発進の時を待っていた。

「乗って！」

後ろから尻を押し上げられ、戦闘機の後部座席に押し込まれた。

「ベルト！」

言われるままに、デイオはシートベルトで体を座席に固定する。

ダナは前方の座席に飛び乗ると、キーを差し込んだ。

「お願い！子どもだけでも連れて行って！」

幼い子どもを抱えた若い母親が、子どもをダナに差し出す。ダナは冷たく切り捨てた。

「もう人に乗せる余裕はないの」

「何とかならない？一人だけでも」

よけいな口をはさんだデイオは、目を覆うまで引き下ろしたゴーグルごと、鋭い視線で射ぬかれた。デイオは口を閉じた。

「あたしが命令されたのは、あんたの救出だけよ」

ダナはキーをひねった。勢いよく垂直に機体が飛び上がる。

「安心なさい。落ち着いて。船員の近くに行くの。すぐに仲間が救助にくるから」

下に言い聞かせると、ダナは機体を動かした。空中から、勢いよく前に飛び出る機体。

風に目を叩かれて、デイオは瞼を閉じた。息ができない。

「やだ、ウィンドウ閉め忘れちゃった」

強化ガラスのウィンドウが降りてくる。強風から目と髪を解放さ

れて、ディオは胸をなでおろした。

## 2・襲撃からの脱出(2)

前方からやってきた小型機二機のパイロットが、ダナに親指を立てる。すれ違う一瞬の間に合図を返してダナは言った。

「あれ、救助部隊」

「君たちは、いったい……」

「アーティカって言ったらわかる？」

「噂は聞いてるけど……」

古文書に記された、太古の文明の遺産。今よりはるかにすすんだ技術力を持った古代人たちは、フォースタイトを加工し空飛ぶ島を作った。伝説によれば、飛行島での生活を許されたのは、特権階級とそれに仕えた人間だけだったらしい。

王族が結婚すれば、新たに島を作り、宮殿を建てる。いくつもの島が、空に漂うようになった。支配される側は、地面からそれを見上げるだけ。

やがていきすぎた技術力は、世界の崩壊をもたらすことになる。王座をめぐつて起こった争いは、人類の大半が死亡する大戦争へと拡大した。地上に残された者たちは、島へとわたる翼を持たなかった。空で生きるための物資は地上から運び込まれていたが、それを運ぶ手段は失われた。

特権階級の人間だけでは、生き延びる手段を見つけだすことができなかつたのだらう。島へ取り残された人間たちは、長い年月の間に少しずつ数を減らしていき、絶滅した。

大戦から長い年月が過ぎて、ようやく人類は再び空を飛べるようになった。

鳥のように、とはいかなかったが。

一度手段を見つけてしまえば、どんどん技術力は進歩していく。

より高く、より遠く。誰が一番早く飛行島に到達し、歴史に名を残すことができるか。競争は加熱し、この世界のあちこちに存在する飛行島に人類が到達するまで百年とかからなかった。

到達することができれば、今度は支配したくなる。

翼を手に入れた者たちは島の所有権を巡って争い始めた。そうして地上とは別の勢力図が、空に描かれることになる。武装した彼らは、地上の王と契約を結んだ。傭兵として。

ひとたび戦争が起これば、相手の国に攻め込んで空からの攻撃を加える。平時には、空からの警戒の任にあたり空賊を退治する。その代償に、王は彼らに必要な物資を提供する。契約を結んでいない外国の飛行船に対して、傭兵自ら空賊となることもある。

ディオの国、マグフィレット王国が契約を結んでいるのがアーティカの一族だった。

団長の名はビクトール。過去の戦争で手柄をたてたのをきっかけに、マグフィレット王国の貴族に叙されている。契約する金額によって、平気で裏切るのが傭兵の常だが、ここ数十年は専属契約だ。国王が十分以上の賃金を支払っているというのが一番の理由だろう。そこに忠誠心はない。

ディオが留学していたセンチア王国と、マグフィレット王国は同盟関係にある。現在のマグフィレット王国の王妃が、センチア出身ということも両国の関係が良好である一つの要因だ。アーティカの船団が、センチア領内への進入を許されたのもそのあたりに理由があるのだろう。

そのアーティカの一員ということとは、彼女も戦闘員ということになる。あつという間に届けられた偽の旅券といい、タイミング良くあらわれた救助といい、事態は予期されていたということなのだろうか。

「君も傭兵ってことなんだね」

「そう。専門は空。白兵線には不向きだわね、どう考えても」  
「けらけらと笑う。」

緊張感がないことこのうえない。

ついで、ダナは右手で後方をしめした。

「二機、追ってきてる。ちょっと荒っぽくいくから、しっかり捕ま  
つてて」

捕まっつてと言われても、せまい機内につかまるような場所は見  
あたらない。ベルトを両手でぎゅっと握りしめる。

「わあああああっ」

機体が急上昇して、ディオはわめいた。

天と地が逆転する。

「だまっつてなさいって!」

ダナの声もディオの耳には届かない。目の前で、死に神の鎌が  
らつくのが見えたような気がした。

「死ぬ、死ぬ、死ぬうううう!!!!」

「黙れっつて言っつてんでしようが!」

右に左にめまぐるしく機体が旋回する。急上昇、急降下、右へ、  
左へ。体はベルトで固定しているとはいえ、首から上までは固定し  
ようがない。がんがんと座席に頭をぶつけ、右に左に揺られ、生き  
た心地がしない。

「まずは一機……!!」

「ダナがつぶやいた。」

続いた轟音。

目をあける気力もないが、追ってきた機体が撃墜されたというこ  
となのだらう。

「もっついちよ!」

もう一度響く爆発音。

「ダナ、ほどほどにしとけって言っただろ。任務を忘れるな」

「……すみません……」

通話装置から聞こえてきた男の声に、今までの勢いはどこへやらしゅんとしてダナは機体を水平に戻した。

「生きてる？」

「な……なんとか」

「失神しなかっただけ上等ね！」

「失神……しそつだったけど……」

ディオのつぶやきは聞こえなかったように、ダナは前を見すえる。

「あれが軍用艦よ」

見えてきたのは、巨大な船だった。堂々とした黒い艦。左右に砲が突き出ている。航行に風力は使用していないのか、帆はたたまれている。ゆっくりとこちらに向かって進んでくる。

マグフィレット国内でも、センチア国内でも、これほどの艦は見たことがなかった。

他の機体は甲板を滑走して着艦していたが、二人の乗った機は甲板の後ろに向かう。右手をのばしてダナは通話装置のスイッチを入れる。

「ダナだけど、着艦OK？」

「いつでもどうぞお」

通話装置ごしに返ってくるのんびりした声。後部座席からベルトに固定されたままでできるだけ首をのばして確認してみれば、ダナはぱちぱちといくつかのレバーを上げたり下ろしたりしていた。上げ下ろしの間に操縦席に並んだボタンを押したりもしているのだが、どの基準で押すボタンを選択しているのかまではわからない。

プロペラの回転が停止する。そのまま機体はゆっくりと下降し、甲板に降り立った。

「おつかえりー！」

駆け寄ってきたのは、背が高くひよろりとした青年だった。ダナが飛び降りるのに手を貸しながらたずねる。ついでに軽く抱きしめたように見えたのは、ディオの気のせいだろうか。

「おかえりー、首尾は？」

「上々ね。目的は果たしたし、二機撃墜してきた」

「聞いている。ビクトール様が怒っていたよ。『あいつは目的を忘れてる』ってね」

にやにやしている青年とは対照的に、甲板に足をつけたダナは顔をしかめた。

「しょうがないじゃない。久しぶりの空だったんだから」

「で、そつちが『お宝』ね」

お宝よばわりされたディオは、目をぱちぱちさせながらベルトと悪戦苦闘していた。ようやくはずして降りようとするのにも、彼は手を貸してくれる。両足で立つのは、ずいぶん久しぶりのような気がした。メレディアーナ号を脱出してから、一時間とたっていないはずなのに。

「ようこそ、フォールシャ号へ。俺はルッツ・クライトン。ルッツでいいよ」

「ディオス……ディオ……ヴィレッタです。どうぞよろしく」  
危うく本名を名乗るところだった。

口ごもったディオを、疲れているのと勘違いしたのかルッツは優しく肩を叩いた。

「本拠地に着くまで、少し休むといいよ。こんな船だからお客様用の部屋はないけど、俺の部屋使ってくれていいから」



「あたしは、ビクトール様のところに行ってくる。後まかせていい？」  
「いいよー。君が着艦したら、俺はお役目ごめんだし」

脱いだ帽子とゴーグルを右手でふらふらさせながら、ダナは船の中へと入っていく。その後ろ姿を見送りながら、ルッツは言った。

「彼女の操縦、荒っぽかつたる？」

「死ぬかと思いました」

「堪忍してやってよ。あれで、うち一番のパイロットだからさ……。まあ、戻ってきたのは久しぶりなだけだ」

素直な感想に、ルッツは口元をにやりとさせて一応のわびらしきものを入れた。

「そういえば、フォースダイト搭載機って言っていましたよね」

なぜ戻ってきたのが久しぶりなのかは、聞かないことにしてデイトは話をダナの機体へと変える。

「そうそう。うちにも三機しかないんだよね。ビクトール団長とサラ副団長、それにダナの機体」

フォースダイト搭載機とは、飛行島から発掘したフォースダイトを使用している機体のことだ。もちろん現在でもフォースダイトの採掘は行われている。

フォースダイトを機械の動力源として使用するためには、それなりの純度になるまで精製しなければならないのだが、現在の科学力では小さな機械を動かすのが限界だ。

飛行船サイズを動かしたければ、飛行島から発掘するしかない。当然発掘されてしまった飛行島は地へと戻ることになるわけだから、流通する量は多いとはいえない。

大きなフォースダイトを分割して、メレディアーナ号のような客船や輸送船へ大きなかけらを搭載する。小さなかけらは戦闘機やも

つと小型の船に使われることになる。フォースダイトを搭載した機体は、垂直離陸垂直着陸が可能となるため非常に使い勝手がいい。使用する燃料も少なくてすむ。フォースダイト専門に船を襲う空賊もいるほどだ。

そのフォースダイト搭載機を使用することが許されているというのは、よほどの腕ということなのだろう。……あの若さで。

狭いトコだけど、と申し訳なさそうにルッツはディオを招き入れた。通されたルッツの部屋は、ベッドが一つあるだけの簡素なものだった。軍用艦に快適さは必要ないということなのだろう。小さな窓に狭いベッド。天井も低く、小柄なディオはともかくルッツは天井に頭がついてしまいそうだ。壁には上着と帽子がならんでかけられていた。

「俺たちの島まで、半日くらいかかるからのんびりしているといいよ。昼寝してもいいし」

「ルッツさんは？」

「ちよつと機体の整備に行つて来るよ。あ、鍵はかけないでね。誰か君を呼びに来るかもしれないし」

ひらひらと手をふって、ルッツは部屋を出て行った。

昼寝をしてもいいと言われても落ち着かない。ベッドに腰をおろして、ディオはネクタイを緩めた。上着は脱ぐ気にはなれない。

確かにアーティカとは長年の間契約を結んでいるが、傭兵など信用できない。気をひきしめなければ。

小さな窓から見える空は、茜色に変わり始めていた。

### 3・アーティカの軍用艦(1)

いつの間にか眠り込んでいたようだ。デイオが気がついた時には、外は真つ暗だった。小さな窓に顔を押しつけるようにして外をのぞく。

視界は全て真つ暗だった。どこへ連れていくつもりなのだろう。いまさらながら不安になってくる。

あまりにもタイミングよくやってきた救出の手。デイオの持つこの研究成果を、アーティカもねらっていたのだとしたら？

「あー、やっと起きたね。ビクトール様が会いたいって言ってるんだけど。さっき来た時、よく寝てたから起こさなかつたんだ」

ノックもなしにドアがあいて、部屋の主が顔を出した。

「ビクトール？」

「うん。こんなところに説明もなし連れてこられて、君も不安だろうからって。ダナは……」

まあ、俺もそうなんだけど。詳しいことは何も聞かされちゃいないし、説明してあげられないからね」

ビクトールとは、宮廷で何度か顔を会わせたことがある。あの時はいい人間のように見えていたのだが……。イヤだと言うわけにもいかず、ルッツに続いて部屋を出る。

改めて見るとメレディアーナ号にくらべてフォルーシャ号の廊下はかなり狭い。あちらは優雅にふくらませたドレスをまとった女性が歩くということもあり、廊下の幅も広めにとられている。

こちらは二人すれ違うのがやっと、というだけの広さしかない。長い廊下を通り抜ける間、誰にも会わなかった。他のドアよりほんの少しだけ立派なドアの前にたどり着く。

ルッツはドアをノックした。

「鍵はかかってねーぞ」

中から聞き覚えのある声が返ってくる。宮廷で何度も聞いたことのある声。

「ビクトール様、ディオ君連れてきました。俺はこれで」

部屋にディオを押し込んで、ルッツはさっさと退室した。見回した部屋の中は、ルッツの部屋よりは多少広かった。違いはそれだけでルッツの部屋同様、そこに快適さはまるでなかった。部屋のはじめにベッド、テーブルが一つ、それに向かうようにおかれた椅子が二つ。それに小さな本棚が一つ。部屋の中にあるのはそれだけだった。壁には大きな地図がかけられている。

「はじめまして、だよな」

椅子に腰かけたまま、人の良さそうな笑みを浮かべたのがビクトールだった。二十代後半から四十代、どの年齢と言われても信じてしまいそうだが、その物腰からして四十代の方が近そうだ。

体格はよく、数百人にも及ぶ傭兵団を率いる団長としての自信がその場にいるだけで伝わってくる。美男子とはいいがたいが、妙に女性を引きつける引力のようなものは持ち合わせているらしい。女性たちが彼の気を引こうと、周りを取り囲んでいるのを何度も見たことがある。

「はじめまして」

王子として接するか、ディオとして接するか。判断に迷う必要はなかった。彼の方からはじめましてと言ってくれたのだから。

「悪かったなあ。ダナには逃げることに専念しろ、と言っただけなんだが。怖かったら？」

「……怖かったと言えば、怖かったけど」

「ま、あいつは叱っておいたから。とにかくこうしてここに無事についてくれてよかった、ってことだ」

彼はテーブルの上におかれていた瓶から中身を二つのグラスに注ぐと、一つをディオに手渡した。

「とりあえず飲もうか」

「いただきます」

「不安だろうから先に話しておく」

グラスから一口飲んで、ビクトールは話し始めた。

「あなたの正体を知っているのは、この中では俺だけだ。サラもあんと顔を合わせた事があるが、あいつは今別の任務についているからな。だからここでは、ディオ・ヴィレッタとして扱わせてもらう」

ビクトールは続けた。国王から密かに依頼を受け、メレディアーナ号を密かに護衛していたこと。これから、ディオを王都まで連れていくつもりであること。ディオの持っているセンチアでの研究成果が、何であるか知っているということまで。

「俺としては、賛成できんがな。あまりにも危険な研究だろ？下手したら、世界中を敵に回すことになる」

「……空賊には有効だと思うけど」

「俺たちみたいな空戦部隊にも有効だよな」

「……」

「まあ、契約を結んでいる以上主には従わなければならないからな。あんたは無事に王都まで送り届けるさ。今夜はこのまま俺たちの本拠地に向かうが、補給をすませて明日の朝には出発する」

ビクトールは、グラスの残りを一気にあけた。

「帰ったら親父さんに伝えてやってくれ。」

研究成果を悪用しようとしたら、俺たちはいつでも反旗を翻すとな「わかった」

話を終わると、ビクトールは通話装置を開いた。

「誰か坊やを迎えに来てくれ」

「了解！」

すぐにドアがノックされた。今度顔を出したのは、ダナだった。戦闘機を降りた今は、飛行服は着ていない。白のシャツに、茶のパンツを合わせていた。足元は同じく茶の編み上げブーツだった。

「ダナか。話は終わったから、坊やを部屋まで連れて行ってやってくれ」

「わかりました」

ダナは、ディオをうながした。

ディオが退室しようとする、後からビクトールの声がおいかけてきた。

「艦内を案内してやってもいいぞ。こんな船に乗る機会なんてそうそうないだろうからな」

肩越しにふりかえってみると、ディオのことなど忘れたように、ビクトールは新しい酒をグラスに注いでいた。音がしないよう、静かにドアを閉めてダナは口を開いた。

「どうするの？艦内見てまわる？」

「……お願いしてもいいかな？」

肩をすくめて、ダナは先に立って歩き始める。右手を軽くふったのについてこいという合図だと解釈して、ディオも続く。

最初に案内されたのは甲板だった。メレディーアーナ号のそれとは違って、殺風景だ。甲板は殺風景だったが、空は違った。まさしく落ちてきそうな、という表現があてはまる。これほどの星が、夜空にあるのだとは知らなかった。

「ちよつとすごいでしょ」

得意げな顔で、ダナは胸を張る。

「すごいね」

「あたし……。最近まで地上にいたんだけど、この空が恋しかった」

「地上にいた、て……?」  
ディオの質問は聞こえなかったふりをして、ダナは急いで甲板をつ  
つきった。

#### 4・アーティカの軍用艦(2)

「次はこつち」

もう一つの船内への入り口から、ディオを呼ぶ。問いを重ねることをあきらめて、ディオはダナの後を追う。階段をおりたところで、厨房からだろうか。温かそうなスープの香りがただよってきて、ディオの腹の虫が鳴いた。

「夕食まだだった？」

うなずいて返せば、ダナは慌ててディオを食堂へとひっぱっていく。並んだテーブルの一つにディオを座らせておいて、彼女は厨房へとかけこんだ。

「あんたが『お宝』か」

柄の悪そうないかにも傭兵的な雰囲気をもった男に声をかけられて、ディオの背筋が凍りついた。助けをもとめて左右を見回していても、食堂にいるのは彼と彼の連れだけだった。

「おい、ジヨナ。あまり怖がらせるなよ」

連れの男が、苦笑混じりに声をかけてきた男をたしなめる。

「お前は顔が怖いんだから、子どもの相手は不向きだぞ」

「子どもって……もうすぐ十九になるんだけど」

子ども扱いされてかちんとくる。童顔なのも小柄なのも彼のせいではない。思わずいい返したディオにジヨナと呼ばれた男は手をふつて謝った。

「悪い、悪い。子ども扱いする気はなかったんだ。短い時間だろうが、楽しんでいってくれ。うちのコック、腕はいいからな」

そう言いながらも、ジヨナはディオをじろじろと眺め回した。

「……あんたが普段食っているものほど、上等ではないだろうが」と最後につけ加えたところからして、着ていたものから値踏みした



ということか。偽名で旅をしているとはいえ、メレディアーナ号のような空の客船に乗る以上それなりな格好をするのは当然だ。ましてや、その中でも上のクラスの部屋を取っていたのだから。

空賊の襲撃さえなければ、今頃はメレディアーナ号の食堂できちんとした晚餐をとっていただろうに。傭兵団の軍用艦で、夕食をとることになるとは思っても見なかった。味の方は期待できないだろう。美食家だと自分のことを思ったことはないが、どうせ食べるならおいしいものの方がいい。

ダナが戻ってきたのはジョナたちが食堂を出ていってから数分後だった。トレイの上には野菜のスープ、オムレツとパンが並んでいた。コーヒーマグのマグカップだけは二つ載っている。

「ごめんね、ろくな物残ってなくて。いそいでコックに作らせたんだけど。呼びに行っただけはルッツは何してたのかしら」

「僕、寝てたみたいで」

「あらそうなの」

トレイをディオの前に置いて、ダナは向かいの椅子をひいた。コーヒーマグのマグカップの一つを自分の前において、残りをディオにすすめる。

「どうぞ」

どうぞと言われても。頬杖ついて食べるところを見守られていたのでは居心地が悪い。確かに温かなスープもオムレツも期待していたより味はよかったのだが、味わう余裕なんてなかった。流し込むようにして、食堂を後にする。

食堂を出てからは、格納庫に砲門、武器庫に弾薬庫、居住区とダナはディオを連れ回した。

話には聞いていたが、実際に軍用艦に乗るのは初めてだった。

「あとは、後方の格納庫だけかな？あたしとビクトール様の機体だ

けそつちに置いてあるの」

最後に案内されたのは、さきほど着艦した船体後方だった。誰もいないのか、格納庫の中は真っ暗だった。ダナがスイッチを入れると柔らかな光が格納庫の中を照らしだす。

二機の戦闘機が並んでいた。赤と茶で塗装されているのが、デイオが乗ってきたダナの戦闘機。黒一色なのが、ビクトールの戦闘機だった。二機を見比べて、初めてデイオは気がついた。

ビクトールの機は、一人分しか席がない。

「ダナ。君の戦闘機って二人乗りなの？」

「本来はね」

自分の戦闘機を見つめながら、ダナは続けた。

「前の席がパイロット。後ろの席は射撃担当ね」

「あれ、でも……」

救出に来てくれたあの時。確かにダナは追ってきた二機を、撃墜していた。

「パイロットの席からも攻撃できないわけじゃないの。そつちに集中力を取られちゃうから、分業できるならやらないけど。あんたじや乗ってるだけで精一杯でしょ」

「そりゃそうだけど」

ダナの言っていることは正しいのだが、そうぼんぼん言われては面白くない。

乗っているだけで精一杯と言われても、戦闘機に乗ること自体生まれて初めてだ。それ以上のことは期待しないでほしい。

「あたしも、もう後ろに人を乗せるつもりはなかったんだけどな……」

つぶやいた声は小さかった。一瞬その背中が小さく見えて、デイオは思わず手をのびしかけた。意味ありげな言葉の理由を問いただそ

うとした時、ダナは勢いよくふりかえった。

慌てて伸ばしかけた手で前髪を直すふりをする。

「さつきは、ごめんね。怖かったでしょう。ビクトール様にも叱られちゃった」

「怖くなかったと言ったら、嘘になるけど……でも、あそこで撃墜しなかったら逃げられなかったんだろう?」

「あたしはそう思ったんだけど。パイロットの席からじゃ攻撃力は十分じゃないし……。あたしの任務は、敵を全滅させることじゃなくて、あんたを無事にフォルーシャ号に連れてくることだから」

そういえば、とようやくディオは思い出した。

「メレディアーナ号に乗っていた人たちって……」

「乗客は仲間が全員救出した。けが人は出たみたいだけど。船もなんとか近くの港まで運ぶことができたって」

「よかった」

ディオは胸をなでおろした。どこから話をもれたのかまではわからないが、空賊たちの目当てが自分だったということは間違いがない。自分のせいで死亡者が出たとしたら後味が悪いことこのうえない。

その場所を最後にディオはルツツの部屋へと送り届けられた。

ルツツ本人はどこに行ったのかというと、船の機関室でトラブルが発生したとかでそちらにかかりきりになっているらしい。危険だという理由で、機関室までは案内してもらえなかった。

「ダナ」

部屋の扉に手をかけてディオは言った。心からの感謝をこめて。

「助けに来てくれてありがとう」

「任務だから」

そう口では言いながらも、彼女は笑みを返してくれた。暗い廊下が、一気に明るさを増したように感じられたほど明るい笑みを。

## 5・本拠地の夜(1)

アーティカの本拠地、飛行島クーフに到着したのは真夜中近くだった。すぐに徹夜での補給作業が開始される。

ルッツの部屋に取り残されたディオをダナが呼びに来たのは、到着してから数十分後だった。

「ビクトール様が、島の中も案内してやれって。こんな夜中だから、見ても楽しいところなんてないと思うけど」

あいかわらずの口調で、ずけずけとダナは言う。彼女の言葉を一つ一つ気にしていても、仕方がない。

それならば、と一番見たかった物をディオは口にした。

「フォースタイト見られるかな？」

「いいわよ。そんなもの見たいだなんて、変わってるわね」

「大学の専攻なんだ」

大学、という言葉聞いてダナは納得したように首をふった。

「大学に行っているなんて、やっぱりおぼっちゃんなんだ。あんな船に乗っていたし、着ている物も違うものね」

大学に行くことができるのは財政的に恵まれた家の者が、奨学金を得ることができる優秀な学生だけだ。たしかに、国王の息子というのは国内最高級のおぼっちゃんだろうが、身分を明かすわけにもいかない。

あいまいにかべた苦笑いでごまかす。

甲板に出ると、冷たい風がディオの頬を刺した。まだ秋には間があるとはいえ、ここは上空。地上よりはだいぶ気温が低い。はあ、と息をはいてみた。白くはならないのを見て、思っていたほど寒くはないのだと目で実感する。

「何やってるの。行くわよ」

先に島に降り立っていたダナが、ディオをせかした。

甲板から見下ろした島内は真つ暗だった。ほとんどの人間が寝ている時間なのだから、当然か。

「食べるものはどうしているの？」

ダナが開いたのは、軍用艦をおりてから数分歩いたところにある小さな扉だった。その先に続く通路を歩きながらディオはたずねた。

通路の両壁にはところどころに明かりがともされてはいるが、十分な光の量ではない。

「島内でも作っているけど、ほとんど地上から買っているわね。パンを作る小麦だけは、国王陛下から支給されるけど」

食生活は、かなり質素なようだ。自分の寮の食事と似たようなものなのだろうと、解釈する。

「水は？」

「ものすごい貴重品。島内に池はあるけど、それだけじゃ足りないし。でもクーフは恵まれているかしら？」

「なぜ？」

「古代人の機械があるから。海水から真水を作るのって今の科学力じゃ無理でしょ」

フォースダイトを作ったことといい、真水精製機を完成させていたことといい、古代の人間と現代の人間の間にはどれほどの差があるのだろうか。

生きているうちに、その科学力に追いつくことができるのだろうか、ディオが自分に問いかけた時だった。

「はい、到着」

もっと嚴重に警戒しなくていいのだろうか。無人のドアを、ダナがあけた向こうは広い部屋だった。天井も高い。普通の家の三階の天井と同じくらいの高さのところ天井があった。中央にわずかに発光している緑色の球体。広い部屋の大部分を、この球体が占めてい

る。

「これがフォースダイト……」  
デイトはつぶやいた。

研究室で実験に使っているのは、これよりもはるかに小さなかからではない。半径数キロに及ぼうかという島を地上に浮かべようというのだからこの技術力はたいしたものだ。

やはり、古代の人間にはかなわないのだ、まだまだ。

実験室で使っているかけらとは比べ物にならないフォースダイトの輝きに魅せられているデイトをよそに、ダナは部屋を横切っていた。部屋の向こう側から、デイトを呼ぶ。

「制御室も見ろ？」

「で……できるなら」

ダナの案内してくれた制御室には、三人の男がいた。皆、中年以上の年齢であることにデイトは気がついた。さらにそのうち一人は右手がなく、義手が服の袖口からのぞいていた。

「やあダナ、久しぶりの空はどうだった？」

「最高！やっぱリアーティカの間人は、空を離れは生きられないんだ、って実感しちゃった」

声をかけてきた一人に笑顔を返してダナはデイトを三人の方におしやった。

「彼、今回の救出目標。大学でフォースダイト工学を専攻しているんですって。デイトって言うの」

「ど……どうも」

デイトは頭を下げた。三人の目が丸くなる。

「大学生を見るのは初めてだなあ」

「こんなとこまで来ないもんな」

「とりあえず、こっち見てみるかい？」

口々にディオに話しかける。ディオは誘われるがままに制御板に目をやった。彼には見当もつかない。いくつもの赤いランプ、緑のランプ、レバーにボタン。左上にあるのは、航路図だろうか。黒い背景の上に、緑の光でセンチアとマグフィレット近郊の地図が描き出されている。

「この赤いランプが現在地」

男の一人が親切に教えてくれた。

「現在地？」

「飛行島だからね。今現在もこの島はゆっくりと東北東に移動している。停止させることも可能だけど、本拠地攻められたらたまらないだろう？だから我々は常に移動しているというわけさ。上空からの警戒にもなるし」

右手のない男が親切に説明してくれた。

「下におりすぎたら、君の右手にあるボタンを押してやる。そうすると、少しばかり上空にあがるってわけさ」

最初にダナに話しかけた男が、続く。

「高度は、君の正面。常に三人体制、二十四時間で監視しているから、墜落の心配はまずないよ」

残った一人が笑う。

「我々にできるのは、畑仕事と監視ぐらいだからなあ」

右手のない男が話を引き取った。監視にあたるのは、戦闘から引退した者がメインなのだという。

若者があたったこともあったのだが、いつの間にか引退した者がこの任にあたることに慣習が定まっていた。

引退した者すべてが監視の任にあたることができるわけではなく、団長に見込まれた者だけが許される。責任ある任務というわけで、引退時にこの任務につくよう命令されるのは一種の名誉のようなも

のらしい。

「今は、ティレント方面に向かっているな」

「陸地に近づきないようにしろよ。万が一ってことがある」

「わかっているって」

口々に言う三人を横目で見ながらダナがささやいた。

「島から石一つ転がり落ちただけで、下では大惨事につながりかねないから現在地は大切な。あたしたちは基本的には海の上にいるってわけ」

下に島があつたり、船がいたりした場合はどうなるのだろうかと思つたが、そこも計算されているのだろう。そうでなければ、海路を使つての航行などできるはずがない。監視室を出て、ダナはディオをビクトールの家案内した。

客人はビクトール家に滞在するのが決まりらしい。夜明けにはフォルーシャ号で出発だが、数時間の仮眠をとるくらいの時間はあつた。柔らかなランプの明かりに照らされた部屋は、簡素ながら居心地がよさそうだった。

壁には、明らかに子どもの手とわかるへたくそな花の刺繍が飾られている。窓際におかれた小さなテーブルの上には名も知れない小さな花がコップにいけられている。

「明日の朝、誰か迎えに来ると思うけど。日が出るのと同じくらいに出るからそのつもりでね」

よく勝手をしっているのだろう。てきぱきとベッドを整えると、ダナはそう言って出ていった。ネクタイは外したものの、上着は脱ぐ気になれずそのままベッドに潜り込む。

潜り込んだ布団は、太陽のにおいがした。寮の冷たいベッドとは大違いだ。船の中で昼寝もしたはずなのに、あつと言う間にディオの瞼は重くなった。



## 6・本拠地の夜(2)

夢を見た。

ほんの昨日あったできごとを。

父が倒れたという電報を受け取って、国からの使者を迎えた。荷物をつめて、メレディーアーナ号へ乗船した。偽名を忘れないようにと必死で頭にたたき込んで、旅程も全部記憶した。

夢のような豪華客船の旅を楽しむ間もなく、空賊の襲撃。

響きわたる悲鳴。

警戒警報……。

警報？

ディオはとび起きた。この警報は、夢ではない。島内から響いている！ベッドから転がり落ちたディオは、そのまま部屋のドアにかけよった。手荷物はメレディーアーナ号に置いてきてしまったため、持つていかなければならないものはない。

廊下に顔を出すと、向こうから早足にビクトールが歩いてくるのが見えた。

彼も寝ていたのだらう。下半身は一応着ているが、上半身は裸にシヤツをひっかけただけだ。

胸を大きな傷が横切っているのに気がついてディオは目をそらせた。

そのシヤツのボタンをはめながら、ビクトールは大声で命令をくだす。

「非戦闘要員の待避準備！島が落ちるような真似はさせないつもりだが、万が一ってことがあるからな。戦闘機部隊、発進準備しとけ、俺も出る。フォルーシヤ号もすぐ出られるな？」

壁にしこまれた通話装置ごしに、

「了解！」

「すぐにとりかかります！」

と返事が返ってくる。

この状況下でも、焦ったりおびえたりはしていないようだ。

「ビクトール様！」

ビクトールの後ろからダナが追いかけてくる。ダナもこの家で寝ていたらしい。先ほどと同じ白のシャツにパンツ、ブーツという格好だが、短い髪の毛があらぬ方向に飛び跳ねている。櫛を通す暇など当然なかった、ということだろう。

まさかビクトールと一つベッドで寝ていたわけではないだろうな、と一瞬不謹慎な考えが、ディオの脳内を横切る。いくら何でも年が違いすぎる、とすぐに打ち消したが。ディオの開いた扉の前まで来て、ビクトールは足をとめた。追ってきたダナに、ディオをしめす。「ダナ。おまえは坊やを連れて脱出するんだ」

「私は……信頼されていないということですか？私だって、戦えます」

ビクトールをにらむようにして、ダナは返した。碧玉色の瞳が、輝きをます。

「そうじゃない」

ビクトールは首をふった。

「信頼できるのがおまえだけだからだ。おまえには説明してなかったが、その坊やは、大切な書類を持っているんだ。それを敵の手にわたすわけにはいかない。そう言えばわかるだろ？」

「でもっ……」

「後ろに丸腰の人間乗せて戦闘空域を飛べる人間が何人いる？『雷撃』と『閃光』の血をひく、おまえにしかできない芸当だろ？」

それに、とビクトールは軽い口調でつけたした。

「おまえを信頼しているのは、ヘクターが選んだ女だからってわけじゃないぞ。ここ二年、外部の人間と接していないのはおまえだけだという理由もある」

「外部の……人間……？」

「そうだ。裏切り者がいるってわけさ。メレディアーナ号が襲撃されたことといい、クーフの現在地が知れたことといい、裏切り者がいるって考えるのが自然だろ？」

「……わかりました」

最終的に唇をかみしめて、ダナは言った。

「ディオを連れてティレントを目指します。王都でお会いしましょう」

蚊帳の外だったディオは、ようやくそこで口を挟むことを許された。

「僕は……どうすればいい？」

「黙ってダナの言うとおりにしときゃいいさ。空の上にいる間はな」

ビクトールは、ただ肩をすくめてみせる。

「地上におりることになったら、二人で知恵をしばって考える。無

事に王都へたどりつく手段をな」

それから、顔を引き締めると、二人に言い聞かせた。

「何かあったらすぐに逃げる。ディオの持っているものを、王都に届けることだけを考えるんだ」

「はいっ！」

二人の声がそろつ。ビクトールは目を細めた。

「それとダナ……」

「はい」

「出たら逃げることに専念しろ。後ろに乗ってるのがヘクターじゃないってことを忘れるな」

「……はい」

数秒の間をあけて、ダナはうなずく。二人の間の別れの抱擁は、恋

人同士かと思つてしまつほど熱烈なものだつた。ダナを引きはがして、ビクトールはディオの頭を軽くたたく。

「うちのじゃじゃ馬を頼むよ。ものすごい世間知らずなんだ。そう育てちまつた俺たちにも責任はあるんだがな」

「できるかぎりの努力はしますよ」

あくまでも、軽い口調を装つて、ディオも返す。

「行け！」

ビクトールの声と同時に二人とも家を飛び出した。

フォルーシャ号にかけこむと、すでにルッツが待ちかまえていた。

「遅いよー」

この状況下でも、このひよろりとした青年ののんびりとした口調は変わらない。

「はい、飛行服、飛行帽、ゴーグル。んで、道中のお弁当」

最後の一つまで用意されているあたり、緊張感がないとしかいいようがない。

「お弁当って……」

苦笑しかけたディオに、ルッツはまじめな顔で言った。

「腹が減つてはなんとやらつて言うでしょ？ほい、君お弁当係」

飛行服を身につけた二人を戦闘機に乗せるところまで数分。最後にディオにバスケットを押しつけると、ルッツは言った。

「コック叩き起こして作らせたんだから、粗末にしちゃあだめだよ？」

「……そろそろ出たいんだけど？」

「焦らない、焦らない」

あきらかにいらついているダナをなだめてルッツは、通話装置ごしに連絡を取つた。

「フォルーシャ号が出港したら、君たちは死角になる角度を狙つて脱出するようにだつて。まあ、すぐ気づかれちゃうだろうけどね」

やがて、ゆつくりとフォールシヤ号が動き始めた。前方から、小型戦闘機が発進していく音が聞こえてくる。通話装置から離れたルッツが頭をかき回した。

「んじゃ、カウント。ゼロと同時に反対方向へ。OK?」

「了解」

「生きて再会しようね……って俺ここから動かないけど」

そういうルッツに笑いかけ、きゅっとゴーグルを直して、ダナは操縦桿を握る。

「5……4……」

ルッツのカウントが始まった。

足元に押し込んだバスケットが飛び出さないことを祈りながら、デイオはベルトを握りしめる。

「1……0!!」

ルッツの合図と同時に飛び出した。首をねじれば、暗い夜空の中、はるか後方の空だけが赤く染まっている。

夜が明けるまで、何機が残っているのか。それはデイオには予想すらつかないことだった。

## 7・救援(1)

二人を乗せたダナの機体は、急速にクーフから離れていった。フオルーシャ号が砲撃を開始する。船から打ち出される火の玉が、暗い空に軌跡を描く。呼応するように打ち返される敵の砲弾。双方の戦闘機が、翼をもがれて海へと落ちていく。

二人はその全てを背に、暗闇へと逃げ出していた。天を埋め尽くすほどの星たちも、何の慰めにもならない。二人の下にあるのは、真っ黒な海。撃墜されたら、二人を飲み込んだまま二度と吐き出すことはないだろう。

「これからどうする？」

「そうね。この機では直接王都には行けないから、どうするか決めなきゃ」

背後の戦闘から心をそらせてたずねると、ダナは前を向いたまま答えた。

「テイレントまでは行けない？」

「……無理ね。燃料がもたないもの……でも、決めるのはこの状態を切り抜けてからね！」

ビクトールの防御線を突破して、背後から三機追ってきている。ダナは機体を急降下させた。重力に逆らうことなど知らないかのようにな、機体が落ちていく。

「う……」

悲鳴をあげかけた口を、デイオは片手で押さえた。もう片方の手でベルトを握りしめる。今度は、アーティカの援軍は期待できない。この状況下で頼りにできるのは、ダナの腕だけだ。彼女の集中力をそいではいけない。その思いで、必死に悲鳴を喉の奥に閉じこめた。足下に置いたバスケットを、かかとでしっかりと座席の下に押し込

む。こんなものを持たせたルッツを恨む。座席の下からこれが飛び出すなんて事になったら惨劇だ。今度顔を合わせたら、思い切り文句を言つてやるう。……その機会があれば、だが。

海面すれすれまで降下したダナの機体が、向きを変える。星を背につつこんでくる三機の戦闘機。その三機に正面から立ちむかうかのように、ダナは機体を動かした。三機の間を、すりぬけるように今度は空へと賭けのぼる。すれ違いざまに、一機が爆発した。

「とりあえず逃げる！」

ダナの機体は、宙を自在に賭け巡った。相手の機体を翻弄するように、夜空に何重もの円を描く。

「しつっこいなあ、もつっ！」

舌打ちするダナの機体を追い続ける、二機の敵機。

「来るっ」

敵から弾が撃ち込まれた。機体を左に傾けて、ダナはそれをよけると、今度は左から撃ち込まれた。機体を上昇させる。右、左、さらに左。どれだけあがいても、ふりきれそうにない。

「げ……撃墜しちゃえ……ば？」

ベルトをにぎりしめたままの、ディオの指の関節は白くなっていた。

「そうしたいんだけど……ね！」

言葉と同時に、ダナが撃った。見事にかわす、敵の機体。

「あっちのパイロットの腕もなかなかなのよねっ！」

ダナの言うとおりだった。どれほど敵を引き離そうとしても、ぴたりとついて離れない。急上昇や急降下を繰り返しても、気分が悪くなるのはディオだけで、ダナも敵機のパイロットたちもいっこうに堪えている様子はなかった。

「下手すりゃこっちが落とされる……」

ダナがつぶやいた時だった。

「しまった！」

機体後方へ打ち込まれた衝撃。

「だめ！もうちょっとがんばりなさい！」

ダナの叱責もむなしく、機体は海めがけて落ちていく。

「うわあああああ！」

今度はディオも容赦なくわめいた。海面がせまってくる。このままつつこんだら、後は沈んでいくしかない。

「ま……負けないっ！」

ダナは、何とか機体を水平に立て直す。目の前に砂浜が見える。ダナの機体は、そのまま砂浜に滑り込んだ。砂をまき散らしながら砂浜をのりこえて、前方の木が群生しているところにつつこんでいく。ベルトを外すのと同時にダナは、ウィンドウを開けて立ち上がった。足で機をコントロールしながら、手を腰に着けた小さな鞆にやる。

タイミングをはかりながら、取り出したものをダナは森の向こう側へと放り投げた。それこそ機体が爆発したのではないかというような音を立て、炎、ついで白い煙が立ち上る。もう一個同じところを目がけて投げた。

繰り返される炎と煙の誕生。

その横に、機は静かに停止した。

「今の何？」

たずねたディオの唇に手をあてて、ダナは静かにするよう無言の圧力をかけた。上空から、戦闘機の旋回する音が響いてくる。やがて音が遠くなっていくと、ダナはディオの唇にあてていた手を離して、息をついた。

「ごまかされてくれたみたいね……。あれ、ルッツが作ってくれたのだけど、まさかこんなに早く使うことになるなんてね。朝にはあなたの持つてる機密書類だっけ？それを取りに来るだろうし、それまでに何とかしないと」

「燃えちゃったって思ってくれないかな……？」



「どつちにしたって、フォースダイト回収に来るわよ。動きでフォースダイト積んでるってばれているだろうし」

確かにフォースダイトは貴重品だ。ディオの持つ研究成果を持って帰れなかったとしても、価値のある戦利品として通じるだろう。秋の気配をまとった空気がディオの肌を指した。思わず身震いすると、ダナはあきれたように首をふった。

「これくらいでそんなに寒いわけ？ほら、毛布！」

どこから取り出したのか、薄い毛布がディオの顔にたたきつけられた。それを体に巻きつけてみても、保温効果の恩恵にはあずかれなかった。吹きつける潮を含んだ風の方がよほど強い。

「本当に……ぼんぼんってやーね！」

もう一枚、同じような毛布が投げつけられる。

そんなことを言われても困る。防寒に優れている飛行服を着ているとはいえ、寒いものは寒いのだ。ディオに二枚の毛布を渡しておいて、ダナは戦闘機から地面の上に滑り降りていた。

「二枚とも僕に渡しちゃって、ダナ、君の分は？」

「あたし寒くないし。朝までに機体何とかしなきゃ。あんたは寝てなさい」

損傷を受けた機体後部にダナは回った。身を乗り出して、ダナの様子をうかがうと小さなライトで機体後部を照らし出している。上を覆っているのは、空からこのわずかな光が発見されないようにと言う用心なのだろう。

「寝てなさいって言われても……」

一人に労働させておいて、自分は寝ているというのは何か違う気がする。機体後部から、声だけが返ってくる。

「じゃ、起きてたらどうにかできるの？」

「できない……と思う……」

それを認めてしまうのは、くやしいことだけれども。大学でフォー  
スダイトについて研究していたと言っても、彼の研究では戦闘機を  
飛ばすことなどできない。その逆は可能ではあるだろうが。

「なら、寝てなさい。あたしは、二日間くらいは寝なくてもどうつ  
てことないけど、あんたはそういうわけにもいかないでしょう？」  
三日くらいなら徹夜の経験がないわけではない。ただし、研究室の  
中で、だ。肉体的活動は専門外。体力を温存しておいた方がいいの  
は間違いがない。

「もうしわけないけど、そうさせてもらおうよ」  
返事はなかった。ディオはそろそろと、戦闘機の後部座席から脱出  
した。二枚の毛布を抱えて、少し離れた場所に横になる。地面の上  
が寝心地がいいとはいえないが、窮屈な戦闘機の座席よりは、体を  
伸ばすことができる分楽だ。

波の規則正しい音が耳に忍び込む。時おりまざる、工具がたてる金  
属的な音。

上を見上げれば、木の間から星が見える。つい先ほどまで、あそこ  
にいたのだと思うと不思議な気分だ。ディオは目を閉じた。

## 8・救援(2)

眠らなくてもいい。体力を温存するだけ。

そう思っていたはずなのに、浅いながらもなんとか睡眠時間は確保できたらしい。

意外と自分はずぶとかったのかと苦笑しながらディオは起きあがった。

東の空が白みかけている。

堅いところで寝ていたためかさすがに体のあちこちが痛い。一步踏み出したところで、関節がきしむのがわかった。地面で寝るという経験は、予想していたより体に負担をかけていたらしい。そうはいっても、気分はさほど悪くなかった。爽快、とまではいかなかったけれど。

「起きたの？」

戦闘機の座席からダナが言った。飛行帽とゴーグルは、翼の上に放り出されている。

「……おはよう」

ディオの挨拶に口の両端を軽く持ち上げてこたえると、ダナは後部座席の方に身を乗り出した。

「はい、これ受け止めて！」

放り投げられたのは、昨夜足で必死に押さえ続けたバスケット。どうやら中身も無事のような。続いてダナが、身軽な動作で飛び降りる。

「今、仲間から連絡があつたの。救援に来てくれるって言うから、そっちに合流するわ。一応飛べるであろうところまではこぎつけたけど、それほど速度は出せないだろうし」

「飛べるところまで直せた？」

「うん。ほら、あたしの機体フォースダイト搭載してるでしょ。フォースダイトの制御装置の方は無事だったから、エネルギーの流れをちよつと変えてやったの。だから飛べることは飛べるんだけど……」

こぼれるため息。

「やっぱりだめね。スピードは出せないから、今度敵に見つかったら間違いなく撃墜されちゃう」

デイオは話を変えた。肩を落としたダナの姿は、これ以上見たくなくて。

「このバスケットなんだけど……」

「その中にコーヒー入っているはずなの。それだけ飲んだら、出発する」

デイオにバスケットを持たせたまま、ダナはふたを開けた。中には紙にくるまれたサンドイッチとポット、カップが二つ入っている。

「お腹すいてる？」

問われてデイオは首をふつた。昨夜からの経験があまりにもこれまでの日常と違いすぎて、神経回路が麻痺しきっているようだ。

「お腹すいたら、後ろで食べても気にしないわよ？」

「……遠慮しとく」

コーヒーを注いでから、ポットをダナはバスケットに戻した。自分の分しか注いでいない。

デイオはバスケットを足下において、自分にもコーヒーを注いだ。材質はわからないが、カップは金属でできているようだ。ポットに注がれたときから時間が経過していることもあり、火傷をしそうな熱さというわけではなかった。

体が温まる。

昨夜からの緊張がほぐれるような気がした。

「救援つてビクトール？」

コーヒーをちびちび飲みながらたずねる。ダナの表情が曇った。

「クーフとは連絡ついていないの。途中で妨害されているみたい。

救援に来てくれるのは、サラ副団長の部隊よ。彼女、今、クーフとは別の島にいるの」

その島から軍用艦をこちらに送ってくれるらしい。

「軍用艦の中で機体を修理させてもらって、それから出発しましょう」

ダナは、飲み終えたカップを握りしめる。

「王都で会うって約束したんだもん。絶対、たどりつかないとね」  
ディオに向けられた笑顔は作りものめいて痛々しかった。

もう一度バスケットをと二人を積み込んで、何とかダナの機体は飛び立った。かろうじて、と本人が言っていただけあってそれこそ何とか宙に浮いている、という感じだった。

この近辺に敵機はいないとサラの偵察部隊から連絡があったとはいえ、今攻撃されたらと思うと冷や汗をかいてしまう。

下降することそなかったものの、機体が左右に揺られて不安定だ。無駄だとわかっていても、ディオはベルトを握りしめずにはいられなかった。

数十分、そんな不安定な飛行を続けたところで二人はアーティカの軍用艦、サラが指揮するリディアスベイルに合流することができた。

「久しぶりね……見違えてしまったわ」

自ら出迎えたサラは、二十代後半の女性だった。豊かな栗色の髪を、太い三つ編みにして肩から胸の前へと垂らしている。

なかなか整った顔立ちで、きちんとした格好をすれば周りの男たちが放っておかないだろうとディオには思えたのだが、今は二人が着ているのと同じ茶の飛行服を身につけている。

「お久しぶりです……こんなことになってしまつて」

苦笑混じりに、ダナは頭を下げた。あわててディオもそれにならう。「こつちもね、手薄なのよ。トールにいた戦闘機、皆クーフへの援護に出してしまつたから」「リディアスベイルを出してしまつたら、トールラスが手薄になりませんか？」

「それはそれ。これはこれ、よ」

サラは肩をすくめた。

「ビクトールには私の判断で動けつて言われてるし、あちらの狙いはその坊やでしょう？トールラスが攻撃される可能性は低いと思うの。今のところ、こちらに向かっている船も飛行機もないという話だし、問題はないはず」

それからサラは、ディオの抱えていたバスケットに目をやった。

「ひよつとして、ルツツがお弁当持たせてくれた？」

笑い混じりにたずねられて、ディオは首を縦にふる。

「お腹……すいてる？」

今度の問いには、首を横にふるのが返事だった。ぱつとサラの顔が明るくなる。

「ちようだい！」

手を出されてディオは当惑した。

視線でダナに助けをもとめるが、無言でバスケットをひつたくられた。

「うれしい！こつちの船にはるくなコックがないのよね！同じサンドイッチでもぜんぜん味が違うんだから。朝ご飯まだでよかったわ！」

ダナから受け取ったバスケットをにこしながら抱え込むと、サラは二人にむかって言った。

「悪いんだけど、船の中はあまりうるうるしないでもらえるかしら

「こつちの船、これから大がかりな作戦があつてその準備もしているところなのよ。もし敵につかまっても、知らなければ知らないと言えるでしょう？」

「捕まらないことを祈っているけど……。捕まってしまったとしたら、ディオはともかくあたしは確実に地獄行きね」  
薄く笑つて、ダナは身を翻した。

「機体の修理、手伝つてくる」

サラとディオに軽く手をあげて、格納庫へと向かう。残されたディオは、どうしたものかとサラとダナの後ろ姿に交互に目をやった。これから、どうしたらいいのだろう。船の中はうるうるすると言われているし、ダナに続いたところで邪魔物扱いされるのがオチだ。立ったままバスケットをあけて、中をのぞき込んでいたサラが口を開いた。

「することないなら、ジャガイモの皮むきでもする？」

## 9・サラ(1)

働かざる者食うべからず、ということか。ジャガイモの皮むきは固辞したものの、

「皮むかないとお昼ご飯食べられないわよお？」

と、サラに言われてしまっただろうもない。結局のところ、船にいる間は労働力を提供しろということなのだろう。そう思えばビクトールのディオに対する扱いは、破格だったのかも知れない。

リディアスベイルの厨房は、船の下の方にあつた。サラに連れられていくつもの階段をおり、厨房へと足を踏み入れる。フォルーシャより小型とはいえ、船に乗っている人数はかなりのものだ。したがってむかなければならないジャガイモの数もそれなりに、ということになる。

厨房にいたのは、覇気のない中年の男だった。ジャガイモを一つむいては、ため息をはく。人参に一回包丁を入れては、ため息をはく。作業は遅々としてすすまない。というよりやる気がないのだろう。野菜のスープとパンを食卓に並べればいいのだと聞いて、テーブルに肘をつけて同じようにのろのろとジャガイモの皮をむいていたディオは立ち上がった。この後におよんでも、上着だけは手放そうとしない。

コックのエプロンを借りて、上から羽織る。大学の寮には、食堂やコックなどと言うものはない。寮生皆で使える共通の厨房があり、皆自分の食事はそこで作るのだ。というのは建前で。

下級生は、上級生に言われて食事を作らされることが多い。男子学生ばかりだから、野菜を切つてどかどかと鍋に放り込んでひたすら



煮込む。運がよければ、肉や魚も入る。といったおおざっぱなものが多い。それと同じ要領でいいのだろうと勝手に解釈して、デイオは包丁を動かし始めた。

野菜の皮をむいて、刻んで、鍋に放り込む。それをくりかえして、野菜の山を完全に消滅させる。煮込んで、味付けをする。

あつという間に昼食の時間になった。

「時間通りにできているなんて、珍しいじゃないの」  
厨房をのぞいたサラが機嫌のいい声で言う。

「ああ、ダナは格納庫から動かないって言っているから、運んであげてちょうだい。うちの整備係は、食堂で食べるって言ってるから、一人分でいいわ。私は、勝手にいただきます」

するりとキッチンに入り込んできて、勝手にスープをよそい、パンを取ると食堂へと消えていく。

「あの人も、よく食べるんだよなあ」  
と、ほとんど仕事の役には立たなかった本職コックが笑った。

二人分の昼食を借りたトレイに乗せてデイオは食堂を出た。先ほど降りてきた階段を逆に上つていき、一度甲板に出る。小さな窓しかない厨房にいたから気づかなかったが、今日はいい天気だった。風をはらんだ帆と並んで、洗濯物がばたばたとしているのが妙にのどかだった。

思えばメレディーアーナ号に乗船したのは昨日の今頃ではなかっただろうか。髪を乱す風に顔をしかめながら、船体後部に回る。格納庫の扉を肘で押さえて中を覗くと、ダナは機体の後部にいた。梯子を持ち出して、修理しなければいけない箇所を目線を合わせている。

「ダナ、お昼ご飯」  
声をかけると、勢いよく梯子から飛び降りた。

「さすがにお腹すいた」  
けらけらと笑って、工具を床の上に置く。

「厨房にいたんですって？大変だったでしょ」

ちっとも同情していない口調でそう言うと、ディオの運んできたトレイからスープの皿を取り上げた。

「鍋に放り込んで煮るだけだったから何とかなつたよ」

笑い混じりに返すと、ディオはダナを外に誘った。

「天気がよくて、気持ちいいよ」

素直に外に出るダナのために、格納庫のドアを押さえてやる。

「どんな感じ？」

格納庫の壁を背に、並んで座るとディオはたずねた。

「なんとかなりそう。でも、テイレントまでこのまま連れていってくれるって。あたしの出番は終わりかな」

肩の荷をおろしたというような、ほっとした笑顔。

「ビクトールたちは大丈夫かな」

「大丈夫……だと思う。だって、ちゃんと王都で会おうって言ったんだから。ビクトール様は嘘つかないもん」

皿を空にして、ダナは立ち上がった。

「サラ様のところに行つて、連絡ついたか聞いてみる」

あわててディオもダナにならう。トレイに皿を重ねて、片手に持つ。中身が入っていない分持つてきた時よりは楽だった。

船内に入る時、ちらりと空を見上げた。

やはり、青くどこまでも高い。

ずっとここで生活するのは、どんな気分なのだろう。

「サラ様……」

呼びかけながら、ダナは操舵室のドアを開けた。返事も待たず、そのまま室内に滑り込む。続こうとしたディオは、ダナの背中に思いきりぶつかつた。トレイの中身をひっくり返しそうになり、そちらに気を取られてしまう。

だから気がつかなかった。

扉をあけて、正面にあるのは大きな航路図。その前に立って、こちらを向いたサラは困ったような笑いを浮かべた。

「あらあら、ノックしなさいって教わらなかったの？ビクトールの教育もなっていないわね」

室内には、ほかに数名しかいない。

自動航行になっているのだろう。皆、驚いた様子もなくサラの後ろにひかえ、それぞれの作業に没頭している。しんと室内は静まり返っている。

計器類のたてるごくわずかな音だけが、室内を支配していた。

「まったく……おとなしくしていれば無事にビクトールのところへ返してあげようと思っただのに」

ため息混じりにサラは、腰の銃を抜いた。長い三つ編みを、肩から背中へと払いのけて姿勢をただす。

「違うわね……本当にそう思っていたらここに鍵かけておくもの」  
まっすぐに、ダナの胸に向けられる銃口。そこに迷いなど一切なかった。持ち主が望みさえすれば、いつでも銃弾は飛び出して目標を撃ち抜くだろう。思わずダナが一步下がる。

そんな彼女の様子には頓着することなく、サラは続けた。

形のいい口元に自嘲気味な笑みがひらめく。

「違うわね。やっぱりあなたを始末する理由が欲しかったみたい。秘密を知られた以上、生かしておくわけにはいかないもの、ね」

「……………どういう……………こと？」  
ようやく声を絞り出したディオに、サラは哀れむような視線を向けた。

「ああ、ディオ君は航路図読めないのね？今、この船はテイレント

になんて向かっていないの。ダナは部屋に入ってきた瞬間に気がついたみたいけど」

高らかに、サラは宣告する。

「この船が向かっているのは、センチアとアリビデイルの国境よ」

「サラ様……なぜ、こんなことを？」

力のない声で、ダナはたずねた。

## 10・サラ(2)

サラは機嫌よく答える。どこかもろさを抱えた笑顔で。

室内にいる男たちは、誰もこの状況で動こうとしない。不自然なほどにだまりこんで、それぞれの定席からサラの様子を見守っている。銃口をダナに向けたまま、サラは器用に肩をすくめた。

「だってしょうがないじゃない。その坊やの持っているものは、私たちから空を奪ってしまう危険なものよ。あなたは聞かされていないのかもしれないけれど。それを守ろうとするビクトールが、信頼できなくなっただのが一番の理由。それに」

ダナは、黙ってサラの言葉を受け止めていた。ディオの位置からは、背中しかうかがうことはできない。それでも、ディオの脳裏には唇をかみしめているであろうダナの姿が容易に想像できた。

「ヘクターはいないのに、ヘクターを殺したあなたはのうのと生きているんだもの。それって不公平よね。そうね、でもそれだけじゃあなたを殺そうなんて思わなかった」

ダナが拳を握りしめた。

「ビクトール様は、ヘクターを殺したあなたの治療に多大なる労力を払った。二年も王立病院にいるなんて、どれだけの金額がかかるか予想つくでしょう？それもまだ我慢できたわ。だって、あなたはビクトール様の親友の子どもだから。だけど」

ダナに向けられた銃口がゆれる。

男たちは、まだ動かない。余計なことをしないようにと、命じられているかのよう。

「なぜ、空に戻ってきたの。一生、私の目の届かないところにいてくれればよかったのに。ヘクターから空を奪ったあなたが、空で生きているなんておかしいでしょう？そんなの許せるはずがない！」

サラの声が割れる。

ディオは飛び出そうとした。ヘクターが誰かなんてことは知らない。ディオの知らない過去のことなんてどうだっていい。ただ、黙ってサラの言葉を受けているダナを守りたかった。

動こうとしたディオを制するかのように、ダナの手がのびてくる。背中越しにディオの手をさぐりあてるときゅっと握りしめた。

サラはそんな様子に気づくことなく話し続けていた。

「だから、私の目の前からいなくなっただろうだ。私はアリビデイルに行く。あなたを失ったビクトールの嘆く顔も見ないですむし、ヘクターの敵だっということができるもの」

ダナに銃をむけたまま、サラはゆっくりと部屋を横切ってきた。サラ以外、誰も動こうとしない。まるでサラ以外、時を止めてしまったかのように。

ディオもまた、ダナに手を握られたまま動けなかった。

「どうして……ヘクターはあなたを選んだのかしらね？」

ささやくような小さな声。

「……わかりません」

返答も、消えてしまえばそんなものだった。サラは首をふった。

「そうね、そんなの誰にもわからないわね。安心なさい。坊やは、センチア方面へ送り届けてあげるから。無益な殺生はしたくないのよ。できれば、ね」

説得力のない言葉をはいて、サラはダナの正面に立った。

「ここを血で汚したくないわ。甲板へ行きましょう」

男たちを室内に残したまま、サラは二人を甲板へと誘導する。ダナはディオの手を握りしめたまま、黙ってサラの言うとおりに階段をのぼった。

「遺言の言葉は？ビクトールに届けてあげるけど」

凄惨な笑みを浮かべて、サラはたずねた。

「ありません……ただ」

ダナが哀願するような声で返す。

「ディオにきちんとお別れを言わせてください」

「どうぞ、ご自由に」

くるりと向きを変えたダナは、ディオを抱きしめた。

最後の別れを惜しむかのように、ぎゅっと腕に力をこめる。ディオが小柄なので二人の頭の位置はほとんどかわらない。今の今まで手放せなかったトレイが、居心地悪いというように宙をさまよう。

「さよなら、ディオ」

そう言っておいて、ダナはすばやくささやいた。

「合図したら、格納庫まで走って」

ディオを抱きしめたまま、ダナは肩越しにサラにたずねた。

「彼の持っているものを渡せば、彼の命は助けてもらえるんですね？」

「もちろん。ちゃんと、センチアまで送り届けるところまで約束するわ。あなたはそれが果たされたか、見届けることはできないでしょうけれど。あなたがいなくなったあと、彼と交渉するから安心なさい」

「よかった……じゃあこれでお別れです」

ダナの手がひるがえった。

皿が宙を舞い、サラの顔を直撃しようとする。両手で顔をおおったサラの腕に皿が命中した。勢いで引き金をひいたのだらう。空に向かつて銃声が響く。

「走って！」

言われるまでもなかった。

ディオは格納庫目指して必死にかけた。

気を取り直したサラが銃を撃つ。一回、三回と続いたそれはディオの体をかすることさえしなかった。

格納庫に飛び込んだのはダナが先だった。ディオを待って、ドアをしめる。もう一発放たれた弾が、ドアにあたって不愉快な音をたてた。

「乗って！」

昨日と同じ台詞。同じように尻を押し上げられて、戦闘機の後部座席に滑り込む。

背後では扉に到達したサラが、声をあげて仲間を呼んでいた。二人が入ってきた入り口とは逆方向の、発進口のシャッターを開くレバーを操作してダナも乗り込む。

前に滑り出したところで開きかけた発進口がまた下に降り始めた。

「間に合わないよ！」

「間に合わないならこうするだけよ！」

戦闘機のウィンドウをあげて、ダナは無造作に小さな玉を放り投げた。シャッターにあたると、それは爆発してシャッターをふきとばす。

「乱暴……うつつうつつあああああ……！！！」

爆風と同時に二人の乗った戦闘機は空に飛び出した。

リディアスベイルから銃砲が二人を狙う。ちらりとリディアスベイルに視線を投げて、ダナはつぶやいた。

「生き延びる……なんとしても」

銃弾をかわしながらダナは戦闘機を下降させていく。軍用艦は戦闘機ほど急降下することはできない。相手をひきはがしたところで、海面すれすれに飛び身を隠す。

航路図を横目でにらんでダナが言った。



「どこか適当なところで海岸に着けるわ」

「このまま地上におりるってこと？」

「それしかないと思う。この機体も万全じゃないし、陸路使うしか手はないわ」

それだけ言っとダナは黙り込んだ。ディオの質問をすべて拒むように。

## 11. 地上の夜(1)

長い時間海面すれすれを飛び続けて、ようやく陸地が見えてきた。日はとつくに沈んでいる。緊張を強いられる夜間の飛行にもダナは平然としたものだった。

特に今夜は月が明るく、視界が遮られることはない。

機内の空気に耐えられなかったのはディオの方で、無言のダナに何度か話しかけてみたりもしたのだが返事が返ってくることはなかった。見えてきた陸地に思わずディオは、何度目かの問いかけを投げた。

「あれは？」

「ルイーナ。ひとまずあそこに降りるわね」

ようやく言葉を発したダナが口にしたのは、観光地として知られる比較的大きな島の名前だった。温暖な気候、風光明媚なことで知られ、富裕層の別荘も多く建てられている。

島の南側は綺麗な砂浜に恵まれているため別荘やら宿泊施設やらが集中し、それをあてこんだ商売人もそちらに向かうというわけかなりにぎわっている。

一方北側の方はというと、古代人の遺跡がある程度。遺跡の数も多すぎて、観光名所となっているのはそのうち数カ所ではない。

海岸も砂浜ではなくごつごつとした岩場のため、こちらのにぎわいはさほどでもない。

ダナは、機体をつけられそうな場所を探すと、そこに一度機体をおろした。後部座席からディオを放り出す。

「はい、これ持ってて」

続いて投げ落とされたのはそれほど大きくないリュックサクサクだった

た。最後に毛布が二枚。

ダナが腰につけていた小さな鞆は爆発物が入っているからと言う理由で、ダナ自ら地面にそつとおいた。それだけをすませ、ディオをその場に残してダナは機体を浮上させた。

「ど、どこに行くの？」

「ここから動かないこと。いいわね？」

ディオの問いに答えず、機体は沖へと向かう。動くなど言われても行くあてなどあるはずがない。ディオのできるのは膝を抱えて座り込み、ただ彼女の機体を見送るだけ。

さほど行かないうちに、機体は海に落下した。暗闇の中でもそれとわかる激しい水しぶき。

「ダ……ダナ！ダナ！！」

声をあげるが、返事はない。頭の中が真っ白になった。動くなど言われたが、この場合は例外だろう。慌ててブーツをふりはらうように脱いで飛行服に手をかける。苦勞して上半身を脱いだところで、何かはこちらに向かってくるのに気がついた。

波の間をぬってこちらに向かってくる赤い頭。

月の明かりでそれだけがくつきりとういて見えた。泳いできたダナは手近な岩につかまって一息ついてから、ディオのいるところまであがってきた。

「何しているの？」

半分脱ぎかけたディオを見て、ダナはあきれた口調で問いかけた。ぼたぼたと頭や着ている物から水が垂れる。

うつとおしそくに前髪をかきあげると、水滴がディオの顔まで飛んでくる。

「助けに行こうと思って」

「それなら、飛行服は脱いじゃだめ。水に浮かぶようにできているんだから」

肩をすくめて、ダナは地面に置き去りにされていたリュックサックのふたをあける。

そこから取り出したタオルで頭をごしごしとふいてから、飛行服を脱ぎ捨てた。

中に着ていた白いシャツと茶のパンツはほとんど濡れていない。

どうやら防水加工もしてあるらしい。

「何してたんだよ、いきなり落ちたからこっちは心配したっていうのに！」

珍しくディオが声をあらげた。

タオルを頭にかぶっていたダナが、きよんとした顔でこちらを見る。

「だって……。機体をここに放置していくわけにはいかないじゃない？

水の中ならそうそう見つからないし」

「そうじゃなくて」

ディオはため息をついた。

心配した、のだとどう言えばわかってもらえるのだろう。

荷物をまとめ終わったダナが、タオルをかぶったままディオの方をふりかえった。

「とりあえず場所を変わりましょ。海岸にいたら見つかるかもしれないし」

うながされるままにディオも彼女に続く。リュックサックと毛布を押しつけられたが、文句は言わなかった。

空気が冷たくなってきている。温暖な気候で知られる場所とはいえ、夜になればそこそこ冷えてくる。

二人は海から離れるように、森の中に足を踏み入れた。枝を通して月の光が足下を照らす。十分な光量とは言えないが、なんとか足下を確認しながら進むことができた。

ぼきりと足下で枯れ枝の折れる音がする。それ以外は、二人の足が枯葉を踏みしめる音だけ。

どちらも口をきこうとはしなかった。

沈黙に耐えられなくなって、ディオは口を開いた。

「これからどうする？」

「そうね。とりあえず森の中で野宿かな」

なんと二夜連続の野宿だ。

ディオは目を回しそうになった。

とはいえ、警沢など言えないことはわかっている。

しばらく森の中を進む。

わずかな光にも目が慣れてきて、だんだんと歩く速度もあがってきた。

最終的に二人がたどりついたのは、古代人の遺跡だった。

たくさんの巨大な石が積み重ねられている。こういう遺跡は神殿だと考えられているが、はつきりとした結論が出ているわけではない。

「ここにしましょうか」

石が頭上をおおって屋根のようになっているところを見つけると、

ダナは足を止めた。

すぐ近くには川が流れている。

荷物を放り出して、ディオはその場にへたりこんだ。

昨日といい、今日といい、穏やかに一日を終えることはできないのだろうか。

ディオをその場に残したダナは、一度遺跡を出ていく。

戻ってきた時には、両手にたくさんの枯れ枝を抱えていた。

ディオが動けないでいる間に、彼女は森と遺跡を何往復もして、薪

を積み上げていく。

一息ついてからディオも彼女を追ったが、運んだ薪の量は比べ物にならなかつた。

十分な量の薪を確保してからダナは器用に小さな火を起こした。

火を起こすのに使つたのは、ここまで運んできたリュックサックに入っていたマッチだつた。

次は何が出てくるのだろうか、興味深々で覗き込みながらディオはたずねる。

「それ、何が入っているの？」

「んー、三日分の非常食とかマッチとか。包帯、薬。撃墜されちゃつたときに、運良く生き残れたら必要になる物、かな。はい、夕食」  
手渡されたのは、固形の携帯食だつた。

ために袋の端をちぎって鼻を寄せてみる。

なんとも言えないにおいがした。

## 12・地上の夜(2)

「これ……本当に食べられる？」

「おいしくはないけど、栄養にはなるわよ」

もう一袋を自分用に確保して、ダナは立ち上がる。

「水汲んでくるから、そこにいて」

遺跡を出てすぐ左にある川から水を汲んで戻ってくると、ダナはそのカップをディオに渡した。

「悪いけど。カップは一つしかないから飲んだらこっちに回してちようだいな」

ディオは携帯食に口をつけた。

おいから予想されるとおり、美味とは正反対の極地に位置する味がした。

もそもそと咀嚼し、半分以上を水で流し込む。

「こっちに回してって言ったのに！」

ダナが抗議の声をあげた。

「ご……ごめん。すぐ汲んでくるから」

はじかれるように立ち上がり、遺跡の外に出る。

やってしまったと、自分が情けなかった。大学では他の学生と同じような生活を送っているとはいえ、生まれてからの生活習慣によって作られた性格まではなかなか変えようがない。

自分のために他の人間が動くのが、当たり前となってしまっているところがある。それは寮の仲間にも研究室の仲間にも、幾度となく指摘されたことだ。一言で言ってしまうえば、気が利かれないと言っことになる。

これが、研究や学問に限定してのことならまた話は変わる。ディオが王子でありながら、センチアに留学、さらには研究室への出入

りを許されたのは、彼の鋭さに定評があるからだ。その鋭さは、日常生活には一切生かされていない。必要なかったのだ、今までは。

文句を言いながらも、周りが片づけてくれた。

これからはそうはいかない。

無事に帰りつくまで、もう少し気をつけなければ。

水を汲んで戻つてくると、ダナは膝を抱え込んでいた。

濡れた飛行服は、火のそばに広げられている。毛布は、二枚ともリユックサックのそばにたたまれたままだった。ダナは礼を言つて、ディオが渡したカップを口元に持っていく。一口だけ飲んでカップをおいた。

大きいため息をついて足を投げだし、石の壁によりかかる。

その仕草が妙にぎくしゃくとしていて、ディオに壊れた人形を連想させた。

「食べないの？」

携帯食がカップと並ぶように地面に置かれているのを見て、ディオはたずねた。ダナの頭がわずかに横にふれた。

「食欲なくて」

「食べないと体力持たないよ？」

「あんなまずい物、食欲ない時に食べる気しないもん」

ディオには食べさせたくせに、自分は食事をとらないつもりのようにだ。確かに、できることなら二度と口にしたくない味だ。

「それにあだし、一晩くらい食べなくても大丈夫だし」

言い訳のようにつけたして、ダナはディオの汲んできた水だけを空にする。

視線がカップとディオの顔と、小さな炎、遺跡の壁とせわしく動いた。



「ディオ……？」

ためらいがちに、ダナは口を開いた。

「聞いちゃいけないって思ってたから……。聞かなかっただけ……。ディオの持っている機密書類って……。何？」

「それは」

返答につまつて、ディオは口を閉ざした。何としても、持って帰らなければならぬ大切な研究成果。センチア、マグフレットの両国が総力をあげて完成させたものだ。もう一通の研究成果を記した書類は、センチアの王立研究所の奥深くにしまいこまれている。それだけ大事な機密を、ダナに話してしまつていいものだろうか、自分に問いかける。

二人の間に落ちた沈黙は、居心地のいいものとは言えなかった。

お互い相手に聞きたいことがありすぎて。それでも、それを聞いてしまつたら何かが変わりそうだと、自分を制して問わずにいる。

今まで、幾度となく問うだけの時間はあつたというのに。投げられた問いに、答えなければならぬというならば。ディオにだって、たずねたいことは山ほどある。

「ここまで来たら……。君にまで秘密にしておくことはないのかも  
しれない……。でも」

ディオは言葉を切った。

本当に、この問いを口に乗せてもいいのだろうか。

足を投げ出したまま、こちらを横目で見ているダナと目が合った。やはり聞いておいた方がいい。一度は閉じた口を、もう一度開く。「僕もたずねたいことがあるんだ。その……。君とサラとヘクターと  
か言う人の間にあつたことを」

「……」

少し意地が悪いかと思ひながらディオは言った。困つたように、ダ

ナは首をかしげた。

そのまましばらくディオを見つめていたが、体勢を変えた。膝と手を使って、這うようにディオの方へと進んでくる。ディオのすぐ目の前まで近づくと、ぐっと身を乗り出した。

碧玉色の瞳が、炎を移してゆれた。

ディオは目をそらせた。

これほど間近で異性に見つめられた経験など、ほとんどない。ましてや相手は、宮廷内にもなかなかないほどの美少女だ。意識しないではいられない。

「ね……あたしの顔、どう思う？」

真顔でダナはたずねた。

「どつって言われても……」

どう答えればいいのかだろう。

「きれい？かわいい？それとも好みじゃない？」

せかすようにダナは言葉を続ける。今顔の美醜について語る必要はあるのかと、問いたださうかとも思ったのだが。

ダナの剣幕に負けてディオはあいまいな返事を返した。

「そ……そうだね、きれいだと思う……すごく」

最後にすごく、とつけたしたのは。ただきれいだというだけでは、ダナの機嫌をそこねるのではないかと思ったからだった。

女性に「私きれい？」と聞かれたら。「とても」とか、「すごく」

とか、「その花よりも」とか、何でもいいからつけくわえておけとは、いつも女性に取り囲まれている従兄の教えだ。

あいにくとこの教えはダナには通じなかったよう。

つまらなそうに

「ふうん」

とうなつた後、這ってきた体勢からぺたりと座り込んだだけだった。

「きれいなんだ、あたし」

他人のことを話しているような口調だった。

普通なら言わないようなことを無理矢理言わせておいて何だ、とさすがのディオもむっとする。ダナはさらりととんでもないことを口にした。

「これ整形なのよね。包帯とれて三ヶ月たつけど、いまだに自分の顔って気がしなくて」

思わずディオはダナの顔を見つめる。

ディオの視線に気がつくくと、ダナは苦笑して話し始めた。

「先に言っておくけど。そんなに面白い話でもないわよ？」

### 13・追憶の空戦(1)

数十もの軍用艦が悠然と空を進む。そのうちひととき大きな艦をビクトールは旗艦と定めていた。

リディアスベイル。

先日建造したばかりの、新型艦だ。

ビクトールたちの率いるアーティカは、何十年も専属契約を結んでいるとはいえ、傭兵であるということにはかわりがない。リディアスベイルも、今までに得た報酬を投じて作られたものだ。

「やはり新型の艦は違いますね。肌を感じる風まで別物みたい」

甲板に立って空を見上げているビクトールに、サラが笑いかける。

「そうだな。これが戦じゃなきゃ最高なんだが」

「団長のお言葉とも思えませんね」

束ねた紙の束を一枚めくって、サラはビクトールの前につきだした。

「これ、今回の作戦計画です。目、通されてますよね？」

「あつたりまえだ」

無然として、ビクトールはサラのつきだした紙を受け取った。

戦闘機に乗るのは好きだ、好きだった。戦闘時のめまいのするよう何ともいえない高揚した気分。思うとおりに機体をあやつり、敵を撃破する。それだけで満足だった。もう少し若かった頃は。

一族をたばねる今となっては、それにとまなう損害を考えざるを得ない。どんな勝ち戦であろうとも、こちらの損害もゼロというわけにはいかない。たとえ、空では最強に限りなく近いと言われる傭兵団を率いていたとしても。

何人もの仲間を、部下を見送ってきた。だから立てられた作戦計画には、綿密に目を通す。

部隊間の連携がうまくいかなければ、どれだけ強力な艦を用いよう

が、すぐに負け戦に転落する。

サラもそれはわかっているはずだ。あえて作戦計画のことに触れたのは、自分の目が遠くにいつているのを察知したからではないかとビクトールは思った。

「あれから十年……か？」

つぶやいて、もう一度サラの渡した作戦計画に目を落とした。

今朝最終的に決定された計画。もう何度も目を通して、中身はすでに頭にたたき込んである。

それでも念のため、もう一度中身を確認してサラに戻した。

「あいつらはどうしている？」

あいつら、が誰を指しているのかサラにはすぐわかる。間髪入れずに答えは返ってきた。

「機体の最終チェックにいそしんでいます」

「そうか」

現在リディアスベイルには、フォースタイト搭載機は一機しか積んでいない。普段ビクトールとサラが使っている機体は、他のパイロットに回してある。二人はリディアスベイルから指揮をとらねばならないから、戦闘機で飛び回るわけにはいかないのだ。

その一機しかないフォースタイト搭載機のパイロットが、はねるような足取りでこちらに向かってきた。

背の中程まで届く赤い髪を、首の後ろで一つに束ねている。

「最終チェック終わりました！いつでも出られます！」

「それじゃ少し休んでおけ。お前たちの出番はまだ先だぞ」

「父さん」

彼女の後からやってきたヘクターが、ビクトールに呼びかけた。

ビクトールとほぼ同じくらいの背丈だが、体の方はやや細身だ。仲

間からは二十年前のビクトールにうり二つだと言われるが、ビクトール本人は「俺の方が男前だった」と主張している。息子の方は、というと「父さんの言うとおり」と、かわすのが毎度のことだ。

ダナに並んだヘクターは、表情を引き締めた。

「照準が狂ってた。急いで調整し直したけど、整備班に言うておいて」

「だから出撃前に最終チェックさせてるんだろっが。とはいえ、たるんでるのは間違いないな。他のやつらにも、もう一度チェックさせるか」

頼むよ、と彼は言うてダナを引き寄せた。

のびあがるようにして、ダナがその耳に何かささやく。

「ヘクター。ダナ」

ビクトールはあきれた声を出した。

「いちやつくのもほどほどにしとけ。お前ら、緊張感なさすぎだぞ」  
くすくすと笑いながら、ダナはヘクターを船内へと引っ張っていく。ダナに引かれたまま、ヘクターはもう一度こちらをふりかえって大きく手をふった。

「まったく」

ルッツを呼んでもう一度整備を確認するよう言いつけてから、ビクトールがぼやいた。

ダナと同じようにくすくすと笑いながらサラが返す。

「でも、団長は喜ばしいと思っておいでしよう？ハリーイとオリガの娘と団長の息子ですもの」

ふん、と鼻を鳴らしてビクトールは顔をしかめる。

「俺はダナが十八になるまで待てと言ったんだ。それをあいつときたら、『ダナが十八になるまで、俺とダナ両方が生きている保証は

どこにあるんだ？』

だとよ」

髪に手をつつこんでかき回しながらの、ビクトールのぼやきは続く。対するサラの声は静かなものだった。

「ヘクターの言うことにも、一理はあります。私たちの生き方を考えれば。ましてや二人で一つの機に乗っているんですもの。気がせいても仕方のないことでしょうか？」

「まあな」

そうサラには言いながらも、ビクトールはもやもやとしたものを抱え込んでいた。気にかかるのはヘクターとダナのことではない。今は十六と二十一。多少年の差があるように思えるが、あと数年もすればつりあいがとれるはずだ。

それに。

サラが言ったとおり、この二人の仲は密かにビクトールの望んでいたことでもある。

十年前に散った親友たちの娘。

以来手元に置いて慈しんできたダナならば、ヘクターの相手としてこれ以上望むべくもない。常人ならば反動が大きすぎて、機体の制御を失いかねない反動の銃火機を搭載しても、機体の操縦を誤ることのなかったオリガ。どれほど高速で移動中であろうが、敵の進路を神がかった精度で予測して撃墜することのできたハーレイ。

それぞれ、閃光、雷激と呼ばれた彼らの乗った戦闘機はアーティク最強を誇った。

彼らが乗った戦闘機でさえ、運命の手から逃れることはできなかった。

「そうか……」

ようやく気がついて、ビクトールは嘆息した。今日は、彼らが逝っ

てしまつてからちょうど十年目。朝から胸にのしかかっていた重みはこれだったのか。

「今日でちょうど十年だ」

「お忘れでした？」

サラに言われて、ビクトールは苦笑する。

「あの時も戦そのものは大勝利だったんだ。失ったものは大きすぎたがな」

「今回も任務としてはそれほど難しいものではないでしょう？空賊退治ですもの」

「そいつが怖いんだ」

ビクトールは、前方の空をにらみつけるようにして腕を組んだ。



## 14・追憶の空戦(2)

傭兵団が兼業で空賊業を営んでいる場合と。最初から空賊を専門にする場合と。この世界の空には二種類の空賊がいる。

どちらが手強いかと言えば、傭兵を兼業している方だ。対軍用艦相手の戦闘訓練を、しっかりとつんでいる。武器も破壊力の大きなものを装備していることが多い。

傭兵としての活動を行わない空賊の場合は、戦闘訓練をそれほど行っているわけではない。

今回のように、空賊先滅作戦が展開された場合には、すかさず戦闘領域から脱出をはかる。

彼らの装備では、戦うよりも逃げる方が生き残る確率をはるかに高いとわかっているからだ。

投降するのは最後の手段で、一度捕虜になったらよくて生涯強制労働所行き、悪ければ死刑の二択しか残されていない。今日相手にするのは、それほど手強い相手ではないはずなのだ。

整備不良などアーティカではめったに起こることではない。整備不良の機体で出撃することが、どれほど危ないことか皆身をもって知っている。

それでも発生した整備不良。

大切な仲間が逝ってからちょうど十年目という日付。

何か今日はやめておくと、語りかけるような気がする。

迷信を信じやすいと言うのは、空に生きる者も海に生きる者も共通して持ち合わせた気質だ。人の力ではどうにもならない自然の力に直接対峙することの多い彼らにとっては、迷信は生き残るための知恵でもある。

ビクトールはさほど迷信を信じやすい方ではない。

己の才覚一つで生き残ってきたとも思わないが、迷信に惑わされるのは愚かなことだと思う。

それでも。

何ともいえない予感が、ビクトールの胸を締めつけた。

「出撃やめるか？」

出すつもりはなかった言葉が、口からこぼれた。

「かまいませんが、空賊たちは本拠地を移動すると思いますよ。今回のやつらは、飛行島一つ占領していますから」

冷静な声が、状況を報告する。

「それはわかっちゃいるんだが……どうにもこうにも嫌な予感がするんだよな」

「やめましょう」

サラの決断は早かった。

「団長がそうおっしゃるのなら、引き返しましょう。国王陛下には団長が腹痛を起こしたので、と報告しておきますから」

「腹痛かよ」

ビクトールは苦笑いする。

言い訳は何でもいいのだ。この出撃をやめることさえできれば。

「んじゃ、他の部隊にも帰ると連絡を入れてくれ。」

しきり直した」

「わかりました」

サラは、他の部隊に通信を送るために船内に入った。

食堂の中をのぞきこむと、ヘクターとダナが向かい合ってコーヒを飲んでいる。

見つめあう眼差しに迷いはない。

カップを持っていない方の手は、互いの指先に絡めている。在りし

日の彼女の両親を思いだして、サラは微笑んだ。彼女の両親も、よく出撃前にはこうしてコーヒを飲んでいたものだ。

基本的に二人乗りの戦闘機は、一人乗りの戦闘機よりもスピードという点で劣る。撃墜されれば二人を失うことになるため、最近は使われなくなってきた。

例外は、フォースダイトとパイロットの腕、射撃手の腕と三本の柱がそろった時だけだ。

十年前はハリーとオリガ。現在はダナとヘクター。アーティカにも一機しか存在しない。

ただ向かい合っているだけなのに、二人の姿は、サラの目にはまぶしく見えた。

わずかに覚える胸の痛みを押し殺して、サラは通信室へと向かう。他の部隊へとビクトールの意志を伝えようとした時だった。

「敵機発見！」

通信が入る。サラは眉をひそめた。こちらの持っている情報では、敵の空賊団はまだまだ先にいるはずだ。こちらの情報が、もれていたのか？

他の部隊との交信をあきらめて、サラは急ぎ足に艦橋へと向かった。こうなっては、応戦するしかない。

艦橋へ駆け込むと、ビクトールがすでに命令を下し始めていた。

「戦闘機部隊発進！ダナとヘクターも出るように伝える。応戦準備もぬかるな」

「撤退、間に合いませんでしたね」

「たく、どつから情報が漏れたんだ。まあいい。先方から出てきてくれたというなら、全滅させてやるだけのことだ」

「いらだたしげに舌打ちして、ビクトールは壁をたたいた」

「サラ、作戦変更。防御陣を展開する。敵さんはいした武器は持

つていないだろうからな。敵軍用艦の撃墜は戦闘機部隊に任せるさ。俺らはこっちに来た戦闘機だけを相手にしてりゃいい」

「団長……何かひっかかりませんか？」

ためらいがちにサラは口を出した。

「普通の空賊なら、アーティカを相手にしようとはしないでしょう。どこかの傭兵団と結びついていたりする可能性は？」

「そんな情報があれば、噂くらいは入ってくると思うんだがな。何か聞いているか？」

「いいえ」

サラは首をふる。噂が入ってこないとはいえ。アーティカが待ち伏せをされていたという事実は、打ち消しようもない。用心に用心を重ねてもいいような気がした。

「どつちにしろ、先手を取られたことには変わりがないからな。さて、敵さんはどう出てくるか、だが」

ビクトールが、状況を確認しようとした時だった。

前を飛行していた軍用艦が、炎をあげて、二つに折れた。

ついでリディアスベイルも揺れが襲う。

「どこからの攻撃だ！確認しろ！」

机にしがみついてビクトールがわめいた。

「下です！やつら下から来ました！」

ビクトールはうめいた。

たかが空賊相手にこちらの進路を読まれ、待ち伏せされた。

おそらくもつとずつと下。海面まで降りていたのだろう。

飛行島一つ持っているならば、地図には乗っていない小さな島に偽装することはたやすい。

そこをつかれた。

アーティカの進路情報を入手し、発見される可能性がある間は海面すれすれで待機。

真上に来る時間を読んで上昇してきた、ということだろう。

「応戦しろ！上にいる分こっちが有利だ。敵に爆弾を落としまくってやれ！島一つつぶしてかまわねーぞ！」

先手を取られたとは言え、ビクトールの立ち直りは早い。彼の命令を、もう少し丁寧な言い方でサラが全艦に連絡する。不利な状況で始まった戦だったが、負ける気はしなかった。

## 15・追憶の空戦(3)

ともに出撃してきた他の部隊と連携を取り、すぐに防御態勢を取ることに成功した。

「戦闘機部隊の様子はどうか？」

「敵をこちらによせつけないようにしてくれていますね。今のところは、かろうじて成功しているようです」

中心となるのはダナとヘクターの乗った機体であることは、入ってくる通信状況を分析するまでもなく容易に理解できた。

最初に空を飛んだのは五歳の時。最初に敵を撃墜したのは十二の時。親から譲り受けた才能を存分に彼女は、開花させている。ヘクターと組むようになってからの撃墜数は、それぞれが単独で出撃していた頃の倍以上となっている。

今日だって二人は敵を圧倒して戻ってくるはずだ。

「下だけじゃない、前方にも注意しろ。この船が落ちたら、戦闘機部隊の戻る場所がなくなるんだぞ」

ビクトールが檄を飛ばす。

敵の動きは、ただの空賊と思えないほど巧みなものだった。

しかけてくる攻撃は、的確に目標をつらぬく。また、アーティカの軍用艦が炎をあげた。

「やるじゃねえか。脱出してきたやつらの救助には、どの艦が回せる？」

ビクトールの口元に苦い笑みが浮かぶ。

「ハイネリアを救助に回します。まだ、負けた訳じゃありませんよ、団長」

手早くサラが救助の手はずを整えたのを確認して、ビクトールは顔

をしかめた。

「バカ野郎、誰が負けた時の話をしている。オーウエンの部隊に前に出ると言ってるやれ。ネヴィルのところは少し下がらせる。戦線を維持できなくなりつつあるぞ」

バカ野郎呼ばわりされたことには全く頓着せず、サラはビクトールの命令に従う。

彼女の見立てでも、まだ焦らなければならぬ状況ではない。

ビクトールならば、十分に勝機を見いだすことができるはずだ。戦場の魔物にさえ捕まらなければ。

正体のわからないまま開戦した敵の姿が見えてきた。アーティカの軍用艦にも劣らないほどの、堂々とした軍用艦が並んでいる。その中央に、飛行島がいた。

飛行島まるまる一つを空飛ぶ要塞として、マグフィレット領内へ攻め込んできたものらしい。

軍用艦に施された装飾を見れば、どこの艦か一目でわかる。

「ビルフレイン……」

サラがつぶやいた。アーティカ同様、傭兵団としては最大級を誇る。アーティカと違って専属契約はしておらず、戦争になるたびに契約先をかえる。

ともに船を並べたこともあるだけに敵がどれほど強大かすぐに悟ることができた。

「空賊退治じゃなかったのかよ」  
ビクトールがうめく。

「守りをかためろ。機を見て撤退するぞ」

ただの空賊ならともかく傭兵団を相手にするとなっては、今の装備ではこころもとない。

すぐに他の部隊へ伝令がとばされる。

「戦闘機部隊はどうした？」

「そろそろ、弾薬が切れる頃です。補給に戻れば、そのまま撤退できるのですが」

時計をにらみつけながら、サラは素早く計算した。ビクトールの命令を受けた部隊は、徐々に撤退の構えに転じ始めている。敵もそれを見て取ったのか、攻撃が激しさをました。

相手の力量は、双方が熟知しているところだ。このまま撤退されれば、との思いもあるのだろう。

「軍部にも連絡を入れておけ。どこに防御線を引くかが勝負になるだろう」

「クーフ経由で、連絡済みです」

「さすがだな」

額の汗をぬぐってビクトールは笑った。

「悪いがしんがりはこの船だ。頼むぞ」

「わかっています。新型艦ですもの。そろそろ落ちたりはしません」

「簡単に落ちられちゃ困るんだよ。俺は百まで生きて、曾孫に看取られて死ぬと決めてるんだからな」

「ヘクターとダナがあのだ子では、あなたが死ぬ頃には、曾孫の子どもも生まれていそうですね」

サラの口元に刻みつけられた笑みは、どんな時でも姿を消そうとはしない。

どれだけ、胸の痛みを覚えようとも。

今はその笑みが歪んでいないことを祈りながら、サラはビクトールの次の指示を待つ。

ビクトールが一族を率いるようになってから、アーティカは無敗だ。今回ばかりは初めての敗戦になるだろうが、最後に勝てばいい。

「ダナとヘクター……戦闘機部隊はまだか」

「まだです」



ビクトールが見上げた空は、まだ明るい。つい先ほどまでは、空を  
行くのに絶好の日和だと思っていたはずなのだが。今は、砲弾のあ  
げる煙が白く濁った膜をはっている。

ビクトールは息をついた。

「しかたないな、やつらが戻らなくても撤退だ。機を逃すわけには  
いかないからな」

このあたりには、小島が散らばっている。

戦闘艦に戻れなければ、そこに不時着して迎えを待つはずだ。

敵の捕虜になるか否かは時の運。

「……わかりました」

長の決断は重い。全体のことを考えれば彼らを待ち続けるわけには  
いかない。

「ご命令を……いつでも」

サラは前方の敵艦隊を見すえた。

中央にある飛行島。あれを落とすことができれば、形勢は一気に逆  
転できるだろうに。

おそらく命令を出しているのは、あの島の中央にいるであろうビル  
フレイン上層部だ。

あの艦隊を突破することさえできれば。

「よし、いくか。俺の直属部隊はしんがり。ネヴィルの部隊を先頭  
に撤退だ」

味方の陣形が整ったのを見て、ビクトールは命令した。整然と部隊  
は撤退していく。

強い部隊は、撤退の際も隙を見せない。リディアスベイルに最後に  
残された任務は、味方艦隊の撤退の援護だ。

「一番前の艦を集中して撃て！」

リディアスベイルから、弾が発射される。狙いを誤ることなく、一  
番先頭に出ていた敵の艦が大きく揺れた。その瞬間を逃さず、ビク

トールはリディアスベイルを撤退の構えに移行させようとした。味方の艦隊は、ほぼ安全圏へと脱出を終えている。

「よし撤退……しまった！」

ビクトールの声が終わる前に、船全体が揺れた。

## 16・追憶の空戦(4)

爆発に艦橋の窓が割れて、一気に空気が流れ込む。強風などというものではない。皆、吹き飛ばされた。

床に叩きつけられたサラは、せき込みながら立ち上がった。

爆発音で、耳が痛む。室内にたちこめる煙に、目をやられ、涙がぼろぼろと落ちた。

なんとか起きあがることができたのは、自分一人のようだ。舵を取っていた男の上半身が吹き飛んでるのに気づき、思わず目をそらす。何度も戦場に出てはいるが、戦闘機で敵を撃墜するか、こうして艦から指揮をとるか、だ。

生々しい死体を見る機会などほとんどない。

室内のあちこちから、うめき声が聞こえてくる。

煙に覆われ、見通しの悪い部屋の中を目をこらして見回す。

「だ……団長！」

さほど離れていないところにビクトールが倒れていた。

その胸を横切るように、サラの腕の長さほどもある機体の破片が突き刺さっていた。

はじかれるように駆け寄ると、ビクトールは薄く目をあけた。

「状況……は？」

「貴方のですか、この艦のですか？」

ませっ返しながら、サラは素早くビクトールを診察した。

見たとおりの重傷だ。

命の方もこのままではどうなることか。

通話装置をつかんで、助けを呼ぶ。

「貴方でしたら、命の保証はできかねる状態です。この船の方もそう長くはもたないでしょう。退艦を進言しますが」

「な……まだ、あいつらが戻ってきていないだろうか！」  
胸に刺さった金属片を投げ捨てて、ビクトールは起きあがった。  
とたん、視界がぐるりと回転する。

「無茶です……本当に貴方って人は」  
よるめいたビクトールを支えて、サラは嘆息した。

やはり息子たちが戻らないことを気にしていたようだ。妻も両親も  
だいぶ前に亡くなっているから、ヘクターが最後の肉親ということ  
になる。

こんな商売をしていても。

団長という地位があっても。

いやだからこそ、肉親に対する情は人一倍強いのかも知れない。

「あとはおまかせください、団長。できる限りのことはしますから」  
やってきた応援にビクトールを託し、サラは通話装置越しに宣告し  
た。

「総員、退艦。ただし、救命艇は一つだけ残しておいて」  
生きてさえいれば、何度だって復讐戦は可能だ。

日頃の訓練の成果をいかんなく発揮して、サラ以外全員が脱出する  
のに五分とかならなかった。

その間も艦橋に残ったサラは、相手の砲弾を交わし、逆に撃墜し、  
と巨大な軍用艦を一人で操るといふ大仕事に追われていた。

この状況から逆転するには、方法は一つしかない。  
味方の部隊が撤退していくのとは逆に、リディアスベイルは前進す  
る。

「全速、前進」

他に誰もいないのに、思わず口からこぼれる言葉。

さすが新型艦だけあって、敵の攻撃にもひたすら耐え続けた。  
それも長くは続かないだろうが。

「サラ様、援護します！」

通話装置越しの会話から、状態を理解したのだろう。戦闘機部隊が、サラと連携を取り始めた。戦闘機部隊の助けもあり、よるめきながらも、敵艦隊の間に割り込むことに成功する。

こうなつては、敵もつかつには動くことはできない。下手をすれば、味方の軍用艦を打ち落とすことになりかねないからだ。また、船のどこかで爆発音がした。時間の猶予はない。

目の前にせまる敵の飛行島。サラは、フォースナイト制御装置を解放した。これで、この艦はひたすら前に進み続ける。何かに突撃するか、撃墜されるまで。

最後に、ありつたけの弾薬を、目の前の島にたたき込んでやる。景気よく建物が吹き飛ばされるのを確認して、サラは艦橋を離れた。廊下を走り抜け、救命艇のある艦底まで一気に降りる。

最後に一つ残された救命艇を発進させるのとはほ時を同じくして、リディアスベイルは飛行島に激突した。

海面めがけて半ば落ちながら、かろうじて確認できたのは、煙に覆われた島が崩れていく光景。煙に紛れて脱出できれば、と思ったのだが敵の戦闘機がびたりと後を追ってくる。

サラは舌打ちした。

いつも乗っている戦闘機なら、撃墜してやるものを。

これは救命艇だから、武器になるようなものは搭載していない。

放たれた弾をかるうじて交わす。

スピードも相手の方がはるかに上だ。

味方の部隊が撤退できただけでよしとするか、と諦めかけた時だった。

轟音とともに、追ってきた戦闘機が落下していく。

「あたしたちに任せて、早く行ってください！」  
通話装置越しに聞こえたのはダナの声。

「こつちも弾薬の残りが少ないんだ。援護できる時間も長くはない。早く行け！」

ヘクターの声も聞こえる。

「ありがとう。あなたたちも、できるだけ早く戻りなさい」  
迷っている暇などなかった。

こちらは丸腰で、あちらは残り少ないとはいえ武器も弾薬もある。どちらが残る方が生存率が高いかなど、あえて口に出すまでもない。サラは、ビクトールのことは告げなかった。救援に礼をのべるに留めて、味方の艦を追う。

サラがアーティカの軍勢と合流できたのは三時間後。戦闘機部隊で脱出に成功したのはおよそ半数。その中に、ダナとヘクターはいなかった。

## 17・復活の日(1)

泥の海に沈み込むような気がした。どれほどがこうとも、そこから抜け出すのは容易なことではない。

ビクトールは、首をひねろうとして小さく毒づいた。体のあちこちに痛みが走る。やっとのことで目をあけると、光が飛び込んできた。ぎゅっと目を閉じる。目をしばたたかせながらもう一度あけると、今度は白い天井が見えた。

どうやら、死に神の手からは逃れることができたようだ。

「お目覚めですか？」

聞きなれた声が耳に心地いい。視線を横に向けると、サラがベッドのそばに寄せた椅子に腰をおろしていた。肩から前に垂らした三つ編みを、肩越しに背中へと放り投げて、彼女は立ち上がる。

「申し訳ありません。リディアスベイルを失いました」

それだけを口にして、頭を下げた。痛み在眉をしかめながら、ビクトールは返す。

「いいってことだ。生きて戻ただけ上等。ビルフレインはどうした？」

「撤退しました」

「あの状況で撤退だ？何があつた」

「指揮系統がばらばらになつたのではないかと。」

リディアスベイルが飛行島を破壊しましたので」

沈黙は、ビクトールが事態を飲み込むまで続いた。

「傑作だ。要はリディアスベイルで体当たりしたってことだな？」

あげかけた笑い声は、すぐにうめき声に取って代わられる。

「アーティカの女は強いな、サラ」

「強くなければ、生き残れませんから」

ビクトールは感心したように、サラを見つめた。

若すぎる、と反対の声もあったが彼女を登用して正解だった。時として、ビクトールさえ想像しようともしなかった大胆なことをする。「ところで、俺はどのくらい寝ていたんだ？」

「三日間です」

思っていたより長かったようだ。ビクトールは自分のことをひとまずおいて、部下のことをたずねる。

「それで……戦闘機部隊のやつらはどうした？」

サラの表情がくもった。

「私が合流する前に、救助は開始していたのですが……」

半数は自力で戻ってくることができた。さらに残された半数の半数は救助できた。残された四分の一は、遺体すら発見できなかった者も多かった。

ビクトールが一番気にかけているであろう二人の消息を、サラはゆつくりと口にする。

「ダナは救助できました……。重傷を負っていて生き延びることができるかどうかはまだ不明ですが」

「……そうか」

「ヘクターは……」

一瞬、息を飲んでサラは続ける。

「ヘクターは……もう火葬しました。あの……あなたが目を覚ます前に。……その……遺体が、腐敗すると大変ですので」

口ごもりながらも早口に吐き出して、サラはビクトールを盗み見る。アーティカに墓は存在しない。狭い島で暮らしているからだ。死亡した者は火葬され、灰は空からまき散らされる。

ヘクターの灰を入れた壺は、すぐそばのテーブルの上に置いてある。それに視線を投げかけ、すぐにそらせるとビクトールは、布団を頭の上まで引っ張りあげた。

部屋の中を重苦しい沈黙がおおう。



サラは、二人を発見したときのことを思い出した。サラ自ら捜索隊の一員となって、海の上を飛び回った。機体発見の一報を受けて、かけつけた先で見たものは。かばうように、ダナを腕の中に抱えて倒れているヘクターの姿だった。

よりそうようにして倒れていた二人を見た瞬間、真っ先に連想したのは、ダナの両親を発見した時のことだった。

あの時も同じように、ハーレイがオリガをかばうように倒れていた。見たくはなかった、十年前と同じ光景。

損傷の激しい機体を不時着させるまで、ダナはどれほど苦労したのだろう。

機体の状態が完全なら、まだ別の手段だってあったはずだ。

フォースタイト搭載機なら、不時着するにしても他の機体よりはダメージを減らせたはずだ。それでも、地面に激突した機体は、激しい炎をあげた。体中火傷を負い、何力所も骨折していた二人。はじめは、二人とも死んだのかと思った。ダナが生きていると知って、どれほど安堵したことか。容態は予断を許さないものであることは、間違いなかったが。

それでもいい。

ただ生きていてくれただけで。

「サラ」

布団の中から、くぐもったビクトールの声がする。

「明日には戻る。今日一日はほっといてくれ」

「そのように手配します」

ビクトールから見えないのはわかっただけで、サラは頭を深くたれた。

言葉通り、翌日にはビクトールはベッドから離れた。とはいっても、当然普通に日常生活が送れるはずもなく、執務室に座り心地のよい長椅子を持ち込んでの復帰となった。

「そんなに無理をなさらなくても」  
そう言うサラに、ビクトールは厳しい顔で答える。  
「そんなわけにはいかないさ。今回のことは俺の失態だからな」  
ただの空賊退治だったはずが、どこで情報が狂ったのだろう。ビクトールに命令が下されるまでの経路を、彼は裏から手を回して調べ始めていた。

不幸中の幸いというべきなのだろうか。

重傷の負傷者のうちアーティカの医師が手に負えないと判断した患者は、ダナだけだった。

王都の病院へとダナを入院させてから、ビクトールは一度も彼女の元へは訪れようとしなかった。

彼本人に王都までの往復に耐えうるだけの体力がまだ戻っていないか、  
つたというのも理由の一つではあったが、我ながら意気地ないと思  
いながらも、サラを派遣するだけだった。

見たくはなかった。

傷ついたダナの姿など。

息子を失ったのも大きな打撃だった。

それに加えて、重傷を負った親友の娘の姿を見ることなど、耐えられ  
れそうにもなかった。

それが息子の選んだ相手だとしたらなおさら。

## 18・復活の日(2)

「どうした？座らないのか」

王立病院から戻ってきたサラは、ビクトールの前にダナの容態を記した紙をつきだしたが、そばにおいた椅子には座ろうとはしなかった。

「座れないんです」

くるりと後ろを向いて、「ここから、ここまで」と尻のあたりを指さして説明した。

「ダナへ移植する皮膚が必要だということで、提供してきました。しばらくは、横向きに寝ないといけませんね」

苦笑混じりに言うと、半分起き上がり、半分横になった形で長椅子に座をしめているビクトールの頭の方へと回る。

一つ一つの数値を具体的にあげながらダナの容態を説明すると、下唇を軽くかんで元の場所へと戻る。

「痛むのか？」

「たいしたことはありませんけれど。何とかひりひりする感じがして不愉快ですね」

「すまないな。サラがいてくれて、本当に助かった」

素直な言葉に、サラは破顔する。そんなサラに、ビクトールは王宮からもたらされた知らせを告げた。

「貴族様に叙任してくださるんだとよ。息子を亡くしてさぞ落ち込んでいると思われたらしい」

「……家族を亡くして、落ち込まない人なんています？」

「それはそうだがな」

王家の紋章入りの通知書を、ビクトールは口角を下げて睨みつけながらひらひらとふった。

今までも、何回か申し出はあったのだが、傭兵は地位や家柄には  
しばられない、と断ってきた。

今回は、受け入れるつもりでいる。そうサラに言うと、首を傾げて  
微笑んで見せた。

「あなたの考えていること。なんとなくですがわかるような気がし  
ます」

「そう言ってもらえるとありがたい」

貴族の位を受ければ、このクーフだけではなく地上にも領地を得る  
ことになる。

「ダナが空に戻りたくないと言い出した時に、行き先がないと気の  
毒だからな」

それだけ言うと、ビクトールは王家からの封書をテーブルの上に投  
げ出した。

まだ、彼女が生き延びることができるとかどうかなんてわからない。

医師からの手紙にも、五分五分どころか助からない可能性の方が大  
きいと記されている。

それでも、できるだけのことをしてやりたいと願ってしまおう。

結局、ビクトールがダナの見舞いに訪れたのは、それから半年後の  
ことだった。

まだ彼女の回復は完全ではない。顔の骨も粉々に砕けてしまってい  
たため、何度も整形手術を繰り返している。

「どうせなら最高の美女にしてみらいなさい、とダナには言ったの  
ですけれど」

サラからはそう聞いていた。だから、予想はしていたはずだった。

顔一面包帯で覆ったダナの姿。

体の大半もまだ包帯に覆われている。

体の回復もまだで、一日の大半をベッドの上で過ごしているのだと  
いう。

訪問を聞いていたのか、ダナはベッドの上に上体を起こしてビクト

ールを迎えた。

「悪かったな、来るのが遅くなって」

そう言うビクトールに、首を横にふって見せる。

包帯に覆われているから、表情までは知ることができなかった。

「入院生活はまだ続きそうだな。何かほしいものとかあるか？」

「いいえ」

短く返された答え。

ビクトールは窓に近寄ると、大きくあけはなつた。入ってきた風に、白く清潔そうなカーテンがゆれる。空の青さが目に痛い。

まるであの日のようだ。軽く咳払いをして、ビクトールは切り出した。

「それで、だ」

背中越しに投げかけた問いに、どんな答えが返ってこようと受け入れるつもりはある。

「戻ってくる気はあるか？無理にとは言わん。地上で暮らすというのなら、場所は用意してある。クーフで暮らしたいというのなら、何かおまえにできる仕事を見つけろさ」

「あたしは……」

包帯越しに聞こえるダナの声。

「あたしは、戻りたい、です」  
小さな声。

違う、戻りたいだけではない。

その裏にあるものをビクトールは直感した。

「まだ、飛びたいか？」

肩越しに振り向いて、単純な言葉で問いかけた。ダナはうつむいた。シートを握りしめた手に力が入る。関節が白くなるのを見ながら、ビクトールはたたみかけた。

「あんな目にあつて、それでもまだ飛びたいと言うか？次は死ぬか

もしれないぞ？それでもまだ飛ぶというつもりなのか？」  
ゆっくりとダナの首が上下に動く。

「言ってくれるよな」

再び窓の外に視線を向けて、ビクトールは息をつく。

「退院したら、すぐに訓練再開だ」

ぼん、とダナの頭をに手をおいてビクトールは病室を後にした。病院の庭で、サラが待っていた。

「どうやら、ダナはまだ飛ぶつもりらしいぞ」

そう言うと、サラは目を丸くしたがすぐに笑顔になった。

「早いうちに訓練を再開できるといいですね」

「そうだな。また、見舞いに来てやってくれ」

サラを後ろにしたがえて、ビクトールは病院を後にする。

「ヘクター。おまえの選んだ女は強いな」

風にむかってつぶやくと、まるで返事だともいっつかのように木の葉が舞い上げられた。

## 19 デイオの決意(1)

「結局、身体が元に戻るまで一年半。顔の方はそれからさらに四ヶ月かかったわ」

デイオの前に。膝を抱えて座り込んだダナの話はまだ終わらない。「毎朝鏡を見る度に、知らない人を見るような気がするの。こんなの、あたしの顔じゃないって……。いつになったら慣れるのかもわからない」

デイオは言葉を失っていた。

自分と同じ年頃なのに、はるかに壮絶な世界を生きてきたダナ。そんな話をしるとせまった自分は、なんと無責任だったのだろう。

「親を亡くして、ヘクターを亡くして、自分の顔まで失って。全てを亡くしても。それでも。

まだ、飛びたいと思ってしまう。どうしようもない愚か者って、あたしのことね、きつと」

くしゃりと顔がゆがんで、涙が落ちた。

ほんの一粒だけ。

それをデイオは見逃さなかった。

長い話の間に、炎は小さくなっていた。

最初から、それほど大きな火を起こしていたというわけでもないけれど。

「ひ……冷えてきたね」

長い沈黙の後、ようやく口から出すことのできた最初の言葉はそれだった。自分でも間が抜けていると思わざるをえないのだが。

「あんたって……ホントにほんほんなんだから！」

ダナの顔に血の色がのぼる。はじかれるように立ち上がったダナは、ぐいと目のあたりをぬぐって毛布を二枚ともデイオに投げつけた。

「さつさと寝なさい！明日になったら、この島を抜け出す算段をしないといけないんだから！」

たたきつけるように言うと、ダナは炎を挟んで反対側に回り、石の壁にもたれるようにして座り込んだ。投げつけられた毛布を手にして、ディオはダナと毛布を見比べた。ディオは飛行服を身につけたままだが、ダナの方は水に濡れたこともあつて火のそばに広げられている。

今彼女が身につけているのは薄い服だけで、自分が毛布を独占するのは不公平としか言いようがない。

さて、どうするか。ぼんぼん、ぼんぼん言われるのはしゃくだが、事実なのだからしかたない。かといって、自分が毛布を独占するも気がひける。

よし、と気合いを入れる。

ディオも炎を回ってダナの隣に腰をおろした。

「何？」

じろりと見られ、一瞬たじろぐ。一呼吸おいて、ディオは言った。

「ダナは、僕のことをぼんぼんだって言うけれど」

「だから？」

「うん、実際そうなんだ。だから」

ひよいと手をのばして、ダナを自分の自分の腕の中にひっぱりこむ。「ちよっと！何してるの！あんたバカ？」

暴れるダナを強引に抱え込む。相手が本気になれば、抜け出されてしまうだろうから。今のうちに話をつけるしかない。ディオは早口で続けた。

「ものすごく寒いんだってば。何しろ、あつたかいふかふかのベッドでしか寝たことがないしね」

実際には、大学の寮のベッドは石のように堅いし、冬ともなれば凍えそうなほど寒いのだが、

そのことは今言う必要はない。ディオを押し退けようとしながら、



ダナがわめく。

「だからってこんなにひつつく必要ないでしょう!」

「君があつたためてくれなかつたら、風邪ひいてしまつかも。うん、なんかぞくぞくするんだよね。背中が」

「……これだからお金持ちのおぼっちゃんはやなのよ」

そう言うダナの口調から、棘がほんの少しだけ抜けていることにディオは気がついた。本当にしかたないといった調子でため息をつく  
と、ディオの腕の中で丸くなる。

「ねえ、ダナ」

「今度は何?」

ディオの胸に顔をふせたままダナは返す。

「僕は大切な人を失ったことなんてないし、君にこんなことを言っている立場じゃないのかもしれないけれど。君は飛ぶことに、罪悪感を覚える必要はないんじゃないかな」

最初に彼女と飛んだ時、彼女は本当に生き生きとしていた。

敵の攻撃をくぐり抜けて、フォルーシャ号にたどりついた時見せた  
笑み。

とても充実しているようにディオには見えた。

静かになったダナは、ディオに話を聞いているのかいないのかわからない。

それでもディオは続けた。

「父と母はかなりの年齢差があるっていうのもあるんだけど。僕は遅くに生まれた子で、父はもうすぐ七十なんだ。ずっと病と闘っていて……正直それほど長くないって言われている」

死に目に会えないかもしれない。国を発つ時、そう言われた。国のために必要なことだから、という大きな理由があつたとしても。先方の研究所でディオが必要とされているという理由があつたとしても。

いつ国王が死ぬかもしれないという時期に、王位継承者であるディオが国を離れるというのは後々問題が発生する可能性が高い。それでも父の出した結論は。

「センチアに行つてこいって言うてくれたんだ。自分が死ぬかもしれないからつて、僕がやりたいことを諦めてしまったとしたら嫌だからつてね」

小さな頃からあこがれていた。空を自由に飛ぶ力を秘めた鉱石に。現在の科学ではどうしても十分に引き出すことのできないエネルギーを秘めた石。

その謎を解きたいと、一二の誕生日に小さなフォースダイトをもらったその日から夢中になつて研究してきた。

もしあの時行くなと言われたら、どれほどがっかりしたか想像もできない。

実際、父が倒れて急遽国に戻らなければならないことになつた上に、見えない相手に追いかけて回されているわけではあるが。

「だから……君の両親も。ヘクターつて人もきつと同じように思っているんじゃないかな。会つたこともない人たちだけだ」  
話し終えて、ディオはダナを抱きしめる腕に力をこめた。

## 20・ディオの決意(2)

「ディオ」

もぞもぞと体を動かして、ダナが顔をあげる。

「何？」

至近距離で見つめられてときまぎしながら返すと、ダナの目元が柔らかくなった。

「あんたって案外いい人？」

「たまに言われる」

くすくすと笑いながら、ダナはもう一度ディオの胸に顔をうずめる。ディオは、手を伸ばして毛布を取ると、しっかりと自分たちをくろみこんだ。

「あのね、ディオ」

毛布の中から、ダナの声がする。

「あたし……。サラ様がどうして裏切ることになったのか、どうしてもわからない。

あたしには、あんなによくしてくれたのに」

ダナの命を救うために、ためらうことなく皮膚も血液も提供してくれた。

今も彼女の身体には、皮膚を切り取った跡が残っているはずだ。

入院中だって、忙しい合間をぬって何度も会いに来てくれた。

右手でダナの髪を撫でながら、ディオはゆっくりと自分の考えを口にする。

「そうだね。でも彼女にも思うところがあったんだろうな。まだ僕たちには見えていないけれど」

それが、自分の持っている研究成果のせいなのは明らかだ。

いっそ事実をダナに告げてしまおうかと、ディオの心がゆれる。

「サラ様について行った人数もそれほど多くはないみたいだし……」

アーティカの砲撃手は優秀だ。

もし、リディアスベイルを動かすのに十分な人数がいたとしたら、逃げることなんてできなかつただろうと、ダナは言った。

「そういうことは、明日考えようよ。今日はもう遅い」  
ダナの話をうちきって、ディオはもう一度ぎゅっと彼女を抱きしめる。

今までは守られるばかりだったけれど。今度は僕が君を守るよ。  
心の中でつぶやく声は、ダナに聞こえるはずもない。

「おやすみ、ダナ」

その言葉に返事はなかった。

目を覚ました時には、ダナはもう起きていた。

昨夜のことなどすっかり忘れた顔で、荷物をまとめ始めている。

そう言えば、ディオの方の話はまったくしないまま終わってしまったのだが、

そこを追求してくる気配もなかった。

「ダナ、現金とか旅券とかがって持つてる？」

差し出された携帯食料は辞退しておいて、ディオはたずねた。二食続けて食べるのには、あまりにも微妙な味だ。

「現金は、ビクトール様が持たせてくれたけれど」

投げてよこされた小袋の中に入っていたのは、ざっと見積もってディオの所持金全ての三倍ほどに該当する札束だった。

具体的に言えば、平均的な庶民なら数ヶ月は暮らせそつなほどの金額だ。

「旅券なんて持ってない。不都合ある？」

「あるある。おおありだよ」

旅券がなければ、船に乗ることができない。

貸し切りという手もあるかもしれないが、目立ちすぎる。

「ねえ、その中身って大金なの？」

「大金つて……ものすごい大金だけど」

「あたし、お金つて使ったことないからよくわからなくて。ディオは？」

「お金使ったことないって、どういう生活してるんだよ」  
ディオは頭を抱え込みたくなった。

別れ際にビクトールが世間知らずと言っていたような気もするが、まさか貨幣の価値も知らないとは。

「しょうがないでしょ。クーフにいる間は、お金なんて必要ないし。あたし、地上にいたの入院してた二年間だけだもん」

開き直った様子で肩をすくめ、ダナは携帯食料をリュックサックに放り込んだ。

「病院内の売店は？」

「欲しい物を言えば部屋まで届けてもらえたから、行ったことない」  
配達までもらっていたとは、かなりの好待遇だ。

「旅券は……ダナみたいな生活してたら必要ないだろうな」

飛行島クーフからほとんど出ることなく。まれに出ることがあっても、出撃だとすれば、旅券など必要ない。

どうやって、ダナの分の旅券を手に入れようか。

考え込みながら、ディオは小袋をダナに返そうとする。

「それ、ディオが持つてて。使い方もわからないし」

あつさりと言われて、ディオはうめき声をあげた。

こんな大金、持ち歩いたことがない。

今まで以上に緊張を強いられる旅になりそうだった。

## 21・駆け落ちの二人(1)

飛行服は防寒効果は抜群だが、それを着たままうるついている人間などあまりいない。しぶるダナを説得して、ディオは飛行服を隠すことにした。持つて行くことができれば一番なのだろうが、防寒のために分厚いそれはどう頑張っても小さくすることはできない。持つて行っても邪魔になるだけだ。

ダナがこっそりゴーグルだけは荷物に入れていたのは、見逃すことにする。ゴーグル一つならば、たいした荷物ではないから。

夜になれば冷え込んでくるが、昼間の間はそれなりにあたたかい。上に着るものは、町まで行って買えばいい。幸い軍資金はたくさんあるのだし。

飛行服以外のまとめた荷物は、半分ずつ持つて森の中を歩く。船に乗るにしても、旅装を整えるにしても、南側に行かなければ身動きをとることができない。

栄えているルイーナの南側に下っていくにしたがって、ディオはあることに気がつかざるを得なかった。

目立ちすぎる。

飛行服を脱いだとは言え、ダナの真っ赤な短い髪はすれ違う人の目を引く。

整形だと告白されたディオは本来の顔ではないことを知っているが、整った顔立ちであるのは間違いない。その美貌を目立つ要因の一つに追加するまでもなかった。彼女を目にした異性のうち、ほぼ全員がもう一度ふり返っているのは確実だった。

「ダナ、ちよつといいかな？」

町まで数キロという地点まで来た時に、ディオはダナを呼び止めた。

「何？」

「ちよつとここで待つてくれないかな」

「何ですよ？」

「目立ちすぎるんだ、君は」

どこが目立つのかといった様子で、ダナは自分の体を見下ろす。白いシャツに茶のパンツにブーツ。一つ一つを見れば、目立たないといえる。

「地味じゃない」

「着ている物は地味かもしれないけど、ダナが目立っているの！」  
どん、とディオは足を踏み鳴らす。

「どこが？」

「赤い髪の女の子もいっぱいいるだろうし、緑の目をした子もいっぱいいるだろうけど。町の女の子はそんな服を着ないし、髪だってもつと伸ばしている。特徴あげて探されたら、すぐに見つかってしまっよ」

ディオの言葉を、唇をとがらせて聞いていたダナは逆に問い返した。  
「じゃあディオは？目立たないの？」

ディオは肩をすくめる。

「僕は容姿に恵まれているわけじゃないし。このあたりは金持ちも多いからね。着ている物で目立つこともない」

それに地上のことは、自分の方が詳しいのだとディオは付け足した。不承不承、ダナは森の入り口近くに隠れて待つことに合意した。ディオはダナを残してリュックサックを背負う。

「ディオ」

歩き出しかけたディオをダナは呼び止めた。

「買ってきてくれるのなら、首まで隠れる服にして。そうじゃなかったら着ないからね？」

「わかった。探してみる」

そしてディオは、町の方へと向かって歩き始めた。

別荘を訪れている金持ちの息子が、朝の散歩から戻るところに見え

ることを願いながら。難点をあげるならば、今背負っている物と着ている物が合っていないということか。

南東の方では朝早くから市が開かれている。

それを何度かこの島を訪れたことのあるディオは知っていた。

市では食べる物から衣服、生活日用品と、幅広い品が取引されている。中古の品もあるし、盗品が混ざっているという噂を聞いたこともある。

ここの住民ではないディオに真偽のほどはわからないが。

朝早くから観光客や地元の間でこつた返している市場の中を、ディオはある一角目指して早足に通り抜けていく。狭い通路の両側にずらりと並んだ露店は、どの店が何を扱っているのかすぐには判断できないほどありとあらゆる品が並べられていた。

「おじさん。女の子の服で、僕が着られそうなのってないかなあ」のんびりした口調で、ディオは市場の隅で古着を扱っている露店に声をかけた。

ダナのサイズはわからないが、ほぼ同じ背丈であることを考えるとディオが着られればなんとかなりそうだ。いくらなんでも、ディオの方が細いということはないだろう。

「なんだ、学生さんか。あれ……あんだ」

店主の男はディオを見て首をかしげた。

「どこかで見たことあるような？前にも何か買ってくれたかな？」

ディオはぎくりとした。

この島には何度も訪れている。

ディオの顔を知っている人間がいる可能性も高いということに、改めて気がつかされる。

「去年もこのあたりで服を買わされたんだよ。ひよっとしてその時にここで買ったかも」

「せいじゃお得意さんだ。んで、探しているのは女物か？確かに兄



さんはスカートはいても違和感なさそうだけどな」

にやにやする店主に、デイオは深々とため息をついてみせる。

「大学の先輩たちと一緒に、先輩の別荘に来ているんだ。昨日の賭トランプで負けて女装しなきゃいけないなくなったんだよ。今夜の宴会でね。もちろん洋服代は僕持ちで。大学の寮にいる時だったら誰かから借りられたのにさ」

あつはつはと、店主は笑った。

「学生さんは気楽でいいなあ。そんなゲームをしているなんて」

「僕は気楽じゃないよ。次の仕送りまでパンと水で生活しなきゃかも」

実際、罰ゲームで女装というのは留学中に何度もやらされている。デイオは、大げさにため息をついてみせた。仕送りまでパンと水で生活するというのも経験済みだ。寮にいれば、どこからか調達できたであろうと言うことも、間違いのない事実だ。

「そうだなー、こいつとかどうだ？ちょっと細身だが何とかなるだろ。もうちょっと露出の多い方がいいか？こつちのだと、いい感じに谷間が見えるぞ」

「それはちよつと厳しいんじゃないかなあ」

残念ながら見せる谷間など持ち合わせていない。

店主が出してきたワンピース二枚のうち、露出の少ない灰色のワンピースを買い求めてデイオはその場を離れた。

別の露店でスーツケースが道ばたに出されているのに目をとめて、それも購入する。

あとはダナの頭を何とかしなければ。やはり染めるかかつらを買うしかないか。ごちゃごちゃといういろんな物が売られている場所とはいえ、かつらなどそうそう見つかるはずもない。

先ほど入手したワンピースに合わせても違和感のなさそうな帽子を見つけたので、代わりにそれを買う。

女性のファッションにはうといので正しい組み合わせかどうかはわからないが、当面これで我慢してもらおう。  
ひとまずダナのところへ戻ることにする。

他に買わなければならないものは山のようにあるだろうが、あまり長い間彼女を一人で待たせておくのもどうかと思う。買った物をすべてスーツケースにまとめて、ディオは市を後にした。

北へと戻る足が、自然と急ぎ足になる。考えてみれば、こんなに離れていたことなどない。

同じ船の中にいるか、同じ屋根の下にいるかだった。

早く戻らなければ。

それだけを考えて、ディオは半ば走るようにして森へと足を踏み入れた。

「ダナ！」

声をあげれば、奥の方から軽やかに落ち葉を踏みしめてダナが戻ってくる。

「やだ、その荷物何？」

「君の着替え」

「あらやだ……余計なのまで連れてきてるけど、お友達？」

スーツケースを差し出したディオの後ろに、ダナの視線は集中している。

慌ててふり返ると、いかにも柄の悪そうな二人組が立っていた。

二人とも体格がよく、どう鼻屑目に見てもディオに勝ち目はなさそうだ。

## 22・駆け落ちの二人(2)

「いや、これからお友達になるんだよ。兄さん、ちよっと金貸してくれないかな？」

にやにやしながら、右に立っている男が言う。もう一人がナイフを出した。

「貸すようなお金なんて……」

「古着屋のおっさんが言ってたぞ。財布の中身すごい札束だったつてな」

言いかけたディオの言葉を、ナイフを出した男が遮った。

ディオは唇をかんだ。財布の中身まで見られていたとは、油断も隙もあつたものではない。

「逃げようたつて無駄だぞ？女の子連れてちゃ、そう速くは走れないだろうがな」

最初に口を開いた男が、ダナを見ながら言った。値踏みするように視線が上下する。

足手まといになるのは自分の方だと思つたが、ディオは口は出さな  
いでおいた。

「逆らわなきゃ痛い思いはししないですむさ……。ちよつとしたお楽しみはあるかもしれないが、な」

ダナの眉毛が跳ね上がるのを、ディオは見た。  
危険信号。

彼女も『ちよつとしたお楽しみ』の意味がわからないほど、世事に通じていないわけではないらしい。

「つつしんでお断りしますって言つたら？」

腕を組んで、顎をつんと持ち上げながらダナは返す。

「痛い思いはさせたくないんだがなあ。素直に言うこと聞いてくれた方がこちらとしても助かるんだが」

ナイフを持っている方の男が、なだめるような口調で言う。

「お・こ・と・わ・り！ディオ下がって！」

きつぱりと切り捨てて、ダナはディオを突き飛ばした。

尻餅をついた彼の手から、スーツケースが消える。

慌ててもう一人の男も、ナイフを出した。と思いきや、ダナはそのスーツケースを盾に、一人に体当たりした。男がよろめく。ダナの足が跳ね上がった。後ろからかかるうとしたもう一人の腹に、ブーッがめり込む。思わず同情したくなるような音が響いた。

うづくまる男にはかまわず、最初にスーツケースアタックを食らわせた男にダナは対峙した。

静寂が支配したのは、ほんの一瞬。

「まいった！悪かった！」

男が手をあげた。いつの間にかダナは男の後ろに回り込んでいる。どこから取り出したのか、首にぴたりとナイフがあてられていた。ひやりとするナイフの感触を感じた男の額に汗が浮かぶ。

「ディオ、そっちの男縛って！」

適当な紐が見つからなかったので、ディオは自分のネクタイで腹をおさえてうづくまる男の両手を後ろで交差させて縛り上げた。

「悪かった、ちよつと魔がさしたただけなんだって！ちよつと脅せばうまくいくと思っただよ！」

手をあげて、必死に言う男にダナは冷たい声で言った。

「誰に頼まれた？返答次第によつては容赦しないわよ？」

「頼まれたって何のことだよ！俺たちは、そっちの兄さんがすごい金持ってるって情報を仕入れたから、ちよつと分けてもらえないかなー、なんて思っただけだ」

器用に片方の眉だけをつりあげたまま、ダナはたずねる。

「つまり、ただの強盗ってわけね？」

男は慌てて首をふる。

「そうそう、ただの強盗。強盗だ」  
男の首からナイフを離し、ダナはディオを横目で見た。

「財布の中身知られるなんて、ずいぶん不用心なんじゃないの？」  
「君に言われたくないよ」

たしかに不用心だったのだと思うが、謝るのはしゃくだ。それより、確か白兵戦には不向きだと言っていたいなかったか。もの言いたげなディオの視線をとらえて、ダナはこともなげに肩をすくめる。

「相手が軍人ならこうはいかないわよ？素人なのはナイフの構え方見ればわかったしね」

「いつてえ……」

ダナに腹を蹴られた方の男がようやく声をあげた。

「なあ、悪かったよ。未遂ですんだんだし、見逃してくれないか」  
ダナにナイフを突きつけられていた男が手を合わせた。

ダナは、というと。

無造作にその男を前に突き倒して、腕を後ろで交差させ、必要以上にぎりぎり縛り上げている。ナイフの収納先と言えば、ブーツの中だった。

「まあ……僕たちも騒ぎは起こしたくないし……」  
ディオは目を細める。

警察に男たちを連れていけば、いろいろとうるさく言われるのは目に見えている。ディオの素性が明らかになってしまいかもしれない。それは避けたかった。

男たちの様子を見ていて、ディオはあることを思い出した。  
もしかしたら旅券を手に入れられるかもしれない。

「ねえ……出生証明書なしに結婚させてくれる司祭様知らないかな？」

「ちょっと、何でそんな話になるわけ？」

横からわめくダナの言葉は無視して、ディオは続けた。

「僕と彼女は駆け落ちの最中なんだ。彼女、傭兵辞めてうちにメイドにきた子なんだけど……。うちの母がメイドと結婚なんてとんでもないと反対してね」

大仰な身振りで肩をすくめてみせる。

「結局、大慌てで逃げ出してきたんだけど、彼女の出生証明書持ってくるの忘れちゃってさ」

「ちよつと！」

ダナはディオに近づくと、襟元を締めあげた。

「誰が凶暴？というか、結婚って何よ？」

「……ちよつと待つてて。逃げようとしたら、どこまでも追いかけてつけは払わせるよ。……彼女が」

ダナを示しながら言うつと、男たちは慌てて首を上下に動かす。

半分ダナに引きずられるようにして少し離れ、ディオは早口で説明した。

「妻の旅券はなくてもいいんだよ。夫の旅券に名前を書いておけばダナの声があつた。危険信号を察知して、ディオは首をすくめる。

「何それ。女は男の付属品ってわけ？なんてふざけた制度なのよ。

それはおいておくにしても、結婚なんて嫌だし。まだ、ヘクターとも誓いをしていなかったのに」

そうか、とディオは舌打ちする。

いい考えだと思つたのだが、どうも女性にとって結婚というのは何やら大切なものらしい。

ヘクターともまだだつた、というのならなおさらそうなのだろう。

「僕は無神論者だから、気にしないけど。君がそう言うなら、違つた手を考えよう」

彼の名を口にさせた自分に腹を立てながら、ディオは腕を組む。

ディオがこの手を思いついたのは、去年あつた出来事を思い出した

からだった。

仲間の一人が酒場で給仕をしていた女性と駆け落ちしてしまったのである。

本来ならば、結婚するにあたっては、証明書が必要になるはずなのだ。

とはいえさまざまな人間が集まる場所柄なのか、書類を無視する司祭もいるらしい。

実際、友人もそういつた司祭の一人に式を挙げてもらった後、彼女と一緒に消えた。

その後一通だけ届いた手紙には、苦勞してはいるが、何とかやっていると近況が記されていた。

ダナがこの手を拒否するというのなら。どうにかして、偽の旅券を手配することを考えなければいけないだろう。大金を払えば、作ってもらえるという話を聞いたことがないわけではないが、あくまでも噂だし、冒険小説の中の作りごとだと思っている。

考え込んだディオの顔を、ダナはのぞきこんだ。

「ひよつとして……すごく困ってる？」

「すごくじゃないけど、困ってる。僕一人なら、正規の旅券があるんだけど、君の分をどうにかしないとだから」

正規の旅券とはいえ、そこに記されているのは仮の名前だ。無事に国に到着するまでの。

旅券が正式のものでありさえすれば、そこに記されている名前などただの記号で、意味はない。

出入国で止められることはないはずだ。

「わかった……あたしも無神論者だし、それでこの島を出られるのなら、嫌だとか言ってる場合じゃないしね」

「出生証明書出さなくていいから、違う名前を使えばいいよ。そうすれば、ヘクターを裏切ることにもならないだろ？」

「そのあたりはディオにまかせる。適当な名前決めて」  
投げやりに言うダナを見て、ディオの良心が痛んだ。  
今、ディオ自らヘクターの名前を出すこともなかったのかもしれない。

守ると誓っておいてこの様だ。

何て無力なのだろう。

男たちのところへ戻ると、ディオはもう一度たずねた。

「出生証明書なしで結婚させてくれる司祭様の所に連れて行って欲しいんだ。」

それで、警察には何も言わないってことでどう？」

男たちは、顔を見合わせた後ディオの提案を承諾した。



### 23・協力者(1)

男たちは、グレンとニースと名乗った。どことなく似ていると思ったら、グレンが兄でニースが弟。つまりは兄弟だということだった。「兄弟で強盗してちゃ世話ないわね」

と、切り捨てたのはディオの買ってきた服に着替えたダナ。荷物の大半は、彼女の持つスーツケースに収められている。

「だから、魔がさしたんだって。謝っているだろう？」

「ごめんですむなら警察はいらないわよ」

もつともな意見にニースは苦笑する。

「あんたも苦労するな。あんなに気が強かったら、尻にしかれるの目に見えているぞ。女はおとなしいのが一番だって」

グレンの言葉に、ディオは乾いた笑いを浮かべることしかできなかった。

当のダナは、というと。強盗を正当化しようとするニースとスーツケースを構えて向かい合っている。

「ニース、その辺にしとけや。そのお嬢さんにはかなわないってわかってるだろ」

スーツケースアタックをくらったグレンが忠告して、ようやく二人の剣呑な空気がやわらげられる。ほんの一瞬だけ。

「ダナ、これ以上騒ぎを起こさないでくれよ、頼むから」

「誰が原因でしたっけ？」

顎をつんとあげてそう言われてしまったら、ディオには返答のしようもない。弟の首をつかんで先に行くグレンが、同情したような視線でディオを見た。

ディオの予想通り、二人は必要書類を持たずに結婚させてくれる司祭に心当たりがあった。華やかな通りから二本ほど入った、ごちゃ

ごちゃとした路地の一角。その教会の司祭は、ディオオの話を聞く  
と珍しくもないといった様子でごくごく事務的に式を執り行った。  
結婚証明書には、ディオオがとっさに口走ったダイアナ・ミルトンあ  
らためダイアナ・ヴィレッタの名前が記されている。

二人の証人の欄には、都合よく二人居合わせた、グレンとニースが  
署名して書類の完成。

「旅券に名前を追加するには、出入国管理局だな」

と、すっかり二人に協力的になったグレンが教えてくれる。ディオ  
オたちにとって幸運なことに、出入国管理局の審査もいい加減なもの  
だった。追加の書類を要求されることなく、旅券に妻の名が追加さ  
れる。

すべての手続きを終える頃には、昼食の時間もとつくに過ぎていた。  
この際だからと、グレンは弟を家に走らせた。家にいる妻に、二人  
分の食事の追加を頼むためだ。自分の家で食事をすればいい、と強  
盗を働こうとした人間とは思えないほど親切だった。

裏があるのではないかとダナは顔をしかめたが、食事はとらないと  
いけないわけで。

最終的にはグレンについていくことに同意した。

「ここが俺の家だ」

グレンが二人を案内したのは、教会から少し離れた、同じようにご  
ちゃごちゃした通りに建つ集合住宅だった。上を見上げれば、洗濯  
物が風にひらひらとしている。窓にはいたるところに布団が並べら  
れ、風にあてられていた。裕福な人間の住む地域でないことは、デ  
イオの目にもすぐにわかった。

「ミーナ、今帰ったぞ」

グレンがドアを開けると同時に、

「今までどこ行ってたのよ、この大馬鹿者が！」

すさまじい勢いで、木製のボウルが飛んできた。慣れた様子でグレ

ンがそれをよけ、ディオの顔にぶつかりかけたところを、スーツケースが遮った。ただし、そのスーツケースが勢い余ってグレンの後頭部を直撃するというおまけもついたが。

「ごめんなさい」

謝罪の色が少しも混じっていない口調でダナは言つと、

「これ、どうしますか？」

拾い上げたボウルを、投げ終えたままの形で固まっている女性に差し出した。

「あら……、どうも、ありがと」

女性は気の抜けた様子で、ボウルを受け取った。

「ニースから聞いているわ。何も無いけど、どうぞあがっていった年の頃は二十代後半だろうか。」

細身で一見華奢に見えるが、ボウルが飛んできた速度から判断すると、身体的能力には恵まれているようだ。

「うちの馬鹿旦那と馬鹿義弟がご迷惑をおかけしたんですって？ 本当に何て言ったらいいのやら」

「ニースのやつ、どこまでしゃべったんだよ」

ようやく後頭部をさすりながら、うずくまっていたグレンが立ち上がる。

「強盗未遂まで話してくれたけれど？」

「あの馬鹿」

「……馬鹿？」

ミーナの眉が跳ね上がるのをディオは見た。つい近頃、同じような表情を見た覚えがある。

危険信号。

ディオの脳内をその言葉が走り抜ける。

「馬鹿はあんたでしょうがっ！ さっさと港に行つて荷おろしでも手伝つてきなさい！ まじめに働いてりゃどうにか食っていけるといふのにさー！」

ミーナはダナを横に押し退け、デイオを反対側に押しやると腕を組んでグレンを見上げた。

「ニースは荷おろしに行っただけど……あんたはどうする？」

「俺の昼飯は？」

「抜きに決まっているでしょう！」

ミーナは膝を胸に押しつけるように高く持ち上げると、そのまま足の裏でグレンを蹴り出した。

「夕方まで帰ってこないで！」

ぱたりとドアをしめ、さつさと鍵をおろす。ドアの向こうで、グレンが何か叫んでいたが、すぐにその声は聞こえなくなり、階段を降りていく足音が続いた。

「本当に迷惑かけたわね。怪我とかしなかった？」

二人にかけるミーナの声は、グレンを相手にしていた時よりはるかに優しい。ダナは肩をすくめ、デイオは首を横にふった。女はおとなしいのが一番だと、グレンが言っていた理由がなんとなくわかったような気がする。本当にダナと結婚するわけではないからどうでもいいのだが。

「本当に馬鹿でしょ、あの二人。ちよつとつまい話があるとすぐに乗って、結局痛い目を見るのよねえ」

質素ながら、温かくて十分な量の食事を二人にふるまいながらミーナはため息をついた。

「別れようと思ったことはないの？」

「ちよつと！」

単刀直入すぎるダナの質問を、デイオは慌てて止めようとした。

「ないわけじゃないけれど」

苦笑混じりに、ミーナは返す。

「私がいなくなったら、あの二人あつと言う間に犯罪者に転落ですよ。誰か手綱をしめてやる人間がいないとね。生まれた時から知り

合いだし、今さら投げ出せないわよね」

どことなく愛情に似たものこもった口調で、ミーナは言った。

「正確にはもう犯罪者だけど」

「ダナ！」

ダナはすましてスープをすすっているが、ディオは背中を冷たいものが流れ落ちるのを感じないではいられない。先ほどのボウルの威力からして、ミーナとダナが取っ組み合うことになったとしたら、血の海を見ることになりそうだ。

「そうね。二人を警察に突き出さないでくれて本当によかったわ。

ありがとう」

「いえ、こちらも助けてもらったので」

今度はダナに口をはさませる隙を与えず、ディオは答える。

## 24・協力者(2)

「そうそう、駆け落ちなんですよって？」

「そういうのってすつごくロマンティックよねえ」

ミーナの瞳が夢見る乙女のそれになる。それはほんの一瞬で、すぐに現実に帰ってきて、冷静な問いをディオに向ける。

「で、これからどうするの？」

「どこか適当な場所まで船で出て、そこから陸路……汽車でマグフイレット王国まで行こうと計画しています。王都には知人がいるので、そのつてをたどって、仕事を探せれば、と」  
このあたりの話はダナには答えようがない。

彼女がスープの皿を空にしている間に、ディオは地図を広げてミーナと話を続ける。

「それなら、一度マーシャルに行くのがいいかもね。マーシャル行きなら明日の朝、定期便が出るわよ」

ミーナの指が、地図の上を滑った。センチアとマグファイレットの間に挟まれている別の国の名前をあげて、位置関係を説明してくれる。

「マーシャルはまだエトルニア領内だけど。少し行けばマグファイレット領内に入ることができるし……。汽車だとどのくらいかかるか、私は知らないけど」

「本当ですか？それなら早めに乗船券を手配した方がいいかも」  
ディオは一度腰を浮かせて、またおろした。

「明日の朝ってことは、今夜泊まる場所もどうにかしないとだ。

ミーナさん、どこか適当な宿知りませんか？」

「うちに泊まればいいじゃない。うちの人と義弟を、警察に突き出さないでくれたんだもの。そのくらいお安いご用だわ」

ディオは、ダナを横目で見た。

一心にスープを口に運びながら、左手で「それでいい」のサインを送ってくる。

ディオは、ミーナに頭を下げると、

「迷惑ついでにもう一つ二つお願いが」

と、ミーナについての頼みごとをした。

幸いなことに定期便の乗船券はまだ残っていた。金銭的な面を考慮すると一等客室というわけにはいかないが、二等客室なら他の乗客と同じ部屋を使わされることはない。

部屋にシャワーもついているし、それなりに快適な旅になるはずだ。ディオが乗船券を手配している間に、ミーナはダナを買い物に連れていってくれた。

何しろ、身一つで逃げ出してきたという設定だ。

着替えもなければ、洗面用具もない。

ダナ一人で買い物に行かせるのは心配だし、とはいえまさか下着をかうのにまでつきそうわけにはいかない。

いくらなんでも。

親が人を雇って、探させているだろうという理由でかつらも探してもらおうように頼んだ。色そのものも目立つが、短髪の女性は多いとは言えない。納得したようで、ミーナはそちらもなんとかすると請け合ってくれた。

出会いはあれだったが、ミーナと知り合うことができたのはよかったと思う。

夕方帰ってきたグレンとニースは、ディオたちがまだいるのを見て少し驚いた様子だった。

ミーナの話の聞くと、

「そうすればいい」

と、すぐに賛成した。

普段ニースが使っている部屋を、二人に提供するという。ニースは  
どうするのかと言えば、台所の床に寝かされることになった。二人  
が台所で寝ると言ったのだが、ミーナの

「迷惑をかけたのは、うちの馬鹿二人だから」  
という一言で却下された。

夕食後通された部屋を見て、かたまつたのはディオだけだった。

普段ニースが使っている寝室、というからには当然なのだが、ベッ  
ドは一つしかない。

その他に部屋の中には家具らしい家具はない。

「ベッド……一つしかないんだけど？」

「そんなの見ればわかるでしょ。あたし床で寝るから、ディオがベ  
ッドを使えばいい」

「でも、それって不公平だと思うんだけど」

「あたしはもつとひどい場所でも寝られるけど、あんたはそうもい  
かないでしょ」

似たような会話を、つい先日交わしたことをディオは思い出した。  
ついで、それがつい一昨日の夜であったことに思いあたって、天井  
を仰ぐ。

ずいぶん昔のような気がする。その間にも、ダナは戦闘機から持ち  
出してきた毛布を床に置いて、もう一枚を上につけ、あつと言つ間  
に寝息をたてはじめた。

本当にもつとひどい場所でも寝られるようだ。

今さら起こすわけにもいかず、ディオはベッドに潜り込んで部屋を  
暗くした。

翌朝起きたときには、家に残っていたのはミーナだけだった。兄弟  
は、朝早くから港で働いているのだという。



「本当は、昨日もそうしているはずだったのだけど」

苦笑混じりに、ミーナは説明してくれる。パンとチーズとミルクという朝食まで食べさせてくれた。港の仕事では、稼ぎがいいとは言えないだろう。住んでいる場所も、どちらかと言えば貧しい人間が住む地域だ。

失礼なのかもしれないと思いながら、ディオは財布を差し出した。

「こんなに親切にいただいたのに、僕たち何もお礼できなくて……」

「やだ、やめてよ。もとはと言えば、家の人たちが迷惑かけたのだし」

ミーナはあわてて手をふった。それから厳しい顔になって、ディオを見つめる。

「手持ちのお金は大事にしなさい。所帯を持ったんでしょう？ 運良く仕事が見つかったとしてもよ？ すぐにお給料がもらえるとは限らないのだから」

それからディオの財布を取り上げると、中から一枚だけ、それも一番少額の紙幣を抜いた。

「そうは言っても、それじゃあなたたちも困るわよね。食事にかかった分だけもらっておくわ」

財布をディオに戻すと、ミーナは時計を見上げた。

「大変、急がないと。」

船に乗り遅れたら、次は三日後になっちゃう」

あわてて彼女は二ースの部屋へとかけこむ。

連れられて出てきたダナを見て、ディオは目を丸くした。昨日と同じ服を着ていても、まるで雰囲気が違う。どこで用意したのかミーナが選んだかつらは明るい茶色のふわふわとしたもので、ダナの碧玉色の目とよく合っていた。

「びっくりした？」

「……うん、まあ」  
時間がないと、ミーナは二人を追い立てる。

二人が乗船手続きをすませたのは、出航の十分前だった。

「体には気をつけなさいね。落ち着いたら、手紙でももらえたら嬉しいわ。うちの人はだめだけど、私は文字を読めるから」

「お世話になりました」

「いろいろとありがとう。その……買い物とか」

照れくさそうに、肩にかかった髪を払うダナにミーナは笑いかけた。

「若い子の洋服見立てるなんて、めったにないから楽しかったわ」  
仕事中のグレンとニースも、二人を見つけると手をふってよこした。言葉にはならない別れの挨拶。もう一度ミーナと握手を交わし、グレンとニースに大きく手をふって、ディオとダナは船に乗り込んだ。これで難題を一つクリアしたことになる。ディオは密かに安堵のため息をもらした。しかし、安心するのはまだ早かったとすぐに思い知らされることになる。

## 25・思いがけない再会(1)

一等客室や特別客室ともなれば部屋も広くゆったりとしていて、快適な船旅が約束されている。

国にいた頃のディオなら、王室専用船で移動だし、留学中は他の学生たちと一緒に行動することになる。金持ちの家の息子というのは、金銭面ではいたって鷹揚な人物が多く、奨学金をもらっている学生たちの分も誰かが支払って一等客室を使うことが半ば慣例化している。

身分から言えばディオは支払う側なのだが、残念ながらいつも支払ってもらった側だった。

というわけで噂には聞いていたが、二等客室に入るのはディオは初めてなのである。

せまい。

それがまず最初の印象。

部屋の片側にどんとベッドがおかれ、もう一方にはベッドとしても使用できるソファとテーブル。壁に作りつけられたクローゼットをのぞけば、あとは家具らしい家具はない。

部屋に入ったとたんダナは歓声をあげて、シャワーに飛び込んでいったため気がついていないようだ。

ベッドが一つしかないということに。昨夜使わせてもらったニースの部屋と違い、複数人で泊まることが前提の部屋だ。

置かれているのも、少し狭いのを我慢すれば親子三人くらいは寝られそうなサイズのベッドだが、枕が二つ並んでいるのはなんとも微妙な気分させられる。

三等客室にしないでよかったと、ディオは心の底から安堵した。

三等客室ともなれば、十人近くが一つの部屋に押し込められ、床に敷いたマットレスの上で就寝する、と聞いている。

そんなところでも、ダナは平気で寝られそうだが、ディオ自身は耐えられないだろう、多分。

風の具合にもよるが、マーシャルまでは五日ほどで着くはずだ。その間、海賊の襲撃がないことを祈るしかない。定期便の乗客は、それほど裕福ではない層が多い。特別客室も一室しかない。それよりは、同じような航路を就航している豪華客船を狙った方が、海賊たちにとっては効率がいいはずだ。

船によっても違うが、この定期便の特別客船ランクが大半の客船も存在するのだから。

ディオは靴を放り出して、ソファの上に身を投げ出した。空の船はさほど揺れないが、今乗っている船の揺れはかなりのものだ。その揺れに身を任せるのも、たまにはいい。

これが甲板なら最高なのにも思うが、ダナを置いて出ていくわけにもいかない。

両腕を折りたたんで頭の下に置く。最初は天井を見上げていたのが、だんだん瞼が重たくなってくる。ここ数日、今までに経験したことのないことばかり起こっている。

ようやく落ち着いた今、眠くなっても不思議ではないのだが。

ディオがうつうつとしかけた時だった。

ぱたりと洗面所のドアがあく。よろよろと出てきたダナは、ふらふらしながら部屋をつきつてくる。ディオの横になっているソファまで何とか到達すると、そのまま床の上に座り込んでしまった。濡れたままの髪から、ぼたぼたと滴が落ちる。

「どうかした？」

あわててディオが飛び起きると、ソファに顔をつっこんでダナはうめいた。

「……気持ち悪い……」

「気持ち悪いって……まさか船酔い？」

たずねるディオに、息も絶え絶えといった様子でダナは返す。

「あたし……こっちの……船……は……じめて」

「嘘だろ？」

あれだけ空を飛び回っておいて、船酔いするとは。ディオは頭をふった。

ソファによりかかっただけでぐったりしているダナを助け起こして、ベッドまで移動させる。

なんとか寝かしつけて、ディオは一度部屋を出た。医務室にまで行けば薬がもらえるはずだ。薬をもらって戻ってくると、ダナがベッドから恨めしげな声を出した。

「どこ……行つてたの」

「医務室。ほら、薬飲んで」

もらってきた薬を飲ませて、もう一度寝かしつける。

「すぐ慣れるよ」

「ディオだけ、元気でするい」

「そついつ問題？」

すねた口調に、思わず笑いがこぼれる。

ベッドから離れようとしたディオの袖をダナがつかんだ。

「だめ。どこにも……行かないで。ここにいて」

真剣な目で見上げられ、ディオは苦笑混じりにベッドの端に腰をおろす。

「……どこにも行かないから。少し寝るといいよ」

素直にダナは目を閉じる。ディオの袖をつかんだまま。ディオは、ダナを見下ろした。

顔の右半分は枕に埋もれている。長い睫に覆われた目元にはひどいくまができています。

いくらひどい場所で寝るのには慣れていると本人が言っていたとはいえ、かなり疲労していたはずだ。

何かあればまずディオを休ませて、その間彼女はずっと起きていた。船に乗り込んで緊張の糸がゆるんだ、ということか。袖をつかまれたままなのも、頼られるのも悪い気はしない。

捕まれていない方の手を伸ばして、頬の線にそってなでおろしてみ

る。聞き取れない言葉をつぶやいて、ダナは布団の中に潜り込んでしまった。

苦笑して、ディオは天井を見上げた。

見慣れている王室専用船より、だいぶ低い天井。そこに小さな明かりが一つだけつけられている。夜になればここに電気が灯されるようだ。

ダナがつかんでいるのが、ジャケットの袖だけだということに気がついて、そつと袖を抜く。

内ポケットにしまったままの研究成果の入った封筒が、ベッドの上に落ちた。

ディオはそれを拾い上げて、窓からの光に透かしてみる。

見た目は、茶色くて薄いただの封筒だ。内容もひどく簡略化して書かれているから、この封筒を手に入れても中身が理解できるのはフ

ォースダイト研究従事者だけだろう。

こんなことになっていなかったら。

研究室にこもって一日中研究に没頭して。早く解放された日には仲間たちと、街へ出かけていって酒場で騒いで。うっかり酒場の女の子といい感じになってしまった仲間を置いて先に帰宅。

門限破りをした仲間のためにこっそり窓から入れてやる、なんてそんな日々を送っていたはずだ。

自分がいい感じになるだけの甲斐性は、残念ながらディオは持ち合

わせていない。

それでも、皆で過ごす時間は嫌いではなかった。どうせ国へ戻るまでの留学期間中だけ許された自由だ。だから誘われれば、いつでも喜んで一緒に行った。今置かれている状況からすれば、信じられないほど平和な時間だった。

本当にこれでよかったのかと、デイオの胸に疑問が浮かぶ。自分が今抱えているこれは、下手をすれば空の勢力図を根底から揺らがせることになってしまう。とけない疑問があれば、手を出してしまうのが研究者というものなのかもしれない。

まだ、今の科学力では手を出してはいけない領域に踏み込んでしまったのではないかと初めて思う。

デイオはため息をついて、封筒を戻した。いずれにしても、もう手を出してしまったのだから今さら戻ることなどできない。

まずは国へ戻る方が先決問題だ。

## 26・思いがけない再会(2)

どこへも行かないと約束してしまったから、部屋から出ることをさえできない。

クローゼットを開けてみる。中にラジオが備え付けられていた。過去に何度か盗まれたことがあるのだろうか。何重にも鎖が巻かれ、嚴重にクローゼットに固定されている。

ディオは期待せずにスイッチを入れた。上空の飛行島に中継局が置かれているから、どここの海域でも聞けるようになっていた。自分の期待する局が流れているとは限らないが。

メレディアーナ号を逃げ出してから、今までの人生で全く知らなかったようなことをいろいろと経験した。逆に今世の中で何が起きているのかがわからなくなっている。昨日新聞を買えばよかったのだが、そこまで思い至らなかった。

最初に聞こえてきたのは、音楽だった。つまみを回して、何かニュースはないかと探してみる。どの局に合わせても。聞こえてくるのは種類はいろいろあれど音楽ばかりで、ディオの捜し求めている情報はなかった。

諦めて適当な音楽をかけたまま、ダナの側に戻る。

そのうちニュースが放送されるのを期待して、ディオは音楽に耳をかたむける。

聞き覚えのない音楽。国によって流行の曲は違ってくるから、当然かもしれない。

ベッドに背を預け、床の上に座り込んで膝を抱える。

マーシャルから陸路を使っても、王都まではさらに一週間ほどかかる。

その間に襲われたら……。いや、この船の中にだってもう敵は潜ん



でいるのかもしれない。  
いざという時が来たら。自分は守り通せるのだろうか。ここに至るまで、ずっと守られっぱなしで何もできなかつた。  
非力だ。

抱えた膝に顔を埋める。

そのままディオは動かなくなった。

部屋の中は、静かな音楽だけが流れている。

「ねえ、ディオ、起きてる？」

「ん……起きてる」

すっかり顔色のよくなったダナに肩を揺すられて顔を上げれば、数時間が経過していた。

「寝るならベッドで寝ればよかつたのに」

「そう言うけど。僕も男だよ？変な気起こしたらどうする？」

立ち上がって、体を伸ばしながらディオは言った。あちこちの関節がぼきぼきと鳴る。

「あたし相手に？冗談でしょ？」

ベッドに腰掛けて、ブーツに足をつっこみながらダナはけらけらと笑う。

いかにも対象外だというかのよう。

「でもそうね……。そんなことになったら、容赦なくひっぱたいてあつちの壁まで投げ飛ばすけどどうする？」

ソファが置かれている方の壁をしめしながら、ダナは首をかしげてみせた。

「……遠慮しとくよ」

反対側の壁まで投げ飛ばされるかどうかは別として。容赦なくひっぱたかれるのは間違いがない。

空腹を訴えるダナを連れて部屋を出る。客室は階層ごとに区切られ

ている。一番下の階が三等客室。ディオたちがいるのは、そのすぐ上で、一番上は一等客室と特別客室の客だけが出入りを許される階だ。食堂も各階層ごとに用意されている。航海の間は、二十四時間使うことができるが、供される食事は階によってがらりと変わる。二等客室以下の乗客は、自分たちで食事を席まで運ばねばならないが、一等客室以上の乗客になると給仕が配膳までしてくれるという違いもある。

食事時をはずれてしまったということもあって、食堂は空いていた。さつさとすませて、今度は甲板へと移動する。甲板だけは、どの階層の客にも公平に解放されている。

子どもたちが走り回っている。手すりにもたれて海を眺める人もいれば、用意された椅子に腰をおろしておしゃべりに夢中人たちもいた。

「平和ねー」

海の風にダナの髪がなびく。

地毛では目立つからと、ミーナに買ってもらったかつら着用のままだ。長い毛先に鼻をくすぐられて、ディオはくしゃみをした。他にすることもないので、適当に甲板をうろつろつろとしてみる。

ダナが言うには、多少揺れることをのぞけば、空とたいしてかわりがないらしい。

数時間の睡眠でだいぶ回復したのか、船酔いもおさまったようだ。そろそろ船を一周しようかという頃だった。

「ディオ、ディオじゃないか。元気だったか？」

声をかけられて二人は足をとめた。ディオに声をかけてきた青年の両腕には、若い女性がぶら下るようになっている。警戒するように、

ダナはディオの腕をつかんだ。

ディオの方はというと、

「フレディー！」

思いがけない再会に、ダナの手をふりはらっていた。

「伯父上、倒れたんだろ？お前こんなところで何しているんだよ」

「まあ、いろいろとあってね」

「あれもいろいろの一つか？」

フレディと呼ばれた青年は、腕にぶら下っている女性たちを押しや  
つて自由の身になると、ディオに近づいてきた。

警戒するかのように右手を腰にあてて彼をにらみつけているダナを  
視線でしめす。

二十代半ば、小柄なディオよりはやや背が高く中肉中背という表現  
がぴたりとはまる。

ディオと同じ色の日に焼けた薫の色をした髪は、かなり長めで、首  
の後ろで一つに束ねていた。

年の功か天性のものか、女性の扱いには長けていて、ディオが十八  
になったばかりの頃、「十八になったら女の扱いも知らなきゃいか  
ん」と誕生日プレゼントと称して、その手の店に招待してくれたの  
も彼だった。

残念ながら、その時の経験を実地にうつす機会には恵まれていない  
が。

「というか、今お前どこの客室にいるんだ？特別室は俺が占領して  
いるし、一等客室の乗客は全部把握しているがお前はいなかったぞ」

「ん、それもまあいろいろ。今は二等客室にいる……。て、なんで

一等客室の乗客全部把握しているんだよ」

「きれいなお嬢さんがいたらお近づきにならなきゃだろ」

ごく当然といった様子で、それを口にするフレディは明らかにディ  
オとは別の種類の人種だった。

「で、あの子誰だよ。お前の彼女じゃないなら、ぜひ俺が」

ダナの耳に聞こえないように、ひそひそとささやくフレディにディ  
オの眉間にしわがよる。

「僕と彼女はそういう関係じゃないけど。うかつに手を出さない方がいいと思うよ？相当腕っ節、強いから」

「彼女がお前と一緒にいるなら、そのうち機会もあるだろうさ」  
彼ならやりかねない。

二等客室から、彼の部屋へ移動してはどうかという提案を丁重に却下して、ディオはダナの元へと戻る。

「あれ、誰よ？やな感じ」

ダナが下唇をつきだした。じゃあな、と軽い様子で手をふり、待っていた女性たちを従えて、フレディは船内へと降りていく。

「従兄弟。正確な関係を言々と父の妹の息子」

「何でこんなところにいるわけ？」

「ルイーナには彼の家の別荘があるからね。そこにいたんじゃないかな」

「避暑って季節も終わろうとしているのに、今頃、ねえ」

ディオがいくら言葉をつくしても、ダナはフレディに対する疑いをはらそうとはしなかった。

## 27・告白(1)

夕食をすませてしまえば、あとはする事もない。

上等の客室にいる人間ならば、パーティだカードゲームだとさまざまな社交関係に余暇を費やすことになるのだろうが、ディオたちにはそんな余裕もない。

シャワーを終えて、ディオはラジオのスイッチを入れた。相変わらずこの局も音楽ばかりを流している。

昼間とは違う局でつまみを止め、ディオはソファに腰かけた。頭をこしこしとこすって、水気を払う。船内には売店もあって、雑誌や軽い小説なども買えたりするのだが、自分から離れるなどダナにきつく言われている。

昼間のうちに買っておけばよかった、と後悔していつも後から気づくのだとディオはタオルの影で苦笑した。

音楽が止まった。女性アナウンサーの音が、ニュースの時間だと告げる。

空賊に船が襲われた、殺人、新しい法案の可決、と機械的に読み上げられていく出来事はどれもディオには関わりのないものだった。ふいにアナウンサーの音が止まった。

「……………ここで臨時ニュースです。本日午後、センチア王立研究所に武装集団が押し入りました。現在研究所は炎上中。所属研究員の生存は絶望的と見られています。なお、逃走した武装集団の目的は不明。政府は……………」

ディオの頭からタオルが滑り落ちた。センチアの王立研究所。その研究員といえば彼の同級生や先輩の研究員、指導教授。

落ちたタオルを拾い上げようとディオは身をかがめるが、指が言う

ことをきかなかつた。

タオル一枚拾い上げることなど、それほど難しいことではないはずなのに。がたがたと震える指先は、大判のタオルをつかむことさえできないでいる。

「ディオ、どうかした？」

シャワーから出てきたダナは、ディオに視線を止めて凍りついた。

「……僕だけだ、ダナ……僕だけが生き残ってしまったんだ……」

自分の声ではないような気がした。ひどくしわがれている。部屋を横切ってきたダナは、タオルを拾い上げてソファの上に放り投げた。

「何があつたの？」

問いかける声が、動揺している。

ディオの隣に座ると、ダナは力づけるようにディオの手に手を重ねた。

ぐらりとディオの体がゆれた。ダナに全体重を預けるようにして、ディオは浅い呼吸を繰り返す。

「気持ち悪い？横になる？」

次々にたずねるダナに首をふっっておいて、ディオは自分の意志で体勢を立て直した。

「ラジオのニュース」

言われてダナは、ラジオの方を見た。ニュースは終わってしまったていて、再び音楽が流れている。

「ニュースが、どうかした？」

ぴたりとディオに寄り添って、ダナは彼の肩に片方の腕を回した。

「ニュースで……言ってたんだ。センチアの、研究所……僕がいた研究所が武装集団に襲われたって」

ダナの身体に力が入るのが、ディオにはわかった。

「それで？」

「研究所内にいた人間は……誰も生き残ってないだろうって。今、

火事になっっているみたいで詳細はまだ、なんだ」

もう片方の腕が、ディオの身体に巻きつけられる。ぎゅっと抱きしめられて、ディオは息を飲んだ。直接伝わってくる体温。自分だけが生き残ったことを痛感させられる。

「ディオ……それって……」

「研究所に行けば、僕が持っているものの原本があるからね。彼らの目当てはそれだったのかもしれない」

ダナの肩に顔を埋めて、ディオは小声で言った。

「僕だけが生きているんだ」

脳裏にうかぶのは、仲間たちの顔。

ディオの急な帰国を残念がって、戻ってきたらまた飲みに行こうとそう約束したばかりだったのに。

ダナが身体を離れた。両手で、しっかりとディオの肩をつかんで顔を見せる。

「しっかりしなさい。今、あんたがやらなきゃいけないことは何？ 肩をゆすられるのにあわせて、ぐらぐらとディオの頭が揺れる。

何も考えたくない。考えられない。

全てを投げ出して、安全な場所に逃げてしまいたい。

何があつたのか、ラジオのニュースでしか知ることができないから不明確だ。

「ディオ」

ダナの声が厳しくなった。

「あえて蒸し返さなかったけど。あんたの持っているものっていったい何なの？ 研究所の人全員殺してまで奪う必要があるものなの？ 研究所が襲われる他の理由は考えられないの？」

ディオははじかれるように立ち上がった。

シャワーに行く前、ベッドの上に放り投げた上着の内ポケット。薄い封筒を引っ張り出す。

「これは」

封筒をダナにつきだして、言葉が止まった。わかっている。ほぼ確実に原因は、この研究だ。あの研究所で、価値があるものと言えばこれしかない。

「ダナ、僕が持っているこれは……」

手の中で封筒がくしゃりとなった。そのままディオは腰を落とす。その勢いに、安物のベッドが悲鳴をあげた。

「それはいったい何なの？」

テーブルを挟んで、部屋の向こう側からダナは問う。

「フォースダイトを兵器利用するための研究成果」

ディオは一気に吐き出した。ダナの目が丸くなる。

「フォースダイトの、兵器利用？」

言い訳めいた口調で、ディオは続けた。

「最初は違ってたんだ。今よりももっとフォースダイトを効率よく利用できないかって、そういう研究をしていたんだ。今の半分の大きさですめば、単純計算で船の数は倍にできるし、船内でフォースダイトを置いてある空間を、他の目的で使うことだってできる」

「どうしてそれが、兵器に転用されるのよ」

「偶然の産物」

言葉にしてみても、ディオの口元が歪んだ。最初は純粋な研究のはずだったのに、気がつけば全く違う目的に転用されようとしている。



「フォースダイトにあるエネルギーを与えてやると、特殊な光線を発することがわかったんだ。破壊力抜群の、ね。それだけじゃない。フォースダイトに対してはその破壊力が何倍にもなるってことまでわかったんだ。制御が難しく、まだ実戦には配備できないけど」

「なんてことなの……それをビクトール様はわかっていて、あんたを助けたってわけね」

ダナの肩が落ちた。

「サラ様が裏切った理由、わかる気がする。そんな研究、完成されちゃたまつたもんじゃない」「ダナ、僕は……」

ディオの言葉など聞こえていないかのように、ダナは続ける。彼から視線をそらせたまま。

「ねえ、その研究って完成したら島だって落とせるってことでしょ？ そんなことになったら、あたしたちどこで生きていけばいいのよ？」

だんっ、とテーブルが鳴った。

勢いよくテーブルの上に両手をついて、ダナは立ち上がる。

つかつかとディオの方に近づいてくると、封筒を握りしめたままの手を持ち上げた。

「こんな研究、なんでしようと思ったのよ？」

ディオの前に膝をついて、指一本一本を封筒から引きはがしていく。どんな表情をしているのか、頭の陰に隠れてディオには知ることができなかった。

ダナは、ぐしゃぐしゃになった封筒の皺を丁寧に延ばしてから、もう一度ディオの手の上にのせた。

「ディオ……あんた何者なの？ 一介の大学生が、こんな物騒なもの持ち歩けるはずがない。本当は重要人物なんじゃないの？」

「僕は」

言いだしかけて、ディオはためらった。膝をついたまま、こちらを

見上げているダナの顔。

ここ数日のことがぐるぐると頭の中を回る。最初に顔を合わせた時の勝ち気な笑顔から、たった一度だけ見せた涙、側にいて欲しいと見上げられた時の表情まで。

口にしてしまえば、この関係は変わる。ともに逃げ出した仲間から、主従へと。

できることならば告げたくない真実の名。

「僕の本当の名前は……ディオス・グレイス・シルヴァースト。マ  
グフィレットの……王位継承者だよ」

一瞬のためらいののち、早口に言葉に出す。本当の自分の名前を。

「そんな……王位継承者……ああでもそんなことって」

うるたえた様子で、自分を見上げるダナに少し意地悪をしたくなっ  
てディオは言った。

「自分たちの次の主の顔も知らなかった？」

「だって、あたしたち王宮に行く機会なんてないし、新聞の写真じ  
や不鮮明すぎて顔なんてわからないし」

ダナは口を閉じた。立ち上がり、一歩下がって頭を下げる。

「……いろいろと申し訳ありませんでした、殿下」

「やめてくれよ」

ディオは手をふった。

「君が今まで通りにしていてくれないと、僕が困るんだ。駆け落ち  
中なんだからね、僕たちは」

「……はい」

見えない壁が、二人の間を隔てている。こんな壁なんていらぬ。  
瞬時にしてそびえ立った治める者と手足となる者の間の壁。

欲しいのは、主への忠誠心などではない。

欲しいのは。

ディオの思いとは裏腹に、部屋の中を支配した沈黙は、その座を明け渡すことはなかった。

## 29・船内にひそむ敵(1)

一度生まれた壁は、時間がたつにつれてその存在をますます主張するかのようだった。

別々の行動はできない以上、同じ部屋の中で過ごすしかない。ダナはソファの上、ディオはベッドの上と別れて座り、膝を抱えてラジオに耳をかたむける。

翌日になっても、新しい知らせは届かなかった。研究所の職員および協力していた学生全員の死亡が確認された以外には。

それを聞いたディオは拳を握りしめたが、ダナはただ膝の上に顔をふせただけで、なにも口にすることはなかった。ただ、気まずいだけの時間が流れていく。

「食事に行こうか？」

ディオが声をかけたのは、夕方近くになってからだだった。

朝から何も食べていない。さすがに胃が空腹を訴え始めていた。仲間が死んだというのに、食欲があるというのは不自然なようにも思えるのだが。

昨日同様、食堂で食事をすませてそのまま甲板へとあがる。

ダナの眉が物言いたげにはね上がったが、見なかったと自分に言い聞かせる。見ていなければ気にもならない。あの部屋に二人きりであるのは、息がつまりそうだった。

その責任はディオにあるとしても。

「何だよ、今日一日見かけなかったじゃないか」

上着を肩にひっかけて、これまた昨日同様に若い女性に囲まれていたフレディが、話を中断して近づいてくる。ダナはフレディが近づいてくるのに気づくと、肩を一つすくめてその場を離れた。

少し離れた場所から壁に背を預けて、二人の様子を眺めている。

「何だ何だ喧嘩でもしたか？昨日とずいぶん様子が違うぞ」

フレディはにやにやしなから、交互にディオとダナに視線を送る。

「……何でもないよ」

フレディが妙に鋭いのは昔からだ。ディオにとって兄のような存在で、勝てると思ったことなど一度もない。

フレディは、手をのばしてディオの曲がったネクタイを直しながら続けた。

「ま、いいけどさ。マーシャルにいたらどうするんだ？列車、手配してやるうか？俺も一緒によければだがな」

「何で一緒にくるのさ？」

「どうせ目的地は一緒だろ。あれからよく考えたら、お前は物騒な物を持っているんだろ？し、護衛は多い方がいいだろうが」

しれっとして彼は、ダナの方に指を向ける。この分だと彼女の素性も知られているのかもしれない。

「お前がセンチアで何やってたか、知っているぞ？」

あたりをはばかりように、ディオの方にかがみ込みながらフレディは言う。

「列車も個室の客なら、それなりに車掌も警備に気を使うだろ」

「……考えておくよ」

そう返答したものの、ダナは反対するだろう。どういうわけか、フレディにはやたらと警戒心を持っているのだから。

フレディと別れて、船内へとおりた。ダナは相変わらず一言も発することなく、ただディオの後をついてきていた。

またあの沈黙に押しつぶされそうな時間を過ごさねばならないのかと思うとうんざりするが、船を降りるまでは耐えなければ。

部屋のドアに鍵を差し込む。違和感を覚えて、ディオは首をかしげた。部屋を出る前に確かに鍵をかけたはずだ。それなのに今鍵を回

した時、再度鍵がかかった音がした。  
がちゃがちゃと何度か回してようやくドアを開けることに成功する。  
部屋の中に足を踏み入れて、ディオは驚きの声をあげた。  
後から入ってきたダナがわめく。

「何よ、これ！どういうこと？」

部屋の中は荒らされていた。クローゼットの中身は床の上に放り出されている。二人のスーツケースも蓋を開けられていた。ベッドのシートもはがされ、床に引きずりおろされ、枕もあるべき場所にはない。

ダナの表情が変わった。つかつかと部屋の中央まで進んで、そこに放り出されていたゴーグルを拾い上げる。

「ディオ、あれは？」

問われてディオは上着の内ポケットを押さえた。

「大丈夫。持ってる」

「他に無くして困るものって？」

ディオはポケットに手をつっこむ。

「旅券、財布……あ！」

声をあげて、ディオは床の上にかがみ込んだ。目を皿のようにして探す、もとめていた物はどこにも見あたらない。

「預かってたお金がない！」

「それがないと困るの？」

「そうだね、列車の切符が買えない程度には」  
ダナの口角が下がった。

「それって財政的に逼迫してるってこと？どうして持ち歩かなかつたのよ？」

「あんな大金持ち歩けるわけないだろ？部屋には鍵をかけたし、スーツケースにも鍵かけたし、持ち歩くより安全だと思ったんだよ」

とがめられて、ディオの声もとがった。だいたいディオにそれを預けたのはダナなのだ。今さら文句を言われても困る。部屋の外にまで響き渡る二人の声に、船員がかけつけてきた。部屋の中の惨状を目の当たりにして、慌てて上司を呼びに走る。

呆然としているディオを放置して、ダナは部屋の鍵を確認した。こじ開けられたような傷がある。

ただの物取りなのか、それともディオを狙ったものなのか。

現状では判断をくだすことはできない。今失われたのが、現金だけだとしても。

ダナの手が、そっと自分の腿をおさえる。銃にナイフ、小型の爆弾。全てそこに巻きつけてある。船の中でこれを使わなければならない事態がおこらなければいいのだが。

呼ばれてきた上級の船員も、鍵の状態を確認してうめいた。船の中に盗人がいるということになる。

被害額を聞かれて、ディオは正確な額を伝えた。あまりの金額に船員の顔に不審の色が浮かんだ。

彼女と駆け落ちをしたため、ありとあらゆるところからかき集めた現金だったのだと相変わらずの作り話に、一気にそれが同情へと変わる。

両手を腰に当てて、部屋の中からディオを睨みつけていたダナは唇を突き出して言った。

「これからどうするの?」

たずねられても、考えなどあるわけがない。それより今夜この部屋で寝る方が不安だ。簡単にこじ開けられる鍵などかける意味がない。船員たちは一応犯人を捜すとは言ってくれたが、当てにするわけにもいかない。

警備のしっかりしているところと言えば、心当たりは一つしかない。





### 30・船内にひそむ敵(2)

「……フレデイのところまで寝かせてもらおう。ダナは嫌だろうけれど、ここで寝るよりよほど安心だと僕は思う」

二等客室の乗客が、特別客室のある階に立ち入るわけにはいかない。知人がいると船員に説明して、フレデイを探してもらおうと、いかにもパーティに出かけますといった正装で現れた。

伝言を頼んだだけのはずなのに。

「こりゃ、ひどいなあ」

部屋の中の惨状を目の当たりにして、フレデイはある意味感心したような口調で言った。

「俺の部屋、寝室四つあるから好きなのを使えばいい。ああ、君は俺のベッドでもかまわないけど」

「冗談でしょ？」

肩に回された手を勢いよく払い落として、ダナは眉を吊り上げる。

「今度あたしに触ったらひっぱたくわよ？」

「おー、怖い怖い」

少しも怖くなさそうな口調で言うと、フレデイは鍵をディオに渡して、来たとき同様ふらりと消えた。

「……あたし、本気で言ったんだけど」

「あの人、暇さえあれば目の前にいる女性を口説いているから気にしない方がいいと思う。目の前にいなかったら、わざわざ探しに行くくらいだから」

「あきれた」

心底あきれ果てた口調で言うと、ダナはスーツケースを引き寄せた。

荷物をぐしゃぐしゃと放り込んで、ぱたんと蓋を閉じ、鍵がかからなくなっているのに気がついて顔をしかめた。

デイオのスーツケースも同様で、こちらは内側に張られた布が裂かれている。徹底的に探したらしい。

これほど徹底的に探したのなら、目的はやはり金銭ではないのだろう。

ダナにはそれを告げず、デイオは黙ってスーツケースの蓋を閉じた。

案内された特別客室は、一人で使うにはやたらと広い部屋だった。

中央に居間があり、その左右に四つの寝室が配置されている。居間だけで数十人を収容してもまだ余裕がありそうだった。

左側奥の寝室はフレディが使用しているという話だったので、デイオは右手前の寝室に入った。ここも広い。

部屋の中央におかれたベッドは、三、四人で寝ても問題なさそうな広さだし、枕やクッションも見るからに柔らかそうだ。

ソファにテーブル、どの家具も前の部屋にあったのとは比べ物にならないほど高価な品だ。壁には絵がかけられ、棚には高級酒の瓶が並んでいる。

何より窓が広がった。

沈んでいく夕陽に海が赤く染まっているのがよく見える。

「あの人、ここ一人で使っていたわけ？ものすごい空間の無駄よね」  
当然のような顔をして続いて入ってきたダナは、手を乗せてベッドの柔らかさを確認している。

「贅沢なんだよね、フレディって。いつも最高級の物しか使わないんだ」

服をクローゼットにかけようと、スーツケースの蓋を開いて気がつく。ダナも自分のスーツケースを開きはじめていることに。

「あっちの寝室使えば？」

「い・や・よ！あたしもここで寝る！」

「何で？」

昨夜からの壁がいつの間にか崩れていることに安堵しながら、デイ

才はずねた。

「身の危険を感じるのよ！」

スーツケースの中をひっかき回し、手当たり次第に物を取り出しながら、ダナは答える。その合間に手を振り回しているのは何の主張なのか。

「夜中に目が覚めたらあの人の上に乘ってたなんてことになったら、洒落にならないでしょ？」

「そこまで獣じゃないと思うけど」

苦笑混じりに言って、ディオはつけたした。

「なんだか今日はいろいろとやる気になっていたみたいだし、この部屋には戻ってこないかも」

「それならいいけど。ディオと一緒にいる方が安心だわ」

自分は安全だと思われているのか、信頼されているのか。いずれにしても複雑な気分ではある、が。昨日以前のような口を聞けるようになったのは、嬉しかった。

「戻ってきたら、またあの店に飲みに行こうぜ」

「なんかイザベラって娘が、ディオのこと気に入ってるって話だからさ。今度はうまくやれよ」

どこかで聞いたような会話だと、ディオは思った。

ああ、そうだ。

父が倒れたから国に戻るのだと知らせた時に仲間たちとした会話だ。

「それでうまくやれるのなら、苦労はしないよ」

そんな風に返したのだと、頭の後ろの方でディオは考える。

こんな会話を交わすことは二度とない。

皆、炎の中。

無事なのは。

研究所を出ていた彼だけで。こんな夢、早くさめてしまえばいい。

肩をゆすられて気がついた。

「大丈夫？ずいぶんうなされていたけれど」

ディオにベッドを押しつけて、ソファで寝ていたはずのダナが枕を抱えて見下ろしていた。

「ごめん、うるさかった？」

「そういうわけじゃないけど」

そのままダナはディオの隣に潜り込んでくる。

「な、なんだよ」

「誰がそばにいた方が安心するでしょ」

うつ伏せになって、ダナは枕をたたいている。

「あたしも、そうだったから……それにあのソファ寝心地最悪」

ようやく気に入った形になったのか、それだけ言うとそのまま枕に顔を埋めてしまう。言葉の後半は、既に眠りの中。

「別の意味で眠れないと思うけど？」

ディオの言葉はおそらく聞こえていない。ディオは少しだけダナの方に身を寄せると、背を向けた。

### 31・知らない世界(1)

「お前たちなあ、人の部屋で何やっているんだよ」

翌朝デイオたちを起こしたのは、フレディ本人だった。

昨夜着ていた服のままのところを見ると、昨夜はここには戻らなかったということか。

「何……って、うわあ!」

腕に感じた重みをデイオは払い落とす。

フレディが何やっているのかと言いたくなる気持ちもわかる。

昨日は背を向けて離れていたはずなのに、朝起きてみれば何故かダナに腕枕をしていたのだから。着衣にいつさいの乱れはないが、誤解を招きかねない状態であるのは寝ぼけた頭でも理解できる。

「……起こさないようにしてたのに、なんでずかずか入ってくるのよ?」

払い落とされたダナは、身体を伸ばしながらベッドの上に座り込む。フレディは勢いよくベッドに近づいてくると、デイオの腕を掴んだ。反抗する隙を与えず、そのまま居間の方へと引きずっていく。

「お前なあ、そういうことは人の部屋では遠慮しとけて」

「何もしてないって!」

居間のソファにデイオをおしつけて、フレディは目の前に腕を組んで立った。デイオの主張を信じていないのだと、その眼差しは語っている。

「本当に何もしていないわよ?抱き枕代わりに使われただけで」

寝室のドアから顔だけ出してダナが口をはさんだ。それだけ言うと、すぐに顔を引っ込めてしまう。

「何も無い方が問題だ!お前、あんな可愛い子に添い寝してもらっ

「何もしないって失礼だぞ？」

「失礼ってそっちの話？」

「ディオの話をぶちりとうちきって、フレディはため息をついた。

「俺はそんな情けない男にお前を育てた覚えはない！」

「育てられた覚えもないけど？」

「マリアンヌの店に連れて行ってやっただろうが？」

「その話はなしだつてば！」

慌ててディオは手をばたばたとさせる。

確かに楽しい体験だったが、その手の店は一度行けば十分だ。

ダナの前でその話をされるのは非常に困る。

「じゃあさー、俺にゆずれって。俺赤毛って好みなんだよな。気が強い子が多くてさ……あれ？」

フレディは首をかしげた。

「あの子昨日赤毛だったか？」

「あれかつら。目立つからね」

そんな会話を交わしている間に、寝室のドアが開き、着替えたダナが出てきた。

「あのおさ、やっぱり今夜は俺と一緒に……」

すかさずフレディが近づく。ディオの目には、ダナはほとんど動いたようには見えなかった。

鈍い音がする。フレディは体を二つに折ってうめき声をあげた。

「今度触ったら、ひっぱたくって言ったでしょ」

拳を打ち込んだ体勢のまま、平然としてダナはフレディを見下ろす。

「ひっぱたくって言ったなら平手かと思ってたよ」

この場に不釣り合いなほどしみじみとした口調で、ディオは言った。

「顔は堪忍してあげたんだから、感謝してほしいくらい」

ひっぱたかれるような真似をしなくて、よかったと心の底からディオは思う。

確かにすぐ近くに他の人の体温を感じるのは、悪夢を追い払うのは役にたったけれど。

「まだ触ってない!」

フレディの抗議は、二人の間で黙殺されたのだった。完全に。

「あの人朝まで飲んでいたでしょ」

昨夜は一睡もしていないのだと言い残して、自分の寝室に消えていくフレディを見送って、ダナはしかめっ面になった。

「王族とか貴族とかお金持ちってみんなあんななの?」

「いや、彼は特殊だと思うよ?」

返しながらディオは思う。

フレディは彼の知る限り放蕩人という言葉が一番ぴたりとはまる人間だ。

暇さえあればあちこちの夜会に出かけ、招待されていない時には、街へと繰り出す。一人寂しくベッドで寝ることはほとんどないという話で、そっち方面の武勇伝には事欠かない。彼自身、武勇伝を吹聴しているふしもある。

金の使い方も豪快で、一晩で家一軒が買えるほどの金額を浪費したこともあるという。

自分とは別種の人間だと半ば珍獣を見るような気持ちで眺めていたし、それで十分だった。

一人でこの広い部屋を使っているのを知って、それだけではないと初めて思う。欠けた何かを浪費で埋めようとしているのかもしれない、と。

彼の抱える深淵をのぞき込んでしまったような気がした。

「無駄に贅沢な作りよね」

昨日は素通りした部屋の設備を確認しながら、ダナは何ともいいが

たい表情を浮かべていた。

昨日まで使っていた部屋は、クローゼットの中にラジオが置かれているだけだったが、この部屋は違う。

ラジオもあれば、レコードのプレイヤーもある。もちろん鎖で厳重に固定されているなどということもない。レコードも少なく見積もって数百枚が棚に納められていて、どんな嗜好の人間でも一枚くらいは聴きたい音楽が見つかりそうだった。

本棚には読まれた形跡のない本がぎっしりと並べられていて、テーブルの側にはランプをふくめ、様々なゲームが用意されている。時間をつぶす娯楽は十分用意されている。

「ディオも国にいる時はあんななの？」

「うーん、どうかな。僕夜会とかって苦手なんだよね。もちろん必要最低限は出席するけれど」

たとえば国賓を歓待するためとか、高齢の父親に変わっての代理出席とか。学生としてだけでなく、ディオにはやらなければいけないことがある。

「どうして？夜会って楽しいって聞くけど？ビクトール様は招待されれば、喜んで出かけているわよ」

「ビクトールは女性にもてるからね。何人にも囲まれてきゃーきゃー言われてるの、見たことあるよ」

「ディオは？」

こういう風に話ができるのは、昨日までの沈黙に比べたら喜ぶべきことなのだろう。国での生活にあまり触れて欲しくないけれど。

「僕の周りの女の人は、やたらに背が高いんだよね。ヒールのついた靴をはかれると、たいいてい僕より目線が上になるんだ。その状況でダンスをするっていうのもなかなか大変だよ。だから出席するのは必要最低限」



「まだ伸びるわよ、とは言ってあげられないわね。もういい大人な  
んだから」

「ほつといて」

背が低いのも童顔なのもコンプレックスなのだから、そこをつつか  
ないで欲しい。

寝ていた格好のまま居間に連行されたディオが、一度寝室に引ッ込  
んで戻ってくると、ダナはソファの上に寝そべっていた。

「ねえ、本当に皆こんなのを着ているの？」

ソファの上で腹ばいになって眺めているのは、最新のファッション  
雑誌。膝を折り曲げているので、踵が宙でぶらぶらと揺れている。

頭の方に回って眺めてみれば、夜会に出かける時着る服の特集だっ  
た。

女性服のわずかな流行の違いなどディオにはわかりようもないが、  
あちこちの夜会で見かけた服装とたいして変わりがないように思え  
る。複雑な形に結い上げた髪、上半身はかなり深く胸元を切り込ん  
で、対照的に下半身はスカートをふくらませる。これでもかど肌を  
露出して、首や腕だけでなく、髪にも耳にもきらきらとした宝石を  
飾ってポーズを取るモデルたちの写真。

ディオが肯定すると、ダナは羨ましそうにため息をはいた。

「こういうのってお姫様だけが着るのかと思ってた」

「着てみたい？」

「ちよつとね」

照れくさそうに舌をのぞかせると、ダナはページをめくった。着せ  
てあげるよ、と言いかけた口をディオは閉じた。国に帰ればダナを  
ディオ主催の夜会に招待して、服の一着や二着用意するのは不可能  
なことではない。ディオにだってそのくらいの力はある。

けれど。身分のことを口にするのははばかられた。  
あえてダナが触れようとしないうたから、ディオオから蒸し返すこと  
はない。

### 3.2. 知らない世界(2)

ディオは本棚の中から小説を選んで、ダナの寝そべっているのとは別のソファに座った。彼女は踵をぶらぶらさせたまま、雑誌を眺めている。二人とも口をきかない。出会ってから初めての平和な時間だった。

この静寂を破りたくないと思う程度には。左側に重みを感じて、ディオは目をあげた。思っていたより夢中になっていたらしく、物語は中ほどまで進んでいる。音も立てずに移動してきたダナが、ソファに横向きに座って、ディオに体重を預けていた。

足もソファの上にあげてしまっていて、ブーツは床に仲良く並べられていた。

「……………何？」

「落ち着かないの。広すぎる」

「落ち着かないって……………」

ディオからしてみれば、広すぎるなどということはない。確かに寮では狭い部屋で生活していたが、国にいる時はこの数倍もの広さの部屋を一人で使用している。

「そのままでもいいけど、あまりこっちに体重かけないで」

最終的にディオの方が譲渡したのだが、その後は読書に集中するどころではなかった。どうしてもダナの二つ二つの動作を意識せずにはいられない。

ダナの方かというと、気になる記事を見つけるたびに、

「これってどうなの？」

とディオに質問を投げかけ、雑誌を堪能しているようだった。

結局部屋から一步も出ることなく、その日は暮れた。

別の客室に泊まっているフレディの従者が時々出入りする以外は、人の出入りもなく平和な一日だった。

食事を部屋まで運ばせれば食堂へ行く必要もない。外の空気を吸いたいと思わないわけでもなかったが、部屋を空けるのもためらわれた。

夕方になって、腹減ったと言いながら出てきたフレディは、今日もしっかり正装に身をつつんでいた。

昨日と変わらない二人の服装を見て、心底残念な口調で嘆く。

「着替えがないのが残念だなあ。そうしたら連れて行ってやれるのに」

「あたしは別に行きたくもないけど」

「デイトは行きたいだろ？」

「遠慮しとく」

つれないなあ、と大仰な身振りで嘆きながらフレディは扉へと向かう。

フレディは入り口のところで振り返った。

「……ダナ」

「何よ？」

ダナはつまらなそうに、雑誌から視線をあげようとしめない。

「そのワンピースは流行遅れだ。今年の流行は鎖骨を見せるんだぞ？下船したら新しい服を買ってやる」

「いらぬわよっ」

扉が閉まるのと、雑誌がそこに叩きつけられるのは同時だった。

本を置き、雑誌を拾い上げて元の場所に戻しながら、デイトは口を開いた。

「流行遅れだって……気になる？」

「別に」

デイオが戻したのとは別の雑誌を引っぱり出して、彼女はページをめくる。

「そこに命かけているわけじゃないもの。こんな格好しているのも戻るまでの間だけだし、ね」

確かに島にいる間も、スカートは身につけていなかったのをデイオは思い出す。

デイオも元の位置に戻って、読みかけの本をもう一度開いた。しおりを挟んだ場所を指でたどりながら別の質問を試してみる。

「本当に行きたくなかった？」

「行っても何もできないし。ダンスも踊れないし、うまく振る舞う自信もないし」

「そうか」

デイオは本を閉じた。

「のぞいてみる？」

そう言ったのは、ダナの口調のどこかに好奇心に似たものを感じ取ったからだだった。

「のぞける？」

「たぶん」

部屋をあけることにためらいを感じながらも、ダナを連れて外に出る。

フレディの向かったホールは、一つ上の階にあった。

誰にもとがめられず上質の絨毯がひかれた廊下を進んで、二人は扉の前に到達した。

細く扉を開いてデイオはダナを手招きする。軽やかな音楽がこぼれ出てきた。

そっとのぞき込んで、ダナはうわあ、と声をあげたきりそれ以上何もいえないようだった。

ホールの中にはたくさんの人がいた。着飾った紳士淑女たちが部屋の中を埋めつくしている。

音楽に合わせてスカート裾が翻る。身につけた宝石が、明かりをうけてきらきらと輝く。

彼女が想像していたのよりも、ずっと華やかだった。こんな世界が実在するなんて、思ってもいなかった。

空と船しか知らなかった。それで満足だったし、それ以外の世界を見てみたいとも思わなかった。

ディオと逃げ出してから、その梓が外されてしまったようだ。

知らなかった人たち。知らなかった世界。空を去る気などないけれど、違う世界を見るのはわくわくする。

ディオが腕をひいた。

「人が来る」

音がしないようにドアを閉めて、二人は駆け出した。

特別客室に戻ると何故か笑いがこみあげてきて、二人そろって床の上に座り込む。たいして悪いことをしたわけでもないのに。笑いの発作は数分にわたって続き、先に立ち上がったのはダナだった。

「ちよっといいわね。ああいうの」

ダナはディオに手を差し伸べる。その手を取って、ディオも立ち上がった。取った彼女の手は、彼の手より一回り小さくて固かった。

ディオの知っている女性の手とは違う。この手で戦闘機を駆り、銃の引き金を引く。戦う手だ。

そっと手を離してディオは、レコード棚に目をやった。

近づいて一枚を手に取り、プレイヤーにセットする。静かな音楽が流れ始めた。

手を伸ばして、ダナを呼ぶ。

「おいで」

「おいでって言われても、あたし踊れないってば」

「誰も見ていないから大丈夫」

今度は、ダナがディオの手を取った。

ぎこちない手つきでディオはダナを引き寄せる。

右手はこう、左手はここと教えて、ダナはディオの腕の中に収まった。

二人の頭の位置がほぼ同じなのに気がついて、ディオは苦笑した。

「君がヒールのついた靴をはいていなくてよかった」

音楽に合わせて、二人はゆるやかに動き始める。

最初はぎくしゃくしていた動きが、数度のターンの後滑らかになる。

「次回があるなら、ぺったんこの靴履いておくわ」

そう言つて、ダナはディオの肩に頭をもたせかけた。肩にかかるわずかな重み。

その重みにディオの良心が痛む。

仲間たちの訃報を聞いたのはつい一昨日のことだというのに。

「……ディオ？」

重くなつたディオの心を見透かすように、ダナが名を呼んだ。

「何？」

「……ありがとう」

「……どういたしまして」

その言葉に、少しだけ心が軽くなる。

後ろめたさは完全になくなつたわけではないけれど。

### 33・なんて無力な(1)

「それ、全部彼の荷物なの？」

「そうでございますよ」

明日はいよいよマーシャルへの入港という夜。フレディの従者であるファイネルは、彼の荷物を整理していた。彼の主といえば、「明日でこの船ともお別れだからな」と言い残し、最後の恋を探しに夜会へと出かけている。

「どれだけ着替え持つてくれば気がすむのよ？」

「そうですねえ、これでも今回は少ない方でございますよ」

「ホントに？」

ダナは、フレディの荷物をまとめているファイネルの側で彼の手伝いをしている。

この部屋に身を寄せてからは、ずっと彼の世話になりっぱなしだった。食事の時間になれば、二人分の食事を食堂から運んでくれたのも彼だったし、必要な品を言えばすぐに調達してきてくれた。

彼がいなかったら、旅の間相当不自由な思いをしなければならなかったのは間違いないところだ。

「下船したら新しいお召し物を用意しなければなりませんね」

「誰の？」

「ダナ様の、でございますよ」

「……いらないわよ」

「いけません。美しく装うのは、女性としてとても大切なことなのですよ」

開け放った扉の向こう側から二人の声が聞こえてくるのに耳を傾けながら、ディオは居間のソファに身体を預けていた。

先ほどまで二人の周囲をうろうろしていたのだが、ディオの身分を



知っているファイネルが手を出させるはずもなく。ダナの方はといえば「邪魔」の一言で、ディオを完全に撃沈させたのである。

相変わらず着たままの上着の上から、ディオは内ポケットを押さえる。

ようやくここまで来た。それでもまだ道のりの半分というところではあるが。

ファイネルが目を配ってくれたからなのか、上級の客室は元から警備が厳重なのか。あれから部屋が荒らされることはなく無事にマールシャルに入港しようとしている。

ディオは、今までのことに思いをはせた。

結局、ダナは全ての夜をディオのベッドに潜り込んできた。ときどきして眠れないのではないかと心配していたのはディオだけで、それでも案外眠りにつくのはたやすいことだった。

悪夢を見なかった、とはいえない。自分だけが生きているという後ろめたさは、昼間の間は追い払うことができている、夜になると無意識の世界からディオのもとへとやってくる。

うなされて目が覚めた時、ダナは黙って身を寄せて髪を撫でてくれた。とても優しい手で。

眠れないまま、暗闇の中で目を開いている時に聞こえる彼女の穏やかな寝息。

人が近くにいるというだけで、こんなにも安心できるのだということとを今まで知らないでいた。文句をつけていたフレディも、あきらめたのかあきらめたのか。

自分の一夜の恋の方が大切になったようで、残りの夜は今夜同様、二人のいる特別客室に戻ってくることはなかった。

フレディとの同行を、ダナは嫌々ながら受け入れた。何かあった時

には、ディオだけを守るという条件付きで。

フレデイもそれを了承したのではあるが、何かとダナにちよっかいを出しては、反撃を食らっていた。その反撃自体も楽しんでいたのではないかと、ディオは疑っている。

最後の夜も無事に乗り越えた翌朝。入港と同時に、三人はファイネルをともなつて上陸した。入港審査がいたって簡単だったのは、フレデイの肩書きが物を言ったのだらう。フレドリク・カイトファーデン様とその友人という扱いだ。

いまだにディオたちは偽名の旅券を使用している。旅券そのものは正規のものであるが、それで審査が手抜きになるのならば、同行したのは正解だったのかもしれない。

フレデイはおびただしい量の荷物をファイネルに持たせ、自分は必要最低限を詰め込んだ小さな鞆一つだった。ディオとダナはそれぞれ自分の荷物は自分で持っている。あらかじめ命じておいた自動車が、三人を迎えに港までやってきた。

自動車に乗れるのは、運転手をのぞいて三人まで。ファイネルは、歩いて宿まで移動するのだという。

大半が衣装のフレデイの荷物を、ファイネルが車のトランクに積み込んでいる。

「王族専用車とかないの？」

荷物の積み込みを手伝いながら、ダナがつぶやいた。

「俺、王族じゃないし」

と、こちらは手伝う気などさらさらなく見守るだけのフレデイ。

「カイトファーデン家は、有力貴族ではあるけど王族としての扱いは受けないんだ。男子だけが王族としての地位を受け継ぐことができるんだよ」

とディオが説明を追加する。こちらもただ突っ立っているだけだ。

役に立たないことこの上ない。

「そんなのって不公平よね。今荷物積み込んでいるのが、あたしとファイネルさんだけっていうのも不公平だと思うけど」

「誰も頼んでいないぞ？」

と、フレディが大仰な身振りで腕を広げた時だった。

ぱん、という乾いた音とともに、ディオの目の前で、殴られたようにファイネルの頭が不自然にかたむく。

くるりと回って、地面に倒れていくファイネル。その光景は、異様にゆっくりとディオの目にはうつった。

「ディオふせて！」

ダナの体当たりと同時に、地面に押し倒される。

続く音。

ついでしたがたまでディオの頭があったであろう場所の後ろの壁が削られた。

さらにもう一発。

今度はフレディをねらったものらしいが、こちらは既に地面に身を投げていた。

続々と下船してきていた乗客たちの間から悲鳴があがる。

「あそこだ！あそこから撃ってきたんだ！」

誰かが少し離れたところにある背の高い建物をさした。窓辺にいた人影が、身を翻して消える。「誰か警察と救急を！」

その声に、フレディは静かに返した。

「救急はいらん。もう死んでいる」

ダナが手を貸して、ディオを立たせた。

脚が震えて、自分一人ではまっすぐに立つことさえできない。

デイオはダナの肩に寄りかかるようにして、ようやく立ち上がることに成功した。

銃弾は、ファイネルの頭を貫通したらしい。倒れたファイネルの頭の下に、血が池を作っていた。驚いたように目は見開かれたままで、手にしていたフレディのトランクは、数メートル離れた場所に投げ出されていた。

目の前で人が死ぬのを見るのは初めてだった。

今まで葬儀に出席したことは何度もあるが、不慮の死を遂げた者はいなかった。

皆、棺の中で花に囲まれて穏やかな顔を見せていた。ファイネルの死は、デイオの知っている死とは違う。

自分の意志とは関係のないところで、無造作に強制終了させられた人生。

背中をさするようにしているダナの手の温かさも、今のデイオには届かなかった。

やがてやってきた警察がファイネルの死体を車に積み込み、その場の状況を確認しようと、フレディに質問をはじめた。

マグフィレットの有力貴族である自分を暗殺しようとしたのではないかと、フレディはでまかせの説明を警察相手にしている。

デイオは、ダナの手をふりはらった。

「僕のせいだ……僕の」

自分がこんな研究に参加しなかったら。失われないうすんだ命がいくつあったのだろう。

銃を撃ってきたということは、敵はデイオを殺すつもりになったということだ。

研究成果を奪うのは諦めた、ということか。

ディオの持っている書類だけでは、研究の全容を明らかにすることは困難だ。機密の一番大切な部分はディオの脳内におさめられている。他にも機密を知っていた人間はいたが、皆センチアの研究所とともに灰になった。

つまりディオさえ消してしまえば、マグフレット王国が書類を手にしたとしても、フォーサイト兵器として使用するためには数年以上の時間を費やすことになる。

その間にどこの国かはわからないが、敵国は対応策を講じることができる。

ディオさえいなければ。

ファイネルは、ディオの殺害に巻き込まれただけ。

自分はここにはいけない。

握りしめた拳は、驚くほど冷たかった。

### 34・なんて無力な(2)

『殿下。ご自分を大切になさいませ』

そうファイネルが忠告してきたのは、一昨日のことだったか。

ダナ相手に丁重な態度を崩さないでいても、彼からすればどの馬の骨かもわからない相手だ。ディオが騙されているのではないかと不安を感じたのかもしれない。主が二人が同じ部屋で寝るのを認めていたとしても。

『大丈夫……彼女はただの護衛だから』

そうディオは返したのだった。あの時のファイネルの不安そうな顔。ディオの身を案じてくれているのはよくわかっていた。ファイネルなりのやり方で。

フレデイがダナを呼んだ。一瞬、ダナの気がディオからそれる。

その隙をディオは見逃さなかった。そろりとその場から身を引き、人混みに紛れ込んだ。

「ディオがいない！」

狼狽したダナの声を背に、ディオは走り始めた。

どこへなんてあてはない。

ただ、あの場から離れたい、それだけだった。

港を走り抜けて目についた路地に飛び込んだ。

適当に右左と角を曲がって、港から遠ざかろうとする。

運動慣れしていない身体は、すぐに悲鳴をあげはじめた。わき腹に痛みが走り、息が乱れる。

誰も後ろからついてきていないのを確認して、ディオは走るのをやめた。

息を整えながら、それでも足を止めることはない。

荷物に入ったスーツケースは途中で放り出してしまったから、何も

持つてはいない。

このあたりで曲がるうかとディオは路地をのぞきこんだ。  
行き止まりだ。

肩をすくめて歩きだそうとした時、何かに突き飛ばされた。無様な格好で地面にたたきつけられ、一瞬気が遠くなつた。

シャツの喉元をつかんで、無理矢理立たされた。

「ディオ・ヴィレッタか。あれはどこにある？」  
低い男の声が問いかけた。

拒む目を強いて開ければ、左手でつかんでディオを立たせているのは背の高いがっしりとした男だった。

人相からして善人でないことは明らかだ。

言うものかと、ディオは口を結ぶ。

「まあいい。命令されているのは、お前の殺害だけだしな。書類の方はついでだ。お前を殺してからゆっくりと探すさ」

男の右手にナイフがきらめいた。

「行きがけの駄賃つてやつだ」

見せびらかすかのように、ナイフをゆっくりと掲げる。ディオの喉を締め上げながら。

ディオは男の腕から逃れようと懸命にばたばたするが、逃れようもない。

せめてナイフが落ちてくる瞬間は見たくない、かたく目を閉じて、それでも必死に男の手を引き剥がそうとする。

男がわめいて、ディオを突き飛ばした。

喉を解放されて、咳こみながらディオは目をあける。

目の前にあったのは、見慣れた茶色のブーツだった。

男の手にあったはずのナイフが、少し離れた場所に転がっている。

「あたしが時間を稼ぐから、あんたは逃げなさい」

ディオの方を見ようとせせず、ダナは言った。構えたナイフの先は、赤く染まっている。

「逃がしてたまるかよ」

腰からもう一本のナイフを抜きながら、男がうめいた。動作がぎこちないのは、右腕をダナに刺されたからなのだろう。

「二人とも天国行きだ！」

ナイフを構えて男が襲いかかってくる。ダナが動いた。

男のナイフをかわし、懐に飛びこんでナイフを突き上げようとする。「遅いな！」

男の左腕がうなりをあげた。ダナの頬に拳が綺麗に入る。

勢いで飛ばされて、ダナは頭から壁に叩きつけられた。彼女のナイフが地面に落ちる。

ぐらぐらする頭を叱咤しながら、ダナはわめいた。

「逃げなさいって言ってるでしょ！」

「でもっ」

ダナはよろめきながら、もう一度ナイフを手取る。

「逃げなさい。そのためにあたし達は雇われているのだから」  
妙に冷静な声。死を覚悟したのだと、ディオは悟らされる。

「早く行きなさい！」

言葉と同時にダナは動いた。男が鼻で笑って、ダナをかわす。

「あなたの負けだよ、お嬢さん」

振り回したナイフは、男をかすることさえできなかった。男に右手を捻り上げられ、ダナの口から悲鳴がこぼれる。

男は、ディオに見せつけるようにやりとすると左手でダナの喉をつかんだ。



そのまま半分つり上げるようにして壁に押しつける。  
ダナは宙に浮いた足を動かし、男の指をはがそうと喉に手をやるが、男の方はまったく動じなかった。

喉にやった手に、ゆっくりと力を込めていく。

「ディオ……逃げなさ……」

最後までダナは、ディオに逃げるとしか言わなかった。

抵抗を続けていたダナの手が下に落ちる。

がくりと腕を落としたダナを、男はディオの目の前に無造作に放り投げた。

動くことのない身体。奇妙に捻れた手足。

壊れた人形を連想させられて、ディオはただ彼女の名前を呼んだ。

「次はお前だ」

ダナを抱きしめたまま動けないでいるディオに、男が近づいていく。わざと日光をナイフに反射させながら。

彼女の身体を抱く腕に力を込め、ディオが目を閉じた瞬間。銃声が響き渡った。

男が呪詛の叫びをあげて、路地の入り口を振り返る。

「ディオ、そのまま動くな」

現れたのはフレディだった。空に向けて撃った銃の銃口を、男へと向ける。

襲いかかるナイフを身軽な動作で交わし、右足が男の腹にめりこむ。

「今銃を使ったからな。人がやってくるぞ。ついでに俺は警察に追われている身だ」

フレディがにやりとした。

「警察の事情聴取ほったらかしてきたからな」

男が舌打ちした。もう一度、フレディに襲いかかる。

今度の攻撃は、殺そうとしたものではなく退路を確保しようというものだった。

フレディを進路から退けておいて、路地から飛び出していく。悪態について、フレディは銃をしまった。

「ダナ……！ダナ……！」

ディオはダナの名を呼び続けた。

名前を呼んで、抱きしめて、肩をゆするが返事はない。

フレディがゆっくりと近づいてくる。

「どけ。まだ間に合うかもしれないぞ」

フレディは二人の間に割って入って、彼女を地面に横たえた。

顎を持ち上げ、気道を確保すると迷うことなく唇を重ねた。

息を送り込む。

一度、二度。

「だめか？いや、戻ってこい」

フレディはもう一度息を送り込んだ。今度はかすかにうめいて、ダナが首をふる。薄く開いた口から、最初の言葉がこぼれた。

「ディオ……？」

「大丈夫だ。君はよく頑張ったよ」

フレディは優しい手つきでダナの頭をなでると、彼女をディオの腕の中に戻した。

ディオは情けなさでいっぱいだった。

守るところか逃げ出すことしかできず。あげくのはてに敵に襲われた。

巻き込みたくなかったはずなのに、結果として巻き込んだだけではない。

犠牲になったのはダナの方だった。手当の仕方も知らなかった。

フレディがいなかったら、あのままダナはいなくなっていたはずだ。  
力なくディオにもたれかかるダナの頭。  
そこには壁に叩きつけられた時の傷がある。  
首にくつきりと残る、男の指の跡。  
殴られて腫れ上がった頬。  
すべて彼の責任だ。

「……………ディオが……………無事で……………よかった……………」  
腕の中でダナが微笑む。

よかったなんて、なぜ言えるのだろうか。  
全ての元凶はディオだというのに。  
銃声を聞いてかけつけてきた警察に、後のことを託してフレディは  
ディオに言った。

「車を回す。ディオ、お前は後ろの席だ」  
やってきた車の後部座席にダナとともに押し込まれる。  
運転手の隣の席に滑り込んで、フレディは運転手に行き先を命じた。  
くったりとよりかかってくる身体を支えながら、ディオは無力感に  
押しつぶされそうになっていた。

### 35・死を商う女(1)

車が滑り込んだのは、白く高い塀にぐるりと囲まれた巨大な屋敷だった。

巨大な門の前で車を止め、フレデイが自分の名を告げる。すると門番が門を開いた。しばらく進む。また塀が姿を現し、門の前で同じ手順をふむ。それを数度繰り返して、ようやく屋敷に到着した。

煉瓦作りの建物は窓に鉄格子がはめられていて、厳重に警戒されている。普通の屋敷ではないことは容易に知れた。

「降りるぞ」

当然といった顔で、フレデイがダナを抱えあげ、玄関に立った。

扉を開いたのは、全身黒と白に身を包んだ女性だった。黒のロングドレスの上から、白いレースのショールを羽織っている。首には真珠のネックレスを何重にも重ねていた。一番長い物は腰のあたりまで届いている。

豊かな黒い髪を頭の上に高く積むように結び上げて、そこにも真珠が飾られていた。やや盛りを過ぎかけてはいるが妖艶な美貌といい、豊かな曲線を描く肢体といい、見ただけでただ者ではないとわかる。

「思っていたより時間がかかりましたわね」

女性は綺麗に彩られた唇に弧を描かせると、三人を中に通すために一歩退いた。運転手が車を発進させる音を背に、デイオは屋敷の中に足を踏み入れた。

「お医者様はもうじきいらっしやいます。三人とも診てもらおう必要があるのかしら？」

「いや、この子だけで十分だ。俺は包帯でももらえればそれでいい」  
「素人療法はお勧めできませんわね。悪化のもとですもの」

その時はじめて、フレデイの左腕に布が巻かれているのにデイオは

気がついた。

怪我一つしなかったのは彼だけらしい。

こんなことになる原因を作ったのは彼だというのに。

足が沈み込みそうなほどふかふかとした絨毯が敷き詰められた広い廊下を、先に立って女性は進む。足音一つしない。例外は時々、彼女の首から下げられた真珠がかちりかちりとふれあう音だけ。

何度か角を曲がって、屋敷の一番奥まった場所と思われるあたりにたどりついた。

廊下の両側にずらりと扉が並ぶ。

一番奥の部屋をフレディに割り当て、真ん中をディオ、一番手前にダナと決めると女性は手前の扉を開いた。

ブーツを脱がせてソファにダナを寝かしつけ、女性は言った。

「どうぞ、こちらでお待ちください」

軽やかにスカート裾を翻す。磨かれ、鮮やかな赤を塗られた爪が視界に残った。

「ここはどこ？」

扉のすぐ脇の壁にもたれてディオはたずねた。肩が重い。自分の力だけでまっすぐに立っているのは困難だった。

「マーシャルで一番安全な場所さ」

熱をはかるように、ダナの額に手を当てながらフレディは返す。その手を払いのけられて、苦笑いの表情になった。

「彼女の名前はイレーヌ・カーマイン。そう言えばここがどれだけ安全な場所かわかるだろ」

フレディが口にしたのは、このあたりで活動している武器商人の名前だった。一番目が利くとされているのは、空を行く船に積むための武器。

イレーヌが女だてらにこの商売を始めたのは、同じく武器商人だっ

た夫が殺された後を継いでのことだという。  
復讐心を商魂に変えたのか、もともと商才が豊かだったのか。

夫が死んだ時にはまだ二十代に入ったばかりだったという彼女は、めきめきと頭角を現し、あつというまにマーシャルの武器商人にのぼりつめた。

三十代に入る頃には、夫を殺害した人物を見つけだし、身の毛もよだつような報復を行ったという噂もまことしやかにささやかれている。

それを聞けば、この屋敷の嚴重な警備も理解できた。  
武器商人を恨む者は多い。

「どういう知り合い？」

フレディが彼女と知り合いなのには驚いた。配下に抱える傭兵団が独自に行う取引を別として、マグフィレット王国自身は、カーマイン商会とは取引をしていないはずだ。どこで二人が知り合ったのか、ディオには見当もつかなかった。

「きっかけはどこぞの夜会で、あつちからの誘いだったな。相性がよかった、というやつだ」

今、飲み物を口にしていたとしたら、盛大に吹き出していたに違いない。念のため確認する。

「相性って……」

聞かれた相手は肩をすくめただけだった。想像通り、ということなのだろう。これ以上は聞くまい。  
タイミングよくイレーヌが戻ってくる。

従えていた白衣の男を通すと、二人には部屋の外に出るようにながした。何度も訪れているのか、フレディは勝手を知った様子が出てすぐの扉を開く。

そこは応接のための部屋なのか、あちこちに座り心地のよさそうな

椅子やソファがおかれていた。

入ったところでディオがきよるきよると部屋の中を見回していると、一度閉じられた扉がもう一度開かれた。

イレーヌと同じように黒と白を基調とした衣服のメイドがお茶の道具を載せたトレイを手に入ってくる。物音一つたてない滑らかな動作で、テーブルの上に茶道具を並べ、頭を一つ下げて一言も言わないまま出ていく。

続いて入ってきた別のメイドが軽食に茶菓子を並べて、こちらも言葉を発することなく退室した。

「お座りになって」

肩からずりおちたレースのショールを直しながら、イレーヌは二人に席を勧めた。優雅な仕草でティーポットを取り上げると、慎重な手つきで三つのカップに分けて注ぐ。いい香りが立ち上った。

イレーヌはカップの一つを手にとると、そこに角砂糖を四個放り込んだ。丁寧に掻き回してから、そのカップをディオに差し出す。

### 36・死を商う女(2)

「さあ、どうぞ」

「……でも」

いくら何でも砂糖四個は多すぎる。ためらうディオにイレーヌは重ねて言った。

「子どもは大人の言うことを聞くものですわ。今のあなたにはこれが必要なことから、お飲みなさいな」

口には出さなかったが、子どもではないとディオの目に浮かんだ抗議の色をイレーヌは見逃さず、ころころと笑ってつけたした。

「私の年齢を聞けば納得なさる？四十はとっくにこえていますのよ」さらりと自分の年齢にふれる彼女に驚かされた。今までディオの周囲にいた女性は、皆成人したら年のことには触れないようにしていたから。

「俺には入れてくれないのか」

砂糖の入っていないカップを渡されて、フレディが不満の声をもらした。

「ご自分でどうぞ」

自分の分には砂糖を一つだけ入れて、イレーヌはソーサーごとカップを手を取った。つられるようにディオもカップを手にした。受け取った以上、口をつけないのは失礼だとカップを口まで持っていく。用心深く一口すすった。大人の言うことは聞いておくものらしい。ほっと息をついて、改めてイレーヌを見ると、クッキーに手を伸ばしているところだった。

目元だけで微笑みかけられて、思わず目をそらす。頬に血がのぼるのがわかった。

不思議な女性だ。こうして過ごしていると、大量の武器を売り買い



している人間とは思えない。王宮の一室に座っていてもおかしくないほど、気品が備わっているようにも見える。

「迷惑かけたな」

「いつものことでしょうか？」

フレディを見る彼女の目は優しかった。

「診断の結果にもよるでしょうけれど、あの子は、数日は安静にしていた方がいいのではないかしら。先に坊やだけ送るように手配いたしましたでしょうか？」

「そうだな」

思慮深げにフレディはディオを見る。

「だめだよ」

ディオはカップを置いた。

「二人でつて約束したんだ。彼女を置いては行けない」

あの戦火の中、二人を空へと送り出してくれたビクトールに。通りすがりの二人に、黙って手を貸してくれたミーナ、グレン、ニースの三人に。足をひっぱることしかできていないけれど。それでも、確かに約束をしてきた。

その約束を先に破ったのは、ディオだけれど。

取り返しのつかない事態から、紙一重の差で逃れることができた今だからこそ、その約束を破るわけにはいかない。

「特別列車を仕立てるという手もあるのだけれど……」

イレーヌが二杯目のお茶を注いだ。形のいい指を顎に当てて考え込む。

「私も一緒に行くというのはどうかしら？」

「行ってどうする？」

「警護に私の兵を連れていけるでしょうか？今から人を捜したのでは時間がかかりすぎるし、どこの手の者が紛れ込むかわかりませんもの」

ディオは、目で二人を追いながら黙って聞いていた。

「今家に仕えている者は、五年以上雇っている者ばかりだから信用できませんし。私と貴方の関係をのぞけば、私とマグフィレット王国にはつながりはありませんし。彼をねらってる人間が五年も前から、家にもぐりこんでいる可能性もまずないでしょう?」

「それなら兵だけ貸してくれればいい」

「それはできませんわ。兵を貸してしまつたら、私を守ってくれるものがいなくなってしまうものです。いくらこの屋敷の警備が厳重とはいえ、最後に信用できるのは人間ですわ」

爪を綺麗に塗つた手を伸ばして、イレーヌは一口サイズのケーキを取る。節制という言葉とは無縁な生活を送っていてどうして体形を保つていられるのかわからない。彼女は唇に塗つた紅が剥げないように、慎重にケーキをかじつた。

「しかしだな、わざわざこの家を出てティレントまで行く必要があるのか?」

「何もないのに同行するほどお人好しではありませんわ。売り込みたい新種の大砲があるというだけのこと。今のところ、マグフィレットの正規の部隊は、うちの商品は使用してくれていませんもの。これは、私にとつてもいい機会でもあるということですよ」

ケーキを飲み込んで、イレーヌは手を胸の前で組み合わせると満足そうな表情を浮かべて、背もたれに寄りかかった。ディオの方に妖艶な流し目をくれて、どきりとする台詞をはく。

「お口添え、いただけるでしょう。殿下?」

とまどつたディオが口をもごもごさせていると、フレディはあきらめたようにため息をついた。

「こいつの正体そんなにばれれば?」

「そうでもないのではないかしら?ねらっている連中も、上役はと

もかく下つ端には、ただの学生で通しているみたいですし。一国の王子を殺害したとなれば大問題ですものね。ただの学生ならいくらでもいいわけはきくでしょうけれど」

「あなたの情報網はどうなっているんだ」

首をふるフレディの腕に手をかけて、イレーヌは婉然と微笑んでみせた。

「どの商売でもそうだけれど、特にこの商売は情報が命。どことどこが戦争になるのかわからなければ、効率的に武器を売り込むことなんてできませんもの」

「たまには自ら火種を起こしたりするんだろ？」

「ないとも言いきれませんわ」

イレーヌの姿は、まさしく死を扱うにふさわしい言いしれぬ迫力に満ちていた。

### 37・君の瞳と同じ色の(1)

話が途切れたのを契機としたわけでもないだろうが、手当を終えた医師が入ってきた。

「命に別状はありませんよ、奥様。数日は痛むでしょうが、心配するほどのことではありません」

「ありがとうございます。助かりましたわ。もう一人お願いしたいのですけれど？」

イレーヌの言葉が終わる前に、医師は診療鞆を開いていた。

フレディの腕を捲りあげ、治療を始める。

「こちらもたいしたことはありませんね」

「相手も本気じゃなかったしな。退路を確保したかっただけだろ」

ほんのかすり傷で、手当もいららないと言い張るフレディの腕に包帯を巻きながら医師はもらした。

「それにしても、あのお嬢さんは何者なのですか？今日一日は安静にしているようにと言いつ聞かせたのですが、聞かないのですよ。どこぞへ行かなければならないのだと、今汚れた衣服を着替えているようですよ」

あの精神力には感心させられますが、と医師は苦い顔だ。あらあらまあまあと、イレーヌは腰を浮かせかける。

「彼女……アーティカの人間だから」

その言葉を口にしたのは、ディオの正体を知られている今、ダナの正体についても隠さねばならない理由が感じられなかったからだ。

聞いて、フレディは顔色を変えた。包帯を巻き終えたばかりの医師をつき倒しかねない勢いで立ち上がり、ディオにせまる。

「アーティカって言ったよな、今。彼女年はいくつだ？」

「十……八……になっただかな？」

今何歳かということは聞いていないが、ヘクターの死は二年前。当時十六だと言っていたから、だいたいそのあたりのはずだ。

デイオの返答に、フレディは顎に手を当てて考えこむ。

「別に珍しい名前じゃないしな……」

と、つぶやくのが聞こえた。

イレーヌが医師を送り出すために、部屋を出ていく。それと入れ違になるようにダナが顔をのぞかせた。

頭には包帯を巻いて、頬には大きなガーゼが張られているのが痛々しい。

そんな彼女の様子を気遣うことなく、性急にフレディは、ダナにとってはつらいであろう名を口にした。

「ヘクター・ヴァンスを知っているか？」

ダナの顔から一気に血の気がひいた。目を閉じ、黙って首をたてにふる。

「二人で話せないか？」

そうフレディは言うと、デイオを残して部屋を出た。デイオが制止する暇もない。目の前で扉が閉じられる。

ほんの一瞬迷って、フレディは自分に割り当てられた部屋にダナを押し込んだ。

そこはダナの部屋と大差ない作りだった。客室は皆同じような作りになっているのを何度かこの屋敷に泊まったことのある彼は知っている。

「ハーリイとオリガの娘、ダナ・トレーズというのは君のことか」  
押し込められるなり、両肩をつかんでたずねられた。ダナは一つ、うなずく。

「全く俺ときたことが、何で気がつかなかったんだよ。ヘクターから何度も写真を見せられていたのにな」

乱暴にベッドに腰を落として、フレディはうめいた。ヘクターの名を聞いて、ダナの視線が床に落ちた。

「あの頃とは……あたしの顔、変わっているし……。何度か……整形しているから」

「そうか」

フレディは顔をあげた。

「つらかったな」

その声音は、知り合ってから一度も聞いたことがないほど優しいもので、別人のようだった。

「……消毒薬の臭いは今でも嫌い。病院にいた頃のことを思い出すから」

床に言葉を投げつけるように、彼女は言う。つらかったなんて、口にするのは甘えだ。

つらい、痛い、苦しい。

ヘクターは全てを感じることができなくなったというのに。そんなことを口にはできない。

「君にはつらい話になるかもしれない。それでも……聞くというのなら話す。彼から預かっている物があるんだ」

目を見開いたダナは、唇をかんだ。

病院にいる間も、退院してクーフに戻ってからも。

胸の奥底におしこめていた彼の名前。

ヘクターの父であるビクトールでさえも、彼の名前はダナの前では口にしようとしなかった。

唯一口にしたのは、脱出したあの時だったような気がする。

「……教えて」

口にするまで、ずいぶん長い時間がかかったように思えた。

押し込めようとしていた過去と対峙する瞬間。ダナは息を飲んで、

フレディの言葉を待つ。

「わかった」

フレディは上着のポケットに手をやった。取り出したのは、手のひらに収まるほどの小さなケース。

ダナの眉間にしわが寄った。

扉を背に、立ったままのダナの前に、フレディは膝をついた。まるで恋人に結婚を申し込む時のように。

「もっと早く気がつくべきだったんだ。あいつが石を選んで、俺が台の注文を手伝った。あいつ、こういうことには不器用だったから」  
うやうやしいほどの手つきでケースの蓋を開く。

「君の瞳と同じ色のエメラルド。次の任務が終わったら渡すつもりだから、受け取っておいてほしいと頼まれていたんだ」

中央に鮮やかなエメラルドがはめられた指輪を見て、ダナが顔をおおった。

あふれる涙をこらえるかのように、肩が二度三度と上下する。

「やっぱりつらかったか？」

顔を隠したまま、ダナは首を横にふった。それからゆっくりと手を伸ばして、ケースを取り上げる。

「もっと早く渡せばよかったんだけどな。ヘクターがあんなことになって、君のことを誰も教えてくれなかったんだ。ずいぶん探したんだけど、見つからなくて」

「あたし、つい最近まで入院していたから」

取り上げたケースの蓋をぱちりと音をたてて閉じると、ダナは掌に包み込むようにした。ぎゅっとケースを握りしめる。

### 38・君の瞳と同じ色(2)

照れくさそうに立ち上がりながら、フレディは笑った。

「……重かったよ、その指輪は。これで服の型くずれを心配しないですむ」

「ずっと持ち歩いてくれたの？」

「いつどこで関係者に出会うかわからないだろ？俺、アーティカにつながりないから、つながりある人間に会ったら聞こうと思ってさ」  
「……ありがとう」

死んだ人間との約束など、忘れられてもしかたのないことなのだ。それを二年の間忘れず、ずっと持ち歩いていてくれたことに。そして、偶然とはいえダナを見つけたしてくれたことに。心の底から感謝する。

「たいしたことじゃないさ。俺、あいつのことはけっこう好きだったから」

そう言うフレディの表情にディオと似たものを見つけだして、ダナはとまどった。

二人とも欠点はあれど、時として思いがけないほどの優しさを見せる。

血のつながりというのは、こんなところにも出てくるものなのだろうか。

「あなたとヘクターは、どんな関係だったの？」

「そうだな」

フレディは腕を組んで、天井を見上げた。

「俺とあいつは全然違うけど。気が合った、と言っただろうな。あいつが王都に来た時は、よく一緒に飲みに行ったりしたよ。あいつ、人の話はにこにこしながら聞いているくせに、自分の話はほとんど



しなくてさ」

「どんな話？」

たずねるダナの声から、フレディに対する不信感は消えていた。フレディが困った顔をする。

「……そうだな、ま、女がらみってやつだ」

「……」

「あいつの口から出てくるのは、君と……サラって人くらいだったぞ」

言い訳をしたつもりがなっていない。

もう一人出てきた名前を聞いて、くしゃりとダナの顔がゆがむ。

「すまん、サラって人には恋愛感情はなかったと思うぞ？」

誤解したフレディが慌ててなだめようとする。

「そうじゃなくて……あたしは大丈夫」

慌てて涙を拭って、自分に言い聞かせる。

思いがけないところで出てきたサラの名前に動揺しただけだ、と。

対峙したりディアスベイルの甲板。

迷うことなくこちらに向けられた銃口。

あの時のサラの悲痛な声が、ふいに耳によみがえった。

手の中のケースが、熱く感じられる。

まるで存在感を主張しているかのように。

「とにかく今日は休め。予定していたルートは使えないしな。明日出発できるかどうかもわからん」

フレディに元の部屋に戻されて、ダナはため息をついた。

ケースの蓋を開いてみる。中央に輝くエメラルド。

それほど大きな石ではないではない。若輩の身で、大金など持ち合わせていなかったヘクターのことだ。おそらく高価な品ではないの

だろう。

それでもゆらすたびに本物しか持ち合わせていない光を放つ。

「あたしの目、こんな色してた……かな」

ヘクターがいたあの頃は、こんな色をしていたのかもしれない。

クーフの平凡な日々の生活も。撃ち交わされる弾丸の間を駆け抜ける日々も。

ヘクターが一緒なら輝いて見えた。彼が全てだった。

あの頃は、きつとこんな色だったのだろう。

今となつては確かめるすべもないけれど。

鏡の前に立つて瞳をのぞき込んでみる。

不安と、疲れと、恐れと、痛みと。さまざまな感情が渦巻いているが、どれも悲観的なものばかり。とてもではないが、輝いているなどとは言える状態ではない。

仕方ない。

戻ってからずっと演じてきたのだから。

十六歳の頃のダナ自身を。

大切な人を失って、自分の顔を失って、それでもまだ飛びたいと望んでしまう。

願いを叶えるには、偽るしかなかった。

彼の名を、心の奥底に押し込めて。

全てをふっきたふりをして、飛ぶことだけを望んでいるようにふるまってきた。

本当に望んでいたのは、そんなことではないというのに。

エメラルドの光が、責めているような気がした。

いたたまれなくなつて、蓋を閉じる。

遠慮がちなノックがした。

「どうぞ」

入ってきたディオは顔色が悪かった。ダナの顔に痛々しそうな視線を走らせて、所在なげに入っすぐのところ立ちすくんでいる。

「ダナ……えっと、その……ごめん……」

「ディオ」

ダナはディオの詫びを断ち切った。ディオが謝る必要なんてない。当然のことをしたただけなのだから。

「あたしは大丈夫だから。だから一つ約束して」

これだけは言っておかなければならない。二度とこんなことがないように。

「何を？」

「今度同じことがあつたら、全力で逃げるって。あたしを置いて」

「……それはできないよ。だって」

「ディオ」

ダナの声が厳しくなる。

「あんたはいずれ王様になるんでしょう？ だったら、あたしを見捨てても、自分が助かることを考えなさい」

ディオの顔が凍りついた。それ以上、何も言わないままダナの部屋から出ていく。

半分扉を開けたまま。

見送ったダナの肩が落ちた。

そのまま扉にもたれかかるようにして、ずるずると床の上に座り込んだ。背中ががちやりと扉が閉じられる。

「あたし、間違ったこと言っていないよね……？」

胸に抱きしめたケースに向かって何度も何度も繰り返す。

間違ったことは言っていない。ディオには生きて戻ってもらわなければならぬのだ。

たとえダナを見殺しにしたとしても。

「間違つてないよね……？ヘクター……」  
つぶやいた名前は、誰の耳にも届くことなく消えた。

自分に与えられた部屋に入ったディオは、ベッドに身を投げ出した。  
先ほどの彼女の言葉が何度も耳をうつ。

『あたしを見捨てても』

『自分が助かることを考えなさい』

そんなことを言わせるなんてあまりにもふがない。  
償うことなんてできない。何度謝っても。

その原因は彼自身なのだから。

眠れない夜が過ぎていく。

彼女の温もりなしに悪夢に襲われるのなら。眠れないほうがずっと  
ましだった。

### 39・愛なんて知らない(1)

イレーヌの用意した列車は、カーマイン商会が自前で持っているものだった。

夜の間にはカーマイン商会の敷地から、最寄りの駅まで移動させられていたそれは、ディオの目から見ても贅沢なものだった。

まず先頭車両の後ろには乗務員たちの宿泊施設の車両と、道中のサービスに必要な品々を積み込んだ車両が二両ほどつながれている。続いて食堂車。

その後ろにはビリヤードやカードゲームを楽しむための娯楽車両が連結されている。

その次に一両につき二部屋ずつ、ベッドとシャワー完備の客室がある車両が続く。

最高尾は豪邸の応接室をそのまま移動したような全面ガラス張りのサロンカーだった。

自分にあてがわれた部屋に荷物を置いて、なんとなく全員がサロンカーに集合する。

イレーヌは、本棚の本を選んでいた。彼女が言うには、旅の間は頭を使わなくていいものしか読みたくない、という理由でロマンス小説しか置いていないらしいのだが。

夜の貴婦人、背徳に招かれて、太陽に恋して、恋はひそやかに、黒い瞳の盗賊、とタイトルだけで眺めてみてもお腹いっぱいになりそうだ。

頭を使わなくても読める本は他にいくらでもあるだろうとディオは思うのだが、イレーヌの趣味なので文句もいえない。

「禁断の恋、人目を忍ぶ情事って、素敵ですわ」

とうとうとりした顔をされたら、文句をいう気力もそがれてしまう。

ダナは大きな窓に面して置かれた椅子の上に丸くなっていて、デオの方など見向きもしなかった。話しかけたフレディにも、わずかに首をふってみせるだけだ。

「デオ、娯楽室行くぞ」

最初に根をあげたのはフレディだった。部屋の中の空気が重い。

ダナは椅子の上に丸まったままだし、イレーヌは目の前のテーブルに本と甘いものを積み上げてロマンスの世界へと旅立っている。この静寂を破るのは、悪魔に喧嘩を売ることのように思われた。

デオとフレディがサロンカーの扉を閉めたとたん、はじかれるようにイレーヌは立ち上がった。

椅子の上で膝を抱えているダナの肩に手をかける。

「ロマンス小説はお嫌いかしら？」

気分じゃない、と言おうとしてダナは言葉を飲み込んだ。

イレーヌの瞳が開いて中を眺めていたケースに落ちている。ヘクタールの残してくれたエメラルド。ふっとイレーヌの目が優しくなった。

「大事なもののでしょう？ ケースごと落としたら大変ですわ」

彼女は首の後ろに手をかける。

今日は真珠のネックレスを重ねて、ルビーのペンダントをしていた。その留め金を外し、ルビーはテーブルの上に投げ出して、鎖をダナの手に握らせる。

「この鎖に通して、首にかけておいたらどうかしら」

「でも」

「部屋に戻れば、似たようなものはいくらでもありますもの」

にこりとして言われれば、断ることなどできない。ケースから取り出したそれを鎖に通して、イレーヌが首の後ろで留め金をかけてく

れる。

「どなたからなのかしら？きつと大切な人からなのね？」

「……」

返す言葉が出なくて、ダナは口を閉じる。

「そんな顔ができるって幸せね」

意外なことを言われて、ダナの目が大きくなった。亡くした過去に向き合わなければならぬ今の自分が、幸せな顔をしているように思えないのに。

隣の椅子に腰をかけたイレーヌは、優美な動作で足を組んで、車窓の流れる景色に目を向ける。

「私、血のつながった家族を別として、人を愛するということを知りませんの」

「……でも、結婚していたのでしょうか？」

カーマイン商会の女主の伝説は、ダナだって知っている。

「政略結婚ですもの。ある程度成功をおさめた男性が次に欲しくなるのは、若くて美しい妻でしょう？できればそれなりの家柄の」

自分の美貌を否定することなく、イレーヌはさりと云つてのける。

「私はマグフィレット王国の下級貴族の出ですの。かろうじて王宮への出入りが許される程度の、ね」

昔を懐かしんでいるのか、イレーヌの目が遠くなった。

「有力者に見初められた姉が、悲惨な結末を迎えたのをそばで見えていましたから。最初から王宮での生活は諦めていましたし。私にとつても夫からの結婚の申し込みは、願っていたとおりのものでしたの。少なくとも富とそれによる権力は、手に入れることができますものね」

「お姉さんは？」

「子どもを一人残して、亡くなりました。最初から姉がつりあう相

手でないのはわかっていたのですけれど……それでもやりきれませんわね。相手の男は、子どもを養子に出してそれでおしまい」

吐き出される大きなため息。首から下げられた真珠が、音をたてた。「でも結婚生活はそれなりに幸せでしたのよ。若い妻を夫はそれはそれは大切にしてくれましたもの。愛してはいなかったけれど、尊敬はしていましたし」

「一つ聞いてもいい？」

ダナの好奇心が、投げかけてはいけなかもしれない問いを口にもぼらせる。

「旦那さんを殺した相手に復讐したって話は本当？」

「本当ですとも」

イレーヌは立ち上がりながら微笑んだ。

「噂の倍以上は苦しめたでしょうね。彼が死ぬまでに一週間かかりましたもの。……実際に、私も手をくだしましたのよ」  
どんな手段を使ったのかは口に出すことはなかった。

「私、執念深い性格ですの」

部屋の中を移動しながら、吐き出された言葉にダナはぞっとした。

執念深い性格と言うのなら。彼女の姉を死に追いやったという相手の男性は、どんな復讐をされたというのだろうか。

一度離れたイレーヌは、すぐに戻ってきた。両手にたくさん本を抱えて。

「昔話はおしまい。さ、好きな本をどうぞ」

断ることなどできず、ダナは一番上の一冊を手を取った。タイトルを見ることなく最初のページを開く。

開いてすぐに、それが王子と平民の娘の身分違いの恋を扱ったものであることに気づく。

ふとそれを自分ともう一人に重ね合わせて、ダナは苦笑いした。



彼にそんな感情なんて持っていない。考えなければいけないのは、無事に国に帰りつくことだけ。

……本当に？

何かにそう囁かれた気もするが、ダナはその感情を追い払い、本に没頭しようとする。

ロマンス小説なんて面白いはずがない。

そう思っていたはずなのに、気がついたら王子と平民の娘の身分違いの恋にすっかりのめりこんでいた。

## 40・愛なんて知らない(2)

「イレーヌのロマンス好きにもまいったもんだよな」

ビリヤードの球を並べながら、フレディがぼやいた。

「何度言っても、この列車にそれ以外の本を積む気にならないらしいんだ」

「そんなに何度も乗っているんだ？」

「そうだな、これで三度目か」

二人の関係は、ディオが思っていたのよりも深いのかもしれない。

ビリヤードは得意ではないし、球を突くような気分でもない。

ディオは壁にもたれて、フレディが球を突くのを見ていた。

小気味いい音がして、球がポケットに吸い込まれるように落ちていく。

落ちた球を拾い集めて、もう一度並べ直していたフレディが顔を上げた。

「ダナのこと好きだろ」

「な……そんなことないよ」

否定しながらも、頬に血が上るのがわかった。好きだとか嫌いだとか、考えたこともない。

助けてもらったことには感謝している。そばにいてくれたことにも、でもそれがそのまま好意につながるのかと言えば、違う気がする。彼女との旅は楽しくて、これがこんな目的でなかったらと思ったこともあるほどだけれど。

「深入りはやめとけ。お前は器用に遊べるやつじゃないし、あつちもそれをよしとはしないだろ」

「だから違うんだってば」

「そうかあ？」

からかうような声音とともに響く球を突く音。

「それならいいけどな。深入りするとお互い不幸だぞ。お前は国を継がなきゃならんし、そうなればどっかのお姫さんと結婚することになる」

「……わかってるよ」

王の結婚に愛情なんて必要ない。それはディオにだってわかってい

る。  
彼の両親がそのいい例だ。五十歳にもなって、自分の半分の年齢の花嫁を迎えた父。自分の父親と同じ年代の男の元へと嫁いだ母。

夫婦仲がうまくいって、それなりにあたたかな環境で育てられたのは運が良かったのだろう。

「とりあえず、だ」

再び球を集めながら、フレディは言った。

「お前は無事に戻ることだけ考える。いざとなったら彼女を捨て駒にしても、だ。彼女の方はそれを理解しているぞ？」

「……」

台の上に球を並べて、フレディはにやりとした。

「そういうわけで、彼女は俺がもらう」

「なんだよ、それ。彼女の意志は？」

「そんなもの関係ないさ。彼女が俺の魅力に気がつければあつという間だろ？」

自信满满的なフレディの言葉に、懽然としてディオは壁に背を預ける。球を突く音と、フレディの笑い声だけが娯楽室に響きわたっていた。

サラは、艦長室で豊かな髪を丁寧に編んでいた。情事の後はどうしても、編んだ髪が崩れてしまう。事前にどれほどきつく編みこんでいたとしても、だ。

「なんで女って奴は髪を編むのにそんなに時間がかかるんだろうな」

ベッドからのんきな男の音がする。

「誰かさんがぐしゃぐしゃにしなかつたら、編み直す必要もないのよ」

編み終えた髪を背中へと払いのけて、サラは勢いよく立ち上がる。

「さつさと自分の船へお戻りなさいな、部下たちが心配しているわよ」

「してねえよ。戻りは明日の朝と言ってきた」

サラの口から、大きなため息がもれた。

「それじゃ好きにしていたらいいわ。私は見回りに行ってくるから、先に寝てもかまわないわよ」

ブーツに足をつつこんで、サラは部屋の外に出た。

二年前、飛行島に激突して沈んだ船と同じ名。

ビクトールは、あれから最初に建造した船に同じ名前を付けてサラに与えた。

あの時はこんなことになるなど思ってもみなかった。

あのままアーティカでビクトールの副官として一生を終えるつもりだったというのに。

後ろから、追いかけてくる足音がする。

「……ライアン。寝ていれば、と言っただけけれど？」

「俺はお前の部下じゃないしな。言われたことに従う義理はないさ」  
ライアンと呼ばれた男は、あくびをするとサラと並んで歩き始めた。

黒い髪といい、堂々たる体格といい、アーティカの団長父子を思い起こさせる。

アリビディル王国の軍人であるライアンがサラに近づいてきたのは、一年ほど前のことだった。ダナの入院する病院を訪れた帰り。帰路を急ぐサラを呼び止めたのがライアンだった。

一瞬足を止めてしまったほど、似ていた。

死んだヘクターに。

ヘクターを愛していると自覚したのは、いつのことだったのか思い出すこともできない。

姉のように面倒をみていたはずが、いつの間にか異性として意識し始めていた。

彼が一人前になったら、隣に並ぶことができるのではないかと言い寄る男たちをはねつけ続けて年を重ねて。

ようやく並んでもおかしくないと思えるようになった頃には、彼の目は全く違う方に向いていた。

赤い髪のパイロット。

同じ五歳差でも、上か下かでもこうも変わるものか。

周囲の目を気にすることなく、彼の胸に飛び込めた彼女が羨ましかった。

自分の気持ちを押し殺すことには慣れている。

黙って二人を祝福して、相談されれば真摯な答えを返して。

それで満足だと、思いこもつとしていた。

ヘクターがいなくなった後、ダナまで失いたくないと思ったのも事実だった。

血液も皮膚も看護の手も。

自分にできるものは、何でも提供した。

空っぽの心を抱えたまま。

それでも。

どこかで憎いと思っていたのだろうか？

だからマグフレットの王位継承者が、危険な研究に手を染めるとライアンに告げられた時、笑って流すことができなかった。

一年かけてビクトールを観察し。  
同じ期間を使って自分の部下をふるいにかけて、信頼する部下にだけアーティカを離れることを打ち明けた。  
ビクトールを裏切ると最終的に決断したサラに、ライアンは身体を重ねることを要求した。

身体でつながらない女など信用できない、と。  
要求されるままに抱かれた。  
相手が誰だっつかまわなかった。  
ヘクターでないのなら、誰だっけ同じだ。

心を凍りつかせたサラには頓着せず、ライアンは彼女のことを気に入ったようでリアスベイルに入り浸っている。

「そっぴゃ、坊主と嬢ちゃんはカーマイン商会に保護されたいな」

頭の上からライアンの声がふる。

「あらそう。それなら、近々決着をつけることになるのかしら？」  
冷静さを装って、肩をすくめてみせる。

最初から王子が道中で死亡することなど期待などしていなかった。  
ダナが一緒なら、どんな手を使ってもディオだけは無事に戻れるように手配するはずだ。

そういう意味では今でも信頼している、と言える。

ディオが無事に王都に着いたなら、マグフレット王国は、史上最大の力を手に入れることになる。

空の支配権をその手におさめてしまっほどの。

その前になんとか止めなければ。

空を誰かに独占させることなんてできない。

そのために自分はここにいる。

このまま突き進むしかない。

サラは並ぶライアンにちらりと視線を投げて、足を速めた。

#### 4 1・縮められない距離(1)

列車の旅といえど、今までに比べたら気楽なものだ。食堂車まで数車両移動して、座っていれば食事はすべて運ばれてくる。

自分では何もやらないと豪語するだけあって、イレーヌは何人もの使用人を伴っていた。

必要最低限の停車ですむように、運転手は三人。燃料の補給時以外は、常に走り続けることになる。

身の回りの世話をするためのメイドが五人に、車両内の掃除などの作業に当たる人間が二人。

さらにイレーヌの秘書に調理人。この全員が兼護衛なのだという。ひよつとするとディオの父親が公務で旅に出る時よりもはるかに大人数かもしれない。カーマイン商会の財力を見せつけられたような気がする。

食堂車に並べられているレースのクロスがかけられたテーブルも椅子も、庶民にはとうてい手の届かない高級な品だ。

ディオにとっては居心地の悪いこの状態もフレディはむしろ楽しんでいる様子で、給仕にあたったメイドを自分の客室にひっぱり込もうと熱心に声をかけている。

「うちのメイドに悪さをしないでいただけます?」

やんわりとイレーヌにたしなめられて、フレディはようやく食事に戻る。

ダナはというと、食欲がないのか料理の大半は途中で下げさせていたが、食事の途中で席を立つことはなかった。

食後のデザートにコーヒーまですませて、ようやく贅をつくした、という言葉そのものの夕食が終了になる。



さて、自分に与えられた部屋に戻るか。娯楽室で過ごすか、サロンカーに行くか。

立ち上がったダナがフレディに捕まっているのを見て、自分の部屋に引き取ることにする。

好きにすればいい。昼間フレディに言われたことを思い出して、ちらりと反発心が芽生えたのはいなめない。

この列車は嚴重に警備されているという話だから、別に彼女と二十四時間くっついていなくてもいい。

攻撃されたとしても、ディオの身に危険が及ぶまでには何重もの警備をくぐりぬけなければならぬ。

必要ならば、それまでに彼女は絶対駆けつけてくるはずだ。

守られていることをようやく当然と受け入れる気持ちになって、ディオは自室のドアを開けた。

窓の側にある椅子に腰を落とす。列車の窓枠に顎を乗せて、外を眺めてみた。日はとくに沈んでいて、柔らかな色合いの光が、時折車窓を通り抜けていくだけだ。その向こう側では、家族そろっての夕食か夕食後の団らんを楽しんでいる頃だ。

補給以外は停車なしで走り続けるから、当初の予定よりいくらかは短縮できるはずだ。

おそらく三日か四日でテイレントに到着するのではないだろうか。無事に帰り着いた時。その時には、重大な決断をせまられることになる。ディオは窓枠においた腕に顔を埋めた。

探究心を悪いことだなんて、考えたこともなかった。

技術が進歩すれば、それだけ皆の生活が向上すると思っていたのに。悔やんでみても始まらないと頭ではわかっている、これから先のことをあれこれと考え込んでしまう。

フレディをふりきって与えられた部屋へ入ったダナは、扉を後ろ手にしめたまま窓の外を流れていく景色に見入っていた。

真つ暗な中、流れていく家々の明かりを見つめながら、首から下げたエメラルドが重さを増したように感じられる。

自分だけ生き残ってしまった罪。爪が食い込むほど手を握り締め、みても、血が滲むほど唇を噛み締めてみても、胸の痛みは消えてくれようとしない。このまま一人でこの部屋で過ごすのは耐えられそうもない。

彼女は一度閉じた扉をもう一度開く。通路を通り抜けて、ディオの部屋の前に立った。

数回、ノックするためあげた手をおろす。迷って、迷って、それから静かにドアを叩いた。

「開いてるよ」

てっきりメイドだと思って、ディオはふりむきもせず入室を許した。ドアが開かれて、閉じる音がしたのに、それ以外は何も聞こえてこない。

半分だけ身をよじってみると、ブーツを脱ぎ捨てたダナがベッドの上で膝を抱えていた。

「ダナ？」

慌てて椅子から滑り降りると、

「ここにいてもいい？」

とだけ返ってきた。

「一人でいたくなくて」

と、脆さを抱えた笑顔で言われてしまえばディオに反対する理由はない。

けれど。

「フレディのところに行かなかつたんだ？」

隣に腰かけながら、出るのは皮肉めいた台詞。こんなことを言おうとしていたはずではないのに。

「フレディ……ね。ヘクターの知り合いだったって言うし、悪い人ではないと思うのだけど」

昨夜二人で話していたのは、そのことだったのかとディオは初めて知る。二人とも昨夜の会話の内容は、ディオには教えようとしなかったから。

ダナの視線が落ちる。

「……だからつらいのよ。思い出さずにはいられないもの」

胸元にやった手が、何かをぎゅっと握り締めるのをディオは見た。

そこにある大切な物の存在を確かめるかのように。

「それにね」

何とも表せない表情になってダナはつけたした。

「そばにいると身の危険を感じるというか、落ち着かないというか」「身の危険、か」

思わず繰り返して、ディオの表情も微妙な物になる。

まめで口が上手く女性扱いには慣れている従兄。今回はそれが裏目に出ているようだ。ダナの警戒心は限界まで高まっているようで、フレディの望む方向には進みそうもない。もう少し時間をかけて、ダナが彼に慣れてくればまた変わってくるのかもしれないが。

確かにディオとなら、安心できるだろう。今までだって何かあったわけではないのだから。

改めて隣のダナを見る。頭に巻かれた包帯。頬を覆うガーゼ。まだ首に残る指の跡。

彼があの場合から逃げ出さなかったなら、負わないですんだかもしれない傷。

申し訳なさがディオの胸をしめつける。

「ダナ」

名前を呼んで、思わず抱きしめた。びっくりしたように息を飲んで、腕の中で彼女が背中を硬直させたのが伝わってくる。慌てて離して、両手を自分の背中の後ろに隠した。

「ごめん……本当に、ごめん」

「何に對して謝っているの？」

正面から瞳をのぞきこまれて、ディオは言葉を飲み込んだ。迷った末に、背中に隠した手を伸ばす。

「……」

額を横切る包帯に触れる。

「……」

頬のガーゼをそっと押さえて。

「……」

首に残る跡をなぞる。

「……本当にごめん」

「……」

そっと身をひいて、かすれた声でダナが言う。

「もつとひどい怪我だったことあるんだから……そうでしょ？」  
行き場を失った手が宙をさまよう。ダナはその手をつかんで、指を絡めた。

「あたしは、大丈夫だから……でも」

ディオの指を握り締めたまま、ダナはたずねた。

「今夜はここにいてもいい？」

「いいよ。でも」

笑いながらディオはつけたす。

「今夜は、じゃなくて今夜も、だよな？」

今まで救われていたのは彼の方だけれど。できることなら、今まで救ってもらった分を返したいと痛切に彼は願う。王都に戻ったら、

切れてしまう絆だから。

## 42・縮められない距離(2)

二つ枕を並べたベッドは、二人並んで寝てもまだ余裕があった。

「イレー又さんには悪いと思うんだけど」

天井を見上げながらダナが言った。

「警沢過ぎよね、この環境。フレディの部屋に泊めてもらった時もそうだったけど。このまま警沢に慣れちゃったら、あたしアーティカに戻ってやっていけるかどうかかなり不安だわ」

「そう?」

「そうよ。フォルーシャ号の船室見たでしょ。この部屋よりだいぶ狭いじゃない。ベッドだってもっと堅いのよ?床の上でごろ寝したり、野宿することだってあるし」

ずいぶん懐かしい名前を聞いたような気がする。あれからせいぜい一週間というところだ。

確かにあの船の部屋は狭かった。快適な居住空間を提供するための船ではないから、当然ではあるのだけれど。

ダナの思考は、過去へと遡っていく。それだけはやめようとしていたはずなのに。

「病院もね、ものすごく警沢な部屋だった。知らない人が見たら、本当に病室かって疑っちゃうくらい」

ころん、とディオの方に寝返りをうってダナは枕に顔を埋めた。

「ビクトール様が一番いい部屋を用意してくれたって聞いたけど。身体が動かない間は、ずっと一人で天井見上げていて、会う人と言えば、サラ様が看護人くらい。泣いているところを誰にも見られなかったのはよかったけれど。警沢な部屋は嫌い。病室を思い出すから」

何と返事したらいいのかディオにはわからない。仕方がないから、黙って彼女の話の話を聞いている。

「それに食事もものすごく贅沢よね。あんなにこつてりソースのなかったものばかり食べて、よくあの体型保ってられるわよね、イレーヌさん」

「おいしくなかった？」

「おいしいとは思ったけど、全部あんなに味を濃くしなくたっていいじゃない。お腹すいているのに胸につかえて食べられなかった」枕に顔を埋めたまま、ダナは足をばたばたさせる。

「じゃあ何食べたかった？」

「パンとチーズと林檎でもあれば十分。今夜、お腹すきすぎたら、あれ食べるしかないかしら」

「あれ？」

「携帯食よ。まだ鞆の中に入ってる」

あれか、とデイオは苦笑いした。一度だけ口にしたが、確かにひどい味だった。

あの時は水で流し込んで、ダナに非難の目で見られたっけ。それから慌ててダナの分の水を汲みに行ったのだった。

もう一度寝返りをうって、ダナは天井を見上げる。

「なんだかね、すごく自分が薄情な気がするの。昨夜はヘクターからの預かり物を、フレデイが渡してくれて。一晩わんわん泣いたっていうのに、今日はわりとけろっとしてるんだもの。食事が喉を通らないなんてこともなかったし」

「薄情なんかじゃないよ」

デイオの口調は揺らぐことがなかった。海の上にいた間、同じ疑問を彼自身も何度も繰り返していたから。

「僕だって、研究所の皆のことがあったって、しっかりご飯は食べているよ。ものすごくショックを受けたはずんだけどな」

まだ、現実のこととして考えられていないのかもしれないともデイオは考えている。

今の状況が、あまりにも日常からかけ離れていて。無事に帰り着いて、何もかもがすんだその時に、改めて衝撃を覚えるのではないかと。だからといって、王都に戻らないというわけにもいかないのは十分承知しているが。

どちらからともなく伸ばした手が、相手の手を探り当ててそっとつなされる。

そのまま二人は黙りこんだ。  
つないだ手だけが、互いの体温を伝えている。

「あの子たちだったら、何をするといいのかしら。せっかく一つのベッドにいるというのに」

警沢な車両の中でも一番贅を尽くした部屋の中、イレーヌが非難がましい声をあげて耳から受信機をはずした。

「『そういうこと』を思いつかないほど、子どもなんだろうさ二人とも」

当然のような顔をしてこの現場にいあわせたフレディは、口元だけで笑みを作りながら酒瓶を取り上げた。

立場を考えてのことか。単に好みではないか。それとも意識していないところで、互いを大切に思いすぎているか。理由なんていくらでも考えつく。

「若いから期待していたのに残念ですこと」

受信機を置いてフレディの側に近づいてきたイレーヌの腕が、フレディの首に絡みつく。

真っ赤に塗られた爪に、何重にも巻かれた真珠のブレスレット。いつだって身だしなみは忘れない。後は寝るだけだというのに、顔に施された化粧を落とす気配もない。

「まったく……人の情事を盗み聞くその癖どうにかならんか？」

カーマイン商会の列車には、すべての部屋に盗聴機がしかけられて



いる。イレーヌの部屋ではそのすべてを聞くことができるようになっていた。

苦笑混じりのフレディに、しれっとしてイレーヌは微笑んでみせる。お互いの息が混ざるほどの距離から。

するりと腕をほどいて、彼女はグラスを取り上げた。

「大切な話は情事の後と相場が決まっていますもの。それに」  
目元に掲げたグラスの向こう側から、フレディを流し見てイレーヌは笑う。

「男の人なんて信用できない。情事は物語の世界で楽しむか、人様のを聞いてのぞいて楽しむか。そうでしょうか？」

「信用していない男は俺以外、だろ？」

同じようにグラスを目元に掲げて、彼も返した。

「あなたは唯一の例外ですわね。あなただけは信用しているわ。心の底から」

真剣な口調のイレーヌに、鼻で笑っておいてフレディは立ち上がる。「俺が相手をできないのは残念だよ」

立ったまま、グラスの中身を空にした。一気に空けたグラスをテーブルに戻して、フレディはイレーヌを見る。

「メリツサって言ったか？メイド一人借りるぞ」

「私のメイドを寝室に引つ張りこまないでくださいと、お願いしたはずですけれど？」

正面から視線を合わせた彼女は、唇をゆがめる。

「いくら俺でも、それ以外のことを考えることもあるって」  
フレディの耳打ちした言葉に、イレーヌは承諾の意を伝える。

「必要にならなければいいんだ。念のためってやつだよ」  
肩をすくめて、フレディは部屋を出ていく。

静かに閉められた扉に、イレーヌはもう一度グラスを掲げてみせた。

綺麗に紅を施された唇が、緩やかに両端を持ち上げる。

「旅の無事を祈って」

閉まった扉の向こう側から、返ってくる言葉などなかった。

### 43・襲撃(1)

スピードを落とすことなく走り続ける列車は、人家の少ない地域へと入っていく。

翌日もイレーヌは一日サロンカーで過ごした。汽車で出かける機会がある時には、常に新作の本を積ませるようにしている。出発が決まったのはとくに本屋は閉まっている時間だったが、そんなことは彼女には関係ない。本の代金に追加して莫大な時間外手を支払っている。よって、本屋としても彼女の注文に答えるのはいい収入源ということになる。マーシャルにいる時には商売の方が忙しいので、この類の読書に励むのは列車の旅の間がほとんどだ。

ダナはおとなしくイレーヌの隣に座って一緒に本を眺めていたのだが、こちらは数冊で飽きていた。数冊も読めば、似たような展開なのに気づいてしまう。確実なハッピーエンド。時々娯楽室に移動しては、フレディの玉突きにつき合って時間をつぶす。

ディオは、という。サロンカーで膝を抱えていたり、自分の部屋へこもってみたりと何をしたらいいのかわからないまま列車の中をうろつろとしていた。

「襲われるとすれば、今夜が一番危ないだろうな」

ビリヤードでダナにこてんぱんにされたフレディは、通りがかったメリッサにお茶を運ばせて、サロンカーに現れた。

「そうでしょうね。今なら周囲の人家に及ぶ被害が少なくすみませぬもの。人家がなければ、目撃されることもありませんものね」

フレディが運ばせたお茶を当然といった顔で受け取って、イレーヌは口の端だけで笑う。今日も相変わらず黒のロングドレスに、ダイヤモンドを煌めかせている。高く積み上げた髪のあちこちにもダイヤモンドが飾られていた。

「いざ戦闘となったらその格好でどうにかなるのか？」

興味深げにフレディは、彼女の顔を覗き込む。

「なりますとも」

ほんの少しだけ、イレーヌはドレスの裾を持ち上げて見せた。足首を覆っているのは、ドレスには不釣り合いなごついブーツ。その先に黒のパンツが続いている。

「このスカート、取り外しできますの」

「なら、最初から外しておけばいいじゃないか」

「これは美意識の問題ですわ」

「これだから女ってやつは」

嘆息してフレディは、サロンカーの中をぐるりと見回した。窓の外を流れていく景色は、先ほどから何も変わっていないように見える。実際にはかなりのスピードで移動しているのだが。

今この車両にいるのは、イレーヌとフレディの二人きりだ。

「あの子たちはどうしていますの？」

カップに砂糖を放り込みながら、イレーヌは口を開く。

「あつちでダナがディオに玉の突き方教えているよ」

無造作にしめたのは、前方の娯楽室の方。

「気になるのでしょうか？」

全て見通しているような笑みをうかべて、イレーヌはフレディを招く。

「ならないわけないだろ」

イレーヌと向かい合うように腰を下ろして、フレディはポットを手にとった。やや濃い目の紅茶をカップに注いで、たっぶりのミルクを追加する。

「さんざん話に聞かされていた娘だぞ？気にならない方がどうかしてるだろ」

「実物に会ってみてどうでしたの？」

「そうだな……」

手にしたカップに、視線が落ちる。列車の振動に合わせて、表面がゆらゆらとゆれていた。

「いい子だと思ったよ。あいつが好きになった理由がわかるような気がした。だけど」

言葉を選びながら慎重にカップに口をつける。

「デイオを護ろうと必死になっているのが、痛々しい気もしたな。

最初なんて俺に警戒心むき出しで。護衛なんて女の子一人に任せるのは荷が重いだろ」

最後の言葉は、ため息と同時に吐き出された。

「『守つてやりたい』と思ったのは初めてかもしれないな」

「珍しい言葉を聞きましたわ」

年下の愛人を眺めるイレーヌの顔に、嫉妬の色はまったくない。

「俺も柄じゃないと思う」

一瞬だけ真摯な表情になったフレディは、すぐにいつもの顔を取り戻した。

「しよせんは片想いつてやつだ。ヘクターの存在がでかすぎるしな。俺は気楽な恋の相手を探すとするさ」

「大人も大変ですわね」

同情心などかけらも見えない口調でイレーヌは言つと、お茶のお代わりを頼むべくベルを鳴らした。

なぜビリヤードにつき合うことになったのだろう。

「もっとちゃんと球見てって言ってるでしょ！」

「見てるよ！」

すこん、となさけない音をたてて球が転がる。

「うーわー、ホントにちゃんと見てる？」

「見てる見てる！」

あきれた声をあげたダナは、球を拾い集めるときちゃんと並べた。かまえて、うつ。ディオの時とは比べものにならない音がして、台の上の球がはじける。

「君にはかなわないよ」

肩をすくめて、ディオは壁にもたれた。体を動かすのは苦手だ。球を並べて、うつて、拾つてを繰り返しているダナをぼんやりと眺める。やがてそれにも飽きたダナがやってきて隣に並んだ。

「退屈ね」

「……そうだね」

お互い口を開きかけては閉じる。何か話さなくては、という義務感にも似た何か二人の間を行ったり来たりしている。

「テイレントまで、あとどのくらい？」

「二日か、三日かな」

「ビクトール様……皆、無事かしら……王都で会おうとは言ったけれど」

ダナの顔を掠める焦りの色。イレエヌの情報網を使っても、アーティカの消息は入ってこなかった。

「無事だよ、きっと。アーティカの強さは君が一番知っているだろう？」

「そうだけど」

ディオの言葉は、気休めにもならない。ダナは黙り込んだ。

確かにアーティカの兵力は強大だ。でも、戦場ではそれだけではないうことを知っている。二年前にだって大敗しているのだから。壁を伝ってダナの手を探り当てたディオの手が、力づけるようにぎゅつと握りしめる。

いつからだろう。ぎゅつと握り返しながらダナは思った。最初は頼りないと思っていたのに。気がついたらこんな時には、どちらからともなく手を伸ばしている。

「何だよ、何だよ。娯楽室にいるのに、なぜ壁にくっついてるんだ？」

イレーヌとのお茶会を終えて戻ってきたフレディは、二人を見て、首をふった。慌てて二人はつないでいた手をほどく。それに気がつかないふりをして、フレディはディオに声をかけた。

「ディオ、これ持っておけ」

小型の拳銃と弾、ナイフが渡される。

「拳銃の使い方は知ってるだろ？」

「こくりとディオはうなづく。一応使い方は習ってはいるのだが、的にあたったためしはない。自分が持ったところで、何の役にもたたない気はするが、フレディが持っておけと言うなら持っておいた方がいいのだろう。」

「ディオにも必要？」

「ま、念のためってやつだよ。今はまだ明るいからいいが、このあたりは絶好の襲撃場所だからな。自分の身くらい自分で守れってことだ」

ダナが腰に手をやる。船にいた間は身につけていなかった、小さな鞆。中身を確認するようにそつとなでる。

フレディがたずねた。

「そこには何が入っているんだ？」

「拳銃と、弾と……ま、あとはちよつとしたものよね」

「接近戦には？」

「ナイフ持ってるから」

身をかがめ、ブーツの中に隠してあるナイフを引っ張り出して見せる。よし、とフレディはうなずいた。

「俺たち三人は、自動車に乗り換えるぞ。最低限の荷物だけ持って降りられるように準備しておけ」

「最低限ってどのくらい？」

ディオの問いには、身につけておける物だけ、という回答が返って

くる。彼にとつての最低限と言えば、旅券に財布。胸ポケットに納めたままの資料くらいのものだ。全て今身につけているので、改めてまとめる必要もない。

「あやし荷物まとめてくる」

何か持っていきたい物があるのか、ダナは娯楽室を急ぎ足で出ていった。



#### 44・襲撃(2)

昨日とは全く違う重苦しい雰囲気の夕食が終わる。

フレデイに言われて、ディオはコートだけはおつて、そのままサロンカーに向かった。

サロンカーではイレーヌが待ちかまえていた。黒いドレス姿のイレーヌだったが、メイド二人を従えて厳しい顔をしている。

「そろそろですわよ？」

かけられた声にフレデイは頷く。イレーヌは、サロンカーとその前の車両の連結部分の扉を開いた。

飛び込んできた風が髪を乱す。今夜は月もごく細い。民家もないあたりだから、外は真つ暗といつてもいい。

スカートの裾をはためかせながら、イレーヌはフレデイを見つめた。

「列車、止めます？」

「いや、少し遅くしてくれればいい」

いけるな、というフレデイの言葉にダナは肩をすくめ、ディオは目を丸くした。飛び降りるということだろうか。

イレーヌが通話装置越しに、速度を落とすよう命令する。列車の速度が遅くなった。

「行け！」

「無理だつてば！」

フレデイの声に背中を押されても、飛び降りることなんてできない。手すりにつかまったまま、おろおろしていると、手すりから手をひきはがされた。

次の瞬間、抱え込まれてディオは宙にいた。と思うと激しく地面にたたきつけられる。そのままごろごろと地面の上を転がって、とまった時にはディオが上だった。ダナの胸に顔をうめる形になる。

「早くおりなさいよ！」

下からわめかれて、デイオは頭をふりながらダナから離れた。ぐらぐらする。転がった時にどこかにぶつけたのだろうか。

「やればできるじゃない」

回りに人家すらない場所。ダナの顔もよく見ることができない。イレーヌの汽車がスピードをあげながら遠ざかっていくのは、音でわかった。

「俺も年だなあ」

ぼやきながらフレディが這ってきた。

「これからどうするの？」

膝についてフレディを見るダナの手は、腰の銃にいつている。攻撃されたらすぐに対応できるように。

「迎えが来ている」

フレディが周囲を見渡した時だった。激しい爆発音に、デイオは飛び上がる。

「どういうことよ？」

ダナが指した先では、イレーヌの列車が炎をあげていた。

「情報が入ったんだよ。アリビデイルの手の者が、待ちかまえているとな」

「イレーヌさんは？」

「お前はよけいなことを考えるな。行くぞ」

デイオにぴしゃりと言っておいて、暗闇の中で土を払う。そしてフレディは立ち上がった。

「行くつてどこへ？」

デイオの言葉が終わる前に、静かなモーター音が近づいてきた。ライトを消したままの車から、場違いにのんきな声がする。

「お待たせ！」

運転席にいたのはルッツだった。

「ルッツ！」

ダナの声が跳ね上がった。

「デイト君とダナは後ろね。そっちのお兄さんは助手席へどうぞ」  
言われるがままにフレディが助手席に、残る二人は後部座席に乗り込む。

「メリッサからの通信届いたか？」

「うん、彼女優秀だね。美人？」

「見方によつては、だな」

「んじゃ王都に着いたら紹介よろしく」

運転席と助手席の二人はいたつて気があつたらしく、こんな状況下でも交わされる会話は緊張感ゼロだ。

「そんなことより！」

運転席と助手席の間から、ダナは顔をつき出した。屋根のない車なので、風がもろにふきつける。

「ルッツがここにいるってことは、ビクトール様は？」

「別部隊。もう少しすれば会えるよ。それにしても、フレドリック様だっけ？無茶言うよね。5キロごとに車待機させるだなんてさ」

ライトを消したままでも暗闇の中で目が見えているかのようになり、ルッツの運転には危なげなところがまったくない。

「役に立つたろうが。イレーヌの偵察部隊だけではなく、アーティカの偵察機も使えて運が良かったがな」

それだけ言つてフレディは、口をつぐんだ。

昨晚、メイドという建前のメリッサに通信機を使わせて、アーティカとの連絡を試みたのだ。

飛行島クーフが攻められたという噂は聞いていた。だからビクトールへの連絡ができると確信していたわけではない。

彼が使った通信コードは二年前、私的に使用してかまわないコードだからとヘクターに教わっていたものだった。

そのコードが今でも有効な保証はなかった。クーフが攻められた緊

急時に、私的コードを受け付けてもらえるとも思えなかった。

それでも、イレーヌの偵察部隊だけでは心許ない。最初から安全な旅を期待していたわけではないが、何かあると勘のようなものが働いた。当初の予定になかったアーティカへの通信を試みたのは、この勘のためだ。ビクトールへ援護の依頼ができるならばと、わずかな望みにかけた。

イレーヌに雇われる前は某国で諜報部員だったというメリッサの腕は、衰えていなかった。一晩かけて旧コードから新しいコードを割り出し、アーティカへ連絡を取ることに成功した。その後、通信室でメリッサを引き寄せたのはフレディにとってはごく自然な流れだった。イレーヌにはばれたら問題になるだろうが。

ルッツが舌打ちする。

「どじつたみたいだ。後ろから車来てる」

ルッツの耳は、ディオにはまったく聞こえていなかった背後の物音をとらえていた。

「ダナ。座席の下」

「了解！」

ダナが身をかがめる。座席の下に武器が隠されているのは知っている。

「ディオ君は頭さげておいてね！。頭に弾当たったら困るでしょ」

「俺はどうする？」

「俺が死なないように祈っててくださいな。あ、俺に何かあったら、車の運転よろしく」

よろしく、と同時にルッツはハンドルを切った。タイヤがききつと音をたてる。状況についていけなくなっていたディオは、乱暴にダナに引き倒された。

「何するんだよ！……わ！」

座席におしつけられ、ダナの膝の下敷きにされる。

「俺の個人的意見なんだけど。足固定するのにそれはどうかと思う」

よ、ダナ？」

運転席から後方を流し見て、ルッツが苦笑する。

「ちっさいことは気にしないで！」

「小さくないと思うけど！」

下敷きにされているディオの言葉には、誰も答えない。ダナは、後生大事に持ち歩いてきたゴーグルを腰から取り出して装着した。目に風が入らない方がいい。イレーヌの汽車から降りる時も、これだけはと部屋に取りに戻ったのだ。

手持ちの小型大砲の後部から弾を装填する彼女の口元を、交戦的な笑みがかすめた。

やるかやられるか、だ。それならやってやろうじゃないの。

頼りになるのは、わずかなエンジン音。

彼女が普段耳にしている戦闘機の音にくべるとはるかに小さいが、聞き逃すほどではない。

まず一台。

大砲が火をふいた。

## 45・初めての死闘(1)

ダナの放った弾は、相手には命中しなかった。相手からも返礼とばかりに、弾が返ってくる。これも外れて、車が通過したあとの地面がえぐれ、飛び散った。

「ねえ、デイオを殺したいんだと思う？捕まえたいんだと思う？」  
ダナの問いには誰も答えない。

ハンドルの上にかぶさるほど前のめりの姿勢になったルッツは、険しい顔で前を見つめている。もう一度弾を装填して、ダナは耳をすませた。風が髪を乱す。引き金にかける指に力をこめた。  
発射！今度は命中し、一台の車が横転して炎をあげる。

反動で上体が後ろへと反り返る。それをこらえようとして膝に力が入った。

「痛いんだけど！」

ひざでぐりぐりと背中を押されてデイオは、情けない声をあげた。

「ルッツ！」

「何だよ！」

前を見据えたまま、ルッツは叫び返す。

「あと二台つてとこだと思う？」

「そんなもん！」

すぐ後ろの地面が爆発する。衝撃で車の後部が飛び上がった。

体勢を崩したダナが後部座席と前部座席の間に滑り落ちた。

背中中の圧力がなくなったデイオは、身体を起こそうとする。もう一度引き倒された。

「頭あげないの！だから押さえつけてたのに！」

デイオをもう一度ひざの下に押し込んで、ダナは後方を睨みつける。  
「うーん、思ってたよりやばいかなあ。一応別部隊と連絡は取って

るけど、到着までもう少しかかりそうなんだよね」  
運転席のメーターを眺めながら、ルッツがうめいた。

「ビクトールか？」

この闇の中では相手に見えてはいないだろうが、ルッツはフレディに情けない笑顔を向けた。

「うん。俺戦闘の役には立たないからなあ。ただの整備士だし。ダナ頼むよ？」

先日の戦闘で相当の被害を出したアーティカの方も手が足りない。普段ならルッツがこんなところになり出されることなど、ないはずなのだ。

「追いつかれないように頑張ってよね。追いつかれたらあたしだって役に立たないわよ？」

こちらは自嘲気味な笑みを浮かべて、ダナは慎重に気配をさぐる。発砲すればこちらの位置を知られることになる。外すわけにはいかない。

機会を逃さず、引き金を引く。  
ただそれだけだ。

聞こえてくるのはエンジン音だけではない。遠くで獣が鳴く声がする。木の葉がざわざわという。夜の世界も無音というわけではない。聞こえてくる音の中から、必要なものだけをすくいあげる。

耳をすませて……すませて、引き金を、引く。爆発音とともに、敵の車が横転する。

「あと一台！」

「よくやった！」

代償は、向こうからの弾。狙いをそらそうとルッツは、ハンドルを切る。

「しま……！」

ルッツの音が終わるより先に、車が横倒しになった。

横倒しになった車は、砂利を巻き上げながら地面を滑っていく。ダナが転がり落ちた。滑り続けていた車は、何かにぶつかって横になったまま止まった。

「車から出るんだ。早く！」

低いフレディの声にせかされて、ディオは車の外に這って出た。

「いったあ……」

横滑りしている車から転がり落ちたダナは、したたかに背中を打ち付けていた。この状況でも大砲を手放さなかったのは、自分をほめてやりたいと思う。装填中だったから、捕まる余裕がなかったのだ。奇跡的にどこも骨折していないようだし、頭も打っていない。

「ダナ！」

慎重に起き上がろうとした瞬間、地面に押し倒された。

銃声とどちらが先だったのか。上に被さっているのがフレディだと気づいて、ダナはとまどった。

頬に落ちるあたたかい液体。

「フレディ？」

頬に落ちたこれが何か知っている。怪我をしていなければこれが落ちてくるはずなどない。

「いいから撃て！」

言われるがままに、ダナは地面に背中をつけたままずり上がってフレディの下から脱出した。そしてわずかに上体を持ち上げる。

こちらに向かってくる重い足音。

車の音がしないということとは、どこかにとめてきたのか。

足音の発生源に向かって撃つ。人影が宙を舞うのがちらりと確認できた。もう弾は残っていない。

大砲を放り出して、低い姿勢のままフレディのところへ戻る。

「どこやられたの？」

「左肩だ。ディオを頼む」



肩をかばいながら、フレディは右手に銃を握る。

「わかった……ありがと」

「そう思うならあとでキスしてくれればいいさ」

「こんな時でも口は減らないのね」

ダナも腰に手をやり、銃を取り出す。車には他にも何人が乗っているはずだ。こうなったら、近づかれる前に何とかするしかない。

闇の中気配を探る。

手のひらにかいた汗で、銃が滑り落ちそうになる。それを押さえ込んで、ダナは目をこらした。なんとしてもディオだけは逃がさなくては。

ディオは頭をふりながら、車に寄りかかるようにして座った。

「一応俺も銃は持っているんだけどね」

気がついたらすぐ隣にルッツがいた。同じように車に背をつけている彼の手には銃。

「動かない的にも当たったためしがないんだよなあ」

ぼやきながらも、彼の目は鋭く暗闇を見据えている。

慌ててディオも銃を抜いた。

弾は装填してある。使い方は知っている。ただ、撃てばいい。けれどもいつ、どうやって撃つ機会をはかればいいのかだろう。

静かなダナの声が、ディオを現実に引き戻した。

「フレディが怪我したの。戦力外だと思って」

「俺最初から戦力外なんだけど？」

緊張をほぐしたいのか、わざとらしく語尾をあげながらしゃべるルッツにダナが噛み付いた。

「あたしだって戦力外よ！」

「その二人喧嘩しない。俺も引き金引くくらいならなんとかやるさ」

軽口をたたいている間に三人は、ディオを背にかばうように陣形を

整えていた。

「ディオ君。俺が走れと言ったら全力で走れ。あっちの方向からビクトール様たちが来るはずだから。ちよっと遅れてるけどね」

ルッツがしめす方向には何も無い。

それより。三人をおいて逃げろということか？ディオが迷っていると、ダナが続けた。

「あんたがここにいたら、あたしたちも思いきり無茶できないですよ。離れていてくれた方がいい」

「僕だつて戦えるよ！」

思わず口について出た言葉。守られるのはしかたない。かばれるのも当然かもしれない。

けれど。この場に三人を残して、自分だけ逃げるなんてできない。そう思っているのは、ディオだけのようだった。

「ディオ。今お前が捕まったり殺されたりするのが一番困るんだよ。そのくらいわかっているだろう？」

フレディが、銃を持った方の手でディオの肩を叩いた。負傷している左手は、あげることすらできないから。

銃を持たせたくせに。ナイフだつて渡したくせに。

フレディの言葉に、反論しようと口を開きかけた時だった。

耳元を熱い何か走り抜ける。どろりとしたものが肩に滴り落ちた。弾が耳をかすめたのだと理解するまで数秒かった。痛いというより熱い。じんじんとする耳。

胃袋をぎゅっと捕まれたように感じた。

「走れ！」

ルッツの声に、考える間もなく身体が動いた。右手に銃を握ったまま、勢いよく走り出す。

後ろの方では、銃声の応報が始まっていた。

## 46・初めての死闘(2)

銃声を背に、ディオはひたすら駆けた。  
怖い。

恐怖心が足を動かす。

どうしてフレディはあの場にとどまっていられるのだろう。怪我をしたというのに。

ルッツは？ダナは？なぜ、彼らは逃げ出さずにいられるのだろう。

ほんの一瞬前までは、自分も戦えると思っていた。

耳を弾がかすめたのなんてかすり傷にも入らない。

それなのに目覚めた恐怖心は、ディオからあの場に残るという選択肢を奪っていた。

走る。

走る。

走る。

足下が見えない中、足をもつれさせながらディオは走った。  
ルッツの示した方向へひたすら。

早くビクトールたちに会えばいい。そうすれば、皆のところへ援軍を連れて戻ることができる。逃げ出したわけじゃない。援軍を呼びに行くんだ。そう言い聞かせながら、足を動かす。

木の根に足をとられた。体勢を整えることができず、そのまま地面に頭からつつこむ。銃が手から放り出される。

数回転がって、うちつけた膝を呪いながら、立ち上がりかけた時だった。

耳がかちゃりという金属音をとらえた。とっさに前に飛んで、地面にぶせる。

ディオの今までいたあたりの地面に、何かが激突するのがわかった。銃はどこだ。暗闇の中では何も見えない。必死で地面の上を撫で回し、銃のありかを探る。

「そこまでだな」

知らない声が耳をうった。枯葉を踏む足音が近づいてくる。額に押し当てられる冷たい感触。おそろおそろ視線を上げていくと、正面から銃口がにらみつけていた。ほとんど真っ暗な中、ごくごく細い月の光でもそれが銃口だと確認できる。

「機密書類とやらを持っているのはあんたか」

声の主はまだ若いようだった。ディオは黙っていた。何を言っても命取りにしかない。

男はいらついたように、銃口でディオの額をこづいた。ディオの背中を冷たい汗が流れ落ちる。

「殺してからゆっくり探すという手もあるんだぜ？」

男はゆっくりと言う。ディオの反応を楽しんでいるかのように、たつぷりと間をとりながら。

「違っていたら違っていいんだけどな」

男の口調は書類を持っているのが今目の前にいる相手であることを確信していた。

どうしよう。恐慌をきたす、とはきつとこついうことをいうのだろう。どうしたらよいか見当もつかない。放り出してしまった銃は見つからないままだ。

ナイフは腰の後ろに隠してある。目の前の男にナイフで勝てるだろうか？そんなことを考えながらも、選択肢がないこともわかってい。目立たないようにそろそろと手を後ろに伸ばす。

「うわあああああー！」

声と同時に男に飛びかかった。狙うのは銃を持つ右手。

狙いを定めた場所に斬りつけた時には、目を閉じていた。刃物が肉に食い込む嫌な感触。骨にあたって止まったナイフをディオは引き抜く。血が飛び散った。

「何するんだ、この！」

自分の優位を隠していた男は、完全にふいをつかれた。斬りつけられた勢いで、銃を取り落とす。

ディオはとっさにそれを蹴り飛ばした。

「機密書類とやらはお前を殺してからだな！」

ディオのナイフを奪おうと、二人はもみ合いになった。頬を殴られてディオはよろめいた。それでもナイフは放さない。系統だった攻撃なんてできるはずもない。ただめっちゃめっちゃにナイフを振り回す。

今度は腹を蹴りあげられた。

息が止まった。うめき声をあげて地面に倒れる。倒れたまま酸素をもとめて、せわしなく呼吸を繰り返す。

男が足をあげたのを目の端で確認して、横に転がった。今までいた場所に足がおろされる。

「いいかげんにしろ！」

今度は背中を蹴りあげられた。せきこむディオに対し、男は容赦なく蹴りを入れ続ける。

落としたナイフは遠くへとばされ、ディオにできるのは、丸くなくてせめて腹部をかばうことだけ。

圧倒的な暴力にさらされるのは初めてのことだった。

口の中には、鉄の味が広がっている。何度か目に蹴り転がされて、ディオは死を覚悟した。

せつかく皆が逃がしてくれたというのに。

頭が白くなる。このまま気を失ってしまえたら、楽になれるのかも  
しれない。  
意識を手放そうとした時だった。放り出した手が何かを捕らえた。  
自然物ではない冷たい感触。

また蹴りあげられながら、ディオはそれを引き寄せて握りしめた。  
使い方はわかっている。頭の中で手順を確認する。

チャンスは一度だけ。

それを外してしまつたら、本当に殺されてしまう。ぜい、と息をは  
いてディオはその瞬間を待った。

訪れたその瞬間。考える間もなく引き金を引く。ディオの上に血の  
雨がふりそそいだ。

男の動きは、やけにゆっくりに見えた。信じられない、といったよ  
うに男は目を見開いていた。くるり、と一回転してそのまま倒れ込  
む。

数度指先を痙攣させて、言葉を発することなく男は動かなくなった。

ディオは苦勞して身を起こした。歩きだそうとして、その場にしゃ  
がみ込む。地面に手と膝をついて、その場に胃の中身全てを吐き出  
した。

顔に手に身体についた男の血。手を持ち上げて、顔をごしごしとこ  
すってみるが、落ちるはずなどない。降り注いできた人の血はあま  
りにも生々しかった。

自分の身を守るためとはいえ、人を殺めた。今さらのように足がが  
くがくとしはじめる。

言うことを聞かない足を叱咤する。早くビクトールたちと合流しな  
ければ。

数回立ち上がりかけてはひざを折って、それからようやく立ち上が  
る。

銃を右手に下げたまま、ディオはふらふらと歩き始めた。



## 47・ビクトールとの再会(1)

何度も転びながら、ルッツの指示した方向へディオは走り続けた。傷つけられた体中が痛む。蹴りは容赦なく顔にも入っていた。腫れた瞼が視野を狭くする。

追っ手のことなど考えている余裕はなかった。

アーティカの部隊に合流する。ディオの頭を支配しているのはそれだけだった。例外は、銃を落とさないようにと手を必死に握り締めしておくことだけ。

エンジン音を聞きつけてディオは足をとめた。ルッツの言っていた別動部隊だろうか。

アーティカの兵士が否かを確認することなどまったく思いつかないまま、近づいてくるライトの方へと歩いていく。

やってきたのは五台。途中で戦闘があったのか、そのうち一台は破損していた。

ディオの目の前で、車はとまった。

「殿下！」

先頭の自動車から飛び降りたビクトールは、確かにディオをそう呼んだ。

「遅くなって申し訳ありません。お怪我……」

怪我の程度を確認しようとして、ビクトールは口を閉じた。

王族への最大限の礼をもってひざをついて見上げれば、自動車のライトでさえ確認できる明らかに暴行を加えられたあと。

ディオは、ビクトールを立たせながら言った。

「それよりダナたちが、敵をひきつけてくれているんだ。彼女たちを頼むよ」



「わかりました。殿下はこのまま安全圏へ」

ビクトールは部下を呼び寄せて、ディオを避難させようとする。ディオは首を横にふった。

「嫌だ」

即座に返したのは否の答え。

「しかし……」

「僕の従兄もいるんだ。迎えに行かなくちゃ」

「……わかりました」

ビクトールの決断に時間はかからなかった。

ここでぐずぐずしている暇はない。

「お連れしましょう。ただし車からはお出にならないように」

ディオはビクトールとともに先頭の車に乗り込んだ。後部座席のディオは、両脇を屈強な兵士にかためられている。

ディオは、助手席のビクトールに自分がやってきた道をつかえながら説明した。

あの銃声の応報の中、皆無事だろうか。膝の上に置いた手を握り締める。

がたがたとびあがりながら、車は猛スピードで走る。

不意に衝撃が車を襲い、ついでとまった。

後に続いていた四台もハンドルを切ったり、ブレーキをふんだり、なんとかぶつからずに全ての車が停止することに成功する。

「どうした？」

「すみません。人間をはねたようです」

運転していた男があわてて車をおりていく。

「何でこんなところをうるうるしているんだよ」

毒づきながらビクトールが続いた。数分も立たないうちに戻ってくる。

「胸を撃ち抜かれた男の死体だった。ダナたちはこの近くに？」  
前半は部下たちに、後半はディオにあてた言葉。

「いや……もう少し行ったところ。今ひいた死体は……たぶん、僕が」

最後まで続けることはできなかった。

殺した、という言葉の口にするとそのものが恐ろしい。まだ手にこびりついたままの血のあとが、降り注いできた血の生暖かさを思い出させた。

痛ましそうな視線をディオに投げかけると、ビクトールは無造作な口調で前進再開を命令した。

逃げている時はずいぶん長い間走ったと思ったのに、ディオが皆を残してきたところはそこからさほど遠くなかった。

ごくわずかな光がちらちらとしている。

ビクトールが最初に飛び降りた。

続こうとするディオを、両脇を固めた兵士が押さえつけた。

ダナが近づいてくる男に気がついたのは、その直後だった。

フレディの手当をするために、ほんの少しだけつけた明かりを見つけられたかとどきりとする。

「誰かくる。動かないで」

応急手当を終えたフレディを地面に横にならせておいて、ダナは銃を確認した。

残りの弾の数はそれほど多くない。敵の数を確認しようと、全神経を集中させる。

「俺、弾切れ。ダナは残ってる？」

「これでおしまい」

最後の弾薬をルツツに放って、ダナは膝をついた。  
習い覚えた通りの体勢で、銃を構える。

「撃つな、俺だ」

聞きなれた声があった。何年もの間、その声を聞いてきた。一度に緊張が解けた。

「だ……団長！……ビクトール様！」

飛び込んだ胸は大きくて温かった。子供の頃いつもしていたように、しがみついて顔を埋める。

「頑張ったな。王子は無事だぞ」

頭をなでる大きな手。子どもの頃から変わらない大きさに、安心して涙がこぼれた。

「本当にすまなかった。まさかサラが情報を流していたとは思わなかったんだよ」

続くビクトールの言葉にただ首を横にふる。王都にはまだたどりついていないが、帰るべき場所にたどりついたような気がした。

迎いの車に分乗して、一行はビクトールたちが兵舎として借り上げた宿へと向かった。

アーティカにも医師はいるが、クーフで先日の戦闘の後始末に追われているため、今回は同行していない。

近くに住む医師が、ビクトールの要請で宿で待機させられていた。到着と同時にフレディは医師のもとへと運ばれていく。ディオももう一人の医師に引き合わされた。

ダナとルッツはかすり傷程度でたいした怪我ではなかったから、そのままそれぞれ割り当てられた部屋へと入り、体についた泥を落とす。

明るいところで確認してみれば、ディオの傷もかなりひどかった。医師が顔をしかめる。

「顔の方は一週間ほどかかるでしょう」

傷口にしみる消毒液を塗りながら、医師は言った。

「お身体の方は大丈夫でしょう。折れている骨もありませんし、内蔵も傷ついてはいないようです」

宿に入ってからダナは、姿を見せなかった。

ルツツも自分の部屋から出てくる気配はなく、通された部屋でデイオは一人ぼつんとしていた。

## 48・ピクトールとの再会(2)

ディオに与えられた一室は、宿の中でも上等の部屋のように思われる。

顔がじりじりと痛んだ。

我慢できなかったらという口上とともに渡された薬を、テーブルの上に用意されていた水で流し込んで、ディオはベッドに倒れ込んだ。睡眠作用もある薬だと医者と言っていたが、眠れそうにない。

ベッドの中で何度も寝返りをうつ。

訪れかけた眠りに身をゆだねようとしても、あの男の最後の姿が目の前に浮かんで飛び起きる。そして、両の手を確認する。何度確認しても、もう血のあとなど残っていない。シャツに手をこすりつける。

研究所の仲間たちが全員殺されたと聞いたあと、同じようにうなされていたディオを助けてくれたのは彼女だった。

寝つくまで何時間でも髪をなでて、時には彼の腕の中にもぐりこんできて抱きしめてくれた。

半ば癖のようにベッドの半分を明け渡した隣を見下ろしても、今は空っぽで冷たいシーツに皺がよっているだけだ。

どれだけ彼女に助けられていたのだろうと、今さらながらに自問する。

諦めてディオはベッドを抜け出した。長い廊下をあてもなく歩き始める。

眠ることはできなかったものの、薬が効いているのか痛みの方はだいぶましになっていた。

フレディの様子を聞きに行ってみようと思いついたのは、ほとんど

の扉が閉じている中、細くあけられたからこぼれる光を捕らえたと  
きだった。

確かフレディが治療を受けている部屋だ。近くまで来ると中から声  
が聞こえてきた。

「さつさと寝なさいって言うてるでしょ！あなた怪我人の自覚ある  
わけ？」

「キスしてくれたら、おとなしく寝るけど？」

「さつきからキスキスうるさいわね！助けてくれたのは感謝するけ  
どそれとこれとは別問題よ！あたしが寝なさいって言ったら寝なさ  
いよ！」

扉を通り越し、響いてくるダナの声。

胸に針を突き立てられたような気がした。

フレディは彼女をかばって怪我をしたというのに、ディオは何もで  
きず逃げただけだった。

人としての器の差を思い知らされる。ひょうひょうとしたフレディ  
の言葉が、ディオに追い打ちをかけた。

「それってキスしてくれたうちに入らない」

「うるさい！おでこで十分！さつさと寝なさい！明日ひどくなって  
も知らないんだから！」

がたん、と椅子を引く音がした。

勢いよくドアが開いて、中からダナが出てくる。

顔が赤くなっているように見えたのは、気のせいだろうか。

ディオに目をとめて、ダナはぎょっとしたように立ち止まった。

「どうしたの？その顔……」

ここまでは別々の車で来たし、ダナとビクトールが再会した時には  
ディオは車を降りることを許されなかった。宿に着いてからも別々  
の部屋。別れてから顔を合わせるのは初めてだった。

「一人こつちに来てたんだ。逃げようとしたんだけど……」

思い出す男の声。手に残る肉を斬る感触。こびりついて落ちない血。そこから後は続ける必要はなかった。すべて理解したという顔で、ダナが手をさしのべる。

「外へ、行く？」

ダナにうながされて、ディオは一步踏み出した。手をつないで、宿の入り口から外に出る。

夜の風は冷たかった。思わず身をふるわせる。

「ごめんなさい」

入り口の階段に腰かけて、最初に口を開いたのはダナだった。

「肝心の時に役に立たなくて。あなたに手を汚させるつもりはなかったのに」

「ダナ……僕は」

「本当に役に立たないわね」

「そんなことはない！」

対するディオの反論は強いものだった。

「君がいなかったら、僕はここまで来ることなんてできなかった。

感謝している」

アーティカの救いの手がなかったら、メレディアーナ号の船上で研究成果を奪われていたはずだ。殺されていた可能性だってある。あの時船に乗り込んでいたのは、マグフィレットの王位継承者ではなく、一介の大学生なのだから。ダナは今まで見せたことがない、情けない笑みをうかべてディオを見た。

「あたしね、傭兵なんてやってるけど。それでも戦場に出た夜は眠れないの。だってそうでしょ？敵だろうが見たことない相手だろうが、人を殺していることにはかわりがないんだから」

ディオの前で涙など見せないと思っていたはずなのに。

一度あふれた涙はとどまることを知らなかった。

「ごめんなさい……あなたにこんな思いをさせるつもりなんて……」

ディオは、しゃくりあげるダナを引き寄せた。大丈夫だなんて、でまかせを言うことはできなかった。こうして外に出てきているのは、ディオ自身まいっているからだ。

ただ、肩を震わせるダナを引き寄せて、抱きしめる。今まで何度も彼女がそうしてきてくれたように。

「あたし、空に戻れないかもしれない」

ディオの肩に顔を埋めたまま、ぽつりとダナがつぶやいた。

「戻れなかつたら、僕と一緒にきたらいいよ」

耳元でディオはささやいた。

「国に戻つたら王子様だからね。何でもかなえてあげるってわけにはいかないけど。君のできることが見つかるまで、面倒みるくらいのこととはできるよ」

「ディオ？」

しゃくりあげると、くすりと笑うのと両方同時にやるのは難しい。その同時を器用にこなしながら、ダナは言った。

「あたしに優しくしようとしてる？」

「そうだよ、気がつかなかった？」

「気がつかなかった」

ディオはダナを抱きしめる腕に力をこめた。誰も外に出てこないことを祈りながら。



## 49・王子の帰還(1)

それから五日後。

一行は無事王都テイレントに到着した。アーティカ所有の小型機が前方と後方の警戒にあたったためか、その後の襲撃はなかった。

イレーヌたちも無事に攻撃をしりぞけ、汽車からカーマイン商会所有の自動車にのりかえ王都に入ったと連絡があった。

ディオとフレディは王族とそれに準じる立場の者として一番嚴重に警備された車に乗車し、ダナとルッツは二人とは別の車だった。二人には、警護という任務もある。

残りの旅程の間、ディオはひたすら閉じこもっていた。

その日宿泊する場所に到着すれば、ダナは真っ先に車から降りて周囲の警備に駆けだしていく。

ルッツはというと、一日の走行を終えた車の整備のために車庫へとももる。

あとのメンバーは王族相手にしゃべることなどともないといった様子。

ディオとフレディに臆することなく言葉をかけるのはビクトールだけで、フレディは肩の傷が痛いディオの相手をしている余裕がない。

食事も皆と別だったから、口を聞く相手もいなかった。

部屋を抜け出してダナを探してみようとも思っただが、ビクトールたちと再会した夜を例外として、扉の前には常に警備担当者が立っついて抜け出すことなど許されなかった。

留学前にはそれが当たり前の生活だった。王宮にいるのはディオと両親である国王と王妃。あとは全員使用人と国務にあたっている者

たちだけで、常に一人。

友人といえは何日も前から計画を立てて、王宮に招待される貴族の子どもたちだけ。心を割って話せる相手ではなかった。

大学に入ってようやく友人に囲まれて、以来それに慣れきっていた。こんな風に周囲から隔絶された環境は久しぶりだ。ようやく見慣れた景色にたどりついた時、思わず目を閉じた。同じ孤独に囲まれるのなら、生まれ育った環境の方がまだましだ。

生まれ育った王宮の入り口に車がとまる。茶の屋根を抱く真つ白な大きな建物。真つ青な空に映えるそれを見上げながらディオは車から滑りおりた。

ここから先は、今までとは違う。忘れかけていた王族としての顔を作る。

ディオの視線の先にあるのは、王宮の入り口へと続く階段だった。ようやく戻ってきた王位継承者は、王宮の警備兵たちがずらりと並んで見守る中を、ゆっくりと進み始める。

一つ一つの段をしつかりと踏みしめて、入り口に到達した。

扉の両脇に控えていた兵士たちが、大きく扉を開け放つ。

ディオは最後にちらりとだけ背後をふり返った。王宮の中へと入っていくディオを見守るアーティカの兵士たち。ひときわ高いビクトールのすぐそばで、赤い髪を持ち主がディオを見上げていた。

彼女に目をとめて、動けなくなる。全力でディオを守り続けてくれた彼女。この扉を入ったら、もうこの先彼女と接することはない。

ディオとダナの視線が交錯する。ダナが右手を胸のところまであげた。目立たないように小さく手をふってみせる。それに口元だけの笑みを返しておいて、ディオは正面に向き直った。

大きく息を吸い込んで一歩踏み出す。

彼が子どもの頃から王宮に使っていた侍従長が、うやうやしく頭を

下げた。

「よくお戻りになられました」

目元に涙をにじませながら、彼は先に立ってディオを導く。

最初は公的な間で顔を合わされるのかと思っていたのに、いきなり王妃の私的な居間に通された。

待っていた王妃エレノアは、ディオを見るなり駆け寄ってきて抱きしめた。

「ディオス……ディオ……」

最初は正式な名で、ついで愛称で呼んで背中に回した腕に力をこめる。しばらく会わない間にずいぶんやつれていた。

「あと一日早ければ間に合ったものを……」

「もうしわけありませんでした、母上」

父親の容態については、ビクトールから聞かされていたから覚悟はできていた。

それだけを何とか搾り出して、ディオは母親からそつと身をひく。

彼女の身をつつむのは黒い喪服。ちょうど昨日の今頃、国王ディオゲナス三世は息をひきとつたのだという。その父の遺体は、今は王宮にはない。防腐処理を施すために運び出されている。

マグフィレット王国の慣習で、国王の遺体は防腐処理を施された上で、半年にわたって定められた場所に安置されることになっている。半年の間は国民誰もが花を捧げることを許される。その期間が終わる国王の葬儀を行った後、新しい王が即位することになる。

母親の顔を悲しみの陰が縁取っているのに気づいて、ディオは意外に思った。

長年夫婦としてやってきた情なのだろうか。

いくらディオが箱入りとはいえ、くちさがない宮廷すずめたちのおしゃべりがまるつきり耳に入らないほどではない。エレノアが王妃

として迎え入れられたのは、前夫との間に一子をもうけたからであつて、そうでなければ彼女の身分で王妃になることなどありえないと言つことは、幼い頃から察してはいた。

ディオの父であるディオゲネス三世には、正式な王妃の他に寵妃がいた時代があつた。そのいずれも懐妊することなくこの世を去り、人生も半ばを過ぎてから迎えたのがエレノアだつた。

夫と娘を流行病で失つた後、実家に身を寄せていたエレノアのところに話が持ち込まれたのは、たまたま公務でセンチアを訪れていた王の目にとまつたからだつた。

元をたどればセンチア王家につながる家とはいえ、エレノアは外国の王室に嫁ぐことができるような身分ではなかつた。

とはいえ出産が可能な年齢で、なおかつ五十間近の男に嫁ぐことを辞さず、過去に出産した実績がある、という女性の王族はその頃のセンチアにはいなかった。国王は世継ぎを作ることがなにより大切だ。

ディオゲネスには弟が二人いたが、直系の血を残すことができるのできないのでは大きく違う。

ディオゲネスは確実に子をなすことをできる女性を望み、センチア側としては、他の国とマグフィレット王国が近づぐくらいならばと、国内外にさまざまな工作を行った後エレノアは王妃となつた。育つた環境が環境だからだろうか。よく見れば若かつた頃はそれにきれいであつただろうと思われる顔立ちをしているものの、一国の王妃としては存在感、華やかさといったものには欠けている。実際ごく限られた公務は行うものの、ひっそりと王宮で暮らすことを望む女性だつた。

両親ともに息子にはそれなりの愛情を注ぎ、それなりにあたたかな家庭を築く努力をし、それに成功していたのはディオも認めるところだつた。

ただそれだけで、ディオの目には互いにそれほど強い愛情を持っているように見えていなかったというのに。

それでも今彼の前に立つ母は、ハンカチを握りしめて目を赤くしている。

「今後のことはフェイモス様に相談なさい」

「はい、母上」

うやうやしくディオは頭を下げる。

## 50・王子の帰還(2)

フエイモスとはディオの叔父にあたる人間だった。

ディオゲネスのすぐ下の弟で、ディオが生まれるまでは次期王位継承者とされていた人物だ。

王となるための教育を受けていた期間も長く、ディオゲネスの治世にあつては、宰相として辣腕ぶりを発揮している。

凡庸な人だった、と息子であるディオにでさえ評されてしまうディオゲネスのもと、彼のもつ権力は絶大なものだった。

マグフィレット王国が他国の侵略を受けることがなかったのは、彼の力によるところが大きかったともいわれている。

その下にフィディアスという三男がいたのだが、彼は数十年前に逝去していた。

フレディの母親であるフレデリーカは、その下になる。

今頃カイトファーデン家でも親子の再会がはたされている頃だろう。

母親の前を辞してディオは、自分の部屋に戻った。

部屋の広さこそかなりあるものの、一国の王子の部屋としては質素な方ではないかと思う。

マグフィレット王国が貧しいというわけではない。技術力ではセンティア王国に及ばないとはいえ、金や石油、フォースダイトといった資源には恵まれている。国土の大半は土地も豊かで、収穫される作物の種類も豊富だ。ただ、王室の頂点に立つ二人が、質素な生活を好んでいるというだけの話だ。

彼の部屋で唯一金銭的に価値があるものといえば、壁に作りつけられた棚に並ぶフォースダイト鉱石のかけらぐらいのものだ。

ネクタイをゆるめて、ベッドの上に放り出す。上着の内ポケットに納めた書類を手にとって、ディオは顔をしかめた。これをどうしよ

う？ここまで大切に持ってきたこれを。

「ようやく戻ったか」

フェイモスは、頭をたれるビクトールに言った。

七十でこの世を去ったディオゲネスより十歳年下であるが、それよりはるかに若く見える。

何かと病弱な兄とは違い、若い頃から体力には自信がある。

若い頃には兄がいなくなれば、自分が国王になれるという野望もあった。実際兄ではなく彼を王位につけたいと、もちかけられたこともあった。その話ののらなかったのは、王位がほしくなかったからというわけではない。

さほど遠くない未来に王位は自分のもとへやってくる、確信していたからだ。実際に王位を奪おうとした三男は、表沙汰にならぬうちに密かに処刑されている。その手はずを整え、病死として発表したのはフェイモスだった。わざわざ反逆者の汚名をきることもない。正直に言ってしまうえば、フィディアスのことは愚かだと今でも思っている。

もっとも彼の上にはさらにフェイモスが控えていたのだから、焦るのもしかたのないところだったのかもしれないが。

時期がくるまでに自分の手腕を家臣の目に明らかにしておけばいいと、宰相という地位にとどまって腕をふるうこと数十年。

病弱なはずだった兄は、寝たり起きたりしながらも七十まで生きて頼りないながらも一応の後継者を残して。

王位にこそつけなかったが、今の状態にはしごく満足している。国の実権は彼の手にあるのだから。

若い次期国王も彼の手がなければ、国を治めていくことなどできないだろう。

国王を軽んじるつもりもないが、必要以上に口を挟まれても困る。

現在の体制でうまく回っているのだから。

もつとも、ディオも積極的に政治に関わろうとはしないだろう。彼の好奇心の大半は違うところに向けられている。どちらかというところと学者的気質な甥のことを、フェイモスはよく理解していた。

「何はともあれ王子が無事でよかった。ところで、アリビデイルが侵攻の準備を進めているそうだ。戻ったばかりのところすまないが、いつでも出られるようにしておいてくれ」

「先日の戦闘でこちらの被害も甚大なものでしてな。船の修理が間に合いますかどうか」

「まったくお前ときたら」

肩をすくめるビクトールに、書類をたたきつけておいてフェイモスは笑った。

「費用の面は気にするな。国庫から補填させるし、業務を超特急で進めるようにこちらからも通達を出しておく。次期国王の名前でな。ディオも最終的な署名くらいはできるだろう」

宰相と次期国王という以前に、この二人は叔父と甥の関係でもある。思わず愛称で呼んで、彼は顔をしかめた。

「ディオス殿下、だな。油断した。このことは黙っておけよ」

「かしこまりました」

にやにやとしながら、ビクトールは返す。

「まったくいやな奴だよ、お前は」

そう言うフェイモスの表情には曇りも陰りもない。

親子ほど年が離れているアーティカの長のことを気に入ってはいる。

「ところで宰相閣下」

ビクトールは笑い顔から真剣なものへと表情を変えた。

「アリビデイルの侵攻理由とは、ディオス殿下の持ち帰った研究成果ではないような気がするのですが？」

「だろうな」



フエイモスの答えは明快だった。

「国に入る前に奪えることができればともかく、国に侵攻してまで奪うほどのものではないだろう。センチアの研究所の職員がいなくなつた今、王子の持ち帰つた資料があつたとしても実用化には数年かかるだろう。その間にいくらでも対応策は練ることができるぞ」

「なるほど」

ビクトールは、顎に手をあてた。

そんな彼に頼着することなく、宰相は話を続ける。

「狙いはセンチアに侵攻した時、我が国からの援軍を出せないようにすることだろうな。本命はセンチアだ。国境をどこに引くかでもめているらしいからな。ついでに我が国からは鉱山の採掘権くらいは、持っていくつもりだろうが」

まずは正規軍で対応するが、動ける体制だけは整えておいてほしいと重ねてつけ加え、宰相はビクトールを退室させた。

## 51・ゆれる心(1)

リディアスベイルの艦長室、届いた報告書を読み終えて、サラは目元をおさえた。艦長室といっても、他の部屋とそれほど変わった作りというわけではない。書類や地図を広げるための大きな机が置かれているのと、その分部屋が多少広いくらいのものだ。

カーマイン商会に保護された王子を奪おうと、アリビ戴尔と契約を結んでいる傭兵部隊が動いたという話は聞いていた。

報告書によれば列車を停止させることには成功したものの、手ひどい反撃をくらったということだ。護衛用の兵士はほとんど乗っていないという情報に誤りはなかったが、イレーヌ・カーマインの使用人は全員がかなりの戦闘力を持ち合わせていたようだ。

イレーヌ本人も機関銃を手に大暴れしたらしい。さすがは死を商う女ということか。

王子の誘拐することはできず、書類を奪うこともできず。何名もの死者を出して、作戦は失敗に終わった。

別の傭兵団の団長から話をもちかけられた時、断っておいて正解だったと思う。

今サラの手元にいる人数は、それほど多くはない。

傭兵部隊といえど構成員の大半は、ビクトール個人に忠誠を誓っている。

特にアーティカで生まれ育った者はその傾向が強い。

アーティカを離れるにあたって、慎重に選んだ人員は十名。

あとの者はビクトールにつくのが目に見えていたからだ。

連れてきた人数だけでは、リディアスベイルをなんとか航行させることはできても、戦闘ともなれば人員は大幅に足りない。

戦闘機もそのパイロットも、アーティカに残してきた。

今この船に搭載している戦闘機は、アリビデイル王国正規部隊のものだ。パイロットも正規軍の兵士で、正常な体制とはいえない。自分が育った国に攻め込むというのは奇妙なものだ。王子も機密書類も手に入れられなかった今、空を一國に占領させないためには研究を完成させられる前に叩くしかない。

報告書を机に投げ出して、腕の中に顔をうずめた。離れることを決めたとき覚悟はしたはずなのに、胸のつかえは取れそうもない。

サラは、生まれたときからアーティカで育ったわけではなかった。

戦災孤児だった彼女がアーティカに拾われたのは、偶然の結果にすぎない。

王室の運営する孤児院に送られる可能性もあった。サラを拾ったのはまだ結婚前だったダナの母親で、中心になって面倒をみてくれたのは、その母親。つまりダナの祖母にあたる女性だった。

傭兵という職業柄、アーティカには片親を失った子どもや孤児も多い。孤児となった子どもは、誰かの家に引き取られる。

サラのように外部の子どもが引き取られることも珍しいことではない。

引き取られたからといって、アーティカで傭兵となることを強制されるわけではなかった。離れたければいつ出てもかまわない。十五になった時にそう聞かされた。

本人が望むのなら地上の学校へ行くこともできるし、奉公先を世話してやるとも教えられた。

地上におりた仲間も少なくなかったが、サラは残ることを選んだ。ダナの祖母が住んでいたのは、オリガとハーリイが結婚生活を送っていた家のすぐそばだったから、二人の間に生まれたダナは妹のようなものだった。親同士が親しかったから、そこにヘクターが加わるのも当然の結果だった。

いつも後ろをついてきていた二人から、離れることなんてできな

った。

二人が母親を……ダナは父親をも失ってからは、サラがめんどうをみるようになった。

残ったサラを高く評価して、ビクトールは周囲の反対を押し切って副官へと取り立ててくれた。

どれほど感謝してもしきれない。返しきれない恩を仇で返している。彼の期待に応えたかったというのに、このままいけば、アーティカと対戦せざるをえない。

恩人であるビクトールと、複雑な感情を抱く彼女と、双方を相手にすることになる。

ビクトールの思考回路は全て飲み込んでいる。きっと勝機は見いだせるはず。

そう自分を奮い立たせてみても、出てくるのはため息ばかりだ。

「おいおい、辛気くさいぞ。その格好」

頭の上に手がのせられた。

「……ノックくらいして」

顔を上げるまでもなかった。艦長室にノックもせずに入り込む凶々しい男など、一人しかいない。

「したさ。返事がなかったから勝手に扉をあけただけだ」

「それってどうなの」

「部屋の中にいたんだからかまわないだろ」

かまう。おおいにかまうのだが、ライアンはさっさとベッドに腰を落とすとサラを手招きする。

それしか頭がないのかと問いただしたくなるほど、ライアンは毎晩リディアスベイルに乗り込んでくる。

「どうして軍に入ろうと思ったの？」

ライアンの手招きにはこたえず、サラは脚を組み直した。

行儀が悪いのは承知の上で椅子に横向きに座り、背もたれに肘をか

けてライアンを見つめる。

「お？俺についての初めての質問だな。ようやく俺に興味が出てきたか」

「……そういうわけではないけれど」

そういえばお互いの素性について詮索したことなどなかった。必要なんてなかったから。知っているのは、互いの名前と年齢くらいだ。それだつていくらでも偽ることはできる。

ライアンにふれられるのは嫌ではないが、しょせんは契約上の関係でしかない。

そこに特別な感情などない。彼でないのなら、誰だつて同じ。

「養わなきゃならないやつがいっぱいいるからなあ」

ライアンは目を細めた。

ライアンのことなど何とも思っていないはずなのに、胸に針を刺されたような痛みを覚えて、サラは目をそらす。

似ている。

共通点など黒い髪と恵まれた体格程度でしかないのに、ふとした時に見せる表情が、ビクトールにもヘクターにも似て見える。

## 52・ゆれる心(2)

「奥さんと子どもを家に残してきているのね」  
「ということ、妻を裏切っても平気という程度の男ということになる。」

軽い失望を感じながら、サラは話を変えようとする。

「違っつて」

ライアンは手をふった。

「ガキが十五人。ひよつとすると今頃もうちよい増えているかもな」  
靴を履いたままベッドの上に寝転がって、ライアンは両腕を折り畳んで枕にした。

「靴くらい脱ぎなさい……十五人？」

隠し子には多い。

ということは。

踵で靴を蹴り落ししながら、ライアンは続ける。

「俺、孤児院育ちなんだよな。親を亡くしたあと引き取ってくれた、血がつながってんだかつながってなんだかわかんないくらい遠い親戚が、その院長だった、という話なんだけどな」

孤児など珍しい話ではない。

サラもそうだし、育ちが育ちなだけに両親そろっている子どもを見る機会のほうが少なかった。

「ろくな教育も受けてない、コネがあるわけでもない人間が、手つとり早く金をもうけようと思ったたら軍に入るのが一番だろ？なんていっても、ガキってびっくりするほど食うんだよな。俺の給料大半食費に消えるんだぜ？」

「あなただって子どもの頃には、びっくりするほど食べたでしょうよ」

サラは、自分の表情がやわらかくなるのを感じた。

「覚えてられるか、そんな昔のこと。で、くるのか？こないのか？」  
ライアンはもう一度手をサラの方にのばした。

「私に選択権あるのかしら？」  
そう言いながらも、サラは立ち上がる。肩から前に落ちていた三つ編みを、背中にはねのけて。

「なあ、アーティカの男はバカばかりなのか見る目がないのかどっちなんだ？」

サラを腕の中におさめて、ライアンはたずねた。

「どういうこと？」

「サラみたくない女を、今までほっとくなんてさ。バカが見る目を持ち合わせてないかどっちかだろ」

いい女、か。

言い寄ってくる男はそれなりにいたけれど、面と向かってそんな台詞をはかれたことなどない。

世辞だとわかっていても、そう言われて悪い気はしない。

「あら？言い寄ってくれる相手がいなかったわけではないわよ？」

ライアンの腕の中で、サラはほんの少しだけ背をそらす。下から見上げた彼の顔はどこか遠くを見つめていた。

愛している相手ではないけれど、誰かの腕の中にも悪くはない。この頃そう感じる。

アーティカを離れて一月とたっていないというのに。

「だろうな」

「私が愛した男は、今までに一人だけ。そして彼は他の女の子を愛した、それだけの話よ」

サラを組み敷こうとしていたライアンが動きをとめる。

「女の子、だと？」

「私より十歳も若いんだもの。女の子でいいでしょうよ」

「女は若いほうがいいってか。バカだな、そいつ」

反論しようとしたサラの唇を、ライアンは自分のそれでふさぐ。右手をのばして、部屋の明かりを消した。

数時間後、再び艦長室が明るくなる。

出ていこうとするライアンを見送るサラは、完全に身支度を整えていた。

彼を送り出した後、このまま艦内の見回りに行くつもりだ。

乗り込んでいる人間を信用していないわけではないが、用心を重ねるにこしたことはない。

「三日後だそうだ」

出撃命令の期限をライアンは告げる。

ランプを手にライアンに続こうとしていたサラは、予想通りというように首をふる。

「……一つ謝っておかなきゃならないことがある」

艦長室の扉に手をかけて、ライアンはためらいがちに口を開く。

「センチアの研究所でおこなわれていたあれ、実用にはほど遠い代物だったそうだ。つまり当面はマグフレットに空を独占されることはないだろうってことだ」

「あらそう」

吐き出したため息は、納得したものではない。

ライアンは素直にわびの言葉を口にする。

「……だましたみたいになって悪かった」

「いいわよ」

だまされる方が悪い。ライアンから話を持ちかけられた時に、もっと慎重に裏をとればよかったのだ。決断には時間をかけたつもりだったけれど、調査がたりなかったのはサラの失態だ。

心がゆれないわけではない。

ライアンを部屋の外に押し出しながら、サラは自分に言い聞かせる。



これでよかったのだ。

あのままアーティカにいたら。

きつといつか憎しみをぶつけてしまっていた。

サラからヘクターを奪った彼女。

一人生き残った彼女。

とても愛しくて……憎い彼女。

「何だよ？」

気がつけばライアンが見下ろしている。

「何でもないわ。……あなたは自分の船にお帰りなさいな」

何度も自分に言い聞かせる。

これでよかったのだと。

本当にそうなのかと問いかけるもう一人の自分の声には、サラは耳をふさいでいた。

「よろしいのです？」

ライアンがいなくなるのを待ち構えていたように、アーティカから連れてきた部下が顔をのぞかせる。

「何が？」

涼しい顔で艦内の見回りに出て行くサラとは対照的に彼女の方は渋い顔だ。

「あの男好き勝手しすぎですわ」

「エレン……悪い相手じゃないわよ。少なくとも彼に悪気はないもの」

苦笑してサラはエレンの腕を掴んだ。

「そんなことより艦内を見回ってきましょ。よく知らない人間が多数乗り込んでいるわけだしそちらの方が心配だわ」

自分はいい。けれど、自分を信じてついてきてくれた彼女たちをどうしよう。

サラは、早くも戦争が終わった時のことを考え始めていた。

### 53・せまりくる足音(1)

王都に戻って三日。真夜中近くにディオは、ひそかに叔父の家を訪れた。

「叔父上、お願いがあるんだけど」

フェイモスには息子が二人いるが、今は二人とも外交官として他国に赴任しているため、夫婦二人と使用人のみが屋敷にいる。ディオはもう寝室に入ったという彼の妻が、あわてて出てこようとするのをとめた。

勝手に深夜に押し掛けてきたのはディオのほうなのだから。

フェイモスは夜着の上にガウンをひっかけただけ、という気楽な格好で王子を出迎えた。ディオの方にもそれをとがめる気は最初からない。

「お願い、と言われてもできることとできないことが」

「わかってるよ。できないのなら、他の手を考えてほしいんだ。叔父上ならこういうことには慣れているだろうし」

ディオの頼みを聞いたフェイモスは渋い顔になった。

「他国の領域になりますから……まあ手は尽くしましょう」

「頼むよ。彼女の大事な機体なんだ」

ディオが頼んだのは、ルーイーナの北に沈めたダナの機体を引き上げることだった。

海に沈めて二週間。機体そのものは使いものにはならないだろうが、フォースダイトを取り出せば、そちらはまだ使用できる。場所が国外のため、最初からダナは引き上げを諦めている様子だった。せめてもの礼だ。ここまで送ってくれたことへの。

「それともう一つ」

続くもう一つの依頼に、フェイモスの顔はますます渋くなる。

「完成させるつもりですか？」

「ここまで大切に持ってきたものだからね。このままで終わらせたくないんだ」

たくさんの人を借りて。

たくさん犠牲を出して、ここまで運んだ研究資料。ディオは、王宮近くの研究施設の使用権を要求した。

「危険なものだと理解しておられる？」

「しているよ……研究を続けるのは間違いかもしれないとも思っている」

不安がないわけではない。使い方によってはマグフィレット王国が世界から後ろ指を指されることになりかねない。

それでも、戦争が始まるうとしている今、完成さえすれば切り札となるかもしれない。

国を守るために、それでもディオは決めた。持ち帰った研究を完成させる。必要にならなければそれでいい。研究の段階で得られた結果は、別の方面にも生かせるはずだ。

「よろしいでしょう。国を守ることも必要だ」

長い間考え込み、フェイモスは最終的に同意した。研究にさける人数はそれほど多くない。人数が増えれば、秘密が漏れる可能性も高くなる。ディオを中心に、ほんの数名だけが関わればそれであり。

「……それより殿下。あなたにお話ししなければならぬことがあります」

いい機会だとフェイモスは思った。先王の時代から守り続けてきた秘密。まだ若いから、とこれまではディオに話すつもりはなかった。兄である国王ともそれで合意していた。秘密を抱えて兄が逝った後、彼の息子には伝えておかなければならない。

「あなただけが知っておけばいい。見ていただきたいものがここにあります」

ゆっくりとした動作で立ち上がり、壁にかけられた絵を外す。その

後ろに隠されている金庫は頑丈なもので、破壊しようとしても難しく、複雑な暗証番号を入力しなければ開けることができない。

その中身を見せられて、ディオは顔色を変えた。

それはディオが生まれる前、死去したフィディアスについての記録だった。

ある貴族にそそのかされて、自分が王位に着くことを望んだ彼。計画は事前に漏れた。

ディオの目の前にあるのは、秘密に行われた裁判の記録だった。

フィディアスは、病死に見せかけて処刑。

そしてもう一人。

「サイリーン・シルヴァ？」

記されていたのは聞いたことのない名前だった。記録を読めば、ディオの父親の寵妃だった女性だった。

いつの間にかフィディアスとも通じていた彼女は、フィディアスが王となれば自分は王妃になれる、とディオゲネスの暗殺に手を貸した。王家の姓の一部を持っていることからして、元をたどれば現在の王家に行き着く家系だったのだろう。彼女の代にはすっかり落ちぶれて、かろうじて王宮への出入りを許される程度の家柄でしかなかったが。

暗殺は未遂に終わり、彼女は事件から六ヶ月の間幽閉され、そのまま死亡したとされている。

そして、もう一枚めくってディオの手から書類が滑り落ちた。

「これって……」

「あなただけが知っていればいい話だ。将来、このことを利用しようとする人間が現れたときにのみここにある証拠のことを思い出せばいいのですよ、王子。誰も利用しないことを祈っておいてください」

ディオが落とした書類を、一枚一枚丁寧に拾い上げながらフェイモスは言った。ふらつく頭を抱えながら、ディオはフェイモスの家をあとにした。

彼が知った秘密は、一人で抱えるには重いものだった。それでも、誰かに話すわけにもいかない。

やらなければいけないことが山積みなのが救いだった。

戦争は、少しずつ歩みを進めていた。

センチアとマグフィレットの間を航行していたメレディアーナ号は再度襲撃を受け、死者こそ出なかったものの、乗員乗客数十名が重軽傷を負った。これにより、マグフィレット王国とセンチア王国の間の空の便は航行を停止した。陸路を使うと、数力国を経由しなければならぬ上、倍以上の日数がかかることになる。

アリビディル王国は、そのまま空からマグフィレットへの侵攻を開始した。陸続きであるセンチアへは、陸から軍が侵入した。

事前にセンチア側にも情報は流れていたから、防衛の体制は整えられていた。国境近辺で激しい戦闘となり、戦局は一進一退を繰り返している。

マグフィレットへは、飛行島三島を含む、数百にも及ぶ軍用艦部隊が海域から攻め込んでいた。攻撃を受けたばかりのアーティカの部隊は、まだ出られる体制を整えることができず、先に正規軍と他の傭兵部隊が出撃していった。

軍用艦のようにフォースダイトを搭載している船は、数週間なら無補給での航行が可能だ。どちらからも手を出すことのないまま、両軍は海の上でにらみ合っている。

## 54・せまりくる足音(2)

デイオは政治向きのことはすべてフェイモスにまかせ、自分は研究室に閉じこもっていた。集められた学者たちとともに一日の大半を研究室で過ごし、寝食は完全に忘れ去っていて時にはそのまま徹夜での作業になることもある。

「面会の方がいらしていますが」

そうデイオが告げられたのは、一息入れて昼食にしようかと手をとめた時だった。

徹夜明けの上、昨日の夜から何も口にしていなかった。追い返してもよかったのだが、会いにくる人間に心当たりなどない。

首をかしげながらデイオは応接室に入った。腰かけていた相手が、扉の開く音と同時に立ち上がる。

「ダナ……」

名前を呼んだきり、あとを続けることができない。最後に会ったのは一月ほど前か。会ったと言うより目があったというだけ。デイオが王宮の階段をのぼっていたあの時。あれが最後だった。

「ひさしぶりね。ちゃんと食べてる？」

右手を差し出しながらダナは言った。

「食べているよ。どうしてここに僕がいるってわかったの？」

嘘をはきながら、デイオはダナの手をとった。

「あちこち聞き回って……最終的にビクトール様をお願いして」

「そう……」

最後に顔を見たときには、わずかに残っていた擦り傷のあとも今はすっかり消えている。首に残されていた指のあともなくなっていた。以前はシャツ一枚だったのが、秋らしい深い色のジャケットを重ねて着ている。スカートではなく、パンツに膝丈のブーツを合わせているのは、初めて会った時と変わらなかった。

ためらいがちにダナは口を開いた。

「こんなところにいるなんて……あの研究……続けているの？」

「……うん」

その返答に、彼女は目をふせる。

「……ディオ」

「なに？」

「……あたしたちから……空を……奪わないで」

唇をかみしめながら、一言一言区切るようにダナは言った。

「そんなことにはならないよ。約束する」

「……ありがとう」

どこか無理をしているような笑顔に、ディオはとまどった。

「あたしね、明日出発なの」

「……出発……？」

「アーティカにも出撃命令が出たから」

何でもないことのようにダナは笑顔のままだ。ディオは頭を殴られたような衝撃を覚えた。戦争になれば、彼女は戦場に行く。わかっていたはずなのに。

「ちゃんとさよなら言ってなかったから。行く前に言っておこうと思っ  
て」

どうして……彼女は笑顔を作ることができるのだろう。少し無理をした笑顔だとしても、これから彼女が向かう先は、生と死が交錯する場所なのに。

「ダナ」

名前を呼んだディオにかまうことなく、彼女は早口に続ける。

「もう行かなきゃ。今日が最後の休日なの。これからルツツと待ち合わせして、ご飯食べに行っ  
て、甘いもの食べに行っ  
て、もう一軒甘いもの食べに行っ  
て、それから……」

ダナの言葉が途切れた。

「さよならなんていやだよ」

彼女の腕を掴んで引き寄せて、自分の腕の中におさめながらディオはうめく。自分が泣き言を口に行っているのはわかっていて。

「ディオ」

なだめるようにダナの手が背中に回される。背骨にそって、優しくディオの背中をなでた。旅の間何度もしてくれたように。

「さよなら、よ。無事に戻ってきたってもう会う機会なんてないでしょ」

空へ戻ることができないかもしれない。そう言っていたのに、彼女は戻ろうとしている。

戦いの空へと。

「あたしがせめて副官くらいにの地位だったらよかったのにね。サラ様はしょっちゅう王宮に行ってたもの」

冗談めかしてサラの名を口にして、ダナはディオの腕をほどいた。二人の間にある壁は高くて厚い。乗り越えることなんて想像さえできないほどに。旅の間は忘れていた身分差を今痛感させられている。わかっていたのに、旅の間は目をそらしていた事実。せめて、もう少し身分が高かったら。王子などでなかったら。旅の間に結んだ絆をほどく必要なんてないのに。

「僕が会いに行く。だから」

不可能なことを口にしてしているとわかっている。即位したら勝手に王宮を抜け出すことなんてできない。それが理解できないほど、二人とも幼いわけではない。

「……またね、て言えばいい？」

「……そう言っただけいい」

またね、ディオの耳にささやかれた言葉は、心の奥底までしみこんだ。

「王都での休日なんて初めて。おいしいものたくさん食べておかな



いとね」

とびつくようにしてディオの頬に唇をあてて、彼女は勢いよく飛び出していく。鮮烈な赤い色だけがあとに残された。

ダナが研究所を訪れてから一週間後。ついにマグフレット軍とアリビデル軍は空で激突した。

焦るディオをよそに、戦局はかんばしくなかった。センチア王国は国境を突破され、じりじりと王都へと侵攻を許している。

フェイモスは援軍を送ることを考えたが、陸路で経由しなければならぬ国の了承を得ることができず、空での勝利だけが状況を打破する手段だった。

その空も。正規軍の軍用艦の数において、アリビデル王国はマグフレットを上回っていた。

おまけに金に糸目をつけず、当初予想されていた以上の傭兵部隊を集めている。

敗北は確実なように見えた。状況が悪くなれば、傭兵部隊などあてにはならない。

契約の解除を申し出る部隊が続出し、多額の報奨金でなんとかとどめている有様だった。

研究室でもなかなか成果はあがらなかった。

設備が整い、技術者研究者のそろったセンチア王国でも、完成には数年かかるといわれていた研究だ。

人も設備もないディオの研究室などでは、短期間での完成は無理な話だった。

だんだんと戦火の足音が、テイレントへと近づいてくる。

それをとめられるのは、ディオだけだった。

## 55・戦場の空へ(1)

全ての準備を終えて、デイオは再び深夜にフェイモスの屋敷を訪れた。今回は研究所の職員を先に送っておいたため、フェイモスは居間でデイオを待っていた。

フェイモスは入室したデイオを見て顔をしかめた。やつれている、などという言葉ではまだぬるい。毎日数時間の睡眠を取るが取らないか。食事の時間も惜しんで、研究に没頭し続ける。そんな生活を一月近く続けていたデイオは、すっかり別人のようになっていた。デイオはフェイモスに健康のことを気遣う間さえ与えず、考えていたことを口にした。

「許せませんが、そんなことは」

席を勧めるより先にフェイモスは、厳しい声音でデイオをさとした。「誰かほかの技術者を送ればよろしい。時期国王がそのような……そのような危険な場所に赴くなど」

「それは宰相として？」

伸びかけた前髪の下から、デイオは叔父の顔をうかがう。

「叔父として言っているのだ！」

フェイモスの拳がテーブルをうった。あらかじめ用意されていたテイスツトが、とびはねてかちやかちやと不愉快な音をたてる。

「この国は王を失ったばかりで……その状況下で次の国王自ら戦場へ出るなど……自分より若い親族の数を減らしてたまるか！」

宰相としての言葉と、叔父としての言葉が入り交じる。

「でも叔父上」

デイオはフェイモスを見つめた。その目に静かな決意の色をうかがべて。

「あがってくる報告書では、単なる小競り合いかもしれない。出撃

のたびに奪われる命の重さは、はかることなんてできないんだ。そんな叔父上だつてわかっているだろうけれど」

はじめて見た。人がその命を奪われる瞬間を。

目の前で頭を撃ち抜かれたフレディの従者。飛び散った血の色、臭い。デイト自身が命を奪った名も知らぬ男。ごくわずかな月明かりにうかんだ驚愕の表情。倒れていくゆっくりとした動き。目に焼きついて離れない。

仮に十名。

書類の上ではたった十名でも、無慈悲に奪われた人生の重みはたった、という言葉では片づけられない。人の命が終焉を強制される瞬間を目の当たりにしてきた。王都までの旅の間に見聞きしたことが、デイトを動かした。

「終わらせたいんだ。この戦を」

「終わらせる？」

「交戦するたびに命が奪われるという事実は消しようがないから、だから、僕は」

できるだけ奪われる命が少ないように、早期の決着を。

そのために出ていく。安全な王宮に身をかくすのではなく戦場へと。間に合わないかと判断してすぐ、フォースダイトを兵器転用できるようにした戦闘機を用意することに時間を費やした。ダナの戦闘機から取り出したフォースダイトを使って。

乗員は二名必要だ。パイロットと後ろでフォースダイトから抽出するエネルギー量を制御する者と。パワーの制御に失敗すれば、機体は墜落する。その制御を確実に行えるのは、現在デイトただ一人だけ。

研究室の中ならば、他の学者たちもできないわけではない。

ただ、兵器として実際に活用するならば。気温湿度風速等、ありとあらゆる気象条件を考慮した上で、瞬時に流すエネルギー量を計算

し、調整しなければならぬ。

それができるのは、センチアでその研究に没頭していたディオだけだった。

他にそれができた研究者たちは皆、その命を奪われている。センチアの研究所が、炎に包まれた時に。

「国を治めるのは僕じゃなくてもできる。実際、今は叔父上にすべてをおまかせしているわけだし」

「それは……」

フェイモスは言葉につまった。

思うように国を切り盛りするために、ディオが口をはさまなければいいと思っていたのは事実だった。

王位ではなく実権を。自分の上には飾りものの王がいればそれでいい。それで長年の間うまくいっていたのだ。それを甥に悟られているとは、思ってもみなかった。自分の研究のことしか頭にないと思っていたのに。

「父の時代もそうだった。僕はそれでいいと思っている。父もあなたを信頼してまかせていたのだから」

ディオの口元に苦い笑みがうかぶ。

長年の間、お飾りの王に甘んじてきた父。使えない王とかけでそしられても、耳に届かないふりをして。それができたのは弟に絶対の信頼をよせていたからだ。

凡庸。

それを貫き通すのもある種の才能だとディオは思う。

留学する前は、想像さえしていなかった。

「でも、これの制御は僕にしかできない。だから僕は、自分で行くと思う」

ディオの決意をフェイモスは理解した。

理解せざるをえなかった。

「危ないところには行かないように。お前までいなくなったら、エレノア殿が悲しむぞ」

瞬時に叔父の顔になって、フェイモスは承諾した。

戦場に出るのだから、危くないところなど存在しないというのに。

常に最前線にいては、兵士たちの消耗も激しくなる。

アーティカの部隊が合流してから、順番に後方へとしりぞいて休息の時をとるようになった。

最後に合流したアーティカは、現在最前線で警戒にあたっている。

「フォースダイト搭載していない機体って、不便よね」

ルツツの隣にしゃがみこんで、機体の整備を手伝いながらダナは不満の声をもらした。

「君が恵まれすぎだったんだろ？普通フォースダイト搭載した機体は、団長とか副団長くらいにしかいかないんだからさ」

「両親の機体を受け継いだんだからいいじゃない」

あの時はああするしかないと思ったから、迷わず海に沈めてきたが、両親から受け継いだ機体を、海に残しておくのは心が痛い。

アーティカに戻ればすぐに引き上げられると思ったのだが、事態はダナの予想をはるかに越えた速度で変化していた。

結局、機体を引き上げてほしいとビクトールに言うのもはばかられて、そのまま戦場まで来てしまった。

工具片手に機体の下にもぐりこみながら、ダナは続ける。

「ほんと、動きが悪くてイヤになっちゃうわ。どこかでフォースダイト調達してくるっていうのどう？」

「空賊にでもなる？」

「それもいいかも。フォースダイトよこせって、銃をふりまわすのルツツの提案に、けたけたと笑いながらねじをしめていると、

「それは困るぞ」

新しく加わった声に、ダナは機体の下からはいだした。腕を組んでビクトールが見下ろしている。

「その機体は予備機に回す。ダナはこっちに來い」  
呼ばれてダナはビクトールに続いた。

船団の後方にはクーフとトーラス、それに他の傭兵団の持つ飛行島が二島ひかえていた。

クーフへと小型機で移動する。ビクトールは足早に島の中にある自分の家へと進みながら、ダナに言った。

## 56・戦場の空へ(2)

「新しい機体で飛んでもらうぞ。後ろにもう一人乗せて」

「ビクトール様……、あたしは」

団長の命令は絶対だ。

それでもヘクター以外の人間に後ろをまかせるつもりなど、ない。

今ルツツと整備していた機体も一人乗りのもので、それで出撃した実績はまだないが、十分な成果をあげることができると確信してる。

「おまえに飛んでもらわなきゃ困るんだよ。どうしてもおまえがいいとわがまま言う王子がいてな」

「……王子？」

王子などと呼ばれる人間は、一人しか会ったことがない。でも彼がここにいるはずなどない。

今頃は国で、次の王として立つための準備にいそしんでいるはずだ。大きく息をはいて、ビクトールは無造作に部屋のドアを開けた。

「うちで一番の……いや、マグフィレッターのパイロットです。殿

下

ダナを部屋の中央へと押しやる。

「デイト？……殿下？」

あまりのことにダナの口がぽかんと開いた。王族自ら戦闘機に乗り込もうというのか。

「よろしく頼むよ。どうしても生きて帰らなければならないんだから」

出立前に最後の挨拶を交わしたときの母親の顔を思い出しながら、デイトは言った。

喪の期間があけるまではと、黒い服を身にまとったままの彼女は、何も言わずにただデイトを抱きしめて送り出した。留学の為に旅立つ彼を見送った時と同様に。

いずれにしても、今のディオの体力では戦闘機に乗り込むことなど自殺行為だ。

それにダナが新しい機体に慣れる必要もある。

クーフ島ごと一度マグフレット領内の海域まで戻り、目立たない場所で機体の最終調整を行うことが決められた。

前線には、島内に戦闘機をかくして戻ってくることになる。

ビクトールはフォルーシャ号に残ることになった。

アーティカにはもう一つ飛行島があるから、クーフが一度後方に退いても問題ない。

「案外無茶するのね」

ダナの口調はなけばあきれたものだった。

新しい戦闘機にフォースダイトだけ乗せ変えたという話だったが、見上げた戦闘機は茶と赤で塗装され、彼女がルイーナの北に沈めてきたものとまったく同じもののように見えた。

「君のご両親の……勝手に……ごめん……」

本当は、引き上げたらそのまま返すつもりだった。それをどうするかは、彼女自身が決めることだから。

でも、ダナの機体から取り出したフォースダイトを使うしかなかった。他に使えるフォースダイトを用意することはできなかったから。

「……いいわ。どうやって引き上げようかって悩んでいたところだったから。まさか手元に戻ってくるなんて思ってたもの」

険しい表情になって、ダナはディオを振り返る。

「何はともあれ、行動するのはあなたが回復してからね。今飛ばうだなんて自殺行為だわ」

疲労困憊のディオに食事をさせて、彼女はディオを強引に寝室に押し込んだ。

抵抗する気力もない彼を寝かしつけたのは、メレディアーナ号から



救出され、最初にこの島にきた時に通した部屋だった。

あの時と変わらず、へたくそな花の刺繍が壁に飾られている。変わらないと思いつながらディオがベッドからそれを眺めていると、ダナは立ち上がりて額を壁からはずした。

「いやになっちゃうわね、いまだにこんな飾っているなんて」  
見えないように額を裏返しにして、テーブルの上に置く。

「ダナが作ったの？」

「十年前よ、十年前。今でもたいして上達したわけじゃないけど。苦手なのよね、こつこつこの」苦笑混じりに額を手でたたいてから、ディオの布団を直す。

「サラ様に教わって作ったのよね。あの人、本当にこつこつこのが得意で……」

ダナの唇が、やわらかな弧を描く。

「料理はあまりしなかったけど、たまに作るとすごくおいしいもの食べさせてくれた」

「家庭的な人なんだね」

「そうよ。あたしたちの面倒を……」

ダナは途中で口を閉じた。

そのことに触れれば、ヘクターのことまで話さなくてはならなくなる。今はそこには触れたくない。

もう一度ディオの布団を首もとまで引き上げておいて、ダナは足早に部屋を出た。

残されたディオは目を閉じた。頭の中が熱い。

この一月常に脳をフル回転させてきた。眠る間も惜しんで。こつこつ横になっていても、眠ることなんてできそうもない。

おまけにまだ午後二時を回ったばかりなのだ。

たとえ眠りに落ちることができたとしても、幸せな夢なんて見られそうもないのはわかっている。彼がこれから行うことを考えれば、そんなもの見られるはずもない。

甲板を慌ただしく兵士たちが行き来する。ライオンがリディアスベイルを旗艦にすると決めたからだ。今まで旗艦としていた船からの引越し作業は、大急ぎで進められていた。

自らサラに近づいたが、ライオンの階級は低いというわけではない。リディアスベイルを含め、五隻の船団を率いるのだから、それなりだ。

毎晩リディアスベイルに入り浸っていても、表だって文句が出ないのはそのためだ。

一応傭兵としてアリビデイルに入ったとはいえ、サラの立場はたいそう微妙なものだった。

ディオを手土産とできればまだよかったのだが、手ぶらになってしまった。アリビデイルが期待していた戦闘機も人員も、アーティカに置いてきた。この段階で役立たずの烙印を押されている。

ライオンがこの船を正式に旗艦としたのは、戦闘中サラを手元に置くためだった。

戦場全体でアーティカがどのあたりに配備されるのか、偵察である程度は察しがつく。

ビクトールの戦闘を間近で見えてきたサラのいる自分の部隊を、そこにぶつけるつもりだった。

上官ともそれで合意が取れている。

「サラ」

名前を呼ばれて、サラは無言で顔をあげた。自分の船に他の人間が乗り込んでくるのは不愉快なものだ。その不愉快な気持ちを押し殺して、ライオンが積み込む装備の確認をしているのにつきあっている。手にした書類は装備の一覧だ。

「この戦争が終わったら、除隊しようと思っているんだ」

無言のまま顔をもどして、サラは書類を一枚めくる。ビクトールのそばにいた時にも、同じように書類を手にしてひかえていたものだ。

った。あの時、アーティカを離れていなかったら今頃は彼の隣に立っていただろうか。

「除隊した後は何を？」

たずねるのが礼儀なのだろう。彼の未来になど、興味はいつさいないけれど。

「孤児院の方に支援者がいたらしくてな。そっちの手伝いをしてほしいんだと」

「そう……あなたが軍で働かなくてもすむのなら、その方がいいのではないかしら」

めくった書類にペン先で綺麗な丸を描く。積み忘れたものはなさそうだ。

「サラ」

近づいてきたライアンは顎に手をかけて、強引にサラの顔を上向させた。

「一緒に来ないか。俺には……」

責任がある。サラをアーティカから引き離した責任が。皮肉めいた笑みをひらめかせて、サラはライアンの手を顎から外す。

「自惚れないで。私とあなたはそんな関係ではないでしょう？」

もうすぐ正面切ってぶつかることになるだろう。捨ててきた故郷と。ライアンは、『そんな関係』などではない。それでいい。

サラは仕事を続けるよう、無言でライアンをうながした。

## 57・雷神の剣(1)

使える時間は多くはなかった。

ディオに言われるがままに、ダナは何度も新しい機体で空を駆けた。今までの機体と違って、フォースタイトから抽出したエネルギーをすべて機体の制御に使うことはできない。エネルギーをディオの発明した兵器に取られる分、制御が不安定になる。

ダナ自身がマグフレットのパイロットか否かはともかく、現在のアーティカで彼女と並ぶ者がいない事実は動かしようがない。そのダナが苦戦しているのだから、他のパイロットでは無理と判断されるのも仕方のないところだった。

さらに、通常は二人乗りの場合は後部座席の乗員が射手を担当するのだが、今回は後ろに居るのは計算要員であって、射撃もダナが担当することになる。機体をそれこそ自分の手足のように扱った上で、正確な射撃を行わなければならない。ただ新しい機体に慣れる、というだけでは足りなかった。

今日も戦闘機に乗り込んでいたダナが、クーフに戻ってくる。いつもの通り飛び降りたつもりが、よろめいて膝をついた。下で見守っていたディオがあわてて手を差し出す。

「ねえ、あの兵器のこと何て呼んでいるの？」

差し出された手に素直に捕まって、ダナは立ち上がる。

「特に名前はつけていないよ。もともとの研究とはずれたところから発生した代物だしね」

仲間内では雷神の剣と呼ばれていた。放つ光があらゆるものを破壊するその様を、神の雷にたとえて。今はそれがあまりにもおこがましいように思える。

「だいぶ慣れてきたわ。そろそろ後ろに人を乗せてもいけるかも」

膝の土を払い落としながら、ダナはディオをうながした。並んで歩きながら、ビクトールの家へと向かう。

ヘクターがいなくなっただ後、ダナはビクトールの家で暮らしているのだという。

ビクトールが留守にしている今、この家にいるのは二人だけだった。

「あとは僕が後ろに乗って、どこまでいけるか、だね」

ディオの方も、ただ待っているだけではない。持ち込んだ実験機を使って、何度も計算を繰り返している。

その時の気象条件を瞬時に判断して、エネルギー注入量を微妙に調整しなければ、逆流して機体が危険にさらされることになる。激しく揺さぶられる戦闘機の後部座席で、ディオが手元を狂わせでもすれば二人ともおしまいだ。

「午後……試してみる？」

手にしたゴーグルをふりまわしながら、ダナはディオに提案した。

「そうだね。明日か明後日には前線に戻りたいし」

「ディオ、誰かいる」

ダナの指した先にいたのは、見慣れた二人。

フレディが手をふっている。

全身を黒に包んだイレーヌは、さすがにロングドレスではなかったが、いたるところに宝石をきらめかせているのは変わらなかった。日焼けをしないように巨大なパラソルの影に顔を隠している。

「二人ともなんでここに？」

イレーヌが顔の前で手をひらひらさせた。両手の指を飾る指輪がきらきらと輝く。

「おかげさまで弾薬の納品をまかされました。それと食料の補給も。普段は運搬だけというのは請け負わないのですけれども。次の装備変更時に期待していますわ。ついでとっては何ですが、商品も売り込んできましたの」

「俺はただのつきそい……というか野次馬か」  
商品の売り込みというのは口実のようだ。

イレーヌの目は、この場所からでも見えるディオとダナの新しい機体に鋭くそそがれている。

どうせなら、とディオがカーマイン商会から購入させた機体は、外見こそ最初の機体そっくりだったものの、中の装備は最新型のものであった。

フレディはディオの研究内容を知っている。

フレディ経由でイレーヌにも伝わっているのだろう。瞳には隠しきれない興奮の色がうかんでいる。

「肩はよくなったの？」

「おかげさまで。君のためなら何度撃たれたってかまわないさ」

「それとこれとは別問題」

さりげなくフレディが肩にまわそうとした手を、ダナはぴしゃりと払い落とす。つれないなあとつぶやいたフレディの顔を微苦笑がすすめた。

「午後からディオ乗せて飛ぶの。見ていく？」

そのダナの提案には、二人揃って頷いた。

昼食を取り、少しばかりの休憩をはさんで、ディオは飛行服に袖を通した。首元にきつくスカーフを巻いて、皮のグローブをはめる。

その手を数度開いて、閉じてを繰り返した。震えて、思うように動いてくれない。震えを無理矢理におさえつける。

落ち着け。何度も自分に言い聞かせる。彼が計算を間違えれば、前線に出る前に二人とも命を落とすことになる。

ダナに尻を押し上げられて、後部座席に半分落ちるように入っていた。相変わらず一人では乗り込むことすらできない。

ベルトで座席に身体を固定する。耳の奥に自分の鼓動が響いている。ダナは平然とした様子で、ディオの前の席に滑り込んだ。

迷うことなく起動スイッチをいれ、レバーを押し上げる。すべてのランプが正常に点灯しているのを確認して、ダナは操縦桿をひいた。

勢いよく機体が飛び出す。もう一機続いた。

「デイト！発射のタイミングちょうだい」

デイトは目の前の計測機をにらみつけていた。機体の周囲の氣象条件が、次々に表示される。

「ダナ、そっちはいけるか？」

通話装置越しに、もう一機のパイロットから通信が入った。

「デイト、いける？」

「いつでも」

デイトの返答に、ダナはあらかじめ決めておいた合図を送った。先方の機体上昇する。

その機体から放出されたのは、訓練用的だった。デイトの指が制御装置の上を走り回る。

「今だ！」

「撃つわよ！」

ダナは、発射装置のスイッチを押した。他の機体ならば、機関銃の弾が発射されるはずの場所から、真っ白な光が飛び出す。

狙いは正確だった。

的に光があたったとたん、白い煙だけを残して標的は消えた。

## 58・雷神の剣(2)

クーフからもその様子はよく見えた。フレディがつぶやいた。

「神の裁きの光ってあんな感じなのかな？」

「裁きの光が存在するのなら。私たちは、今こんなところにはいませんわ」

イレーヌの声に苦いものが混ざった。

イレーヌにはかまわず、フレディは自身に投げかけるかのように続ける。

「あの設計書、ディオに頼んだら手に入らないかな」

「無理でしょう。王子はこの戦いが終わった後、すべて破棄するつもりですよですから」

「だよなあ」

島での不穏な会話に全く気づくことなく、戦闘機の二人は今の結果を冷静に分析しようとしていた。

「ディオ、エネルギー状態は？」

「問題なし。もう一度やる？」

「もちろん！」

ダナの合図で再び的が投下される。今度も残ったのは白い煙だった。さらに十回近くそれが繰り返された。ダナの手元に不気味な振動が伝わってくる。

「ディオ、機体の様子がおかしいの」

「こっちもだ。一度戻った方がいいかも」

戻ると合図をしておいて、ダナは機体を旋回させた。迷うことなく、フレディとイレーヌの前に機体を停止させる。

ディオは今の入力内容と気象条件、その結果のエネルギーの流れなどの記録を、後部座席に設けた制御装置から取り出した。



「僕はすぐこれを解析してくる。あとはよろしく」

後部座席から転げ落ちるようにして、ディオはビクトールの家に行った。

彼の部屋には記録の解析に使用する機械が据えられている。

「あとはよろしくって……」

ダナは首をふった。自席から機体の様子を確認してみるが異常は見あたらない。

すべての計器は、正常な値をしめしている。

ルッツはフォルーシャ号にいますが、クーフにも整備士は残っている。走りよってきた整備士たちに機体をまかせて、ダナはゴーグルを押し上げた。

悪くはない。機体の性能自体は悪くはないのだ。ただ扱いにくい、とは思う。

それだつて、機体を乗り換えたときに感じる違和感の範囲内といつてしまえばそれまでなのかもしれない。今回は通常の武器は装備することができない。ディオが発明した「あれ」だけだ。

いちいち小型戦闘機相手に「あれ」を使用するわけにもいかない。

ダナとディオは軍用艦の破壊に専念することになる。そのために、護衛として四機の戦闘機とともに出撃することが決められていた。先ほどの投下したのは、そのうちの一機だ。

四機とうまく連携しなければ、軍用艦にたどりつく前に落とされることになるだろう。

怖い……、とってしまう。落とされることが、ではない。そんな強大な兵器を自らの手で使用しようとしていることが。

名前を呼ばれたのにも気づかずに、ビクトールの家の前にたどりつく。

ドアノブに手をかけたところで、上から手を重ねられた。心配そうな色を目に浮かべたフレディが見下ろしている。合った視線をダナ

は、ドアノブの方へと戻す。

「大丈夫か？」

「イレーヌさんは？」

「あつちで話してくるそうだ」

フレディがさしたのは、ダナの機体の方だった。イレーヌは、そばにいる整備士をつかまえて、何かたずねているようだ。

「秘密を知ろうとしてもムダよ？」

「そのくらい、イレーヌだってわかっているだろ。どっちかっついうと、整備士の方に興味があるんだろうな。アーティカは、整備士の腕も並じゃない」

いまだに手を重ねられたままなのに気がついて、ダナは強引に手を引き抜いた。

「フレディはどうするの？」

「ちよつとデオオと話したら帰るつもりなんだけどな。今は邪魔できる雰囲気じゃないよなあ」

フレディは、ダナの頭に手を乗せるとイレーヌのいる方へと足を向けた。

ダナはその場でしばらく考えた後、ドアをあけた。

デオオのいる部屋はわかっている。ずんずん進んでいって、扉をたたく。

返事はなかった。

「デオオ？」

扉の前で声をあげるが、中はしんとしている。ダナは細く扉をあけて、中をのぞきこんだ。

部屋の奥に備え付けられた謎の機械は、デオオの持ち込んできた解析機だ。床の上一面に紙が散らかっている。

テーブルの上もベッドの上も紙に覆われていて、足の踏み場などどこにもない。

その中央に、ディオは胡坐をかいていた。一枚を取って眺め、頭をかいて放り出す。もう一枚を手にして、何事か書きつける。フレディの言っていたように、邪魔などできる雰囲気ではなかった。ディオが身体をひねった。後ろにおいていた紙を取るうとして、扉からのぞきこんでいたダナと目が合う。

「何？」

「ごめんなさい、邪魔するつもりはなかったの。フレディが帰る前に話したいって言ってたから」

「そっちに行くよ」

ひよいひよいと紙の間からわずかに残る床を踏んで、ディオは扉に到達した。

「どんな感じ？」

「実戦で使うときには連続十数回までしか使えないみたいだ。多分、回路が熱暴走しようとしているんだと思う」

研究室ではそんなことなかったんだけど、とぼやいてディオは前髪をかきあげた。

「雷神の剣も無敵じゃないってことだね」

口に出してから、しまったと思った。ダナには、研究員たちの間での呼び名などないと言っておいたのに。

「雷神の剣、ね」

ダナは口の中で繰り返した。確かに人間が扱うには、強大すぎる力だ。

「一度の出撃で撃てるのは十回までが無難ってことね？」

「気象条件によっては、もっと少なくなるかも」

「そう……」

外に出ると、フレディとイレーヌはまだ整備士と話しているようだった。

ディオは、赤と茶で塗装された戦闘機に目をやった。使われているのが引き上げたダナの戦闘機から取り出したフォースダイトだと、

彼女は知っている。勝手に使ったことを、ダナは責めなかった。両親の遺してくれた物だから大切にして欲しいと言っただけ。雷神の剣が暴走する事態だけは避けなければ。

「ディオ？」

呼ばれて顔をあげる。

「大丈夫。ビクトール様が、いい作戦考えてくれるもの。きっと」  
無条件の信頼が、ディオには痛かった。

それからさらに数日調整を重ねて、二人はビクトールに合流した。

「十発しか撃てないって……それで大丈夫か？まあ、確実にあてりや、一度の出撃でそれだけ落とせるってことは上出来と言えなくもないか……？」

報告を聞いたビクトールはうなづいた。

「一回の出撃で撃てる回数は多くないし。的は大きいけど、確実にフォースダイト搭載部にあてないといけないから難しいといえば難しいわね」

テールをはさんで、ビクトールとダナは相手の配置図をにらみつけている。

そこに記されているのは今朝の段階の配置のため、出撃前には再度偵察機を飛ばすことになる。

ディオの提案は簡単なものだった。雷神の剣は、金属を溶かし、消滅させる。攻撃目標のフォースダイト搭載部近辺に攻撃を加えれば、そこからフォースダイトそのものに損害を与えることができる。対フォースダイト兵器として、雷神の剣は最高の威力を誇るのだから、搭載されたフォースダイトだけを破壊するというのも、ディオにとつては好都合だった。

フォースダイトが破壊されれば、軍用艦は航行が不可能となる。艦全体が破壊されるわけではないから、乗員の脱出までの時間は十分にある。なるべく死人を出したくない。甘いと言われようと、わがままともしられようとディオの思いは変わらない。

膠着状態が続いていた空の戦も、どちらが先に仕かけたのかもわからないまま交戦を開始していた。

敵には倍以上の損害を与えたが、アーティカもすでに軍用艦一隻を失っている。マグフィレット軍全体では、数十隻が失われ、人的被

害もかなり出ていた。

「普通の武器は装備できないってことは、撃つたらずく離脱しなきゃならんのか」

「そういうこと。しかもね、ディオが計算間違えれば一発でどかんでも、あたしはやる価値あると思う。ディオが計算間違えるなんてそうあるとは思えないから」

「殿下」

ビクトールは恨めしそうな視線で、黙つたままその場にいるディオを見た。

「こんな危険なことを殿下にやらせるなんて」

「僕にしかできないことだよ、ビクトール」

うめき声をあげて、ビクトールはテーブルの上に倒れ込んだ。

許可などできるものか。そう言いたいのだが、宰相からも王子に従えと命令が届いている。そして、国の最高権力者は軍の最高権力者でもあるのだ。ビクトールに拒む権利はない。契約を強制解除するという手もあるが、別のパイロットを見つけて出撃するだろう。

「ビクトール様、夜は？」

「夜襲か……」

夜間の飛行は昼間よりも危険をとまなう。特に夜目のきくパイロットばかりを選んだとしても。

「あたしは夜飛ぶのも慣れてるし、ディオは目の前の計器さえ見えていれば問題ないでしょ」

殿下と呼べと言おうとしてビクトールはやめた。そのことで二人の間がぎくしゃくしても困る。今の二人は主従ではなく、対等な関係を結んでいるように見える。互いを信頼していなければ、空を駆けるなんてことはできっこない。水を差すこともあるまい。今はまだ。

「……やるか」

ビクトールは最新の天気予想図を持ってこさせた。明日の早朝、ま

だ暗い時間帯の天候を確認する。ここのところ良好な天気が続いていたが、それは明日も変わらないようだった。日の昇る直前に相手の船団に到着するよう、逆算して出発の時間を決める。部隊のどこに攻撃を加えるのが一番有効かを確認するために、偵察機も出した。

「言うまでもないがな、ゆっくり寝ておけ」

二人を部屋から追い出しながら、ビクトールは言った。護衛につく機体に取り込む人員ももう決めてある。彼らにも出発の時間を連絡し、休息をとるようにと告げた。

「寝られそうもないのでしょ？」

食堂に入って、軽食をとりながらダナはディオを見た。

「そうだね、それに食欲もない」

ディオの前にはホットミルクのカップだけが置かれている。

「食べなきゃもたないわよ？……はい、口あけて？」

思わず開けた口にちぎったパンが押し込まれた。

「なにするんだよ……」

一度口に入れたものを出すわけにもいかない。もぐもぐと咀嚼して飲み込むと、今度はフォークに突き刺された野菜がつきつけられる。

「口あけなさい」

「……やだよっ」

ぎゅっと結んだ口の前で、脅すようにフォークが左右にふられる。

「最後の晩餐になるかもしれないぞ……じゃなかったしれませんが、か」

どやどやと食堂に入ってきた男たちのうちの一人が、ディオに笑いかけた。見覚えがある。いかにも傭兵と言った風貌の柄の悪そうな男。最初にこの船に乗り込んだ夜、食堂で会った男だ。

「そつなのよ、ジヨナ。もつと言ってやってよ！」

「殿下なんて高貴な身分の人に、これ以上言えるかよ」

そうダナには言っておいて、ジヨナはディオに向きなおった。

「寝られないようなら、コックが酒を」

「そこまで！お酒なんてだめ！あんたたちもさっさと食べて部屋に帰りなさいよ！」

ダナに追い立てられて、ジヨナたちはコックのいるキッチンスペースへと歩いていく。

「まったく……やあね」

無然とした顔で、ダナは野菜を口に放り込んだ。料理ができるのを待っている間、彼らはなにを話しているのか、テーブルをたたいて大笑いしている。明日出撃だというのに緊張感など見受けられない。「怖く……ないのかな」

ディオのつぶやきを、ダナはすくいとった。

「怖いわよ。あたしだって毎回怖いもの。空を飛ぶのは好きだけれど……ね」

その後、ダナはディオの口に食べ物を押し込むことなく食事を終え、二人はディオの部屋の前で別れた。

緊張しているからか、ディオの眠りは浅かった。何度も寝返りをうつては、そのたびに目を覚ます。皆眠りについていいるであろう時間になって、ディオは思い出した。

ジヨナが言っていた。キッチンに行けば、酒が置いてあるはずだ。

軽く飲めば、緊張も解けるかもしれない。

そっと部屋を忍び出て食堂へと向かう。

ほとんど明かりのともっていない廊下を、足音をたてないように歩いていく。

食堂には、ごく小さな明かりがつけられていた。こんな時間に誰だろつと自分のことを棚にあげて、中をのぞきこむ。

一人座っていたのはビクトールだった。椅子の前後をひっくり返し



て座り、背もたれに顎を乗せている。前のテーブルには酒瓶とグラスが置かれていた。

黙って立っていたのにディオの気配に気づいたらしく、ビクトールはディオを手招きした。

「眠れませんか」

ビクトールの表情は、いつになく老けて見えた。

「ビクトールはどうしてここに？」

その問いに答えることなく、ビクトールは立ち上がるとグラスをもう一つ運んでくる。

椅子の向きを元にもどしてディオに勧めた。渡されたグラスに琥珀色の液体が注がれ、ディオは用心深く、そのグラスに口をつけた。

かなり強い。一口飲んだだけで喉の奥が焼かれるようだった。

ビクトールの方は、グラスを一気にあおっても表情を変えることもない。平然とした顔で空になったグラスをテーブルに戻し、もう一杯注ぐ。

「いつになく思い出すのですよ、息子のことを」

ビクトールの口元が、自嘲の形にゆがんだ。

「二年前……だったよね」

「ご存じでしたか」

ビクトールは拳を握りしめる。思い出したくもない負け戦。あの時自分が助かったのは、サラが機転をきかせてくれたからだ。

「息子の最後の出撃の時、一緒に飛んでいたのはダナだということ  
は？」

「聞いてる。ダナだけが生き残ったということも」

その言葉をきいて、ビクトールは大きなため息を吐き出した。

「親というのは愚かなものですな、殿下」

「……」

「ダナを見るたびに思うのですよ。生きていてくれてよかったです。それと同時に呪いたくもなる。なぜヘクターだけが逝ってしまったのかと」

意外だった。ディオの目には二人は、本当の親子以上の信頼関係を結んでいるようにうつっていたから。

「これはダナは知らないのですが」

何といつたらいいのかわからないでいるディオに、ビクトールは続けた。

「二人が発見された時、ダナの方にだけ応急手当がしてあったというのですよ。手持ちの医薬品だけでは、ろくな手当てできなかった

でしょうが」

ビクトール自身、二人の発見時には昏睡状態にあったからその様子を直接見たわけではない。

ダナを責める気などない。責める気などないが。重傷をおった身体で動き回らなければ。

あるいは先に自分を手当していれば。

もう少し早く発見できていれば。

仮定の話が頭から離れない。二年たった今も。思いをふりはらうように、ビクトールはグラスの中身を一気に空にした。

「夜中に一人で飲むと辛気くさくなっていけませんな」

笑う。

笑ってみせる。

数時間後には、二人を送り出さなければならぬ。

戦場の空へと。

だからビクトールは笑って見せる。

「飲み過ぎると逆に眠れなくなります。それを飲んだら、お引き取りください」

ビクトールはあけたグラスを置いて立ち上がった。

ディオに一礼して、食堂を出ていこうとする。

入り口でふりかえった。

「殿下……無理はなさいませんよう」

わかっているよ、とディオは口の中で返した。

容赦なくゆさぶられて目が覚めた。

「時間よ」

ダナが上から見下ろしている。

すでに彼女は飛行服に身を包み、右手に帽子とゴーグルをぶらさげている。

ディオは目をこすりながら、ベッドから這うようにして出た。服を

着たまま寝ていたから、その上から飛行服を身につければいい。コ  
ーヒーを渡されて、熱いそれを冷ましながら流し込む。

「朝食食べたかったら、生きて戻らないとだね」  
ひとりごとのようにつぶやく。

ダナはディオを連れて、甲板へとあがった。

格納庫で待ちかまえていたルッツが、首にタオルを巻いたまま出迎  
える。

「おっはよう！いい夢見られた？」

「夢も見ずにぐっすりだったわよ」

いまだに一人では乗り込めないディオを、ルッツが後部座席へとお  
しあげた。

吐きそうだとディオは思った。

ビクトールと別れてからは、ダナに起こされるまで夢も見ずに眠っ  
たが、緊張のせいか頭が痛い。

他の戦闘機と違い、二人の乗る機体は垂直発艦が可能だ。まず二人  
がフォルーシャ号を離れた。ディオはウィンドウごしに上を見上げ  
た。

まだ空は明るくなっていない。星が空一面に散りばめられている。

後方を確認すると護衛の機体が四機、軍用艦前方から撃ち出される  
ようにして、出撃してきた。二人の乗った機体を中心にするように、  
陣を組む。

「準備はいいか？」

通話装置からジヨナの声がした。

「さっさとやってさっさと帰りましょ」

言葉と同時に、ダナがスイッチを押し上げた。  
機体が加速する。

形ばかりの背もたれにおしつけられて、ディオはうめいた。

それでもすぐ前の計器から目は離さない。

エネルギーの流れは正常。今の気象条件を入力する。思っていたより気温が低かった。

一時間ほど飛行を続けた後、敵の船団が見えてきた。闇の中に艦が並んでいる。

ディオは制御装置を微調整した。前方からダナが身をひねるようにして、ディオの顔をのぞきこむ。

「発射準備は？」

「できてる」

「いくわよ！」

狙いを定め、ボタンを押す。まだ暗い空を、白い光が裂いた。一番先頭にいた艦の底に小さな穴があく。その穴はどんどん広がっていき、すぐに爆発音が続いた。

フォースタイトが破壊された証だ。ディオは計器を確認した。

大丈夫、まだ正常だ。

ダナが機体を急降下させた。

他の四機も続いて降下する。

敵の船の下側に潜り込んで、ダナは二射目の用意をディオに告げた。今の発射で、エネルギー回路内の温度がわずかながら上昇している。その修正を加えて、第二射発射用意完了。

また、白い光が闇を走る。

さすがに二隻やられたところで、攻撃に気がついたのだろう。

敵の艦内が動き出すのがディオにもわかった。

「戦闘機発進まで五分かからないぞ」

「せめてあと三隻！」

ジヨナの忠告にダナはわめきかえす。

「三射目、準備完了」

ディオは条件を修正する。

船団の後方へと移動しながら、ダナは三射目を敵の船底にたたき込む。

「次！」

「いいよ！」

空へ駆けあがりながら、もう一度。

四隻目がゆれた。

「もう一度！」

「ちよつと待つて……」

デイオの目が計器の上を忙しく往復する。

計算を間違えるな。

間違えるな。

自分に言い聞かせながら、制御装置の数値を調整していく。

「いける！」

「発射！それで離脱！」

五隻目が沈みはじめた。

「おまえたちは先に行け！」

「食堂で会いましょう！」

二人の乗った機体が、先頭にたった。

残る四機は、発進してきた敵戦闘機と交戦に入り、二人の退路を確保する。

デイオは後部座席でぐったりしていた。  
五隻。

乗員は脱出できただろうか。

「一機ついてきてる。もう一発いける？」

ダナの声に現実を引き戻された。

「もう一発って……」

「フォースダイト搭載機よ、あれ。当てれば落ちるでしょ」

「でも……」

「いけるの？いけないの？この機体じゃふりきれないわよ。あんと心中だなんて冗談じゃないわ」  
数秒の間。

「準備完了」

ディオは告げた。瞬間、機体が回転する。

相手の機体から発射された弾をよけ、ダナは相手の上空に回り込んだ。

チャンスは一度。

「……あたれえ！」

天から地へと。

白み始めた明け方の空を光が裂いていく。

フォースダイト搭載部こそはずしたものの、翼の付け根が溶かされた。

激しく回転しながら、敵機は後方へととばされていく。

ディオは目を閉じた。

きれいごとなんて言わない。

生き残るためならやるよ。何だって。

通話装置越しに、ジヨナの声が四機ともに無事に撤退したことを伝えてきた。

## 61・決戦のはじまり(1)

アーティカ側の襲撃が終わってほどなく、ライアンのもとへと命令書が届けられた。リディアスベイルに乗り込んでいるライアンは、艦長室ではなく二番目に広い副艦長の使用する部屋を使っている。この艦の艦長はあくまでもサラだと、自分の部下たちにしめすために。

命令書には、ライアンの部隊の配置変更が記されていた。陣全体でも最前線への移動だ。ついでとってはなんだが、部下の報告に耳を傾ける。なにやら強力な兵器を搭載した戦闘機が一撃で軍用艦を沈めたのだと聞いて、ライアンの表情が厳しいものに変わった。部下たちは知らないが、ライアンはその兵器に心当たりがあった。おそらく王子が持ち帰った資料。そこに記された技術を使った兵器だ。

「実用化にこぎつけた……いや試作機か？」

命令書が届けてきた部下の報告では、軍用艦に直接攻撃をしかけてきたのは一機だけで、あとはその護衛機だったらしい。実用化にこぎつけているのなら、五機ともにあの兵器を搭載しているはずだ。早々に試作機を破壊する手立ては考えなければならぬだろうが、いずれにしても五隻もの軍用艦を失っては、陣を組み直すしかない。いよいよアーティカと正面からぶつかる時が近づいているようだ。命令書の指示に従うべく、ライアンはサラに命令を伝えようと隣の部屋へと足を向ける。あくまでも艦全体に命令を発するのはサラの仕事だ。

隣の艦長室はひっそりとしていた。ライアンは扉を叩く。

扉を開いたのは、若い男だった。確かイネスと言ったか。サラの部屋に入り浸っているライアンのことをよく思っていないであろうこ



とは、扉を開けた瞬間の表情でよくわかった。

艦長室には他に二人の男がいた。デイランとハーヴェイ。双子のようによく似た兄弟だ。ライアンには区別がつかない。

大きな机に何枚もの書類を広げて、サラは二人と熱心に話し込んでいた。ライアンの訪れに気づいて顔をあげる。目の下にはくまができていた。アーティカを相手にするとあってよく眠れなかったのだろう。

大丈夫だろうか、とライアンはサラを気づかい、そんな自分に舌打ちする。

今はそんなことを考えている場合ではない。艦は破壊されたが、人員の大多数は無傷で脱出に成功している。

艦を移動するだけではなく、彼らを基地まで送り戻す手配も整えなければならぬ。ため息をついて、ライアンは机の上に命令書を書いた。

合計で四度、ダナとディオは出撃した。二回目の出撃では護衛の戦闘機が一機、撃墜された。三回目には、ジョナの機体が行方不明になった。

最初に出撃してから一週間。撃墜されるたびに新しい人員を加え、出撃計画は停止することなく続けられている。敵の方は謎の兵器の出現に浮き足立っているらしい。

夜襲に備えて警戒を強めているようだが、アーティカの戦闘機は警戒網をくぐりぬけ、四度の出撃で、計二十三隻の軍用艦を沈めた。

一方マグフレット軍のほうはというと、アーティカのあげた成果に十分満足しているようだった。まさか王子自ら出撃しているともいえず、ディオの存在はセンチアからただ一人戻ってきた技術者として周知されている。

さすがに本国だけあって、ディオの素性は知れ渡っている。いくら偽名を使ったところで、顔を見られれば王子と知られてしまう。軍

の後方にはそれなりに娯楽施設も備えた基地がひかえているのだが、出歩けば誰かに顔を見られるのは間違いのないところだ。

あちこちうろろするわけにもいかず、ディオはフォルーシャ号の中に隠れることを要求されていた。

傭兵といえど、アーティカの統制は取れていた。ビクトールの命令は絶対だ。まるで騎士が王に使えるがごとく、絶対の忠誠心を持っている者が多いようにディオの目にはうつった。

おかげでディオも、フォルーシャ号にいる間だけはのんびりとできた。ディオの正体を知ってもなお、彼らは普通に接してくれたし、他の部隊にディオの正体を話してしまうこともないと確信できたから。

今は甲板に腰をおろして、整備士たちに混ざっているダナを眺めている。甲板の前方では、同じように整備士たちが護衛機の整備を行っているはずだ。彼も制御装置の調整を行いたいのだが、機体本体の整備が終わるまで手を出せない。

もうすぐ冬になろうとしている。上空の風は冷たく、甲板にいる人間は皆厚着をしていた。例外はルッツだけだった。この寒空の下、さすがに半袖とはいかないものの、薄いシャツの上に作業着の前をだらしなく開けてひっかけているだけ。上背はあれど、いかにも脂肪の少なそうなひよろりとした体格なのに、寒さを感じない体質なのだろうか。

「……寒い」

ダナがぼやいた。

ルッツとは逆に、こちらは防寒着を兼ねた飛行服を着込んだ上からマフラーをぐるぐると巻きつけている。

「終わったらココア飲みに行く！」

翼の上でスパナをふりまわしながら、彼女は宣言する。

「ココアそろそろ切れるって言うてたぞ？誰か大量に消費してるやつがいるんじゃないか？次の補給まで我慢するしかないかもな」  
整備士の一人が返した。

「嘘っ、信じられない！整備が終わったあとのココアが楽しみなのにー！」

ぎゅっとボルトをしめあげて、ダナは口をとがらせた。

「俺、個人的に持ってきてる。いい子にしてたらわけてあげるよ」  
そう言うルッツに絶対よ、と笑いかけて、ダナは翼から滑りおりた。  
「デイト！制御装置見てよ」

ぼけっとその様子を眺めていたデイトは慌てて立ち上がった。何度出撃しても一人で乗り込めるようにはならず、そばにいた整備士に手を貸してもらって後部座席に潜り込む。

限度十回を越える手段はまだ見つかっていなかった。理論上は回路を冷却してやればいいはずなのだが、冷却しようとする構造的な問題が発生する。根本から設計を見直す必要があったが、修正している時間はない。

もつとも、十回を越えるだけの回数を撃つたことなどなかった。二人の機体は、敵を攻撃するのに使えるのは雷神の剣だけだ。軍用艦を数隻も沈めれば、敵から戦闘機部隊が出てくる。対抗するわけにもいかずひたすら逃げるのが基本だ。出てきた戦闘機部隊は、護衛機が相手をすることになる。従って十回を越える前に帰投できるのが今までの例だった。

次の出撃は翌朝に予定されている。自分で作った手順書通りに制御装置を確認していると、警報が鳴った。

デイトは整備の手を止めて空を見上げた。変わったところがあるようには見えなかった。

「敵が動き始めたらしいぞ」

通話装置を手にとって、艦内と会話していたルッツが言った。

「いよいよ全面对決ってわけね」

整備が終わったばかりの機体を見ながら、ダナはスパナを握りしめる。本当ならディオはいますぐにでも、もっと後方に下がらせたいのに。きつと彼はきかないだろう。

ディオが自分は退かないという意志をこめて、戦闘機の後部座席から警告を発する。

「撃てるのは十回までだよ？」

「十回撃てれば十分でしょ。艦を破壊すれば、救援活動に人員を割かなきゃいけなくなるもの」

まだスパナを握りしめたままで、ダナは空を仰いだ。出るというのがディオの意思ならば。なんとしても彼だけは無事に帰さなければ。どこまでも晴れ渡った青が見下ろしている。もう少しすれば、ここが戦場になるなんて信じられなかった。

## 62・決戦のはじまり(2)

敵の来襲にそなえて、全員が交代で食事と休憩をとることになった。ココアを飲みそびれたとぶつぶつ言っているダナの前に、ルッツがココア缶を見せびらかすように置く。

「帰ってきたらわけてあげるよ」

「今飲みたいのに！」

ダナはふくれてみせる。これがルッツのげんかつぎみたいなものだとわかつている。約束を果たすためには生きて戻らなければならぬ。

ダナの脳裏を、最後にヘクターを乗せて飛んだときのことがよぎった。彼と一緒に負ける気なんてしなかった。

今日の前にいるのは、不安そうな顔をしたそろそろ成人の日を迎えようとしているのに、まだ大人になりきれしていない少年だ。年はさほど変わらないのに、自信にあふれていた彼とは違う。

「ディオ」

名前を呼んでみる。

「怖くてしかたないって顔してる」

「怖いんだからしかたないよ」

ディオは正直だ。いつだって。怖いときは怖い、不安なときは不安だと。自分の心を偽ることをしない。

「大丈夫……とは言えないけど、全力はつくすから」

「それって不安をあおってるよね」

テール越しに顔を見合わせて笑う。

後ろにいるのがヘクターだろうがディオだろうが、ダナの仕事にかわりはない。

敵の攻撃をくぐり抜け、無事に戻る。それだけだ。

マグフィレット軍が、敵を迎え撃つ準備を終えた頃。敵の軍勢がそ

の姿を現し始めた。

最初は数百あつた軍用艦は、今までの交戦でその数を減らしている。望遠鏡で敵軍を確認していたビクトールは、声をあげた。

このままいけば正面からアーティカにぶつかると一団の中。見覚えのある艦が、悠然とこちらに向かって進んでくる。

「サラ……」

その声に気がついたのは、すぐそばにいたディオだけだった。ビクトールの顔を見上げれば、険しい表情をしている。

「ビクトール様？」

自分の戦闘機を最終点検すると言って、ディオを甲板に残していたダナが戻ってきた。厳しい表情のビクトールに不審そうな目を向ける。

「リディアスベイルがいるぞ」

望遠鏡を渡されて、ダナものぞきこんだ。丸く切り取られた世界の向こうに何度となく乗った、堂々たる軍用艦が見える。そこにいるのが誰だか知っている。

ざり、と奥歯を噛みしめてダナはビクトールを見つめる。アーティカを裏切った、でも憎めない人があそこにはいる。これ以上戦場で会いたくない、だから。零れ落ちた言葉にこめられた意思は強固なものだった。

「……破壊します」

「乗員の待避時間は与えてやれ」

それだけ言うと、ビクトールは向きを変えた。ゆっくりとした足取りで、艦橋へと進んでいく。

「……ダナ？」

気遣うディオには強いて作った笑顔を向けて、ダナはディオの肘をつかんだ。そのまま格納庫へと入る。

前方の扉を大きく開けたそこに待っているのは、彼と彼女の戦闘機。それにはまだ乗り込まず、ダナはディオの肘をつかんだまま壁際へとよって、そこに取り付けられている通話装置を手に取った。

ディオのすぐそばまで顔を近づけ、二人の耳の間に受信装置がくるようにする。

「通信回線開け！」

真つ先に入ってきたのはビクトールの声だった。この会話を聞こうとしている人間は、全艦にいるはずだ。

「どこと通信？」

「リディアスベイル、よ」

ひそひそとダナはディオにささやく。

サラがコードを変えていなければ、まだ通信できるはずだというビクトールの読みはあたった。

「おひさしぶりです、ビクトール様」

通信回線を経由して届いたのは、柔らかな女性の声だった。聞こえてくる声から判断すれば、そこそこ元気にやっているようだった。

ビクトールは腕を組んだ。無駄だと知りつつも、話を切り出す。

「戻ってこい。今ならまだ間に合うぞ」

「お断りします。私は自分の意志で……貴方のもとを離れたのですから」

サラの声に迷いはまったくなかった。逆にビクトールを糾弾するかのようになり、強い口調で責め立てる。

「最近、アリビディル軍を攻撃している新しい兵器。貴方はそれが何を意味しているのかわからないのですか？」

「わからないわけじゃないさ。何だっけって使いようだろ」

生き残るためには強力な武器が必要だ。それを行使することに、彼はためらいを感じない。大切なのはまず生き残ること。戦争が終われば、その開発によって得られた技術をほかに転用することだってできる。昔からそうして発展してきたのだから。

「私は……私は、反対です。許せません。空を一国が独占するような兵器など。空に生きる者の誇りにかけて、許せません。それを許容するというのならあなたも許しません。こちら全力でいきます」

回線を沈黙が支配した。若いな、とビクトールは思った。数十年前なら、彼本人もそう思ったかもしれない。

実際に行動にうつすかどうかは別としても。ビクトールは最後の警告を通達した。

「サラ……俺はやるぞ？もうすぐダナが出撃する。戻ってこないならせめて下がれ」

「傭兵にかけ言葉とも思えませんね。あなたの方こそ下がりなさい、ビクトール・ヴァンス。あなたの持つ兵器は、この空には存在してはいけないものです」  
くすくすと笑う声。

どこか神経質な笑いのように、ディオの耳には聞こえた。受信装置を二人の耳の間にくるように持ち上げているダナの手がわずかに動く。

「やはりあの時、ダナを殺しておくのでした。そうすれば、今頃あなたとここで対峙することなどなかったでしょうに」

「サラ」

「交渉決裂です。ごきげんよう」  
通信は一方的に切られた。

ため息をついて、ダナは受信装置を壁に戻す。こちらに向けられた背中が小さく見えて、ディオは、手を伸ばした。

後ろから彼女を抱きしめる。その体勢だったのはほんの少しの間だけ。すぐに彼女はディオの腕をほどいて抜け出した。それからディオの手をとって、ダナはかろうじて笑顔に見えるように口角を上げてみせた。

やるしかない。二人の間に流れる決意は同じ。空にかける思いはきつと皆同じなのに。どこですれ違ってしまったというのだろう。

回線を切って、サラは艦長席に両手をついた。



ビクトールの言葉は嬉しくないわけではなかった。

それでも。彼の選択した道は、彼女の道とは相反するものだから戻るわけにはいかない。

艦橋内をぐるりと見回す。アーティカから連れてきた十名が、サラを元気づけるように笑顔を向けたり頷いて見せたりとそれぞれの意思を表明してきた。

「ライアン……命令を」

「大丈夫か？」

「大丈夫よ。最初から覚悟はしてきたわ。私も、部下たちもね」

そうだ。覚悟してきた。アーティカを敵に回しても、絶対に阻止しなければならぬことがある。

「んじゃ、行こうか」

ライアンはふてぶてしい笑みをうかべて、最初の命令をくださった。

「全速前進。フォールシヤ号をねえ！」

ライアンの部隊が全速で前進するのを合図にしたかのように、双方の船団から、戦闘機が飛び立った。

### 63・リディアスベイルの最期(1)

ダナは真っ先に飛び出した。ここまで両軍が近づいてしまったら、他の機体の護衛に頼るわけにはいかない。ただ、彼女の腕だけが頼りだ。

操縦桿を引きながら、今日は冴えている、と思う。敵の撃ってくるコースも、敵の機体の動きも完全に読める。撃ってきた敵機二機の間をすり抜けるようにして、先頭の軍用艦にみるみる接近する。

「ディオ！十秒後に発射できるようにして」

勝手にダナがカウントダウンを始める。むちゃくちゃだと思いつつ、ディオは必死に計器をにらみつけ、手を動かした。カウントダウン終了一秒前。ぎりぎりのところで設定が完了する。

「行くわよっ」

見慣れた白い閃光が、敵の艦底に穴をあけ、その奥で爆発する。ぐらりと艦が傾くのが見えた。ややあつて、最初の救命艇が飛び出してくる。

戦場の後方へと退いていくそれを迎え入れるために、敵の一部隊が行動を開始するはずだ。敵が救援活動に人員を割かれれば、それだけこちらが有利になる。

「ディオ！十発撃ったら離脱するわよ」

「離脱つてどこへ？」

「後方基地！」

何度も出撃している間に、ダナが機体を操作するたびに体にかかる不自然な重圧にもだいに慣れた。目を回すこともなく、ディオは修正した数値を入力する。

また敵の戦闘機が接近する。ダナは機体を海面すれすれにまで降下させた。敵機も食らいついてくる。

海面と機首がぶつかりそうになったところで、今度は機首を垂直になるほど上に向ける。

着いてこられなかった敵の機体は、そのまま海につっこんだ。激しく水しぶきがあがる。二人はそれを見ることなく、空高く駆けあがった。

ぐんぐん近づいてくる軍用艦の横っ腹にダナの放つ白い閃光が突き刺さる。二人の機体を見つけて攻撃をしかけてきた敵戦闘機に、アーティカの戦闘機が弾をうちこむ。それを確認する間もなく、二人はもう一隻の軍用艦へとつっこんでいく。

ディオの指は忙しく制御装置の上を走り回っていた。計器が警告を発し、ディオの眉がよる。

「温度が上がりすぎてる！あと一回が限界かも」

今までならこんなことはない。機体の運動量がいつもよりだいぶ多いからだろうか。確かにエネルギー消費量も、いつもの倍近くになっている。

「あと一回？」

ダナの声が裏返った。

「まだリディアスベイルにたどりついてないのに！」

他の軍用艦に攻撃されるより、雷神の剣の方が脱出までの時間を稼げることが多い。撃ち込まれた弾を、わずかに右の翼を上上げることで交わしたダナは、結論を出した。

「この先にいるはずのリディアスベイルを撃つ！」

甘いかもしれない。リディアスベイルまでたどりつくのは難しいことかもしれない。それでも、サラにはやはり生きていてほしいと思ってしまう。

ディオのいる後方の席からは、何も聞こえてこなかった。

リディアスベイルの艦橋は静かなものだった。

持ってこさせたコーヒーをすすりながら、ライアンはやる気があるのかないのか判断しかねる態度で、戦場を眺めている。

「ビクトールはどう動く？」

コーヒーカップを手にしたまま、ライアンはサラに視線を向けた。

「そろそろ右手から新しい部隊を展開させるのではないかしら」

「それじゃそつちの守りを強化するか」

サラの予想を迷うことなく受け入れて、ライアンは自分の率いる五隻の軍用艦を、サラの予測した場所へと向ける。

彼の部隊は、今回に限り独自行動を認められていた。ビクトールの思考を完全に読める者がいる。それが彼の部隊の強みだ。

「本当は怖いんじゃないのか？」

「……何が？」

サラは眉をあげてライアンを見つめる。

「……いや」

自分に向けられる冷やかなサラの視線に、思わずライアンはたじろいだ。

「……サラ、か」

攻撃をことごとく交わされて、ビクトールは苦笑いした。サラが幼い少女だった頃、まだあの二人が生きていた時からそばに置いてきた。

ハーレイとオリガから実戦に必要な全てを教えこまれて。ビクトールの指揮を一番近いところで目にして。

思考回路は完全に把握されて当然ということか。

さて、これから先どう出るか。ビクトールは戦場に鋭い目を向ける。頭を忙しく回転させて、敵の動きを先読みしようとする。

敵の動きから判断するところ、リディアスベイルを旗艦としているようだ。契約したばかりの傭兵艦を旗艦にするある種の剛胆さには賞賛の拍手を送るべきなのかもしれない。

それならば、こちらはこう出てやろう。

「攻撃を強化しろ。リディアスベイル以外に、だ」  
部下を見殺しにできるか否か？

ビクトールは相手の指揮をためす気になっていた。  
見殺しにするならそれでいい。

ダナはようやくリディアスベイルを見つけた。

「ディオ」

名前を呼ばれるまでもない。

「いいよ、いつでも」

ディオはすでに、数値の修正を終えていた。

「ありがとう」

ちらりとディオに笑顔を向けて、ダナはすぐに正面を見据える。

ありったけの感謝と尊敬の念と裏切られた失望と。ありとあらゆる感情をこめて。

一瞬のためらいの後、ダナはボタンを押す。

「あたれえ!」

ダナは放つ。この世界最強の閃光を。リディアスベイルの艦底が溶かされた。

それと同時に。

アーティカからの砲弾がリディアスベイルを直撃した。

サラはとっさに顔をおおって、床に倒れ込んだ。艦全体を衝撃が襲う。

艦橋に流れ込んでくる風。飛び込んでくる砕かれた艦の破片。

いつかのことを思い出した。衝撃が収まるのと同時に咳き込みながら、彼女は立ち上がる。

「ライアン!」

立ち上がった彼女の視線の先には、倒れているライアンの姿。叩きつけられた時に頭をうったのだろう。意識がない。艦の破片で傷つけられたのか、肩から出血もしている。

「終わりね、これで」

サラのつぶやきを、すぐそばにいたエレンが聞きとがめた。よろよろと立ち上がってくる、アーティカから連れてきた部下たち。軽傷を負った者はいるものの、死亡者はいなかった。

「この艦が終わりつてことよ」

サラは通話装置を手にした。

「全員脱出なさい。この艦はもうすぐ沈むわ」

大きく息を吸い込んで続ける。

「ライアンが怪我をしたの。私の部下に連れて行かせるから、彼と医師を同じ救命艇に乗せて頂戴。専門家の手当てが必要だわ」

乾いた音をたてて、通話装置が元に戻される。

それからサラは、艦橋内を見回した。

「エレン、ロナルド、フェイス、デイラン、ハーヴェイ、イネス、

ユール、マリオン、アイザック、レティシア」

アーティカからついてきてくれた部下たち全員の名前を呼ぶ。

「共に来てくれたこと、感謝するわ。脱出したらアーティカに戻るもよし、別の傭兵団に加わるもよし、あなたたちの好きにいなさい。戻るなら、ビクトールはあなたたちを受け入れるでしょう」

大きく息を吸い込んで、サラは最後に嘘を吐く。

「私は最後に脱出するから、救命艇を一つ残しておいて。あなたたちは急ぎなさい」

部下たちにライアンを連れて脱出するようにと告げ、サラは脱出する彼らを見送った。

不安そうな笑みを向けるエレンには、穏やかな笑みを返して見せて

## 64・リディアスベイルの最期(2)

サラは三つ編みにして背中に垂らしていた髪をほどいた。艦の中を一回りして、誰も残っていないのを確認してから甲板へとあがる。

どうせ艦とともに落ちるのならば、空を見上げながらの方がいい。風が髪を乱す。

もう一つの世界では、彼と再会できるだろうか。サラは唇にのせる。愛しい彼の名を。

ディオの叫びとともに、機体が爆風にあおられてはじきとばされた。

「暴走する！もう持たないよ！」

「脱出しなきゃ！脱出装置のボタン押しして！」

機体を立て直しながら、ダナはディオに脱出装置の場所を示す。

ディオは脱出装置のボタンを押したが、本来ならば宙に飛び出すはずの彼の体は、機体に固定されたままだった。

「今の衝撃で壊れたみたいだ……君だけ脱出するといい」  
後悔なんてしない。自分で選んだ道だ。

無理を言っパイロットになってもらった、ここまでやってもらえれば十分だ。

君には生きていてほしいと思うよ。

そう格好つけてみても、肝心のところで手がふるえているのだから情けない。

自分の人生のけりのつけかたには後悔なんてしないけれど、死ぬのは少し怖いかもしれない。

「冗談じゃないわ」

ダナの声が低くなった。

「一人だけ生き残るのは、もうごめんよ」

「君まで死ぬことはないんだ」

「あなたと心中だなんてもつとごめんよ！」

暴れる機体をなだめすかして、ダナはリディアスベイルのすぐ上へと移動した。

「甲板におりて！早く！」

体を固定していたベルトを外したディオは、リディアスベイルの甲板へ転げ落ちた。

続いて飛び降りようとしていたダナが、制御を失った機体の上でバランスを失う。

ディオは思わず手を伸ばした。

非力な彼に受け止められるはずもなく、落ちてきたダナの下敷きになる。

二人の乗ってきた戦闘機は、爆発し、すぐそばにいた軍用艦に炎をあげながら体当たりしていった。

あと数十秒遅かったら、二人とも今頃炎に包まれていたことだろう。今まさに沈みつつあるこの艦へ移動したことが、どれほど命をなげられることにつながるのかはわからないけれど。

「……受け止められなくてごめん……」

「……あたし重いから……」

互いに謝りながら立ち上がる。

「これからどうする？」

「艦底におりて、残っている救命艇を探す。たぶん一隻くらいは残っていると思うの。なかつたらなかったで別の手段を考えましょ」  
「確かな足取りで、ダナは歩き始めた。そのすぐ後ろからディオは続く。」

格納庫を回ると、前方に誰か立っているのが見えた。

「あら……」



豊かな髪を風になびかせていたのは、サラだった。思わず二人とも足を止める。

「こんなところで会うなんて、奇遇ね」

まるで街ですれ違ったくらいに気軽さで、サラは二人に笑いかける。「艦底に救命艇が残っているはずだから、それを使いなさい」

「サラ様は？」

顔にかかる髪を手で押さえながら、サラは笑った。

「私はここに残るわ。もう疲れたの。いつまでも帰ってこない人を目指し続けることにね。きつと私の行く先は地獄だから、彼には会えないだろうけれど」

「そんなのって……」

言葉を失って、ダナとディオは視線を交わす。

「早く行きなさい。ダナ」

サラの口調が真剣なものになった。

「あなたは、思い出と添い遂げる必要はないのよ。きつとヘクターだってそれを望んでいるはず。だから行きなさい」

ダナの手が、胸元を押さえた。分厚い飛行服の下、フレディから渡された指輪があるはずの場所を。

「あんたも思い出と添い遂げるには若すぎるだろうが」

上からふってきた声に、三人とも声の方を見上げた。

上空に救命艇が待機している。そこから甲板にロープをたらして、

背の高い男がすべりおりてきた。

黒い髪、日に焼けた肌。上半身の衣服は身につけておらず、応急手当と思われる包帯が右肩に巻き付けられていた。

一瞬別の人間を連想して、ダナの目が見開かれる。

「地獄の悪魔にくれてやるのは、もつたいなさすぎる。悪いが一緒に来てもらおうぞ」

そう言いながら、ライアンはサラの方へと歩んでいく。

「あなたにそんなことを言う権利なんてないわ！ 私たちはそんな関

係……」

サラの台詞は、最後まで続けることはできなかった。無造作ともいえる動きでライアンはサラの鳩尾に拳をたたき込み、崩れ落ちた体を、よろめきながら抱え上げる。そのまま救命艇からおろしたロープに向かって歩き始めた。

「待ちなさいよ！」

ダナがわめいて、銃を抜いた。サラを抱えたまま、彼はゆっくりとふりかえる。

銃口をまっすぐに彼に向けるダナに気づくと、静かな笑みをうかべた。

「俺を殺して連れ帰るか？」

正面から銃口に相對して、彼の視線はゆらくことを知らない。

止めるべきなのか否なのか。ディオが判断しかねているうちに、ダナは顔をゆがめた。

「約束しなさい。絶対に泣かせないって。幸せにするって」

ダナの言葉にライアンの笑みが、苦笑へと形をかえる。

「お嬢さんに言われるまでもないさ。アーティカから引っ張りだした責任は取る」

責任は取るつもりだ。だから戻ってきた。サラが残るであろうことを予測して。

「お嬢さんじゃない。ダナ。ダナ・トレーズよ」

「ダナ、か」

サラとの寝物語に何度も名前が出てきたような気がする。

彼女が……そうか。口調を優しいものにかえて、ライアンは二人をうながした。

「じゃあ、ダナ。早く行くんだ。この艦はそろそろ危ないぞ。アリビデイルの捕虜になりたいってなら、俺の救命艇に乗せてやってもいいが、そんなのごめんだろ？」

「……名前を覚えて、あなたの」  
ふん、とライアンは鼻で笑う。

「ライアン・ワイオン。ライアン・ヘクター・ワイオンだ。名前を聞いてどうする？」

ダナの視界が、あふれ出た涙に支配されそうになった。  
似ているだけじゃない。

彼の名前を持った人。

その人がサラを連れていこうとしている。

「あんたがサラ様を不幸にしたら、地獄の果てまで追いかけるためよ」

「おつかねえな。アーティカの女は。あんたも苦労するぜ、きつと」  
最後はディオに同情的な口調で、ライアンは二人を交互に見比べる。  
それ以上ダナが何も言わないのをみてとると、ライアンは再度足を  
進めはじめた

「忘れないで！空はどこまでもつながつているんだから！不幸にな  
んてしたら、絶対、絶対、絶対許さないんだからね！あたし  
は本当に地獄の果てまで追いかけるわよ！追いかけるんだから！」  
後ろから投げつけられる、どこか悔しそうな少女の声と足を踏み鳴  
らす音。

救命艇からおろしたロープに二人の体を固定しながらライアンは思  
う。

サラが目覚めて、望むのなら。アーティカへ帰してやるのもいいの  
かもしれない。

その時には、きっと胸が痛むだろうが。  
ふられるのには慣れているし、胸が痛むのもたいして長い時間にな  
いのも、経験からわかっている。

「行こう。僕たちも」

ディオはダナをうながした。艦橋の方から爆発音が響いてくる。  
銃を握ったままの、ダナの手がだらりと落ちた。肘をつかむように

して、ディオは艦底を目指す。

途中ダナが道を変え、最短ルートで救命艇にたどり着いた。

元はアーティカの艦だ。どこを通ればいいのかは、ダナ自身よく知っている。

一つだけ残された救命艇がリディアスベイルを離れるのと同時に、

最後の爆発が艦を海へと沈めていった。

## 65・夢の終わり(1)

後方基地に帰り着くのと同時に、ディオはティレントへと強制送還された。もつとも雷神の剣を失ってしまったえば、戦場においてもディオにできることなどない。

サラの行方を問われたダナは静かに首を横にふり、ビクトールは、それで全てを悟ったようだった。

ディオが連れ戻されても、ダナにはやらなければならない仕事はたくさんある。フォーサダイトを搭載しない普通の戦闘機に乗り換えて、毎日のように出撃し、何機もの敵機を撃墜した。

そして一ヶ月。

ついに両国の間に停戦が成立し、アリビデル軍は撤退した。センティアからは多少の領土をもぎ取ったが、マグフィレットには多額の賠償金を払わなければならなくなったのだから、むしろ失ったものの方が大きいと言えるだろう。

国王の喪中ということもあって、大げさなものではないが王妃の主催で祝いの宴が開かれることになった。勝利の立役者として、アーティカの長にも招待状が送られ、彼は養女を連れて出席すると返してよこした。

ディオは鏡の中をのぞきこんだ。夜会服に身を包んではいるが、借り物のように落ち着かない。何度も鏡の前でタイを直し、髪を撫でつけ、夜会服の裾を引っ張っては直す。

そんなことを繰り返しているうちに招待客が姿を現しはじめ、ディオも会場へと入ることになった。王妃とやらんで一段高いところに座をしめて、勝利を祝う言葉に耳を傾けていても、目は会場の中を探し回ってしまう。

周囲より一段高いところにある黒と、そのそばにいるはずの赤を。永遠に続くかのように思われた勝利を祝う言葉がようやく終わりを

迎え、ディオは席をおりることを許された。音楽が流れはじめ、招待客はそれぞれ相手を見つけてはフロアへと出ていく。

せわしなく会場内をうろろしているディオに、何人が声をかけた。それには生返事を返しておいて、ディオはひたすらに捜し求める。

「ディオ！」

名前を呼ぶ、耳に馴染んだ声にディオは足を止める。

呼び止めたフレディは、相変わらず夜会服をすつきりと着こなしていて、本人も借り物のようだと思っているディオとは雲泥の差だった。顔立ちは似ているはずなのに、どこで違ってしまったのだろうか。「ダナならそこにいるぞ」

「そこってどこ？」

「あの真ん中」

フレディがしめしたのは、招待客の中でも比較的若い女性がつっている輪の中央だった。色とりどりのドレス、きらめく宝石の隙間からかるうじて鮮やかな赤い髪がちらりと見える。

「何あれ……」

「女つてのはわからんな。ダナを見かけたとたんきゃーきゃーわめいて、あつというまに女の子団子のできあがりだ」

フレディは会場内を見回していたが、誰かと目を合わせて右手をあげた。ビクトールが二人の方へと近づいてくる。

「まさかこんなことになるとは思いませんでしたよ、殿下」

笑いながらビクトールはディオに頭を下げる。

「あの真ん中にダナがいるって聞いたんだけど？」

「そのようすな」

アーティカの長は、無骨な外見からは想像もつかないほど優美な仕草で、女性たちの間へと入っていった。

「ビクトール様よ！」

押し殺した、それでも黄色い歓声があがる。

「ダナ様！」

「すてき！」

彼女たちの歓声は、押し殺していても会場内に響きわたる。何人ががぎよつとしたようにこちらをふり返った。

「いったいどうなって……」

ディオが口を開けてその様子を眺めていると、フレディが笑いながら教えてくれた。

「今じゃダナはちよつとした有名人ってやつなのさ。なにしろ今回マグフィレット軍一の撃墜数だしな。ビクトールは前から女の子……まあ熟年の御婦人ふくめて、人気あつたし。あの二人がならぶと絵になるのは間違いないところだろ」

やがて群がる女性たちを押しつけて脱出することに成功したビクトールが、ダナの手を取って戻ってきた。

確かに絵になるとディオは思った。

ビクトールは上背もあるし、顔立ちが整っているとはいいがたいが、不思議と人をひきつける魅力のようなものがある。黒と白で統一された夜会服をまとうていても、彼の素性を知っているからなのか、どこか優雅なだけでは終わらせないといった雰囲気を漂わせている。ビクトールに腕を預けているダナの方は、文句なしの美少女だ。今は肩や胸を大胆に露出するのが流行だが、彼女は首もとまで完全に覆っていた。瞳の色に合わせた深い緑の生地の上を、白の繊細なレースが飾っている。スカートには、細かな模様が金の糸と何万ものビーズで刺繍されていた。

伸びかけの髪を、ディオには名前もわからないほど何種類もの宝石がつけられたピンでまとめているのだけが、装身具だった。

「お招きにあずかり、光栄です……殿下」

ビクトールにうながされるまでもなく、流れるような自然な仕草でダナは頭をさげた。

「あら……殿下よ？」

「こちらにいらしていたのね」

ひそひそとささやいているつもりが、少しもささやきになっていない。しっかりとディオの耳にも届いて、苦笑いさせる。

さっきからここにいたというのに、どれだけ影が薄いというのだろうか。

「……踊ってもらえないかな」

「喜んでお受けします、殿下」

手を取って出ていく二人に、後ろからフレディが声をかけた。

「ディオ！あとでかわれよ！」

フロアは人でいっぱいだった。ぶつからないように用心しながら、二人もその輪の中に加わる。

「あら？」

ダナが驚いたように小さな声を発した。

「背、のびた？」

いつか船室で踊った時には、同じ位置にあっただけの頭が、今はほんの少しだけ高い位置にある。

「それならいいんだけどね、靴が上げ底なんだ」

苦笑いしながら、ディオは白状した。女性が踵の高い靴をはくと、ディオより頭の位置が上になることも多い。以前からこういう場に出るときは、背が高く見えるようにと細工をした靴を履くようにしている。

「ダナは縮んだ？」

「あたしは、ぺたんこの靴だから」

「何で？」

くるりとターンしながら、ダナは頬を膨らませる。



「ディオが言ったでしょ。女性の方が背が高いと踊りにくいって」  
ターンさせたダナの背中にもう一度腕を回す。

「覚えてたんだ」

「……覚えてるわよ」

あの会話を交わしたのが、ずいぶん前のように思われる。

そのまま数曲踊って、ダナをフレディに引き渡した。

ディオに誘ってほしそうに、視界の隅をうろろろしている女の子たちには気づかないふりをして、壁際にいたビクトールに話しかける。

「ダナを正式に養女にしたんだって？」

ビクトールは薄く笑って、目を細めた。

「今までと何も変わりませんが……自分はいつにアーティカを継がせようとも思っています。好きなように生きればいい。正式に手続きをしたのは、ただ自分の気持ちの問題なのですよ」

二人の目の前をフレディに導かれて、ダナがくるくると回りながら通り過ぎていく。

「娘というのも悪くはないですな」

フォルーシャ号の食堂で、一人飲んでいた時とはまるで違う表情だった。

そのまま二人そろって壁の花になっていると、頬を紅潮させたダナがフレディに手をひかれて戻ってきた。

入れ違うようにビクトールはそばを通りかかった女性に声をかけて、フロアへと出ていく。

## 66・夢の終わり(2)

「飲み物取ってくる」

とフレディは、部屋の向こう側へと歩いていく。ダナが手ではたばたと顔を仰いだ。頬は紅潮したままで暑そうだ。

「外に行く？」

「……行く」

すぐそばのテラスへと窓続く窓を開けて、二人はテラスへと出た。

「楽しかった？」

「……そうね。楽しかった。でも一度体験すれば十分ね」

二人はならんで手すりにもたれかかる。冬の空気も冷たく感じられなかった。

「ビクトール様つてば、招待状きたとたん大変だったんだから。行儀作法の家庭教師にダンス教師、宝石商は呼びつけるわ、それから服屋に美容師に……」

げんなりした様子で、ダナは手すりに顔をうめた。その様子からすれば、相当特訓させられたのだろう。先ほどまでの身のこなしを見ていればそれはディオにもわかった。出会った頃とはまるで違う。

「こっちについたらついで女の子に囲まれるし、こんなの一度で十分よ」

「ビクトールが娘はいいもんだって言ってたよ」

「それならいいけど」

ダナは顔をあげた。

雪、とつばやく。今まさに最初のひとひらが落ちてきたところだった。

「明日の朝にはつもっているかな？」

「つもるといいわね。雪におおわれた景色ってそれだけで違って見えるから」

ぎこちない沈黙が二人の間を支配する。まるでお互い相手の出方を待っているような。

「ダナ」

先に沈黙に耐えきれなくなったのは、ディオの方だった。名前を呼ぶのと同時に、片方の手で腰を引き寄せる。

反射的に彼を押し退けようとしたダナの手が、一瞬迷って下に落ちた。

ディオは、ダナの顎をもう片方の手で持ち上げた。せわしなく瞬きを繰り返していた碧玉色の瞳が、長い睫の影に姿を隠す。

もう一度名前を呼んで、ディオはゆっくりと顔を近づけた。二人の息が混ざりあうところまで接近したその時。

「はい、そこまで」

無粋な声に、ダナは悲鳴をあげてとびのいた……はずが慣れない長い裾に足をとられてよろめいた。

「悪いな。じゃまして」

少しも悪いと思っていない口調で、ダナを受け止めたフレディはディオに手をふった。

「いつからいたの？」

「雪、のあたりから」

「見てるくらいならもっと早く声かけなさいよ！」

背中側から両肩をフレディにつかまれたまま、ダナは上半身をそらせるようにしてフレディをにらみつける。

「悪い悪い。初々しいなー、とか思ってたら声かける隙がなくなってる」

やはりまったく悪いと思っている様子はない。ようやく気を取り直したディオに、フレディは真面目な声になって言った。

「ディオ。お前は先に戻れ。俺とダナはもう少し時間つぶしてから行くから」

「何でだよっ」

「お前考えてもみる。留学切り上げて戻ってきて、数ヶ月すれば国王様だ。今国中の貴族たちが娘を嫁がせたい男だぞ？ビクトールみたいな新興貴族の養女と姿くらまされて、やつらが楽しいはずがないだろ」

「政治の実権は叔父上が持っているじゃないか」

「それでも、だよ」

フレディは苦々しい口調で続けた。

「王妃様の親ともなれば、国の政治に口は出せなくても王妃様の志向に影響を及ぼすことができるさ。商人たちはせつせとそいつの屋敷に通うだろうな。自分の商品を王宮に納められれば、王室御用達の看板をあげることができるだろ」

当然そこには賄賂のやりとりだつて発生するだろう。ディオは黙り込んだ。

「宮廷内で彼女の地位を悪くしたくなかったら、先に中へ戻れ。俺と二人でいる分には、『カイトファーデン家の坊ちゃんにだまされてかわいそうに』ですむからさ」

自分がその方面で悪名高いのは、フレディは十分承知している。それを利用するのに何のためらいもない。

行くようにとダナにもうながされて、ディオは不承不承会場へと戻った。

「邪魔して悪かったな」

「いいわよ。あなたが言うのは当然のことだから」

急に夜風を冷たく感じて、ダナは身をふるわせる。ディオといた時はまったく寒いとは感じなかったのに。肩にフレディの上着をかけられた。

「寒くないの？」

聞かなくてもいいことを、あえて口に出してしまつ。こんな風に扱

われるのには慣れていない。どうすればいいのかわからなくて、ただ上から舞い降りてくる雪に視線を向ける。

「寒くないとは言わないけど、俺って紳士だから」

「何それ」

ふいに、フレディに肩を抱き寄せられた。耳元で優しい声がささやく。

「俺とディオの立場が逆ならよかったのにな。カイトファーデン家の息子なら王位継承権は持っていないから、周りも『あらあら可愛らしい二人ね』ですませてくれたらうに」

「言ってみても仕方ないわ、そんなこと」

ダナは、フレディの肩に体重を預ける。

「あたしね、数日中にクーフへ戻る。もうここには来ないと思う」

「それがいい。そうすれば俺にも、チャンスが回ってくるし」

「何のチャンスよ？」

小さく笑ってダナは、フレディに預けていた体重を元に戻そうとしたが、彼の手がそれを引きとめた。

「今後ろに見物人がいる。もう少しそのままでした方が後々面白いぞ」

フレディの悪巧みにダナものった。もう一度フレディに寄り添いながら、ため息を吐き出す。

「あたしが物語の主人公だったらよかったのに。そうすればいつまでも夢を見られていたもの」

夢の世界の住人だったら、もう少しだけ一緒にいることができた。誰にも何の気兼ねもすることなく。けれど、現実はそんなに甘くはなくて。旅の間に結んだ絆は、身分の差という壁によって断ち切れようとしている。

「さめない夢はないよ」

フレディの声はどこまでも優しい。きつと彼は知っている。ディオ

とダナが何をしようとしているのかを。

「そうね。そろそろ現実に戻らなきゃ」

肩から滑り落とした上着をフレディに返し、ダナは手を伸ばした。艶やかな笑みを作って、首をかしげてみせる。

「フレドリク様、現実世界まで連れ帰っていただけける？」

「喜んで」

恭しい仕草で、フレディはダナの手を取った。

フレディのもくろみ通りカイトファーデン家の長男の次なる狙いは、赤い髪のパイロットだと言う噂はあつという間にフロア中に広まった。

その直後。

獲物が養父と同じ自動車で帰宅したことで、今日のところは失敗だという噂も、とんでもない速度でフロア中を駆けめぐる。

とはいえ、フレディは会場で知り合った若い女性と姿を消し、彼女狙いだった男性陣にため息をつかせたのだった。

自分の娘を押しつけようとする貴族たちに囲まれたデイオは、苦々しく思う半分、彼を羨ましいとも思った。彼と立場が逆ならよかったのに。そう願わずにはいらなかった。

## 67・明かされた秘密(1)

翌日、ディオはダナに使いを出した。

きつとこれからも宮中へとビクトールに連れられてくることはあるだろうけれど、彼女とは今までみたいには会えなくなる。

その前に一度きちんと伝えなければならぬことがある。

そう思つて従僕に使いを頼んだのに、戻ってきた彼は、彼女は外出してまだ戻っていないようだと言つた。ディオに告げた。

ディオは首をかしげた。どこに行つたというのだろう。テイレントに知り合いなどほとんどいないはずだ。

伝言は残してもらつてある。帰宅すれば彼女から連絡があるだろうと、気を取り直してディオは執務室へと入つた。

まだ正式に即位していないとしても、大多数は宰相にまかせるといふ前提条件があつたとしても、政務は待つてはくれないのだ。

昼食を終え、午後の休息时间になつても彼女から連絡はなかつた。

ふらりとフレディが現れたのは、そろそろ執務を終えようかという頃だつた。相変わらず最新流行の衣服に身を包んでいて、それが嫌味なくらいに似合つている。

「まいつたよ、すっぱかされた」

ぼやきながら、フレディは勝手に執務室へと入りこんでくる。ディオは書類に判を押そうとしていた手をとめた。

「すっぱかされた？」

「ダナだよ、ダナ」

むくれた顔でフレディはディオの机の端に腰を落とす。山積みになつた書類を一枚取り上げ、

「国王様も大変だよな」

とつぶやくと、もとの位置にもどした。

「すっぱかされた？」

そんなフレディにはかまうことなく、ディオは眉をよせて机越しに身を乗り出した。

「ああ。今朝急に思いついて、昼食に誘ったんだよ。昨日もうすぐ帰るって言ってたし、その前にとまって。何の連絡もなく結局待ちぼうけだ」

つまらなそうな顔のフレディとは対照的に、ディオの顔からは一気に血の気がひいた。

「彼女、今屋敷にもいないみたいなんだ。僕も使いを出したんだけど、外出したまま戻ってないって」

フレディがあわてて机から滑り降りる。

「事故にでもあったか？ビクトールをすぐに呼べ」

フレディの言葉にしたがって、ビクトールが執務室へと呼び出される。

ダナと連絡を取れないときいた彼は、一瞬眉をひそめたが、すぐに警察やら病院やらへと問い合わせの手はずを整えた。

病院に運ばれた怪我人の中に該当するような人間はいなかった。警察に届けられた事件の被害者の中にもいない。赤い髪は目立つはずなのに、彼女の姿は完全に消えていた。

「誘拐……か？」

焦れたようにフレディが爪をかんだ。

「誘拐といつても、理由がなければ……」

ビクトールにも心あたりなどない。わざわざアーティカを敵に回す必要などないはずだ。

「ディオの花嫁候補たちの中の誰かだったのは？」

「お話になりませんな」

ビクトールは肩をすくめる。

「そのレース、スタートラインに立つ以前の話ですよ。そのことは



周知の事実でしょう」

ビクトールの言葉に、ディオの胸が痛くなった。誰でもいいわけじゃない。ディオが手を取りたいのは、一人だけだ。それが許されないことなのはわかっていても。だから、一度だけ伝えようと思っていたのに。

「誘拐なのか、事故に巻き込まれたのかどうかはともかくとして、行方不明ってことだな？ イレーヌの手も借りてみる。カーマイン商会の情報網なら何か見つかるかもしれない」

あわただしくフレディが出ていく。ビクトールも続いた。

「僕は？」

部屋の入り口から、ビクトールはふり返る。

「殿下はお気になさいませんよう。ダナごときのこと政務に影響を及ぼしてはなりません」

ビクトールの言葉が胸に刺さった。

当然こんな状況で夕食が入るはずもなかった。

参加予定だった夜会には、発熱したと欠席の使いを出してディオは早めに寝室に入った。

たいしたことはないからと、医師の診察はやんわりと拒否する。

彼の父親はたいそう体が弱かったから発熱のたびに医師が呼ばれていたが、彼はそこまで病弱ではないし、今回は仮病だ。

夕食にほとんど手をつけなかったことから、誰にもよけいなことは詮索されず、一人になることに成功する。

ディオは扉を入れてすぐのところ座り込んだ。膝の間に顔をうめる。

フレディからもビクトールからも何の連絡もない。

最終的な報告によれば、最後に彼女の姿が確認されたのは、フレディに呼ばれた場所へと向かう時だった。

昼食の前に散歩をと二人が待ち合わせたのは、中央に国王の遺体が

安置されている公園だった。

国王が死亡した時だけ使われる安置所は公園の端、海に面した丘の上であり、昼間の間は誰もが花を捧げられるように開放されている。亡き国王に敬意をささげようと途中で花束を買ったダナは、公園を入るところまでは警備員に確認されている。

つまり、公園の中で彼女は行方不明になったということだ。

当然ながら公園の中は完全に捜索が行われたが、何も発見できなかった。不安がディオの胸をしめつける。どこに行ってしまったというのだろうか。

膝の間に埋めた顔をあげ、壁に封筒がとめつけられているのに気がつく。

朝部屋を出るときにはなかったものだ。

眉をひそめながらディオはその封筒を手に取り、開封して中身に目を走らせた。

中身の確認を終えて、手の中で紙がぐしゃりとなる。

丸めて壁にたたきつけられた紙は、乾いた音をたてて床に落ちた。

頭にもやがかかっているようだ。

ダナは頭をふった。まだもやは晴れない。さらに頭をふるうとすると、優しい手が両頬を挟んでその動きをとめる。

「頭痛が残るぞ。頭は動かさない方がいい」

いわれた通り頭を動かすのをやめて、いうことをきかない臉をこじ開けた。どこに横たえられているのか、見えたのは見慣れない天井体が重い。

手を動かさそうとして、手首を重ねられ、頭上で拘束されていることに気がつく。

どういうことだ？

フレディに呼び出されて、途中で花屋に寄った。公園の入り口から入って……。

小さな悲鳴がもれた。  
そうだ。

後ろから濡れた布で口をふさがれて、そのまま意識を失った。

「そう。君は誘拐されたというわけ」

あわてて声の方に視線を向ければ、そこにいたのは呼び出した当人だった。

「なん……で？」

「俺、ディオになりたかったんだよね」

相手は悪びれる様子もなく、平然と椅子を引き寄せて座った。脚を組み、椅子の背もたれに片腕を預けた状態でダナを見つめる。

ディオになりたかったと言われても、ダナには意味するところがまったくわからなかった。混乱する頭を必死に回転させて、彼の真意を汲み取るうとする。

「誘拐したのはすまなかったけれど、君をどうこうするつもりはない。ディオとの交渉材料に使えるそうなのは君くらいだからね。設計図さえもらえれば、無事に帰してやる」

「設計図？」

「雷神の剣、だっけ？あれさえもらえれば、俺は文句を言わずこの国から出て行くよ……いずれ攻め込むつもりだけどな」

悪びれた様子もなく、フレディは笑った。

「どうして?どうしてそんなことを?」

拘束から逃れようとする気力さえ一瞬にして奪われた。

危ない橋をわたって、自分の生命を投げ出してまで、二人を王都まで連れ帰ってくれたというのに。今度は攻め込むというのか?

「俺さ、本当はディオの従兄じゃないんだ」

いきなり話の方向を変えられて、ダナの混乱に拍車がかかる。

「本当は兄なんだよ。母親違いの……ね。俺の母親は前国王の寵妃だった女性なんだが、身分が低かったのさ。ゆえに俺は王位を継ぐ権利を奪われて、カイトファードン家に押しつけられたというわけだ。生まれた順番から言えば、俺の方が先なのにな」

どこかで聞いたような話だ。似たような話はいくらでもある。けれど、すぐ身近で聞いた話。もつれた糸はすぐに解けた。

「あなたのお母さんって、イレーヌさんのお姉さん?」

「勘がいいな。そう、彼女は俺の愛人じゃなくて叔母なんだ。彼女の美貌なら、俺の年上の愛人と言っても不自然じゃないしな。武器商人つてのも、王位を奪うには何かと都合だろ」

何ということなのだろう。最初に胡散臭い相手だと思ったのは間違いでなかったのだ。帰りつくまでの道のりで、彼に対して築いた信頼ががらりと音をたてて崩れていく。

けれどその話が事実なら、ディオをわざわざ王都まで連れ帰る必要もなかったはずだ。

道中いくらかでも殺す機会はあった。完全に彼らの手の中にあっただから。

「残念ながら俺は、あの研究を完成させるだけの能力は持ち合わせていないよ。だからディオが完成させるのを待っていたんだ。俺の

協力者も力を失っているしな。二年前ならともかく」

「二年前……」

「そう。あの時は正面から王位を奪うつもりだったのさ。空賊退治に出た部隊を一つ一つ消していけば、王家の守りは薄くなる。いつでもどこに部隊が出るか、俺ならいくらでも情報を仕入れられるしな。もっともどつかの馬鹿が、艦ごと島にぶちあたるなんて暴挙を犯してくれたおかげで、最初の一戦で終わってしまったわけだが」

ダナは怒りの声をあげた。ヘクターを、すべてを失ったあの戦。原因は目の前の男だというのが。

拘束された手をふりほどこうと暴れるダナに、フレディは静かに語りかけた。

「ヘクターのことは、本当にすまなかったと思っている。言い訳がましいけど、あの日出るのはアーティカじゃなかったはずなんだ。俺だってあいつには死んでほしくなかった。それにアーティカとはある程度軍の力をそいだところで、契約を持ちかけるつもりだったんだよ。アーティカの力は敵に回せば恐ろしいが、味方にすれば心強いしな」

「アーティカは契約相手は裏切らない！」

拘束された手が、縄でこすられ血がにじむ。それにもかまわずダナはどうにかして拘束された手を縄から引き抜こうとし続ける。

「そうかもな。でも契約相手が死んでしまったら、話は別だろ」

暴れていたダナがおとなしくなった。

「ディオを……殺すというの？」

「二年前の計画では父親だったけどな。王を殺してすべてを奪う……いや取り戻すんだ。俺が奪われたものを」

ダナは唇を噛んだ。

「あたしじゃ人質にはならないわよ？だって……あたしはただの駒だから。ディオだって、駒を取り戻すのにあの設計書を投げ出したりはしないでしょうよ」

旅の間、何度もディオには言ってきた。ダナ自身を見殺しにしても、彼自身が生き延びることを考えると。きっと彼なら、一番大切なことが何なのか理解してくれるはずだ。

「どうかな？」

喉の奥でフレディは笑い声をたてる。今まで聞いたこともないような嫌な笑いかたった。

「あいつは本当にそう割り切ることができるかな？」

ため息をつき、後ろに両手を投げ出して彼は天井を見上げる。

「欲しいものはみな、あいつが独占しているんだよな」

吐き出されたため息。

父親も。

王位も。

好きだと思つた相手でさえも。

でも、一つだけディオより先に手に入れることができるものがある。今日の前にいる彼女。

「君たちの間に何もなかったのはわかっている。ということは、今俺が奪つてしまえば、君だけはあいつより先んじたつてことになるんだよな」

そうつぶやくと、フレディはベッドの上によじ登ってきた。

次に起こることを予感して、ダナは顔をそむける。

「やだっ……」

馬乗りになつたフレディは、強引にダナの顎をひいて正面から顔を見合わせた。

「やだつて言われても、君に選択権あるわけないだろ？大丈夫。俺けっこううまいし、暴れなきや痛い思いはしないですむ」

顎をつかんでいた手が喉から胸元へと滑り落ちて、シャツのボタンにかかる。

一つ。

二つ。

ボタンが外されていく。

首にかけていた鎖と、そこに通された指輪にフレディは一瞬ふれ、それを肩からシーツの上へと払い落とす。

「いやだいやだいやだ！見ないで！見ないで！見ないで……」

身をよじっても、脚をばたばたさせてみても、彼をふり落とせるはずもなく、三つ目のボタンがためらうことなく外される。

「何だよ、これ……」

強引に下着を引きずりおろそうとしていたフレディの手が止まった。

「……あたしの罪の証、よ」

「……」

無言のまま、彼は下着を元の位置に戻し、ボタンをはめていく。外したときは別人のような優しい手つきで。

「てつきり全身の傷跡をきれいにしたんだと思っていたよ」

「外から見えるところだけよ。見る人がぎよっとするから治しておけて、ビクトール様が。身体の方もやっておけて言われたのだから……」

フレディは続く言葉を待った。

「ヘクターがいないなら、見せる相手もないし」

それに、忘れなくなかったのだ。あの日、どこかで自分はミスを犯した。

どこで過ちを犯したのか、何度振り返ってみても思い出せないけれど。

犯していなければ、今頃まだ二人そろって空を飛べていたはずだ。だから消さない。この傷は。少なくとも今はまだ。

「女の子を拘束してつても趣味じゃないしな。やってみたら楽しいかもしれないけど、次回の楽しみに取っておくことにするよ」  
「言い訳のようにつぶやいて、フレディはベッドから滑り降りる。」

床の上に降り立った時には、いつもの顔に戻っていた。

「デイトが来るか来ないか。時間になったら待ち合わせ場所まで行ってみようじゃないか」



## 69・真実の答え(1)

座り込んでいたディオが、ようやく顔を上げたのは真夜中近くだった。淡いランプの光だけが、部屋の中を照らしている。

王宮全体がしんと静まり返っていた。例外は、王宮を警護している兵士が行き交う足音だけ。

ディオは壁にたたきつけた紙を拾い上げて、広げ、丁寧に皺をのばした。

並んでいるのはよく知った筆跡。信頼していた従兄のもの。

彼女を返して欲しければ、雷神の剣の設計書を持ってくるようにと記されている。引き渡し場所に指定されていたのは、ディオの父親の遺体が安置されている場所だった。ご丁寧に誰にも言わず、一人で来いともつけ加えられていた。最後に記された従兄の名が、ディオをあざ笑っているようだった。

ディオは紙を握りしめた。せつかく皺を伸ばしたというのに、手の中でもう一度それは形を変える。

戦争が終わって戻ってきてから何度か、部屋が荒らされたような形跡を感じたことがあった。

一人でいる時に、後ろから突き刺さる誰かの視線に気づいたこともある。確認しようと顔を向けた時には、その気配はすぐに消えてしまっていたが。

まさかフレディが関わっているとは思わなかった。

ディオは首から下げた布製の袋に手をやった。彼が欲しがっていたものは、常に身につけていた。寝ている間でさえも。

迷った末に、窓際に置いた大きな机に近寄る。引き出しの中にしまつてある銃を取り出し、動作を確認して、丁寧に弾をこめた。これを使うようなことにならなければいいと願いながら。それでもきつ

と使うことになるのだろうと覚悟を決めながら。

沈黙に支配された時間は、意外なほど短く過ぎ去っていった。

いつの間にか意識を失っていたのか、ダナが気がついた時には、縄で作った擦り傷の手当は終わっていて、包帯が巻かれた上からもう一度縛りなおされていた。

誘拐されたというわりには、扱いは比較的丁寧だと思う。誘拐された経験がそれほどあるわけでもないから、あくまでも聞いた話との比較になるが。

ベッドに拘束されていた腕は、今は身体の前で交差されているだけだ。白い包帯の上に巻きつけられた縄は、妙につきあがって見える。逃げようと思えば、逃げられるのかもしれない、が。妙に身体が重くて、そんな気力もない。

最後に取ったのは朝食のはずなのに、夜明け近くなるうかという今も空腹を感じることをさえない。

自分の身体は普通の状態ではないのだと、ぼんやりした頭で思う。

「身体、重いだろ？」

起きあがるうとベッドの上でもがくダナに手を貸しながら、フレディは謝った。

「逃げられないように、薬を打たせてもらった。自分で歩くことはできるだろうけど、逃げようなんて思わない方がいいぞ。今の俺は、君を殺すことにならなくてためらいはないんだからな」

「殺してしまつたら、人質の意味がないじゃないのよ」  
自分の声が、別人のもののように遠くから聞こえる。

「その時はその時さ。別の手をうつ」  
フレディは本当に別の手を用意しているだろう。何年も前から計画をしていたというのなら。

「イレーヌさんは？」

起きあがるとだんだん頭ははっきりしてきた。

舌は回らないが。

「港。必要なものを受け取ったらすぐに船で脱出だ」

「イレーヌさんも共犯なのね」

「そりゃそうさ」

フレディは肩をすくめる。

「彼女の姉を不幸においやった男に対する復讐だからな。ま、当の本人は花に囲まれて横になっているわけだが」

フレディは時計を見上げた。

「そろそろ時間だな。君の王子様に会いに行こうぜ」

ダナにブーツを履かせてやり、手を貸して歩き始める。つい昨夜、ダンスフロアでしていたように。けれど昨夜とは違って、寒々とした空気が二人の間に流れていた。

安置所の鍵を持っているのは、ごく限られた人間だけだ。

当然ディオはその一人だが、甥のフレディには渡されていなかったはずだ。きつと彼は鍵を入手していることだろうが、指定された時間より少し早めに行つて鍵を開けておくことにした。彼より先に رفتて、しておきたいこともある。

夜明け前に現れたディオに、公園の入り口を警備していた兵たちがいぶかしげな視線を投げる。

手にした小さな花束を見て、得心したようにディオを通した。父と子の対話をしにきたと解釈したのでろう。

そのまま公園を急ぎ足に通り抜けて、安置所の前に立つ。

石造りのそれは、かなり高い建物だった。安置所の前を警護していた兵士たちも黙つてディオを通してくれた。数十段の階段をのぼつて、鍵を自分であけ、中に入る。

昼間は前国王との別れを惜しむ国民たちが次から次へと花をたむけにやってくるのだが、今はひっそりと静まりかえっている。

花束がそこかしこを覆いつくしている安置所の中は、いっそう空気が冷たかった。花束を遺体が安置されているケースの上に載せ、る

うそくに火をともす。

膝をついて、両手を組み合わせ、祈りの体勢になった。今から自分がしようとしていることを、この人は許してくれるだろうか。

戦争が終わっても設計書を処分しなかったのは、埋葬時に一緒に棺に入れるつもりだったからだ。快く送り出してくれた父への最後の手向けとして。

設計書はセンチアから戻ってきた技術者ディオ・ヴィレッタの手によって完成されたと言きは発表されている。

その後彼は、パイロットとともに乗り込んだ戦闘機が爆発、炎上。行方不明といいつつ、事実上死亡ということになっている。

いくら対外的にとりつくろったところで、設計書を欲しがる人間が身近なところにいたのでは意味がない。

ディオは膝をついた姿勢のまま待った。

やがてゆっくりと安置所の扉が開かれる。

「待たせたな」

黒の長いコートで身体をおおって、ダナを連れたフレディがあらわれた。

「安置所の前にいた二人には眠ってもらった」

肩をすくめるフレディの様子には、特に変わった気配は見受けられない。

公園入り口の警備兵をどうやって突破したというのだろう。

そんな疑問を口にするのもなくディオは静かに立ち上がり、二人の方を見る。

「ごめんなさい……あたし……」

ダナがうつむいた。

「いいんだ。君のせいじゃない」

ディオは、唇の両端を持ち上げて見せる。彼女を少しでも慰めることができればと願いながら。

どこか空々しい陽気さははらんだフレディの声が、二人の間に割っ

て入った。

## 70・真実の答え(2)

「さて、と。感動の再会はそこまでにして。持ってきてるんだろ、あれ」

デイオはフレディから視線を外さないまま、首に手をやった。

首から外した袋から折り畳んだ紙を取り出す。ゆっくりとそれを広げて見せた。

ろうそくとランプのぼんやりした明かりしかない安置所の中で、それでもそれがもとめていたものだとなり、フレディは声をあげた。

「それをよこせ！」

左手にダナを抱えたまま、彼は右手を伸ばした。一歩下がって、デイオは設計書を持った手を上に上げる。

「これを手に入れたら、君はどこかの国と手を結んで王位を奪いに来るんだらう？」

「わかっているじゃないか」

鼻で笑うフレディに、デイオは哀れむような視線を向けた。

「君に王たる資格はないよ……ごめん、ダナ」

デイオの手が、ろうそくの火の上へと設計書を移動させた。炎は紙の下端を舐めたとたん、みるみる燃え上がった。

火傷する一歩手前まで燃えたところでデイオは手を離す。

「何するんだ！彼女がどうなってもいいのか？」

フレディがとびつくまでもなく、床の上に落ちたそれは灰へと姿を変えていた。

「デイオはごめん、て言ったわよ。そしてそれで正解。使えない駒は捨てるべきだわ」

妙に落ち着き払ったダナの声が、安置所の中に響きわたった。この声をデイオは知っている。

マーシャルに上陸したあの日、彼を逃がすために彼女一人で敵に立

ち向かおうとした時の声。死を覚悟した時の。

デイオは腰の後ろに手をやった。彼女一人逝かせるなんてことはさせない、絶対に。

そこに押し込んだ銃を取り出し、構える。

「フレディ、君の野望のために何人が死んだ？王位が欲しければ、最初から僕一人を殺せばよかったんだ。君にならその機会がいくらでもあっただろうに」

フレディは顔を上げた。そしてデイオの手に銃があるのを見て、ふてぶてしい笑みをうかべる。

「彼女にあてないで俺だけを撃てるか？お前の腕で」

「あたしにかまわなくて撃つて！」

ダナを盾にするフレディに、銃をかまえたデイオの手がゆらぐ。

「権利を奪われたのは俺の方だろ？俺の方が先に生まれたというのにな！」

コートのポケットから、フレディも銃を取り出した。二人は互いに銃を向け、安置所の中でにらみ合う。

「デイオ！早くして！」

どちらもダナの声など耳に入っていないようだった。

「違うよ、フレディ。最初から君に権利なんてなかったんだ。君は僕の兄じゃない」

銃にかけた指がふるえる。その指をなだめながら、デイオは続けた。「苦し紛れの言い訳か？俺の母親は、お前の父親の寵愛を受けていたんだぞ？先に生まれたのは俺だ」

あざ笑うフレディの耳を打ったのは、デイオの告げた名前だった。

「君の父親はフィディアス・シルヴァースト。僕の父の末の弟。反乱を企てたために、王位継承権を剥奪された人間だ」

「嘘つけ！そんな証拠がどこにある！」

だん、と足をふみならしてフレディがわめく。

信じていたものがゆらいでいく。

「直接的な証明にはならないだろうけど……フレディ。父は君が生まれる一年以上前から、女性には手をふれていない……どこるか部屋には使用人さえ入れなかったはずだよ」

「そんなでたらめを……」

「でたらめなんかじゃない。君が生まれる一年前から、父はルイーナで療養生活を送っていたんだ。結核で」

宣告された病名に、思わずフレディは息を飲んだ。

十分な療養を行えば完治しない病ではないが、他人に感染させないように、発病した場合には隔離されるのが通例だ。

亡き王の性格を考えれば、必要以上に他人を近づけなかったことはフレディにも予想できた。凡庸と見せていて、けれど常に周囲には気を配っていた人だったから。

「なんだって……」

「記録によれば、確かにサイリーン・シルヴァもその頃ルイーナにいたことになっているけど、彼女の滞在先はシルヴァ家の別荘。父がいた別荘とは別の建物だ。フェイモス叔父上は国元で政務に忙殺されていて、ルイーナまで行っている時間的余裕はなかったはずだから、君の父親候補ではない」

最後にディオは、残忍な宣告をつきつけた。

「それに引きかえフィディアスは、しょっちゅうルイーナを訪れていた。父の別荘には滞在できなかったから、彼が滞在していたのはシルヴァ家の別荘だ。実際にサイリーンと通じていたんだよ。そして反乱を起こそうとしたんだ。父はもう長くないと信じていた、一部貴族の口車に乗せられてね。彼女が死刑にならなかったのは、子どもを身ごもっていたからで、その子のために終身刑に減刑されたんだけど……」

彼女が出産と同時に亡くなったことまでは、ディオは口にしなかった。



残された子どもをどうするか。当時たいそう揉めたらしい。最初デ  
イオゲネスは、寵妃の生んだ実子として引き取ることも考えた。

当時彼の正妃はもう死亡していたが、子どもの世話なら乳母を雇え  
ばすむ話だ。しかしそれでは、将来反乱者の息子が王位を継ぐこと  
になってしまう。それにはフェイモスが反対の意をとなえた。

王家とはまったく関係のないところ、たとえば他国へ養子に出すか  
誰にも存在を知られていないのならば、いつそ命を奪ってしまうか  
兄弟が揉めているところへ、救いの手をさしのべたのが、末の妹フ  
レデリーカだった。

すでにカイトファーデン家に嫁いでいた彼女には実子はなく、女系  
には王位継承権はないことから好都合な提案といえた。

子どもはフレデリーカに名前を与えられ、カイトファーデン家の長  
子、唯一の息子となった。

あの夜、フェイモスに見せられた書類に記されていたのはこのこと  
だった。ディオはそれを胸に押し込めていた。誰にも秘密を漏らす  
など叔父から厳重に念を押されていたからだ。

自分の信じていた事実と違う現実には、フレディは言葉を失う。フィ  
ディアスの名を知らないわけではなかった。

どういうわけか彼の名は、宮中では忌むべきものとされていて、口  
にすることさえはばかれていたが。

反乱を起こそうとした末のことなら、納得もできる。

王位を剥奪された罪人の子。

だからか、と彼は口の中でつぶやいた。どこか哀れなものを見るよ  
うな視線で、王が自分を見ていたのは。

正式に親子と名乗れないゆえだと思っていた。身分が低い女から生  
まれたために、王族としての扱いを受けることができない我が子へ  
の、せめてもの心情がそこに現れているのだと信じていた。

渴望していた。

ディオの持つ全てを。

父と信じていた男のそばでの生活を。

堂々と王位継承者としてふるまうことを。

どれだけ放蕩生活を送ってみても、埋め合わせることでできなかった空虚。

その空虚さえもが実在しなかったのだと思い知らされて、フレディの中で何かが崩れ落ちた。

## 71・野望の果て(1)

「そうか……そういうことか」  
噛みしめた言葉は苦かった。

先代の国王は、自分の中に愚かだった弟の姿を追い求めていたのだろうか。

自分の歩む道は、栄光への道だと信じていた。  
奪われたものを取り返す正義の歩みだと。

「ダナを離せ。彼女は無関係だ」

なおも銃を向けたまま、ディオが言う。

「そうだな……無関係だ」

一瞬、手をゆるめかけたフレディだったが、気を取り直したように再度ダナを引き寄せた。

「帰すのはやめておこう。俺が欲しかったものは、お前のもので最初から俺のものじゃなかったんだもん。……でも、彼女は違うだろ、俺がもらっておく」

「あたしの意志は？」

「うん、そっちはおいおいだな」

こんな状況だというのに、フレディの声音はいつもの彼のものに戻っていた。

作った陽気さにダナの胸に重いものがのしかかる。

「おいおいだなんて、そんなのあるわけないでしょ！」

薬のせいで身体の方は重いが、口はいつものように回るようだ。

この状況を打ち砕きたくて、ダナ自身もいつもの口調を取り戻そうとしていた。

「それはともかく、君は大事な人質だからな。今すぐ解放するわけにはいかないのさ。特に下にいる奴らと離れるまでは」

にやりと笑って、フレディは銃をダナの頭につきつけた。階段の下

には、ビクトールに率いられたアーティカの傭兵たちが到着していた。下からは安置所の中をうかがうことはできない。一方上からは、彼らの様子がよくわかった。

「さて、ディオ。そのままゆっくり銃を置いて、外に出てもらおうか」

「フレディの言うことなんで聞かないで！」

ダナとフレディ双方を見比べて、ディオは緩慢な動作で銃を下に置いた。

両手をあげてもう武器を持っていないことをしめすと、フレディから目を離さないまま、後ろ向きに安置所の外へと出る。

「そうしたら、そのまま下まで降りるんだ」

ディオは目を細めた。

血の気のひいた彼女の顔は、緊張の色を隠せないでいる。ディオは、そのまま向きを変えて一歩一歩階段を降りていった。ダナは自分の頭に向けられている銃を見上げていた。

もしこれがディオの方を向いたのなら、身体を投げ出してでも止める。悲壮な決意を固めて。

何事もなくディオは階段の下までたどりついた。

ビクトールが彼をかばうように前に立つ。

何も言わないで出てきたというのに、どうして彼がここにいるのだろう。

「あなたに尾行をつけておいて正解でしたよ、殿下」

安置所をにらみつけ、ディオには視線も向けなのままビクトールは言った。

「この間といい、今日といい、まったく無茶をなさる」

「無茶なんかじゃ……」

ディオの頭の中を支配しているのは、どうすれば自分の罪をあがな

えるのかということだけだった。

人の手には大きすぎる力を手に入れてしまったことへの贖罪を。

「今あなたがいなくなれば、国が乱れることにつながりかねません。宰相閣下がどれほど有能だとしても、彼は王位を継ぐものではないのですぞ」

「……」

ダナの頭に銃をつきつけたまま、フレディが現れる。首に巻きつけていた手が、そのままコートの内側へとすいこまれていく。

その手が出てきたかと思うと、何かが宙を舞って、下で待ち受けていた一団の中央へと落ちた。

雪に埋もれたかと思われた次の瞬間。

「離れる！」

ビクトールの指示と、落ちてきた物体が爆発するのは同時だった。

「デイオ！」

ダナの悲鳴をよそに、フレディは彼女を肩の上にかつきあげた。首に巻いていたマフラーを、口元まで引き上げて。

爆発したといっても規模はそれほど大きなものではなかった。爆発そのものでは死者も負傷者も出ていない。

爆発と同時に放出されるのはガスだった。放出したガスが目や喉を刺激し、皆目をおおい、激しい咳に襲われている。

「しっかり息を止めておけよ」

ダナにそう忠告しておいて、フレディは二段とばして階段を駆け降りた。上から逃走経路は確認してある。

ガスの影響が極力少なく、兵士の間をくぐり抜けやすい場所を適切に選んで、通り抜ける。

ちらりとビクトールと目が合ったような気がしたが、気のせいだろう。

忠告に従わなかったダナが、肩の上でせき込んだ。

「息を止めておけといったのに」

あきれたようにつぶやいて、フレディは丘の下にある小屋を目指した。公園の管理人が整備に使う道具などをしまっておくための小屋だ。

掃除道具などが、乱雑に置かれている。隅に大きな木箱があった。箱に張られた紙に書かれていることから判断すると、中に入っているのは、花の手入れに使われる肥料だった。

ダナを床の上に座らせておいて、フレディはその箱を動かした。ぎしぎしいいながら、箱は床の上を滑る。

その下から現れたのは、地下へと続く通路の入り口だった。

この小屋を使うのは管理人だけで、この箱を動かすことなどしないであろうと、イレーヌに指示して掘らせた通路だ。

公園に入るときも、ここから入ってきた。入り口の警備兵に見つからなかったのもこのためだ。

「来るんだ」

「もういいでしょ。ここから先はフレディ一人で逃げればいい」

あの様子だと、しばらくディオたちは動けないだろう。ここから先は、フレディ一人で逃げる方が身軽なはずだ。

「だめだね。君も連れていくって決めたんだから」

「あたしの意志は？」

「この場合、問題にならない。立たないならかついで連れていくまでだ」

彼女は華奢とはいえない体格なのだが、フレディなら問題なくかつぎ上げて連れていくだろう。

彼女を肩の上に抱えあげてこの小屋にたどりつく間も、よろめくことなど一度もなかった。

身体が正常に動くのなら、蹴り倒してやるものを。その念だけをこめて、睨みつける。

フレディは平然とダナの肘をとって引き上げた。

「行こうか」

仕方なくダナもフレディに続いて階段を降りる。

一歩小屋に入れば、通路が丸見えだが問題ないと判断したのか、来たときには元の位置に戻した箱は、そのままだった。

ビクトールたちが小屋の通路を発見する頃には、船で待つイレーヌとともに出港しているはずだ。

間に合わせて掘った通路は、海が近いからか、土がむき出しの床も天井もじめじめとしている。

壁に並んだろうそくの明かりが不気味な雰囲気をかもしだしている。水滴が首筋に落ち、ぞくりとしてダナは首をすくめた。

階段を登って通路から出た先は、カイトファードン家の所有する土地だった。

船着き場へ行くためには、崖に作られた階段を降りていかなければならない。

誤って転落しないよう、岸の端には手すりが作りつけられている。

## 72・野望の果て(2)

「風邪ひきそう」

また雪が舞い始めたのを見て、ダナは言った。

闇の中でも雪の白さが目に痛い。コートは着せてもらっているのだが、そこを通り抜けて冷たい空気が身体を刺す。

ほんの少しだけ、東の空が明るくなってきていた。

「そうだな、女の子の身体を冷やしちゃいけないよな」

首にマフラーが巻きつけられる。さらに肩にコートがかけられた。

昨夜してくれたのと同じように。

デイオがようやくあたりを見渡せるようになった時には、二人の姿はなかった。

結局自分は何をできたというのだろう。

フレディの目の前で設計書を破棄しただけで、みすみす彼女を連れ去られてしまった。

こちらもようやく立ち直ったビクトールが、部下たちを走らせる。

デイオの目が、あるものをとらえた。

並んだ足跡。

確かにこのあたりは踏み荒らされているが、その足跡はまっすぐに管理人の小屋へと続いていた。

ビクトールには声もかけず、デイオは小屋に駆け込んだ。安置所に置いてきた銃を取り戻すことなど思いもしないまま。

後悔だけならいつだってできる。

今は彼女を取り戻す方が先だ。

小屋の中に、地下へと続く通路を発見して迷わず階段をおりた。

通路を走りながら、頭の中で通路の続く先を考える。カイトファーデン家の地所に出るであろうことは、容易に予測できた。



階段を駆け上り、ディオが見たものは。

フレディに連れられた、ダナの姿だった。

「ダナ！」

その声に二人とも、ディオの方をふりかえる。

明るくなったダナの表情と、苦々しげにゆがんだフレディの表情は対照的だった。

「思っていたより早く追いつかれたな」

フレディの顔をかすめる自嘲の色。

「連れていってしまったおうと思ったけど、やっぱりやめておくか。俺と一緒に楽しめないだろうしな」

フレディは身をかがめた。

唇を重ねられて、ダナの目が大きくなる。

二人の間に割って入ろうとしていたディオの足が止まった。

「いつぞやの礼ってことで」

「あれはもう返したでしょ！」

ダナは、身体の前で交差させられたままの腕をふり回した。

肩からかけられていただけのフレディのコートが雪の上に滑り落ちる。

それを拾い上げてかけ直してやりながら、フレディはダナを抱きしめた。

これほど誰かを手に入れたいと願ったことがあっただろうか？

「君は幸せになれ。あつちでヘクターに会ったら、君は幸せになりそうだって伝えておくよ。俺とあいつじゃ行き先が違いそうだけどな」

どこか憎めない、人好きのする笑顔を浮かべてフレディは言った。

言葉が終わると同時に、ダナを突き飛ばす。

ディオの方へと。

よろめくダナを抱き止めようとディオが飛び出した。

二人の視線がフレディから離れる。

自分を受け止めようとするディオにダナは叫んだ。

「あたしじゃない！あの人を止めて！」

積もった雪をもともせず、フレディは柵を一気に飛び越えていた。柵の向こう側から、二人に笑いかける。

「フレディ、だめだ！早まっちゃいけない！」

ディオの声に返ってきたのは、ただ笑う声だった。

「反逆者の息子は反逆者つてことさ。ひっそり処刑されるのなんてごめんだ」

「処刑なんてしない、させない！僕が！」

ダナの肩をつかんだまま、ディオは叫ぶ。

「一生罪人として牢獄暮らしか？そんなのもつとごめんだね」

フレディは銃を空に向ける。

響いた銃声は、彼なりの別れの挨拶だったのだろうか。

「ディオ、俺は本当におまえの兄貴だったらよかったのに、と思うよ」

空を向いていた銃口が、フレディの頭に向けられた。

彼は笑った。

この状況で。

彼は笑って見せた。

本当は王位なんて欲しくなかった。

望んだのは息子として認められて、義理の母を支えながら半分だけ血のつながった弟に、いろいろな悪さを教え込む。

ただ、それだけだったのに。

それほどだいたいそれたことではないと思っていた。

自分が他人の息子、反逆者の息子でさえなかったなら。

「僕だって！だから！」

ディオの言葉も、もう耳には届かなかった。

引き金をひいた。

笑ったままで。

彼の名を呼ぶ声だけが、冷たい風を通り抜けて耳まで届く。そのままフレディは、後ろへと倒れ込んだ。

そこには地面はない。彼の身体は海の中へと落下していく。

「僕だつて……兄みたいに……」

ダナの肩に、ディオの手が食い込んだ。

お洒落で口がうまくていつも女性に囲まれていた彼。

ああなりたいと、ああはなれないとわかっていながら、憧れていたというのに。

「殿下、これ以上あなたにできることはありません。王宮へお戻りください」

三人の様子を遠巻きに見守っていたビクトールが、ディオとダナを引きはがした。

「おまえは病院だ。ちゃんと診てもらえ」

フレディのコートとマフラーに包まったままのダナを軽々と抱えて歩き出す。

その後ろ姿をディオは黙って見送った。

警察がカーマイン商会の船に乗り込んだとき、残っていたのはイレヌ・カーマインただ一人だった。

雇っていた部下たちに責任はないのだからと、全員逃がした後なのだ、悪びれず告白する。

「終わりましたのね」

最後にそれだけ言うと、手錠をかけやすいように手を前に出した。

ディオが彼女と面会を許されたのは、二日後だった。

重要人物として、警察署の中とは思えないほど贅を尽くした部屋で、彼女はディオを待っていた。

いつも完全に隙のない身なりをしていた彼女のマニキュアがはがれ

かかっているのを、初めて見た。

「最初は私の方から近づきましたの。名乗るつもりはなかったのですけれど……」

顔立ちには似たところなど一つもないというのに、ふとした時に見せる表情の向こうに姉を見た。

気がつけば、フレディにイレーヌの知っていた事実をすべて話していた。

それが誤りであったと、知ったのはすべてが終わった後だった。

「これで、私はたった一人ですわ。最後の肉親も逝ってしまいましたもの。いずれにしても王族を害しようとしたのですから、死刑かしら？死刑になるというのなら、一人でいるのもそれほど長いことではないのでしょうかね」

そう言う彼女に、ディオが下したのは残酷な裁きだったのかもしれない。

イレーヌ・カーマインは、証拠不十分で釈放。

ルイーナの彼女の屋敷までは、アーティカの船が責任を持って送り届けた。逃がしたはずの部下たちは、そこで彼女の帰りを待っていたのだと、ディオは後から教えられた。

懸命な捜索にも関わらず、フレディの遺体は見つからなかった。

さほど荒れている海というわけではないのに。

マグフィレットの伊達男は、ふきとんだ顔を見られたくないのではとディオは自分に言い聞かせ、誤って海に転落したまま行方不明と公式には発表された。

ディオの手元には、最後にフレディが身につけていたマフラーとコートがビクトールの手によって送り届けられたが、そこに彼女からの言葉は添えられていなかった。

### 73・贖罪の旅へと(1)

最後の荷物を鞆につめて、ディオは部屋の中を見回した。もともとから殺風景だった部屋の中に残っているものはほとんどない。

彼が手にしたのは小さな鞆一つだけだった。

あれから三ヶ月、だんだん暖かくなってきているとはいえ、夕方になると冷え込む。コートの上からマフラーをしっかりと巻きつけて部屋を出た。

もうここに帰ってくることはない。次にここに来るときは、国王の甥、ただの客人だ。

最初にディオの決意を聞いたフェイモスは、真つ赤な顔をして反対した。軽々しく王位を捨てるのかと、責めもした。責められてもディオは決意を曲げなかった。彼にできるのはこれだけだと確信していたから。

何日にもわたって話し合い、そしてディオの決意が揺るがないのを知った叔父は、反対していたのが嘘のように協力的になった。

フェイモスが、政務の合間を縫ってはフレディの墓に花を供えに行っているのをディオは知っていた。

ディオ自身も毎日のように訪れていたから。

遺体の存在しないそこには、代わりに最後に身に付けていたコートとマフラーが納められている。

なぜ、フレディには伝わらなかったのだろう。皆、彼のことを思っていたというのに。

誰も、父親のことを口にしなかったのは……彼が養子になった経緯はともかくとして、成長を大切に大切にそばで見守ってきたのに。

知らない方が幸せなこと世の中にはたくさんある。彼が真実を知らなかったら、今もディオを見下ろして笑っていただろうか。

結局追いつけなかったな……と、ディオの口元をゆるめた。いつかは彼の身長を追い越せると思っていたのに。ディオの方は小柄なまままで止まってしまった。

フエイモスが戴冠をすませるのを見届けた今、ディオに思い残すことはない。

ただ一つ、あれから彼女と連絡を取れなかったことをのぞけば。

ビクトールは何度も宮中で会ったし、彼に言えばダナを連れてきてもらうことくらいたやすいことだっただろう。

けれど、どうしても勇気を出せないまま彼はセンチアに戻ろうとしている。

今度は一介の学生として。

彼が決意したのは、王位の継承権を放棄することだけではなかった。先代国王より相続した個人の財産を、全てセンチア国立研究所で殺害された研究員たちの遺族へ分け与えることも決めた。

このくらいでは、償いになんてならないだろうけれど、それでも何もしないよりははるかにましだ。

国を離れようとしている今、ディオ自身が望んでいたより気持ちは晴れていた。

「ずいぶん思い切ったことをしたもんだな」

フォルーシャ号の甲板の上、せっせとブラシをかけているルツツとダナの前に、ビクトールが三日遅れの新聞をつきだした。

受け取って紙面に目を走らせたダナは、何も言わずに髪をかきあげた。以前は短く切りそろえられていた赤い髪も、今は顎のあたりまで伸びている。

王位継承権を放棄した王子が、センチアへと出発すると書かれた記事の扱いは小さかった。

「気になるか？」

視線をそらせたダナに、ビクトールはやりとする。

「明日の夕方の汽車で出発だそうだが……どうする？」

「……」

フレディが銃口を頭に向けたあの夜。

ダナはデイオを残してその場を離れた。

伝えたいことは山ほどあつたはずなのに。肝心のことは、心の一番底に封じ込めたままで。

「行ってこい。あれから一度も会ってないだろ？」

はじかれるようにダナがブラシを放り出す。

「まだ掃除の途中！」

走り去る後ろ姿に叫ぶ、ルッツの言葉も聞こえていないようだ。

「ビクトール様、余計なこと言わないでくださいよ。せつかく俺と  
いい雰囲気だったのに」

「俺の目にはそう見えなかったぞ。さつさとそれを終わらせて、  
イレントまでついて行ってやれ。あつちに車は用意しておく」

「ビクトール様って鬼だ」

文句を言いながらも、ルッツは手を忙しく動かし始める。

子どもの頃から知っている彼女。ヘクターと一緒にいた頃の輝くよ  
うな笑顔も覚えている。退院してクーフに戻ってきたばかりの頃の、  
作つたような表情も。

この半年見えてきて、確かに以前とは変わったと思う。

彼女が再び未来を見られるようになったのならいい。

テイレントまでつきそうくらいなんてことない。

「そうだろ、ヘクター？」

勢いよくブラシをかけながら、ルッツは彼の名を呼ぶ。彼もそう思  
っているであろうことを、ルッツは確信していた。

## 74・贖罪の旅へと(2)

駅のホームにかけこんだダナの視線の先に見えたのは、生真面目な横顔だった。

小さな靴を一つ下げただけの身軽な姿。

季節は春になるうとしているとはいえ、冷たくなり始めた夕方の風に、コートが揺らめく。

「ディオ！」

ダナの声にびくりしたようにディオは振り向いた。柔らかな笑みが顔に浮かぶ。

その表情が、以前とは違っていることにダナは気がついた。以前は感じられた線の細さがなくなっている。何か一つ乗り越えて……、まさしく大人になったといった雰囲気だ。

「来てくれたんだ」

「……やせた？」

最初に言わなければいけないことは、こんなことではなかったはずなのに。彼女の口から出てきたのは、ありふれた言葉でしかなかった。

少しね、それだけ口にしてディオはダナを見つめた。

「ずいぶん思い切ったことをするって、ビクトール様が言ってた」

視線を合わせるのが気恥ずかしくて、ディオのつま先に目を落としながらダナは言う。

「なんでわざわざセンティアへ？あなたに対する風当たりきついでしょに」

ディオも研究員の一人であったことは、少し世事に通じた人間なら知っている。事前に研究所を離れていたのは、別の事情があったためとはいえ、世間の見る目は厳しいと言えるだろう。

たとえ全財産を遺族へ渡したとしても、それだけでは償いにならない



い。そう言われても仕方ない。

「石投げられるかもね、僕」

「石投げられるだけならいいけど、あなたの頭の中にはまだあの…研究が残っているのでしょうか？殺されてしまうかもしれないじゃない。王宮にいれば安心なのに」

ディオの口元にうかぶ笑みが、苦い物に変わった。

「でも、そうしなければならぬと思っただ」

最初はひたむきな探求心だったはずだ。

その方向性がずれさえしなければ。ずれた代償はあまりにも大きすぎた。失われた命の数を数えることなんてできやしない。

「センチアが技術の面では一番進んでいるからね。このまま自分の国にいたんじゃだめだと思う…：：：今度は」

ディオはダナの顎に手をかけて、顔をあげさせた。瞳をのぞきこむ。一番奥までずっと。

ざわざわとする胸をおさえつけて、ダナはディオの次の言葉を待った。

「今度はみんながもつと幸せになれるような研究をするよ。それだけじゃ償いにはならないだろうけれど」

どちらからともなく寄せた唇が触れ合ったのは、ほんの一瞬だった。「センチアまで会いに行ったりなりなんかしないんだからね？これでもあだし、けっこう忙しいんだから。空盗退治に国境警備。やらなきゃいけないこと、たくさんあるんだから」

ディオの肩に顔を埋めて、ダナはつぶやいた。互いの背に回した腕に力が入る。少しでもこの時を長引かせたいと願っているかのように。

ディオの手が、顎まで伸びた髪をそつとなでる。

「わかってるよ、そのくらい」

ディオはダナから離れると、鞆の口を開いて中に手を入れた。しば

らく中をかき回した後、何かを取り出してダナの手にのせる。

「これって……？」

手にのせられたのは、フォースダイトの破片。

「エメラルドってわけにはいかないけれど……持っていてほしいんだ、君に」

十二の誕生日に両親から贈られたフォースダイト。

これから全てが始まった、一番大切な物。そのことは彼女には言っていないかった。けれど、ディオの想いをくみ取ったように笑顔を作ってくれる。

「……ありがと。大事にする」

ダナは受け取った石を両手で包みこむようにした。

轟音をたてて汽車がホームに入ってくる。

「さよなら」

ダナにそう言い残してディオは汽車に乗り込んだ。

個人の財産は全て寄付してしまったとはいえ、親族からの援助で当面は生活に困ることはない。ディオは固辞したが、元王子に必要な上に貧しい生活を送らせるわけにもいかないのだ。汽車の旅も個室を一つ確保してもらっている。

座席について、ディオは窓をあけた。

「ディオ！」

めざとくディオの姿を見つけて、ダナが走りよってきた。

手を伸ばして、窓越しにディオの首に手をかけ、自分の方へと引き寄せる。

今度のキスはもう少しだけ長かった。

発車のベルの音が二人を引き離す。

「好きだよ……ダナが」

ようやくディオの口から出た言葉。

「会えなくなる直前に言うのって卑怯よね？それに、そういつのつて、普通はキスする前に言うんじゃないの？」

返ってきたのは口元にひらめく勝ち気な笑み。

続くダナの言葉は、汽車の轟音にかき消された。

デイオは窓から身を乗り出した。最後に聞こえたのは、ただ彼の名を呼ぶ声。

大きく手をふるダナに、デイオも手をふり返した。

姿が見えなくなるまでずっと。

「別について行ってもよかったんだぜ？」

汽車が見えなくなるまで見送っていたダナの肩に、ルッツが手をかけた。

「そんなんじゃないもん、あたし達」

大切に胸元に石を抱え込んでダナは、ルッツを見上げる。

「ところでケーキご馳走してくれるって話どうなったのよ？」

「まだ有効」

片目を閉じようとして、ルッツはうっかり両目を閉じてしまう。ダナが笑い声をあげた。

「やだ、ウインクできないんだ？」

「あんまり言っとケーキ買ってやらないぞ。それにビクトール様の分も買って帰らないとな」

「あの人、案外甘党だものね」

二人は並んでホームを出ていく。

見送りの人間の中で、ホームを後にするのは彼女らが最後だった。

ホームから出た瞬間、ダナの頭は次の任務へと切り替わる。デイオを思い出させるのは、手の中に抱えた石だけだった。

駅のホームが見えなくなつて、ようやくデイオは腰を下ろした。

もう会うことなんてないと思っていたけれど、最後に会えてよかった。

最後の最後に、伝えなければいけなかったことも伝えられた。

これからは別々の道を歩むことになる。これから先、この道が交わ

ることはきつとない。

長い冒険が、よじちかく終わったたよじな気がした。

## 75・空をなくしたその先に(1)

研究室の中に、コーヒーの香りが漂う。デイオはカップに注いだそれを口に運ぶ。研究の合間の、休息の一時。

「博士！シルヴァースト博士！」

ばたばたと研究所に駆け込んできたのは、デイオの研究室にいる学生だった。

「先生のこと、新聞に載ってますよ！」

彼の差し出した新聞を、デイオはゆっくりと開いた。

日に焼けた藁の色の前髪をかきあげる。後ろの方は一つにまとめて束ねてあるのだが、前髪は伸びすぎて目に入りかけている。そろそろ切りに行かねばならないのだが、時期を逃してしまっていた。

新聞を持ってきた学生が示すページに大きく掲載されている彼と、彼の学生たちが開発した新技術。実用化されれば、海水から真水を作り出すそれは、飛行島で暮らす人間たちにとっては非常に重要なものになるはずだ。

動力源には、フォースダイトを使用している。まだ、飛行島から取り出したフォースダイトほどの純度は得られていないものの、ここ数年の間にフォースダイトの精製方法もかなり進歩していて、以前よりははるかに純度の高いフォースダイトを作れるようになっていた。

この技術の開発には多額の費用が必要だったが、カーマイン商会のイレエヌが援助してくれた。デイオの書いた礼状には一度も返事をくれなかったけれども。彼女にも思うところがあるのだろう。

「あ……」

デイオは自分の記事の次のページに掲載されている記事に目をとめた。

どこかで見たとのことのあるような気がする顔。紙面の荒い写真ではわ

かりにくかったが、記事を読んでそれが誰なのか理解できた。

「ごめん、今から出かけてくる。戻りは二週間後かな。そのコーヒ  
ー、片づけておいて」

「先生？二週間後って！」

まだ一口しか飲んでいないコーヒーと学生を残して、ディオはあわ  
ただしく研究室を後にする。

新聞を手に握りしめたまま。

一度自宅に戻り、荷物をまとめて乗りこもつとした船の名を見て苦  
笑した。

メレディアーナ号。全てが始まったあの船と同じ名前だ。

大学を卒業して三年。駆け出しとはいえ、一応は学者として認めら  
れつつあるところだ。叔父からの援助ももう受け取っていない。

裕福とはいえないが相部屋になる三等客室ではなく、一人で一部屋  
を使う程度の余裕もある。

たしか船内に髪を切る場所もあったはずだ。久しぶりの帰郷の前に  
髪を切っておこうと、ディオは理髪室の場所を確認した。

「空賊ってあの船ね。射撃準備して。まずは威嚇するからそのつも  
りで」

ダナは前方をにらみつけた。優美な姿の客船にせまる空賊の船。射  
程距離に入る前に、空賊の船が客船めがけて牙を向いた。

「前言撤回。射程圏内に入ったら即撃墜！」

肩から前に落ちてきた三つ編みを、背中の方へとはねのける。人目  
を引く見事な赤の色は、腰の長さまで髪が伸びても以前と変わらな  
い鮮やかさだ。

ダナは、空賊との距離をはかった。慎重に距離を見定めて、右手を  
あげる。

「撃て！」

命令と同時に、砲が火をふく。

空賊の船とアーティカの船では装備が違う。残念ながら弾は外れ、方向を変えて逃げ出す空賊船を見送って、ダナは肩をすくめた。マグフィレット領内にいるのなら、相手が降参するまで追いかけて回すところなのだが、ここはセンチア領内だ。

一撃で撃墜できなかったら追い払うだけでいいと命令されている。彼女自身は生ぬるいと思うのだが、他国の方針に口は出せない。

アーティカは一月ほど前からセンチアと契約していた傭兵団が契約を解除した後、次の傭兵団が見つかるまでという条件でマグフィレットから貸し出されていた。

アーティカ自体傭兵団なのだが、マグフィレット専属契約となっても数十年以上。友好国にこうして貸し出されることもある。

ビクトールもクーフ島ごとセンチア領内へ移動し、そこから指揮をとっている。

ダナは、窓から客船の損害を確認した。それほどひどくはないようだ。

救助の必要はなさそうだが、センチアへ戻るのならば護衛しようと声をかけることにした。

髪を切り終えたディオが、椅子から立ち上がるうとしたところで、船がゆれた。

「空賊だ！」

船員たちの騒ぐ声。けたたましく警報が鳴り響く。思わずディオは苦笑した。船の名前も同じ。まるであの時みたいではないか。

あの時とは違ってすぐに船員から、空賊は撤退したので安心するようにと放送が入り、船内は落ち着きを取り戻した。

ただし船は故障したため、このままセンチアへ引き返すのだという。

ついてないな、とディオはため息をつく。

国に戻って、ビクトールを呼び出すつもりだったのに。  
アーティカの船が護衛につくと聞いて、ディオは甲板に出た。  
あの傭兵団がセンチアに貸し出されているとは知らなかった。  
ビクトールもこちらに来ているのだろうか？それならばわざわざ国  
に戻る必要はないのだが。  
護衛についた小さな船の甲板に目をやって、思わず息を飲む。

ちょうど出てきた艦長らしき人物は、真っ赤な髪の持ち主だった。  
忘れたことのない鮮烈な色。

ディオに気づくことなく、その人は甲板を横切って格納庫へと消え  
ていく。

故障したメレディアーナ号はセンチアへと戻った。

修理が終わるまでは出航できない。乗客は別の船への乗船を希望す  
るか、乗船を取り消すかの判断をその場で行い、ディオは乗船を取  
りやめた。アーティカがここにいるのならば、国に戻る必要はない  
のだから。

下船したディオは、アーティカの駐在している場所へと足を向けた。  
身分証をしめただけでビクトールへの面会は、あっさりと許可さ  
れた。元雇い主という経歴は、十分信頼に値するようだ。

ディオは海面すれすれのところにおろされている飛行島へと、地上  
から斜めに渡された板をのぼって行く。

再会を期待しながら。

ダナは、三代目のリディアスベイルの名をもらった軍用艦をクープ  
へとつけた。その名は不吉だと反対したのだが、ビクトールはよほ  
ど気に入っているらしい。

初代二代目と違って、三代目は、四年の間たいした損害もなく航行  
している。

今回も空賊とは交戦にはならなかったから、艦の損傷はなかった。



整備士たちにあとをまかせて艦をおりる。

彼女はちらりと空を見上げた。夕刻にはまだ間がある。夕食前に子どもたちを乗せて、飛んでくるくらいの時間はありそう  
だ。

ビクトールに命じられて艦長として軍用艦に乗り込むことも増えたが、戦闘機で飛び回る方が好きだ。以前と変わらず。

「ダナ、待って！」

家へ戻ろうと歩いていると、女性の声呼び止められた。呼び止めた女性は、両手にたくさんの本を抱えていた。

「今日は私も授業終わりなの。よかったら、家でお茶でも飲んでい  
かない？」

「どうしようかな。子どもたちと飛んでこようかと思っていたのだ  
けど」

「やめといたら？ビクトール様が探してたわよ。この間のお見合い  
相手がどうこうって」

ダナは顔をしかめた。

「ミーナさんのところにお邪魔する」

ルイーナで知り合った三人とは、ディオがセンチアへと旅立って  
から交流が始まった。

何度か手紙のやり取りが続き、あの事件から一年ほどたった後、と  
うとう職にあぶれてアーティカへと移ってきたのである。

グレンもニースも、意外なことに機械いじりが得意だった。

来た当初はルツツの下で見習い整備士だったが、今では別々の艦に  
乗り込んで一人前に働いている。

ミーナはというと、結婚前は小学校の教師だったという経歴を生か  
して、今ではアーティカの校長先生だ。

もっとも学校に教師は彼女一人しかいないが。

夫と義弟が犯罪者に転落する可能性がなくなったのありがたいと、

ミナはアーティカに移ってきたことを言んでいるようだ。

## 76・空をなくしたその先に(2)

「それで何をしたの？」

テーブルに温かなお茶とビسケットが並べられ、好奇心を両の瞳にきらめかせてミーナは話を切り出す。

「後ろに乗せて飛んだだけよ。あたしと結婚したかったら、そのくらいしてもらわなきゃ」

お茶を注いだミーナは、小さな笑いをもらした。

「どうせまた吐くまでめちゃくちゃな飛び方したのでしょ」

「普通に飛んだだけ……あたしにとってはね。結婚なんてしなくたっていいのにな」

ビクトールは、娘は嫁に出すものだという固定観念が抜けないらしく、数年前から何度も見合いの話を持ち込んできている。

相手の方も新興貴族とはいえ、国王の信頼厚いアーティカの娘ならば、とかなり乗り気で見合いにのぞんでくるのだが、今のダナが乗り気ではない。

乗り気ではないどころか、遊覧飛行名目で見合い相手に乗せ、戦闘時と同じような飛び方をしてみせる。

泣いてもわめいてもやめない。結果、全ての相手から丁重にお断りをされて現在に至っているのである。

「心配なのでしょ。順番からいけばビクトール様の方が先に逝くのですから。まあ……あなたが撃墜されれば別だけど、当分大きな戦は起こりそうもないでしょ。それに人生一人より二人の方が、楽しいことも多いものね。私もそうよ。亭主があんななのでも」

あんなの呼ばわりされたミーナの夫は、別の軍用艦で任務に出ているため今日は留守にしている。

「そんなものかしら」

ダナはカップに視線を落とす。揺れるお茶にうつる自身の顔が見

返してくる。

結婚してもかまわないのだ。制度そのものを拒否しているわけではない。

信頼できる相手でさえありさえすれば。

見合いの席につくたびに、相手の目の中に打算的な色が見え隠れしているのがわかってしまう。

そのたびに空へと連れ出してきた。

せめて一緒に飛べる相手であれば、信頼できるかもしれない願いをこめて。

その願いが叶えられたことは一度もない。

ダナのカップが空になる。

お礼を言っ、立ち上がりかけた時だった。

「お前またやっただろ！」

ダナを見つけて、窓越しにビクトールが叫んだ。

「何もしてないってば！」

人の家の窓をはさんで、父娘喧嘩になりかける二人の間にミーナが割って入った。

「ビクトール様、そろそろ諦めたら？もうこの娘結婚しているんだもの。相手連れてきて責任取らせた方が早いわよ」

「結婚なんてした覚えはないわよ！」

「駆け落ちしたくせに」

にやにやしながらミーナは一枚の紙を取り出し、二人の前に広げて見せた。

「何でそれ持っているのよ！」

旅券目的で偽装結婚したあの時の証明書。書かれているのは偽名で、もちろん拘束力などないのだが。

「いつか使えるかなと思って」

悪びれず、ミーナはそれを折り畳んで大切にしまい込む。

ルイーナから持ってきたのなら、もつと早く出せばいいのに。

「ディオは関係ないでしょう!」

悲鳴にも似たダナの声が響きわたった。

その声は、ビクトールの家へと向かっていたディオの耳にも届いた。自分の名が叫ばれているのに気がついて、そちらへと足を運ぶ。

小さな家の前に立っている後ろ姿はビクトールのものだ。

そしてその向こう。窓越しにビクトールと向き合っている赤い髪の女性。

ディオは足を速めた。

一番最初に気がついたのはミーナだった。

「あら、ちょうどよかった」

ディオに向かつて笑顔で手をふる。

なぜミーナがここにいるのかと、ディオは混乱した。ビクトールにはあれから数回会っているが、そのことについては何も言っていなかった。

ちよつとした騒ぎの中、一人冷静なのはミーナだけだった。

「お茶でもいかが」

とビクトールを家の中に引つ張り込み、

「つもる話もあるでしょう」

とダナを家の外に押し出す。

さつさとカーテンがひかれ、中から外の様子はうかがえなくなった。

「……何しにきたの?」

先に口を開いたのはダナだった。

センチアへ行ってしまったから六年。

手紙の一通も届かなかった。彼女も書かなかった。

忘れたわけではないけれど、彼の贖罪にダナは不要な存在だ。だから会わない方がいいと、そう思っていた。

ディオは柔らかく微笑んだ。

「……三日遅れの新聞を配達に」

「今は陸にいるんだから、当日中に届くわよ」

そうは言うものの、ディオの開いた新聞を受け取って記事に目をやる。

そのとたん涙があふれた。

それは他の国の記事だった。かつては敵対していた国に暮らす人々の暮らしを伝える特集の中、巨大な農園をきりもりしている夫妻の記事。

彼らの運営する孤児院の子どもたちは、自然に農作業を手伝うのだと記されていた。

大人になって独立したとしても、受けた愛情を忘れることなく、おりにふれては戻ってくるのだという。

写真そのものは本当に小さなものだった。

表情なんてわからない。けれど、ダナには写真におさまっている全員が微笑んでいるのがわかった。

ディオの手が肩に回される。

あいかわらずぎこちない手つきだということに、こんな状況下でも気がついてしまった。

「ダナ」

名前を呼ぶ声も。

涙を拭ってくれる手がぎくしゃくとしているのも。

全て懐かしかった。

「こっちも見て」

ディオは自分の載っている記事を示した。

「すごいことしているのね」

素直な賞賛の言葉が、ディオの胸をつつ。

「まだまだ、だけどね」

迷った末に、ディオは一番言いたかったことをついに口に出した。

「……………会いたかった」

「今さら？」

ダナの言葉に、家の中で聞き耳をたてていたビクトールの眉が跳ね上がった。

ミーナの制止もふりきって、カーテンをあけて叫ぶ。

「おまえだってセンチアに来てから一度も会いにいかなかったろうが！」

「それは……………だって、邪魔しちゃ悪いと思ったから」

「邪魔もへつたくれもあるか！相手がいるならさっさと嫁に行け！」

「ディオとは何もないんだってば！」

「はいはい、ビクトール様そこまで。親が見てたら素直になんてなれるはずないでしょ？」

ビクトールをカーテンのかけにひきずりこみながら、ミーナは二人に笑顔を向けた。

「ディオ君、責任はちゃんと取ってね」

窓から放り出される、折り置まれた紙。

それを器用に空中で受け止めて、ディオは開く。

「懐かしいな、これ」

広げた紙に書かれた、今より少し幼い文字。

あの頃使った偽名とともに。

「イヤになっちゃうわね、こんなもので責任取らせようだなんて慌てたようにダナは手をふる。」

「ほんとにね、責任とか考えなくていいから」

「責任、ね……………取るかどうかはゆっくり考えることにするよ」

むかつとした顔のダナを引き寄せてキスをする。

顔を見合わせて、二人そろって笑いだしてしまう。

久しぶりの再会も深刻にはなれないようだ。

一度はなくしたと思った空。

その向こうにあるのはきつと平坦な道ではないけれど、  
きつと二人なら乗り越えていけるはず。

ダナに向かって手を差し出す。

つないだ手は温かった。あの頃と同じように。



## 76・空をなくしたその先に(2) (後書き)

終わりました。

ご愛読ありがとうございました。

別サイトの作家仲間様と「冒険物書こうぜ!」という企画から始まったこの作品、書いていて非常に楽しかったです。

もともとは携帯小説サイト「野いちご」に掲載していた作品で、こちらに掲載するにあたり全面的に手を入れなおしました。

同じ作品で、第五回日本ケータイ小説大賞エントリー中です。楽しんでいただけましたら、下記リンクから一票入れていただければ幸いです。

携帯からしか投票できないのと、若干手順が面倒なのですが、「ケータイ小説大賞に投票する」ボタンをぽちっとやってやってください。

次のページに何やら記載する欄はありますが、全て空欄で画面下部「投票する」ボタンをもう一度ぽちっとやっていただければ投票完了です。

どうぞよろしくお願いします。

## おめでとぅ、19歳

デイオが戦場に出るようになって十日。少しだけダナの後ろに乗って機体をコントロールする事にも慣れてきた。

その日は天気がよかった。戦闘艦を撃沈させ、追っ手をふりきって戻ってきたのは太陽がのぼるのと同じくらいだった。

ふらふらとしながらデイオは食堂へと立ち寄る。温かいお茶を一杯だけ飲んでそのまま自分に与えられた部屋へと戻った。

戦闘艦内の部屋は狭い。艦長室なら机なども置かれているのだが、デイオのいる一般の乗組員の部屋は寝るためのベッド。それも普通のベッドよりは幅が狭いもの。が大半を占めている。

ベッドの足下には着替えなどを入れるための棚が置かれている。

後は上の方にコートなどをかけるためのフックが何力所か設置されているだけだ。窓は小さく、外の様子をうかがうことは難しかった。本当に寝るためだけの部屋だ。食事はすべて食堂ですませることになっている。

起きたら朝食と言うよりは昼食の時間になっているだろうか。デイオは服を脱ぎ散らかしてベッドに潜り込んだ。

近頃では夢を見ることもない。この戦争が終わったら見るようになるのだろうか。悪夢を。

夢一つ見ないままデイオが目覚めたのは昼食の終わった時間帯だった。

空腹を覚えて、デイオはベッドから起きあがる。寝る前に床の上に放り投げた服を広い集めて、棚に置いてあるかこの中に放り込む。それから洗濯済みの服に着替えて部屋を出た。

食堂はいつでも開放されているから、行けば何か食べることができらるだろう。

「目が覚めた？」

食堂の隅からダナが笑いかける。その前に座ったルッツは、ココアのカップを両手で抱え込んでいた。

ダナの目の前の皿には目玉焼きとフライドポテト、それに焼いたベーコンにサラダが山盛りのにせられている。添えられた厚切りのトーストにはたっぷりバターを塗ってあった。

大きなマグカップに並々と注いだコーヒーを、ダナは息吹きかけながら飲んでいる。

「同じ物をもらおうかな」

デイオは厨房にいるコックに、ダナと同じ品を注文した。ただし、パンは厚切りトーストではなく、ロールパンで。

「一度後方基地に戻るんだって。ずっと船にいるっていうのも体がもたないから。あたしはぜんぜんかまわないんだけど」

料理の皿を抱えて戻ってきたデイオにダナは言った。デイオはコーヒーにミルクだけ注いで、一口飲む。

「ダナが例外なんだよ。ずっと空にいると集中力持たないしな、あ、食事終わったら機体の調整するから格納庫に来てほしいんだけど」

「りょーかい」

空になったココアのカップを厨房に返して、ルッツは食堂を出ていく。

それを見送って、デイオは目玉焼きにフォークを入れた。固く焼いてもらったから、黄身があふれ出すようなことはない。

「だいぶ慣れた？」

いさぎよく大きな口をあけてトーストにかじりついたダナがたずねた。

「そつだね、だいぶ慣れてきたと思う」

戦闘機の後部座席はお世辞にも居心地がいいとはいえない。その

中で瞬時に周囲の気象情報と機体の状態から最適の数値をはじめ出して、フォースダイトの制御装置を適切な状態に保つというのは、神経のすり減る作業だった。

そんな弱音を吐くつもりはぜんぜんないのだけれど。

「そう言えば、そろそろ誕生日じゃなかった？」

ふいにダナの質問の方向が変わった。

「……ああ、そうだね。言われてみればそうだったかも」

食堂の壁にかけられたカレンダーにディオは目をやった。意識はしていなかったが、明日だ。

去年はとロールパンをちぎりながらディオは考える。去年の今頃は大学にいた。大学の寮生たちがケーキを買ってきてくれて、ビールやワイン　安物だったけれど　に大量のつまみも用意されて、皆で大騒ぎをしたのだった。

今年は何もないまま終わるだろう。ここは最前線でそんな余裕はないし、自分の誕生日を吹聴するつもりもない。

「何歳になるんだっけ？」

「十九」

「そっか、あたしの一歳上なんだっけ」

ダナは今年十八になったところだ。一歳二歳なんて、たいした違いではないのだけれど。

ダナはそれ以上はたずねず、猛然と目の前の朝食へと取り組み始める。旺盛な食欲に感心しながら、ディオはベーコンを一口サイズに切り取った。

食後はルッツに言われたように格納庫へとむかう。二人の使っている戦闘機は戦闘艦の後部に置かれている。他の戦闘機は前方の格納庫だから、特別扱いだ。

「ほい、照準合わせるから。ディオ君の方は俺の守備範囲外だから

勝手によろしく」

「わかってるよ」

ディオは戦闘機の後部座席に潜り込む。何度やっても一人で乗ることはできずに、ルッツに尻を押し上げてもらわなければならないのは少々情けないと思う。

ディオは抱えてきた手順書を広げる。自分で作った手順通りに精密な機械を一つ一つ確認していく。この作業ももう何回繰り返したかわからない。

「今までの出撃で機体には損傷がないのありがたいわよね。この機体しか使えないんだし」

自分の席に収まってダナはルッツと確認しながら、一つ一つの機器を設定していく。

「休みがもらえるのはありがたいよな」

「そうねー。何しようかしら」

短く切りそろえた髪をかきあげながらダナは言う。

それから前方の座席から、ディオの方をふりかえってたずねた。

「ディオは？」

「……さあ」

ディオはやりたいことも思いつかない。空にいようが、陸に戻るうが、きつと部屋にこもったまま一日を過ごすだろう。

艦の食堂は解放されないから、食事はきつとどこかへ出かけなければならぬだろうけれど。

「さて、と」

作業を終えたディオはのびをして、座席から転がり落ちるようにして地面へと飛び降りた。

「僕はもう行くよ。また後で」

「夜に食堂で会いませよ！」

戦闘機の座席からダナがひらひらと手をふる。ディオはそれに手をふり返して、自分の部屋へと戻っていった。

ディオの乗っている戦闘艦は、最前線から後方基地へとさがっていく。ほぼ毎日出撃しているのだ。休息が必要だ。

ディオは自室に戻ると鍵をかけた。整備を終えると、とたんに眠気がやってくる。靴を脱ぎ捨てて服のままベッドへと転がった。

頭の下に両腕を折り込む。夕食まで一眠りのつもりが、気がついた時には夜があけていた。

「結局夕食食べなかつたわけ？」

食堂に行こうと部屋を出るとちょうどダナとはち合わせた。

「ぐっすり寝ちゃったみたいだ。一晩起きなかつたよ」

「疲れてたのね。あたしとルッツは街へ行くけどどうする？」

「いや、残るよ。やらないといけないことがあるから」

出ていくダナとルッツを見送って、ディオは朝食を食べて自分の部屋へとひきこもった。

部屋中に紙を広げて、ディオは計算式を解き始める。彼にとっては、時間をつぶすのにはこれが一番だった。

それから部屋を出ないまましていると、夕方になって部屋のドアがノックされた。開けるとダナが立っている。

紙のボックスと皿が二枚それにコーヒーの載った盆を目の前にかかげて、ダナは笑った。

「何、これ？」

「ケーキよ、ケーキ」

ディオの承諾も得ず、彼女は部屋の中に入り込み、ベッドの上に盆を置くと、その横に腰をおろす。そしてベッドを叩いた。

「誕生日、おめでとう」

「あ……、ありがとう」

確かに今日は誕生日だ。しかし、今は戦争中だ。誕生日を祝うよ  
うなことをしていいのだろうか。

「……何よ？ 気に入らないわけ？」

「そうじゃなくて、ほら、今は戦争中だしさ……」

「……せつかくルッツと買ってきたのに。じゃあいいわよ、持って  
帰るから」

ダナは、盆を持って立ち上がる。ディオは慌ててダナを引きとめ  
た。

「待って！ 食べるよ、食べるから」

「そーよ、せつかく買ってきたんだから。ルッツお勧めだしおいし  
いと思うわよ？」

箱の中には、リンゴを使ったケーキが二つ。ダナはそれを取り分  
けると、ディオに向かってもう一度

「誕生日おめでとう」

と言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6014i/>

---

空をなくしたその先に

2011年9月5日17時34分発行